

---

# リリカル マジカル とあ新らじお

ラモン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル マジカル とあ新らじお

### 【Nコード】

N5627L

### 【作者名】

ラモン

### 【あらすじ】

これは稚作“とある新人の日常”を元にした、ラジオ風(?)小説です。内容は10割がネタですので、肩肘張らず、「馬鹿だなどの作者」程度の認識で読んでください。

## 登場人物プロフィール(偽) その1

・高町なのは(19)

芸暦10年。

『魔法少女リリカルなのは』でデビュー。

管理局員として働く前に、リンディさんがスカウト。

演技の幅が広く、様々なCM、ドラマに出演。

フェイトII テスタロッサ、八神はやてとはプライベートでも親友である。

最新作は映画『魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st』

ただ、少女時代の役だったので変身魔法を使用して出演した。

2

代表作……魔法少女リリカルなのは(デビュー作)

魔法少女リリカルなのはA's

魔法少女リリカルなのはStrikers くとある

新人の日常

魔法少女リリカルなのはVivid

魔法戦記リリカルなのはForce

魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st

ひぐらしが鳴きまくる頃に

リアル魔王ごっこ 他多数...

・フェイトII テスタロッサ(19)

芸暦10年。

『魔法少女リリカルなのは』でデビュー。

芸能界に入る切っ掛けは、彼女の母親であり、大女優プレシア・テスタロツサが彼女に内緒で応募した「俺の妹コンテスト」で優勝したことである。

その後、姉アリシアと共にデビュー。

以降、リリカルなのはシリーズを筆頭に数々の番組に出演。姉のアリシアはバラエティを中心に活躍中である。

高町なのは、八神はやてとは姉のアリシアと共にプライベートでも親友である。

最新作は映画『魔法少女リリカルなのは The MOVIE

1st』

なのはと同じく、変身魔法を使用したの出演となった。

3

代表作……魔法少女リリカルなのは（デビュー作）

魔法少女リリカルなのはA's

魔法少女リリカルなのはStrikers くとある

新人の日常

魔法少女リリカルなのはVivid

魔法戦記リリカルなのはForce

魔法少女リリカルなのは The MOVIE 1st

部隊・バチスタの栄光

ジエネラル・ライトニングの凱旋 他多数・・・

・八神はやて（19）

芸暦10年

『魔法少女リリカルなのはA's』でデビュー。  
無印を見てそのストーリーに感動し、A'sの主演オーディションにヴォルケンリッター達と応募。

見事に勝ち残り、主役の座を射止めた。

独特の関西弁を武器に、バラエティからシリアスドラマまでマルチに活躍中。

初代リインフォースは現在芸能活動から身を引き、はやてのマネージャー業をしている。

高町なのは、フェイトIIテストロッサとは、プライベートでも親友。

最新作は、ドラマ『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常〜』

代表作……魔法少女リリカルなのはA's（デビュー作）

魔法少女リリカルなのはStrikers〜とある

新人の日常〜

魔法少女リリカルなのはVivid

魔法戦記リリカルなのはForce

嘘吐きゲーム 他多数・・・

・ハヤトIIロックウエル（17）

芸暦5年。

姉のハツキが勝手に応募した「私の王子様オーディション」で、その笑いの才能を見出されて芸能界に。

ちなみにオーディションは1回戦落ちだった。

その後、バラエティを中心に活躍していたが『魔法少女リリカルなのはStrikerS』とある新人の日常』で見事主役を勝ち取って初主演を果たした。

『とあ新らじお』では初めてラジオMCを体験。明るいい性格とくだらないギャグで、子供に人気がある。また、スバルナカジマ、ティアナランスターとはプライベートでも親友である。

ただ、最近プライベートで2人を恋人にしたという噂があるのだが……果たして。

最新作は、ドラマ『魔法少女リリカルなのはStrikerS』とある新人の日常』

代表作……魔法少女リリカルなのはStrikerS』とある新人の日常』（デビュー作）

ヒシマツモトの　な話  
ケイちゃんの執事

・ティアナランスター（16）

芸暦7年。

兄であり俳優のティータランスターの事務所に忘れ物を届けに行った際、社長にスカウトされて芸能界に入った。

以降子役として地道に経験を積み、『魔法少女リリカルなのはS

trickers」とある新人の日常』で主演に大抜擢された。デビュー作は『兄なき子』。これは息の長い長寿ドラマとなった。

その後、『とあ新らじお』で初めてMCを体験。以降ラジオ出演の機会も増えた。

ツンデレキャラで一部男子に熱狂的ファンを持つ。

また、スバル「ナカジマ、ハヤト」ロックウエルとはプライベートでも親友である。

最近プライベートでハヤトと付き合っているという噂があるのだが、真相は定かではない。

最新作は、ドラマ『魔法少女リリカルなのはStrickers』とある新人の日常』

代表作……兄なき子（デビュー作）

兄なき子2

魔法少女リリカルなのはStrickers」とある

新人の日常』

・スバル「ナカジマ（15）

芸暦1年。

新進気鋭の若手女優。

『魔法少女リリカルなのはStrickers』とある新人の日常』で、主演としてデビュー。

ティアナとは訓練校で知り合って以来の仲。

今までは管理局の仕事一筋だったが、ティアナから誘われ、今回

のドラマオーディションに参加、見事主役の座を射止めた。

その後、『とあ新らじお』でラジオMCも初体験。

持ち前の明るさと可愛さで、デビューしたばかりなのに多くのファンを持つ。

また、ティアナ＝ランスター、ハヤト＝ロックウエルとはプライベートでも親友である。

最近プライベートでハヤトと付き合っているという噂があるのだが、真相は定かではない。

最新作は、ドラマ『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある  
『とある新人の日常』

代表作……魔法少女リリカルなのはStrikers』とある  
新人の日常』(デビュー作)

・エリオ＝モンディアル(10)

芸暦8年。

実は、新人FW陣の中で最も芸暦が長い。

デビューは両親が経営する会社のCM。「CMするな息子しかない!」という親馬鹿でデビューさせられた。

その後も両親の会社のCMに出続け、何故か人気が出てきた稀有な存在。

一部では天才子役などと噂されているが、本人は謙虚そのものなので芸能界での評判も良い。

今回の『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常』には、自分でオーディションに応募、見事に勝ち抜いて主役の座に輝いた。

キャラロルルシエとはプライベートでいい感じな関係らしい。だが、その事に触れるのは事務所的にNGなので真相は分かっている。いない。

最新作は、ドラマ『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常』』

代表作……魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常』（デビュー作）

ギョギョギョの鬼次郎

・キャラロルルシエ（10）

芸暦3年。

『全次元世界美少女龍召喚士オーディション』で優勝したのが芸能界入りの切欠。

それ以降暫くは子供向けファッション雑誌のモデルとして活躍。

『魔法少女リリカルなのはStrikers』とある新人の日常』が女優としてのデビュー作。

龍召喚士役の美少女がキャラロしか居なかった為、監督自らがスカウトしに行ったというもっぱらの噂。

その後はドラマの仕事も増え、子役として活躍中である。

エリオ＝モンディアルとのプライベートでの関係が噂されている

が、事務所NGが出るので真相はわからない。

代表作……魔法少女リリカルなのはStrikers くとある  
新人の日常（デビュー作）

華の無い薔薇屋

## 登場人物プロフィール(偽) その1(後書き)

てなわけで、キャラクタープロフィール(偽)ですw  
こっちでは出演キャラクターは全員管理局兼タレントという立ち位置ですので、こんな感じでやってみました。  
ヴォルケンス達や他のキャラクターのプロフィールはまた今度書きます。

ちなみに、こっちの世界ではプレシアもアリシアも初代リインも生きてます。  
それぞれタレントやマネージャーで仲良くやってたりw  
そっちのプロフィールもそのうち更新しますw。

それではw。

第1回『カツ』となって書いた。今では反省している』（前書き）

えー、ラジオ風ということでは会話文オンリーです。

また、30分位の番組という設定ですので無駄に長いです。以上を踏まえてご覧ください。

第1回『カッとなって書いた。今では反省している』

スバル

「ねえ、ハヤトにティア」

ハヤト

「あん？」

ティアナ

「何よ」

スバル

「ここって、一体何の部屋なの？」

ティアナ

「ここは、ラジオを収録する『ブース』ってところよ。さっき説明されたでしょ？」

スバル

「えと、何であたし達がここに？」

ハヤト

「それはな。3人で“魔法少女リリカルなのはStrikerS”とある新人の日常”の宣伝を、ラジオ形式でやってみようという者が唐突に閃いたからだ」

スバル

「お、思いつきなんだ」

ティアナ

「何か某“うたわれるのら お”とかを聞いてたら思いついたんですって」

スバル

「えと、じゃあ頑張らなきゃだね！」

ハヤト

「あんま頑張りたくねえけどな。よっし、それじゃあ始めますか！  
！」

“リリカル マジカル とあ新らじお”

第1回『カツとなって書いた。今では反省している』

ハヤト

「皆様おはこんばんちわ。という訳で始めました“とあ新らじお”。

メインパーソナリティを務めるのは、俺、『変態紳士』ことハヤト『ロックウエルと』

ティアナ

『『ツンデレガンナー』、ティアナ『ランスターと』

スバル

「『腹ペコグラップライ』、スバル!!ナカジマです!」

ハヤト

「さて、作者が思いついた勢いで書き始めた、この“とあ新らじお”」

ティアナ

「えーと何々? 『この番組は、“とある新人の日常”を、より一層面白く読むための情報番組……ではありません』。って違うの!?!」

スバル

「『単純に“うたれるものらじ”とかを聞いてて、面白そうだからやってみた』だって」

ティアナ

「い、いい加減な……」

ハヤト

「つかどーすんだ? 俺らラジオなんて一回もやったこと無いぞ?」

スバル

「あたし、ハヤトとティアが居れば平気だと思って、この仕事請けたんだけど……」

ティアナ

「あたしはハヤトなら大丈夫かと思って……」

ハヤト

「なにその他人任せ」

＼H A H A H A / ＼H A H A H A /

ハヤト

「おお、スタッフの笑い声も入るのか」

スバル

「海外ドラマみたいだね」

ティアナ

「まあとりあえずやるしかないわよ。」

読者の皆さん、私達も初めての事ですし、何より作者も適当に書いているのでおかしな部分も多いと思いますが、温かい目で読んで下さいね」

ハヤト

「うし。そいじゃあ最初のコーナー行cule」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『『なぜなに』とあ新』」

ティアナ

「このコーナーは、リスナーの皆様から寄せられた質問に、あたし達が答えていこう！ というコーナーです」

スバル

「普段の仕事風景から、ちょっといや〜ん なプライベート情報、果てはゲストに対する突っ込んだ質問まで、答えられる範囲で答えていきますよ！」

ハヤト

「……つっても、まだ第1回だからお便りきてないんだけどなw」

スバル

「だよねえ。じゃあどうしよう?」

ティアナ

「どうしようって……あれ? スタッフさん?」

— 3人でお互いに質問してみよう! —

— —  
— —  
ノ。。( )  
づ

ハヤト

「お互いに質問ねえ……じゃあティアナにスバル、お前らの3サイズでも」

ティアナ&スバル

「「セクハラ禁止!」!」

ハヤト

「ちつ。いいじゃん別に減るもんじゃねーし」

スバル

「普通言わないよ!」

ティアナ

「ぶっ飛ばすわよ!？」

ハヤト

「はいはい。それじゃ『2人の好みのタイプ』でも」

ティアナ

「好み? そうねえ……お互いに支えあえる人、かな」

スバル

「あたしは、優しくて包容力のある人!」

ハヤト

「模範的の回答すぎてつまらん。やり直し」

ティアナ

「何だよ!？」

スバル

「別にいいじゃん!」

ハヤト

「馬鹿野郎! これはラジオだぞ! 面白いこと言わなきゃ駄目じゃねえか!」

スバル

「滅茶苦茶だ!？」

ティアナ

「……はあ。もういいわ、馬鹿は放つとして次はあたしが質問するわね。」

そうね、『ハヤトとスバルのお給料は?』」

ハヤト

「うっわやらしい質問キタコレ」

ティアナ

「な、何よ。いいじゃない別に!」

スバル

「でもでも、お給料ってあたし達は一緒じゃないの?」

ハヤト

「む。一緒な気はするけど……そう言われると気になるな」

ティアナ

「でしょ!？ ほら、さっさと答えなさいよ!」

ハヤト

「誤魔化したな。」

俺は手取りで月25万、そこから色々差っ引かれて、残るのはいつも5万ぐらいかなあ……」

スバル

「ハヤト、そんなに貰ってるの!？」

ハヤト

「は？ そんなにって、陸士だとこれぐらいが普通だろ？  
お前いくらなんだよ？」

スバル

「あたしいつも17万ぐらいなんだけど……」

ハヤト

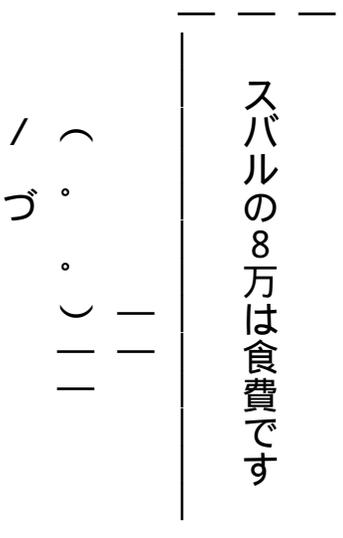
「……8万も差があるのか。何でだ？ ティアナは？」

ティアナ

「あたしも25万なんだけど……なんでスバルだけ？」

ハヤト

「謎だな……って何かスタッフが……」



ハヤト&ティアナ

「「ああ……」」

スバル

「食費！？　そ、そんなに食べてないもん！！」

ハヤト&ティアナ

「嘘だろ(でしょ)」「」

＼H A H A H A /＼H A H A H A /

スバル

「ううう、2人が酷い……(泣)」

ハヤト

「ほれほれ、そんな事で凹んでんなくて。次はお前の番だぞ」

スバル

「そんな事って……(泣)」

ふーんだ。じゃあちよつと意地悪な質問するもん。

あたしの質問は、『ハヤトとティアの初恋の人は』！？」

ティアナ

「えええっ！？　は、ははは初恋！？」

ハヤト

「えー……、それ身内はアリ？」

スバル

「無しで！」

ハヤト

「どこの小学生だお前は」

スバル

「いいの！ 意地悪する2人が悪いんだもん！ ほら、早く答えて  
！！！」

ハヤト

「へーへー。俺の初恋は7歳ン時だな。

近所にディアドラって凄い美人で胸の大きなお姉さんがいて、子供ながらにマジで結婚したいと思ったよ」

スバル

「7歳って早すぎない？」

ティアナ

「マセガキ」

ハヤト

「いいじゃねえか別に！！ (。。(。oミ。おっばい！おっばい！」

スバル&ティアナ

「(怒)」「」

ハヤト

「ひでででで！ ひょうがはからひっはるな！！ ひぎれふ！  
ひぎれふ！

(訳：いででで！ 両側から引っ張るな！ 千切れる！ 千切れる！)」「

ティアナ

「ふん。じゃあ次はあたしね。

初恋は……やっぱり、ハヤトになるのかしら。  
うう……な、何か改まって言うと凄く恥ずかしい……」

スバル

「あ、あはは…… / / /」

ハヤト

「何この微妙な空気！ やめやめ！ “なぜなに とあ新” はこれで終わり！

次のコーナー行くぞ……！」

スバル

「そ、そうだね！」

ティアナ

「えーと、次のコーナーは……」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『励まして！スバルちゃん』」

ハヤト

「……何この珍妙なタイトル？」

スバル

「あ、あたし聞いてないよ！？ ティア、どーゆーこと……？」

ティアナ

「ちよつと落ち着きなさいスバル。  
えーと何々？」

『このコーナーは、リスナーの皆様から凹んだお便りを読み、  
リスナーさんの荒んだ心をスバルに励まして貰おう！ という  
コーナーです』

ってことらしいわよ」

スバル

「あ、あたしそんな責任重大なの嫌だよ！」

— やらなきゃスバルはクビ —

／ づ  
（ 。（ 。（  
— —

スバル

「ひ、酷いよ〜〜」

ハヤト

「諦める。よし、それじゃあ早速……って、これもお便り来てない  
から無理じゃね？」

ティアナ



「ど、どんまいです！ きつといい事ありますよー！」

スバル

「こんな感じでいいのかな？」

「イエーイ！／＼ひゅ／＼ひゅ／＼パチパチパチ／＼結婚してくれー！／＼もじもじ具合が最高ー！／

ハヤト

「おお、スタッフに大人気」

スバル

「恥ずかしいよ」

ティアナ

「良く頑張ったわねスバル。」

えーと、この“励まして！スバルちゃん”では、こんな感じでありスナーの皆さんが凹んだエピソードを募集しています。

皆さんもスバルに励まして欲しいエピソードをどしどし送ってくださいね！

スバル

「送らなくていいよおー！！（泣）」

ハヤト

「コーナーなんだから仕方ねえじゃん。まあ人気なきや消滅すんだ

る。

さてさて、次はこのコーナー」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「 ツンデレ！ティアナちゃん」」」

ティアナ

「何よコレ!?!」

ハヤト

「えー、このコーナーはリスナーの皆様から送られてきた台詞に、ティアナがツンデレっぽく返すコーナーです。

まあ考えるのは作者なんで、ツンデレっぽく無いかもしれませんが、そこはご容赦ください」

ティアナ

「何であたしがそんなこと！ てかメタ発言はやめなさいよ!?!」

スバル

「ティア、往生際が悪いよ……」(ガシッ)

ティアナ

「ちよつ、スバル!?!」

スバル

「あたしも恥ずかしい思いをしたんだから、ティアも一緒に恥ずか

しい思いしようよ」

ティアナ

「道連れ!？」

スバル

「道連れ」

ハヤト

「そいじゃ始めるぞー。まあ、これもお便りが無いから無理なんで、今回は俺が台詞を言うことにしよう」

ティアナ

「ちよつと! あたしはやらないわよ!」

ハヤト

「聞こえませんかあ。んー、どうしようかな。

まあ、ここは返しやすい台詞でいこう。

えーでは早速。『俺の為に弁当作ってきてくれたのか?』」

ティアナ

「べ、別に、あんたの為に作ってきたんじゃ無いんだからね!」

＼ウオオオオオ!／＼萌えええええ!／＼ヒヤツホオオウ!／  
＼ハアハア……ウツ!／＼……ふう／＼……ふう／＼ツンデレご馳  
走様でした!／

ティアナ

「はっ！？ つ、つい口が！！」

ハヤト

「さすが生粋のツンデレ」

スバル

「ティア、可愛かったよ！」

ティアナ

「う、うう……うが……っ！っ！っ！」(暴走)

ハヤト

「うわヤベ！ キレやがった！？」

スバル

「うわわ！ ティア、落ち着いて……っ！っ！」

〜少女暴走中。暫くお待ちください〜

BGM：瞬間センチメンタル

ティアナ

「ふー、ふー……」

ハヤト

「お、落ち着いたか？」

ティアナ

「ええ。でも、こんな二度とやらないわよ」

— やらないと本編出番無し —

／ づ ( 。 ) — —

ハヤト

「……だってさ」

ティアナ

「横暴すぎるでしょ!?!」

スバル

「ティア、諦めよう。ここはそういう場所なんだよ」

ハヤト

「だな。さてさて、この“ツンデレ!ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレ台詞で返して欲しい台詞を募集しています。

ただし! あまり過度な期待はしないこと!」

ティアナ

「送ってきたら殺すからね!?!」

ハヤト

「ツンデレツンデレ」

ティアナ

「本気で殺すからね!!」

ハヤト

「はいはい。それでは次のコーナーいつてみよー……っアレ？  
もう無いのか？」

スバル

「あとは『ふつおた』のコーナーかな」

ティアナ

「ふつおた？」

スバル

「普通のお便りの略だよ。一応現時点で作者さんが考えてるのは

“ふつおた” “なぜなに とあ新” “励まして！スバルちゃん”

“ツンデレ！ティアナちゃん”

この4コーナーだけみたいだね。

他にもリスナーの皆さんから『こんなコーナーをやって欲しい！』  
つてリクエストがあれば、増えていくかも知れません」

ハヤト

「まあ今回は初めてつてのものもあるし、短くてもしかたねえか」

ティアナ

「そうかもね。次回からはゲストも来る予定だし、もうちょっと長  
くなるかしら」

ハヤト

「長くなりすぎても困るけどな」

スバル

「そこは作者さんの頑張りしだい、だね」

ハヤト&ティアナ

「……」

スバル

「？ どしたの2人とも」

ハヤト&ティアナ

「果てしなく不安だ（ね）」

スバル

「ひどっ!？」

ハヤト

「事実だろ」

ティアナ

「実際、この“とあ新らじお”も思いつきで始めたぐらいだしね」

スバル

「う……」

ハヤト

「まあ、クオリティはともかく暫く続くらしいぜ。

本編の後書きに出演してもらおう予定だったゲストの方々も、こっちにゲストとして呼ぶ予定らしいからな」

スバル

「そうなんだ」

ティアナ

「でも平気なの？ まだ全部手探り状態なのに、他の作者さんのキャラクターをゲストに呼ぶなんて」

ハヤト

「とりあえず第2回、第3回はウチのキャラを出して様子見するらしい。」

「それで読者さんと作者が何となく方向性を理解したら、ちゃんとゲストとして呼ぶらしいぞ」

ティアナ

「随分と曖昧ね」

スバル

「大丈夫なのかなあ」

ハヤト

「知んね。とりあえず何とかなんじゃね？」

スバル

「て、適当だ……」

ティアナ

「まあなるようになるでしょ。」

それじゃあ、今回はこの辺でお別れの時間です」

ハヤト

「ん。コーナーも残ってないしな。

さてさて、最後にこの“とあ新”へのお便りに関するお知らせを……スバルから。

ちょっと長くなりますけど、ちゃんと読んでくださいね」

スバル

「あ、あたし？ うん、わかった！。

この“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーの皆様からのお便りを大募集してます！

“なぜなに とあ新”では、あたし達メインパーソナリティ3人や、ゲストの方に対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーの皆さんが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアにツンデレ台詞を返して欲しい、リスナーさんが考えた台詞を。

“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他にイラストなんかも募集したりしてますよ！リスナーの皆さん、張り切ってどしどし送ってくださいね！」

ティアナ

「それと、応募に関する注意を少しだけ」

ハヤト

「えー、見易いように箇条書きでいこうかね。」

・コーナーへのお便りは全て『メッセージ』でお願いします。

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、

採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になっちゃいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一します。

・本文ではどのコーナーに応募してるのかを明記してください。

・PNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

ん。とりあえずはこんなもんか」

ティアナ

「そうね。それと次回更新ですが、5月29日、午後12時を予定しています」

スバル

「わ、次回更新を指定しちゃって大丈夫？」

ティアナ

「大丈夫でしょ。“予定”ってしてるから、ズレても言い訳できるし」

スバル

「なんかズルい」

ハヤト

「うーし、初めての司会でどうなるかと思ったけど、結構なんかなったな」

ティアナ

「あたしとスバルは散々だったわよ。あんな恥ずかしいことさせられたし……」

スバル

「そーだよ。何でハヤトだけ無いのさー」

ハヤト

「女の子がやった方が人気出るから、だって」

ティアナ&スバル

「最低!!」

ハヤト

「俺に言っとなつーの。ま、お便りなければそのうち消滅するだろ。おっと、最後になりましたけど次回ゲストの紹介を。」

次回ゲストは“とある新人の日常”のラスボス。  
ナンバース13、ディレトを予定しています。ディレトへのお便り、質問などをどしどし応募してくださいね！。

それではまた次回。

お相手はハヤト〓ロックウエルと

ティアナ

「あたしのコーナーには送らなくていいですからね。ティアナ〓ランスターと」

スバル

「あたしの方にも送らなくていいですから！ スバル〓ナカジマでした！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「っっっ バイバイ！」

## 第1回『カツ』となって書いた。今では反省している』（後書き）

お便りの注意事項、分かり辛かったかもなので、後書きでもう一度。

- ・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw
- ・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になっちゃいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一します。

・本文ではどのコーナーに応募してるのかを明記してください。

・PNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

**第2回『緊急放送！ ゲストは身内なれど扱い辛さは超一級』（前書き）**

とあ新らじお、ゲストが居る場合の雰囲気などを知って欲しかったので、30分で仕上げました。

今回の放送を参考にして、お便りなんかを贈ってくれと作者が狂喜乱舞して爆発します（笑）

第2回『緊急放送！ ゲストは身内なれど扱い辛さは超一級』

ハヤト

「ミッドチルダ北西部にお住まいの、PN：N a k iさん。

『先日、試験があつたのですが、

全精力を傾けて取り組んだ物理が平均以下だったのに、手を抜きまくった古典はクラス1位でした。

でも理系なんで古典いららないんですね……』」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『『励まして！スバルちゃん！』』」

スバル

「悪い結果を気にするよりも、良い結果を自分の自信にしよう！

その自信が、次はもっといい結果に繋がるから！」

ティアナ

「続いてもう一通。ミッドチルダ中央部にお住まいの、PN：ゆづき爆弾さん。

『わたしもリリカルの小説を書いているのですが最近五月病かなにかでネタが浮かびません！

スバルさん！ お願いします・w・」

スバル

「ネタが浮かばない時は息抜きも大事！ 大丈夫、貴方なら出来るよ！」

ハヤト

「何か意外とノリノリだったなスバル。」

「どうも、メインパーソナリティのハヤト」ロックウエルです」

ティアナ

「ホントにね。始まる前からノリノリだったじゃない。」

「同じくメインパーソナリティを務めます、ティアナ」ランスタ―です」

スバル

「やるからには全力で！」

「同じくメインパーソナリティの、スバル」ナカジマです！」

ハヤト

「さて、今回は最初にスバルのコーナーを持ってきたわけだが」

スバル

「何で最初だったの！？」

ティアナ

「スバルのコーナーが、一番応募が多かったからよ。  
意外とリスナーの皆さんも、結構鬱憤溜まってるのね」

スバル

「うう……あんな感じでよかったのかなあ？」

ハヤト

「大丈夫だと思うぞ。それと、選べなかったリスナーさん、ごめんねっ」

ティアナ

「もうちょっとマトモに謝りなさいよ！」

ハヤト

「はいはい。しかし試験の話題はアレだね、俺らも昔あったよな」

スバル

「だね。古典とかはなかったけど」

ティアナ

「あたしも昔、一生懸命勉強したのに点が低かった時ってあったわ」

ハヤト

「コレって意外と凹むよなあ。でも、次回のテストで挽回すりゃいいんだよ！」

「いらぬ教材でも、1位を取ったってのは凄いことだしさ」

ティアナ

「そうね。自分は出来る子って信じるのも大事ですよ、N a k i さ  
ん」

ハヤト

「そして次のゆうき爆弾さんからのお便りだけど……。これってウチの作者もよく騒いでるよな。『ネタが出ねえーっ！』って」

スバル

「そういえばそうだね。そんな時、作者さんはいつも不貞寝してるけど」

ハヤト

「無理に書こうとすると、余計に自分を追い詰める結果になっちゃうからな。」

浮かばない時は無理せずに気分転換が大事ですよ」

スバル

「思いつかない時に無理に書こうとしても、自分が納得いかないモノになる確率が高いもんね」

ハヤト

「そゆこと。さて、という訳でそろそろ本格的に始めるとするかね。今回からはゲストも交えて、賑やかにやっつけてく予定だしな」

ティアナ

「それでは“リリカル マジカル とあ新らじお”」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートです!!!」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第2回『緊急放送！ ゲストは身内なれど扱い辛さは超一級』

ティアナ

「はい。改めまして、メインパーソナリティを務めるティアナニッラ  
ンスターです」

ハヤト

「昨夜ゲームをやりすぎて少し眠い、ハヤトニッロックウエルです」

スバル

「自分のコーナーが一番最初で嬉しいやら恥ずかしいやらの、スバ  
ルニッナカジマです！」

ティアナ

「で、いきなりの緊急放送ってことだけど、何かあったの？」

ハヤト

「それがなー。思った以上にゲスト出演を希望してくれた作家さん  
が多かったんだ。

第3回まではウチのオリキャラとしても、その後第10回ぐらい  
までゲスト予定が埋まっちゃったんだ。

んで、今の週1ペースだと最後の人なんて2ヶ月以上先の出演になる。それは流石にどうよ？　って考えて、土曜夜12時の更新だけは確定にして、それ以外の日々金曜の間でゲリラ的にもう一回放送しようってことにしたらしい」

スバル

「ゲリラ放送でリスナーさんを獲得しようって魂胆だね。

汚い。さすが作者汚い」

ハヤト

「汚いとか言うな。折角出演してくれるっていうのに、待たせる方がダメだろ」

ティアナ

「でも、それで本編更新は大丈夫なワケ？」

ハヤト

「大丈夫だ。基本優先度は本編>こっちだから、本編が煮詰まってる時はゲリラ放送は無しになる」

ティアナ

「コレから暫くは、週1放送が増えそうね」

ハヤト

「……そうだな。

まあ、そういうことで、今回の緊急放送が決まったワケだ。オーケー？」

スバル

「りょーかい」

ティアナ

「わかったわ。それじゃあ、早速ゲストを呼ぼうかしら」

ハヤト

「おうよ。今週のゲストは！

にっこり笑ってジエノサイド！ 輝く笑顔でカタストロフィ！

とあ新最強キャラにして、とあ新のラスボス！ ナンバーズ13、

ディレト〜！！」

ディレト

「呼ばれて飛び出てじゃんじゃじゃ〜ん！」

〜ヒューヒューノ〜ドンドンドンノ〜パフパフパフノ

〜ディレトちゃん〜ん！〜かわいいー！！ノ

ハヤト

「とりあえず実験ってことで、オリキャラが登場だな」

ディレト

「どうも〜。あ、お嬢様口調って疲れるんで、今日は無しでいいですかあ？w」

スバル

「え？ それって演技だったの！？」

ディレト

「そうなんですよ〜。

何か作者さんが『特徴がないとキャラが薄くなる』って事で無理矢理……（苦笑）」

ティアナ

「意外な事実が発覚したわね。」

まあでも、リスナーさんはお嬢様口調のディレトが目的だろうか、いつもの口調でお願い」

ディレト

「え〜。あれって疲れるんですけど……リスナーさんが求めているんじゃないかあ。」

……っじゃなくて、仕方ないですわね」

ハヤト

「よろしく頼むわ。さて、ゲストも紹介したところで、早速お便りがきてるから紹介しとくぞ。」

えーと、ミッドチルダ南東部にお住まいの、PN：とある凡人の巨乳好きH・Rさん。

『最近彼女が来ました、が一つだけ心配事が、それは彼女が『貧乳』な事です、人並みにはあると思うんですけど、

やはり同僚や先輩方に比べると『小さい』んです。

巨乳好きな俺としてはそこが心配で、まだ成長の見込みはあると思うんですが、

やはり不安は隠せないんです。

どうか彼女が『巨乳』になれる秘訣またはエクササイズを教えてください』

「おー、何か親近感覚えるねえ」

ティアナ

「ちよつと、女の子の価値は胸だけじゃないわよ？」

ディレト

「そうですねよ。胸なんて脂肪の塊じゃありませんの！」

ハヤト

「馬鹿野郎！ 巨乳には脂肪なんて詰まってねえよ！！」

「巨乳にはなあ、巨乳にはなあ！ 男の夢と希望と浪漫が詰まっているんだ！！」

スバル

「うわぁ、最低だ」

ティアナ

「ちよつと、こつち近寄らないで。キモイ」

ディレト

「引きますわぁ」

ハヤト

「何だよ！ コレは全男子の意見だぞ！！」

ティアナ

「変態は放っておきましょう。えーと、H・Rさん。

「せつかく出来た彼女なんですから、その人の全部を愛してあげてください」

スバル

「本当に好きなら、おつきくない胸だつて愛せる筈だよ」

デイレト

「どうしても嫌、と言つたら私が直々に意識改革して差し上げますわ」

ハヤト

「こわっ！？ デイレトお前、リスナーさんを脅すなつての！」

ティアナ

「女の子を胸だけで判断する奴だもの、少し痛い目を見たほうがいわ」

スバル

「あたしも同意見」

ハヤト

「くつ。ゲストも含めて女3対男1では分が悪すぎる。

ここは違うお便りを読んで誤魔化すしかない。

という訳で次のお便り。ミッドチルダ中央部にお住まいの、PN：ゆづき爆弾さん。

お、本日2回目の採用だな。

「ハヤトくん、チートな能力を持ってみたいと夢見たことはありませんか？」

ティアナ&スバルへ ハヤトくんのどこに惚れたのでしょうか？」

ティアナ&スバル

「「!?!」」

ディレト

「あら、それは私も興味ありますわね」

ティアナ

「な、何でこんな公共放送で言わなきゃいけないのよ!」

スバル

「そつだよ! そんなの恥ずかしいよ!」

ハ・ハ

(。。(

— (。( — トン  
— (。( —  
— (。( —

— (。( —

スバル

「スタッフさんまで……うう (恥)」

ティアナ

「何よこれ、公開処刑? (恥)」

ハヤト&ディレト

「「言ーえ! 言ーえ!」」

「「言ーえ! 言ーえ!」」

ティアナ

「ああもう分かったわよ！」

優しく、あたしの事を考えてくれるところが好きなのよ！」

スバル

「あ、あたしは……その……お兄ちゃんみたいなの……」

ディレト

「ベタ惚れですわね」

ハヤト

「いやあ。照れますなあ。はっはっは！w」

ティアナ&スバル

（（後でぶっ殺す））

ディレト

「じゃあ次はハヤト様」

ハヤト

「チート能力ねえ。欲しいっちゃ欲しいな。

そしたら、（キン！ キン！ 子どものころのゆめーはーとかを……」

ティアナ&スバル

「「セクハラ禁止！！」」

ハヤト

「ぬわー」

ディレト

「ああ！？ ハヤト様が殴られて錐揉み回転を！？」

スバル

「セクハラ魔人は滅んだね……」（スツキリ）

ティアナ

「これでこのラジオに平和が戻ったわ」（スツキリ）

ディレト

「（意外と怖いですねこの2人……）」

「そ、それじゃ、次のコーナーにいつてみましょうか！」

ティアナ&スバル&ディレト

「「「なぜなに」とあ新！」「」」

ティアナ

「はい。このコーナーは、リスナーの皆様から寄せられた質問に、あたし達が答えていこう！ というコーナーです」

スバル

「今回はちゃんとお便りがきてますよ。リスナーの皆さん、ありがとうございます！」

ディレト

「それでは不肖、私が読み上げますわね。  
スカリエツティラボ近辺にお住まいの……あら、ご近所さんです  
のね。」

PN：検体番号10032様。

『その場にいる全員に質問です。』

この世で最も怖いのは何（もしくは誰）ですか？

とあ新メンバーが、どんなものに恐怖意識を持っているのか、  
凄く気になります！！』」

ティアナ

「怖いもの……怒ったのはさんね、やっぱり」

スバル

「ティアも！？ あたしも同じだよ」

ディレト

「ちよつと、頭冷やそうか……」（CV：なのは）

ティアナ&スバル

「「やめて!!」「」

スバル

「てゆうか、何でなのはさんの声出せるの!?!?」

ディレト

「私の108個ある特技の一つですの  
わたくし」

スバル

「さ、さすが最強……」

ティアナ

「関係あるの？ それ」

ディレト

「わかりませんわ。」

それは置いといて、私わたくしがこの世で最も怖いのは……ウーノお姉様とチンクお姉様のお説教ですわね」

スバル

「意外〜。もつと凄いのかと思ったよ」

ディレト

「だって、下手したら1日中ですよ……じゃなくって、1日中ですわよ？」

普通に怖いですわ」

スバル

「んー、確かにあたしもティアのお説教は嫌かも」

ティアナ

「……スバルが馬鹿やんなきゃ、怒る必要ないんだけど？」

スバル

「だけど、お説教で3時間は酷いよー」

ディレト

「外道ですわー」

ティアナ

「この戦闘機人どもは……」

ディレト

「あとはハヤト様ですけど……まだ起きませんか？」

スバル

「ハヤト、おきてー」

ハヤト

「いててて。何？ この世で一番怖いのか？ ………………姉ちゃん」

スバル

「ハツキさん？ どうして？」

ハヤト

「あの人さ、ブラコンすぎて半ストーカー化してんだよ。

未だに俺の事自分の部隊に引き入れようとして、あっちこっちに  
圧力かけてるらしい。

マジ怖いつつーの」

ティアナ

「ハツキさん……」

スバル

「で、でもハツキさんってそんなに権力あるの？」

ハヤト

「知らないのか？ 姉ちゃんって昇進する気になったら、今頃普通に少将ぐらいになってるぞ」

ティアナ&スバル&ディレト  
「……嘘おつ!?!」

ハヤト

「ホントホント。だって、姉ちゃんと同期で少将になってる人が言  
つてた。」

あ、ちなみにその人姉ちゃんに頭が上がらないらしい」

ティアナ

「す、凄い人なのね、ハヅキさんって……」

ハヤト

「俺に関すること以外はな」

スバル

「あのブラコンは凄いよねえ」

ハヤト

「お前のシスコン振りも相当だけだな」

ディレト

「ちよつと! 話がズレてますわよ!?

話を戻して! 話を戻して!」

ハヤト

「おつと、そうだったな。検体番号10032さん、俺らの怖いも  
のはこんな感じですよ。」

理解できましたかね? できましたね?

よし、じゃあ次のお便りいってみようか。えーと? ベルカ自治  
区、PN:ルイーネさんから。」

『お三人さん、そしてゲストさん、こんにちは、いやこんばんかな？』

時間的にはこんばんはだな」

ティアナ&スバル&ディレト

「「「こんばんはー！」「」」

ハヤト

「『早速質問なんですけど、機動6課はそんなに忙しい部署なんですか？』

よく隊長陣は仕事に追われてますし、あまり休日の描写も無く、ただただ働いて訓練して、労働基準無視してないか？

と疑問を感じえないんですが、実際のとこどうなんですか？後、普段のナンバーズ達の日常は何をしてるんですか？？』

ふむふむ。確かにリスナーさん的には気になるところだろうなあ」

スバル

「確かに、アニメだとなのはさんもあたし達も、毎日仕事か訓練ばかりしてるみたいだね」

ディレト

「ナンバーズの方も、日常の風景は描かれていませんでしたわね」

ティアナ

「じゃあ、コレはあたしが答えようかな。

機動六課は、普通の部署に比べてちょっと忙しいぐらいです。

あたし達も訓練がある時以外は、定時の夕方5時で仕事は終わっ

てますよ。休日も1日中休みっていうのはそんなにありませんけど、午前だけ、午後だけ休みっていうのが1週間の間に3日あります」

スバル

「でも、なのはさんやフェイトさんはお休みの日も働いてるよね」

ハヤト

「あの人たちはワーカホリックってヤツだろ。いつ休んでるんだ？」

デイレト

「俗に言う『仕事が恋人』状態ですわね」

ハヤト

「部隊長クラスなら色々仕事あるのは分かるけどさ、高町隊長達はそんなに仕事無いはずなんだけど」

ティアナ

「真面目なのよ。なのはさんもフェイトさんも。

ハヤトとは違つの」

ハヤト

「貴方とは違つんです！」（キリッ

＼H A H A H A / ｾﾀ古いW /

デイレト

「えーと、ナンバーズの方は私が答えますわね。」

普段はドクターのラボで訓練をしたり、皆でゲームをしたり、お茶をしながらお喋りなんかをしていますわ。

ウーノお姉様とクアットロお姉様はドクターのお手伝いなんかも

してますわね。あと、時々ですけどノーヴェお姉様、セインお姉様、ウエンディお姉様の3人と一緒に街にお買い物に行ったりもしますわよ?」

ハヤト

「ゲームやってんのか。何してんの?」

ディレト

「この間は、皆で人生ゲームをやりましたわ」

ティアナ

「てゆうか普通の女の子みたいな事もしてるのね」

ディレト

「あら、いけません?」

ティアナ

「悪くは無いけど、何かこっちのイメージと全然違うというか……」

スバル

「あたし達よりも優雅な生活してるのが悔しいというか……」

ハヤト

「正直妬ましい」

ハ、ハ

(。・。)

—

(。・。)

嫉妬乙

—

(。・。)

トン

／  
—  
—  
／

ハヤト

「スタッフうるせえつつ!!」

＼H A H A H A / ＼H A H A H A / ＼H A H A H A /

ディレト

「そうかしらw でも、あまり頻繁に遊びには行けませんから、微妙ですわよ?」

ハヤト

「一長一短つてどこか。えーと、ルイーネさん。

俺らの普段の生活とかはこんなもんです」

スバル

「うー、ディレトに負けた感じがして悔しいなあ」

ティアナ

「何を競ってんのよ何を。」

えっと、まだ時間あるの? じゃあ次のお便りはあたしが読むわね。

海鳴市……あれ、これって第97管理外世界? よく届いたわね

……にお住まいのPN:十五郎さんの質問。

『三人は八神家のメンツの中で、ぶっちゃけ誰が苦手ですか?』

絡みにくいと怖いとか、セクハラされたとか、いろんな意味で結構です。

苦手になったエピソードをまじえて話して欲しいです。

「ちなみに僕はやっぱりメソ……げふんげふん……みんな大好きです」

「……メソって何よ？」

ハヤト

「苦手な八神ファミリー？ うーん……シグナム副隊長かなあ。前にボケたら本気で紫電一閃されそうになって、それ以来ボケるのが怖いとです」

スバル

「シグナム副隊長、ボケ殺したもんねえ」

ティアナ

「斬られればよかったのに」

ハヤト

「酷くない!？」

＼H A H A H A / ＼H A H A H A /

ディレト

「あはは。他の御二人は、どなたですか？」

スバル

「あたしは……うーん、八神部隊長かな。いきなり胸揉まれたし」

ハヤト

「部隊長は全員の胸揉んでるよな。同じセクハラ部の部員として憧れるわ」

ディレト

「機動六課って、そんな部があるんですの？」

ティアナ

「無いから。お願いだから信じないで。」

「苦手な人……ザフィーラかしら。無口だから、一緒にいると間がもたないのよね」

ハヤト

「あー、俺もザツフィーも苦手かも知れん。」

「逆にリンフォース曹長なんかは、一緒にいて楽しいな。ボケるとささずノってくれるし」

スバル

「部隊長とも仲いいよね、ハヤトって」

ハヤト

「あの人と俺はソウルフレンドだ。魂で繋がった兄弟なんだよ！」

「な、なんだってー！」

ハヤト

「スタッフご苦労」

ティアナ

「こ、このラジオは……スタッフまで馬鹿ばっかか！」

ディレト

「ティ、ティアナ様落ち着いて！ 十割ネタ番組ですから仕方ありませんわよ！」

ティアナ

「ぐぬっ！ そ、そうね。ここで怒るのも馬鹿らしいわ」

スバル

「こーゆーモンだって諦めるしかないよ、ティア」

ティアナ

「わかってる。わかってるけど、諦めたらダメな気がする」

ハヤト

「諦めたら、そこで試合終了ですよ」

ティアナ

「やかましい！」

スバル

「あわわ……しゅ、收拾がつかなくなる前に次のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……ツンデレ！ティアナちゃん」「」

ティアナ

「ええええ……コレ、やるの？」

ハヤト

「ネタが来てる以上やるに決まってるっばよ。

ほいじゃ行くぞー。まずは第83管理外世界にお住まいのPN：  
プワゾンクロウさんから。」

『ティア、一緒に相合傘で帰るっか？』

ティアナ

「あ、あんたがどうしてもって言うなら、帰ってあげなくもないわ  
！」

スバル

「続いてもう一通。」

機動六課宿舎にお住まいの……あれ？ 身内？ PN：リオスⅡ  
コーネルドさん。」

『どうして、そこまで親身になってくれるの？』

ティアナ

「別にしたくしてしてるんじゃないわ。命令だから、仕方なくよ！」

ディレト

「それでは私が<sup>わたくし</sup>を。

ミッドチルダにお住まいの、PN：カオスの弟子さん。

『冬のデートで、恋人から手を繋ごうか？

と言われて手を繋ぐときのツンデレセリフ』

ティアナ

「あ、あたしは別に繋ぎたくないんだからね!？」

あんたが寒そうだから、繋いであげるだけなんだから!」

ハヤト

「お疲れー」

ティアナ

「こ、これ本気で嫌なんだけど……恥ずかしさで死ねるわ」(げっ  
そり)

スバル

「ティア、可愛かったよ」

ディレト

「面白かったですわ」

ティアナ

「嬉しくないから。全っ然嬉しくないから」

＼可愛かったぞー／＼ヒューヒュー／

ティアナ

「だからスタッフづつさい！」

＼HAHAHAHA／＼HAHAHAHA／

ハヤト

「照れるなって」

ティアナ

「照れてない!!！」

スバル

「はいはい。そーゆー事しておくね。

さて、それじゃあそろそろお別れの時間が近づいて参りました！」

ディレト

「もうですか？ 早かったですわね〜」

ハヤト

「楽しい時間ってのは、早く過ぎるもんさ」

スバル

「ディレト、今日はありがとねー」

ディレト

「いえいえ。こっちも楽しませて貰いました〜」

ティアナ

「初めてのゲストでどうなるかと思ったけど、問題なくいけたわね」

ハヤト

「意外とディレトってラジオ慣れしてる？」

ディレト

「してないですよぉw ずっと緊張しっぱなしでしたしw」

スバル

「ん？ あ、ディレト！ □調、□調！」

ディレト

「え？ あっ！？ ん、んっ！」

そんなことありませんわよ？ ずっと緊張してましたもの」

スバル

「今更ww」

ティアナ

「まあ、最後まで通すのもプロの仕事よね。

それじゃあラストに、スタッフへの質問のお便りを読んで終わりにするわね。

ベルカ自治区、PN：ルイーネさん、あ、今日2回目ですね。

『ディレトのイメージC.Vって、誰ですか？』

ハ、ハ

（ ）

— トン

ディレト

「まあ、私の外見わたくしイメージが、エウレカ ブンのアネモネですものね」

ハヤト

「だから胸が残念なこと……」

スバル

「セクハラ禁止だつてば！」

ティアナ

「いい加減本気で殴るわよ？」

ハヤト

「さつき殴つたじゃん。えー、ルイーネさん、ディレトのCVはそんな感じだそうです。」

それでは最後にスバルからお便りに関するお知らせを」

スバル

「はい。」

この“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーの皆様からのお便りを大募集しています！

“なぜなにとあ新”では、あたし達メインパーソナリティ3人や、ゲストの方に対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーの皆さんが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアにツンデレ台詞を返して欲しい、リスナーさんが考えた台詞を。

“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、あたし達3人の収録風景のイラストなんかも募集したりしてますよ！

リスナーの皆さん、張り切ってどしどし送ってくださいね！”

ティアナ

「今回は緊急放送になりましたが、次回更新は！ 次回更新こそは！  
5月29日、午後12時になると思います！」

ハヤト

「まあ、思いますって時点で不安だけどなw」

ディレト

「本編も更新しなければですしね」

ティアナ

「そのオリキャラ2人うっさい！  
えー、それから次回ゲストのご紹介を。」

次回ゲストは、ハヤトのお姉さん、“ハツキ”ロックウエル”さんを予定しています。

ハヅキさんに対する質問を、どんどん送ってくださいねー」

ハヤト

「それと、今回お便りを送ったのに採用されなかった、というリスナーさん。

折角送ってくれたのに、読むことが出来なくて申し訳ありません！」

スバル

「これに懲りずに、また送ってくれると嬉しいです！」

ティアナ

「それに、今回読むことが出来なかったお便りも、次回以降の放送で読む場合もあります。

諦めずにドシドシ送ってくださいね」

ハヤト

「そいじゃあ、また次回の放送で！ お相手はハヤト＝ロックウエルと」

ティアナ

「ティアナ＝ランスターと」

スバル

「スバル＝ナカジマと！」

ディレト

「ナンバーズ?? ディレトでした！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ティレト  
「「「「バイバイ!!!」」」」

## 第2回『緊急放送！ ゲストは身内なれど扱い辛さは超一級』（後書き）

お便りに関する諸注意。

- ・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw
- ・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、PN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・PNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

### 第3回『やっべ、この女すげえ扱い辛い!』（前書き）

ちょっと事情があって午前0時に更新が無理そうなので、早めに放送します。

あと、今回も長いんですが、もっと短い方がいいですかね？

もっと短い方がいい読者様がいたら、感想で突っ込んでください。

第3回『やつべ、この女すげえ扱い辛い!』

ハヤト

「……………はああああああ」

ティアナ

「ちよつと、いきなり溜息吐かないでよ」

スバル

「どうしたの？ ハヤト」

ハヤト

「だつてよお、今日は“あの人”がゲストだろ？」

スバル

「“あの人”つて……………ああ、ハヅク」

ハヤト

「言つな！ 名前を言つな！」

ティアナ

「諦めなさいよ。今更どうしようも無いんだから」

ハヤト

「はああ……………仕方ねえ、覚悟を決めるか」

「そんじゃまあ、最初のコーナー」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「『『励まして！スバルちゃん！』』」

ティアナ

「それでは最初のお便り。」

第97管理外世界、学園都市にお住まいの、PN：アガギル・グレインさん。

『最近僕はリリカルなのはStrikerSの小説を書き始めたのですが……』

ぶっちゃけニコ動でなのはMAD（遊戯王なのはシリーズ）を見ていて、

「なのはって面白いじゃん！」と思い全く知らないのに、  
（無印、A'sを飛ばして、StrikerS二話見ただけ）  
勢いで書いているのですが……すでに六課出向のあたりで詰まり出しました。

スバルの元気の出る励ましと、出来ればフェイト隊長のあの大きな胸！

最悪なのは隊長の胸で励ましてください！』」

スバル

「良いものを書く為には、努力も大事！ 時間の許す限り原作を見てみよう！

それと、セクハラはダメ！ 絶対！」

ハヤト

「次のおたより。」

ミッドチルダ北東部、第3区画にお住まいの、PN：バルディッシュさん。

……同じ名前っただけだよな？

『高専の勉強が難しく、宿題も多いのでへこたれそうです。

スバルちゃん。励ましてください！』」

スバル

「勉強は大変だけど、きっと将来の為になるよ！

嫌だーって思わないで、自分のためだっと思って頑張ろう！」

ティアナ

「最後にもう一通。

第97管理外世界、京都にお住まいのPN：次元世界一最弱な、か弱い子狐さん。

『皆がおいらの事をチビだチビだっつて言っんです。

一番気にしている事を面と向かって言われてへこんでいます。

こんなか弱いおいらをいじめて何が楽しいんだ……。

鬱だ……死のう……』」

スバル

「身長がちっちゃいのも、可愛いと思うよー!」

ハヤト

「……それ、フォローになってねえと思うぞ」

ハヤト

「ほい。そんな訳で始めました“リリカル マジカル とあ新ら  
じお”第3回。」

「今日はやる気が全くでねえぜ……メインパーソナリティのハヤト  
!! ロックウエルです」

ティアナ

「真面目にやりなさいよ。」

「同じくメインパーソナリティを務めます、ティアナ!! ランスター  
です」

スバル

「あたしのコーナーって冒頭固定なの？」

「同じくメインパーソナリティの、スバル!! ナカジマです!」

ティアナ

「今回はリアルっぽいお便りが多かったわね」

ハヤト

「だな。最初のお便り、えーとアガギル・グレインさんのだけど…」

スバル

「二次創作書くなら、原作は見た方がいいよね。」

「じゃないとキャラとかが全然違くなっちゃって、読んでくれる人達が「あれ？」って思っちゃうもん」

ティアナ

「そうね。アガギル・グレインさん、DVDの量が多くて大変かも知れませんが、よろしければ無印〜Strikersまで見てから書き出してくださいね。」

あと、セクハラ発言はダメですよ。あんまりセクハラ発言が酷いと……」

スバル

「感想でTOUDAさんから頂いた、この高性能スタンガンが火を噴くよ！」（バチバチ）

ハヤト

「こわっ！？ 火花すっげー出てんじゃん！」

ティアナ

「ハヤトも、セクハラが酷いとコレ使うからね？」

ハヤト

「その程度で俺の浪漫が止められると」「ああん？」「自  
重します」

ティアナ&スバル

「「よるしい」」

ハヤト

「(ぜってー自重しねえ) えー、次がバルディッシュさん」

スバル

「ねえねえ、高専って何？」

ティアナ

「高専って言うのは、主に中学校卒業程度を入学資格とした、修業年限5年の主に工学・技術系の専門教育を施す教育機関よ。」

正式名称は高等専門学校ね」

ハヤト

「ちなみに偏差値が高くて、入るのがすっげー大変らしい」

スバル

「ふうん。だから勉強とかも大変なんだ」

ティアナ

「そういう事ね。でも、それだけ身につく物も大きいから、頑張っ  
て欲しいわ」

ハヤト

「俺らは他人だから、大変さは想像するしか出来ないけどな。  
でも、頑張ったって事実が大事だぜ」

スバル

「うー、良くわからないけど、バルディッシュさん頑張って!」

ティアナ

「強引に纏めたわね……。えと、最後が次元世界一最弱な、か弱い子狐さん。」

身長かぁ、気にする人は凄く気にするわよね」

ハヤト

「小さくてもイケメンだったらモテるんだし、別に気にする事ねえと思うけどなぁ」

スバル

「だよねぇ」

ティアナ

「馬鹿ね、そういう態度が本人を傷つけるのよ。」

いい？ こーゆーのはデリケートな問題なんだから、対応はちゃんとしなきゃダメなの。」

子狐さん。気にする事を言ってくる人達にはキチンと言い返して、それでも駄目な時は反撃しなきゃ駄目よ」

ハヤト

「ティアナがそこまで親身になるとは意外だった。」

えーと、とりあえず『励まして！スバルちゃん』はここまで！  
それでは！ “リリカル マジカル とあ新らじお” 第3回」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートですっ！」「」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第3回『やっべ、この女すげえ扱い辛い!』

ハヤト

「改めましておはこんばんちわ、ハヤトニロックウエルです」

ティアナ

「同じくおはこんばんちわ。ティアナニランスターです」

スバル

「おはこんばんちわ。スバルニナカジマです!」

ハヤト

「んー、最初の挨拶もなんか考えたいな。とあ新らじお特有の」

スバル

「それもリスナーさんに聞いてみようよ!」

ティアナ

「そうね。最後に募集してみましょ。

それじゃあ早速ゲストをご紹介しましょう」

ハヤト

「……え、マジで呼ぶの？」

ティアナ

「呼ぶわよ。その為のゲストでしょう？」

ハヤト

「呼ばなくていいって、つか呼ばないで、お願い」

スバル

「？ なんで？ だって今日のゲストって」

ハヅキ

「ハヤトオオオツツ！！ おねえちゃんがきたぞおおっ！！  
！」

ハヤト

「ぎゃああああ！ 抱きつくなあああっつ！！」

ハヅキ

「ハヤトハヤトハヤトハヤトオオツツ！！ もじゃもじゃ〜〜っ  
っ！！」

ハヤト

「意味わっかんねえええっつ！！！！！！！！！！」

スバル

「あ、あははは……相変わらず過激な愛情表現だなあ」

ティアナ

「えーと、なんかフライングされちゃったけど、本日のゲスト。

ハヤトのお姉さんで、陸士101部隊の“女帝”、ハヅキ「ロツクウエルさんです！」

ハヅキ

「む。思わず我を忘れてしまったな、すまん。

弟溺愛同盟の盟主を務める、ハヅキ「ロツクウエルだ」

ハヤト

「何その同盟!? 聞いたことねーんですけど!?!」

ハヅキ

「何、細かいことだ。気にするな」

ハヤト

「するわ!?!」

ティアナ

「うるさいわよハヤト。ラジオが進まないじゃない、ちょっと黙ってて」

スバル

「そーだよ。黙っててよハヤト」

ハヤト

「味方0!?!」

ハヅキ

「ここにいるぞーっ！」

ハヤト

「姉ちゃんはいいから！」

ティアナ

「えー、ハヅキさん。ハヤトと戯れてるところ悪いんですけど、ハヅキさん宛てに何通か質問のお便りがきてます」

ハヅキ

「む？ 私にか？」

スバル

「はい！ そんな訳でこのコーナー、いってみよう！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「なぜなに」とあ新！」「」

ティアナ

「このコーナーは、あたし達がリスナーさんからの質問に答えていくこう！ というコーナーです」

スバル

「今回も沢山のお便りが届いていますよ。リスナーさん、ありがとうございました！」

ティアナ

「では、時間も有限なのでサクサクいきますね。

最初のお便り。第97管理外世界・第3学区にお住まいの、PN：  
ムーギネーターさん。」

『ハヅキ様の怖い物は何ですか？』」

ハヅキ

「怖い物か。そうだな……やはり母さんだろう」

ティアナ

「お母さん、ですか？」

ハヅキ

「うむ。怒った時の迫力が凄まじくてな。

未だに母さんに怒られる時は縮こまってしまっよ」

スバル

「そ、そんなに怖いんですか？」

ハヤト

「母さんに怒られると、姉ちゃんも俺も結構ガチで泣くぞ？」

スバル

「……会ってみたいような、会いたくないような」

ハヅキ

「会いたいのなら、今度連れて行ってやる」

ハヤト

「やめとけスバル。トラウマになるぞ」

スバル

「そんなに？」

ハヤト

「ああ。怒った高町隊長の数千倍は怖い」

ティアナ&スバル

「次のお便りいつてみましょう！」

ハヤト

「それが賢明な判断だな。それじゃあ次のお便り。」

ベルカ自治区、第35宿舎にお住まいのPN：絶影2010春さん。

『ハヅキ姐御のデバイス、レオンハルトのデータ及び、

初陣の時の感想又は印象に残ったエピソード、あったら教えて

下さい』」

ハヅキ

「ふむ。レオンハルトのデータか。

では簡単に説明するでしょう。」

名称はレオンハルト。男性型AIのインテリジェントデバイスだ。待機形態は十字架のネックレス。展開形態はバリアジャケットそのもの、という一風変わったデバイスだな。

このレオンハルトは母さんから受け継いだもので、私の師であり、友人であり、パートナーだ」

ティアナ

「お母さんも、同じデバイスを使っていたんですか？」

ハヅキ

「ああ。私が管理局に入ると決めた時に譲り受けた。

多少型は古いが、それでも現在管理局中でトップクラスのデバイスだと自負している」

スバル

「なんだか凄いですね！ 喋ったりはしないんですか？」

ハヅキ

「無口なタイプなのでな。レオンハルト、挨拶をしる」

レオンハルト

《レオンハルトです。以後お見知りおきを》

ティアナ

「し、渋い……」

スバル

「置鮎龍 郎さんみたいな声だね」

ハヅキ

「うむ。母さんが当時惚れていた人の声らしい」

ティアナ

「そうなんですか」

スバル

「ロマンスですね」

ハヤト

「……自分の親のそーゆー話って、凄くむず痒いんですけど」

ティアナ

「あら、ロマンチックでいいじゃない」

スバル

「そうだよ、ハヤトは浪漫が無いなあ」

ハツキ

「そう言ってるな。男の子には色々あるものだ。」

ハヤトも小さい頃はよく「お母さん大好き」と

ハヤト

「えー、じゃあ姉ちゃん、初出勤の感想を！」

ティアナ&スバル

( (あ、誤魔化した) )

ハツキ

「ふむ。初出勤は……確か15の時だったかな。」

ランクCの魔導師が街中で暴れていて、その鎮圧任務だった」

ティアナ

「その時、ハツキさんのランクはいくつだったんですか？」

ハツキ

「陸戦Aだったかな。まあ、初出勤はずっと緊張して震えていたよ。当時の隊長や仲間には随分と迷惑をかけたな」

スバル

「ちよつと意外ですね。ハヅキさんって、初出勤からずっと活躍してたばかり」

ハヅキ

「はっはっは。初めてから戸惑い無く戦える者などいるまい。私とて人間だ、緊張もすれば恐れもする」

ハヤト

「姉ちゃんが真面目だ……いつもこうだと嬉しいんだが」

ハヅキ

「ハヤトが望むなら、いつだってお姉ちゃんは真面目モードになるぞ！」

だから私を抱きしめてくれ！」

ハヤト

「それが嫌なんだよ！ いい加減学習してくれっ！！」

ハヅキ

「ハヤトがラブリーなのがいけないのだ！ だから抱きしめさせる！！」

ハヤト

「ティ、ティアナ！ スバル！

さっさと次のお便りいけ！ 次のお便り！ ああもう引っ付くな！！」

スバル

「え？ う、うん。」

次のお便りは……スカリエツティラボ近辺にお住まいの、PN：  
検体番号10032さん。

「ハヤト、スバル、ティアナの三人が何でもありのガチバトルをした場合、

誰が最後まで勝ち残りますか？それとも一つ。

FWメンバー（全員）VSハヅキさん（本気）だと、どちらが勝ちますか？

「どちらにも気になります！」

「だって。考えたことも無かったね」

ハヤト

「俺ら3人がガチバトルねえ……」

ティアナ

「多分、あたしかハヤトが残るんじゃない？」

ハヤト

「だな。まあ、7：3でティアナが勝つだろ」

スバル

「……あれ？ あたしは？」

ハヤト&ティアナ

「「開始したら即座に落とす」」

スバル

「ひどっ!？」

＼H A H A H A / ＼H A H A H A /

ハヤト

「フーかお前、俺とティアナにはタイムマンで普通に負け越してんじやん」

スバル

「な、何でもアリだったら勝てるもん！」

ティアナ

「無理でしょ。何でもありなら、ハヤトの方が優勢だわ」

ハヅキ

「ハヤトは優秀だからな！」

ハヤト

「（無視）ま、そんな訳で俺らがガチバトルをすると、最初にスバルが落ちて、その後俺とティアナが銃撃戦。」

「それで最終的にはティアナか俺のどっちかが勝つって感じですね」

ティアナ

「次はあたし達FW全員と、全力のハヅキさんが戦ったら、ね」

スバル

「ハヅキさんの全力ってどのくらいなんですか？」

ハヅキ

「ふむ、私の全力か……。  
どのぐらいなのだ？ スタッフよ」

（ ・ ・ ・ ）

全力なのは&フェイトと互角

ティアナ&スバル

「マジで!?!」

ハヤト

「あー、まあ姉ちゃんの全力ならそんなもんだよなあ」

ティアナ

「ちょ、ちょっと待って！ ハツキさん、何でそんなに強いんですか!?!」

ハヤト

「決まってるじゃん、チートだからだよ。  
作者的に、ディレト相手に戦って余裕で勝てるキャラって設定らしいし」

ティアナ&スバル

「嘘オツ!?!」

ハヅキ

「本当だぞ。私は陸戦AAAとなっているが、実際は総合SS程度の力量という設定だ」

ティアナ&スバル

「はいいつ!?!」

ハヤト

「クロス、ミドル、ロング。どの距離でもエース並みの実力があるぞ」

ティアナ

「……ハヤト、あんた実は買われてきた子なんじゃないの?」

ハヤト

「実はそうなん」

ハヅキ

「なっ!?!? そ、そうなのかハヤト!?!」

私とお前は血が繋がってないのか!?!? なら私は遠慮なくお前と結ばれるぞ!?!」

ハヤト

「姉弟です! 間違いなく姉弟です!

だから迫らないで! 胸を当てないで! ホント勘弁してください!?!」

ティアナ

「……まあ、あそこの姉弟は放置するとして」

ハヤト

「放置しないで！ へるぷ！ へるぷみい！！」

スバル

「あ、カンペだ。えーとなになに？

『FW全員（ギンガ含む）VS全力ハヅキだと、ハヅキが2分前後で勝つ』

だそうです。……ハヅキさん強すぎ」

ティアナ

「なんだかグダグダになっちゃったけど、検体番号10032さん、わかりました？」

スバル

「それじゃあ次のお便り。

グランセニツク家に居候中の……ヴァイス陸曹のお家に？ P N：  
恵慈さん。

『ハヤトくん、スバルちゃん、ティアナちゃん。

そして、ゲストさん、こんにちはっ！』」

ティアナ&スバル

「「こんにちは」」

ハヤト

「こ、こんにち……姉ちゃん喋りづらいからいい加減離れて！」

ハヅキ

「はあああっ！ ハヤトハヤトハヤト~~~~っっ！」

スバル（無視）

「『質問です。もし自分が管理局員じゃなかったら、何の職業に就いていると思いますか？』」

ティアナ（無視）

「うーん……執務官になること意外考えた事なかったけど……。  
そうね、社長秘書とか憧れるかも」

スバル

「ティアに秘書って凄く似合いそう。あたしはアイス屋さん！  
それで、お店終わった後に余ったアイスを全部食べるんだあ／＼」

ティアナ

「スバル。残ったアイスとかは、普通食べられないわよ？」

スバル

「嘘！？ ホントに!?!」

ティアナ

「当たり前じゃないの」

スバル

「そ、そんなああ……orz」

ティアナ

「ハヤトはどつ?」

ハヤト

「俺？ 俺は……そうだな、ゲーム会社にでも就職してるかね」

ハヅキ

「私はハヤトのお嫁さんだ！」

ハヤト

「無理だから！ あといい加減離れて!？」

ハヅキ

「愛していると言ってくれたら離れるぞ！」

ハヤト

「いやあああああ……（泣）」

ティアナ

「あーもう！ さっきから話が進まない！

ハヅキさんは一旦離れてください！

スバルはいつまでも落ち込んでないの！ ハヤトもしゃっきりする！」

ハヅキ

「む……そ、そんなに怒ることは無いだろう」

ハヤト

「た、助かった……」

スバル

「だってええ……アイスがあああ……（泣）」

ハヤト

「ほらほら、アイスは後で奢ってやるから。とりあえず落ち着け」

スバル

「ううう……全種類いてもいい？」

ハヤト

「スタッフ持ちだから構わないぞ」

(。。(アアアアきこえない

ハヤト

「経費で落ちるよな？」

シュツ

シュツ

シュツ

ハ、ハ

シュツ

ハ、ハ

ハ、ハ

ハ

(。(。(。(。(。(。(。(。(。(。(。お断りします

ノノノノ

ノノ

ノ

ノノ

スバル

「お断りされてるよ?」

ハヤト

「じゃあ諦める」

スバル

「ええええ……」

ティアナ

「あ・ん・た・らあ……!! いい加減にしなさいよ!？」

ハヤト&スバル

「す、すいませんでした!」

ハヅキ

「(母さんよりも怖いかも知れん……ティアナ、恐るべし)」

ま、まあまあティアナ。反省もしているようだし、それくらいで、  
な?」

ティアナ

「……そうですね。これ以上ラジオが滞っても困りますし」

ハヤト&スバル

「ほっ……」

ティアナ

「説教なら後でも出来ますし」

ハヤト&スバル

「こうげつ……」

ハヅキ

「で、では最後の質問といこう。これは私が読むぞ。

第97管理外世界地球のとある骨董アパート102号室にお住まいの、PN：Kの2乗さん。」

『ハヤト君に質問です。ハヅキさんのブラコンぶりによる行動はとてつもないようですが、

その中で1番大変だったことはなんですか？』

失礼な。私はハヤトに迷惑をかけるようなことはしないぞ！」

ハヤト

「（嘘だろ……）えーと、一番大変だったのは2年前かな。

実家に帰った時に、丁度姉ちゃんも帰ってきてさ。そんで俺が風呂に入ったら、姉ちゃんも乱入してきたんだよ。

しかも何故かスク水で」

ティアナ&スバル

「なぜスク水……」

ハヅキ

「裸で入ったら変態だろう！」

ティアナ

「あの、その時ハヅキさんっておいくつだったんですか？」

ハヅキ

「？ 私が22、ハヤトは15だったか？」

スバル

「変態だ!？」

ハヅキ

「失敬な！ ちゃんと水着を着ていたと言っただろう！」

ティアナ

「そうじゃなくて、その歳で弟とお風呂に入ろうとしたっていう事実が……」

スバル

「それに水着のチョイスも……」

ハヅキ

「なん……だと……？」

ハヤト

「姉ちゃん、普通は20歳こえてから15歳の弟と一緒に風呂に入ろうとはしないって」

ハヅキ

「そんな!？ 母さんは叔父さんが入っていたと聞くぞ!？」

ハヤト

「ウチの女はこんなばっかか……（泣）」

スバル

「は、ハヤト、どんまい」

ティアナ

「強く生きなさい……」

ハヤト

「お前らの優しさが痛い」

ティアナ

「頑張れとしか言えないわね。

ま、それはそうとして“なぜなに とあ新”はここまで。それじやあ次のコーナー」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『チャレンジ！ハヤト』」

ハヤト

「えー、リスナーさんからの投稿で始まったこの新コーナー」

スバル

「このコーナーは、リスナーさんから頂いたお題に、ハヤトが挑戦するというコーナーです。

成功するたびに1チャレンジポイントが入って、20ポイント貯まると、ハヤトにご褒美が出るらしいよ」

ハヤト

「ご褒美って何だ？」

（ …… ）

秘密

ティアナ  
「ですって」

ハヤト  
「それじゃやる気でねえよ！」

スバル  
「いいじゃん。ハヤトだけコーナーが無いのはずるいよ！」

ティアナ  
「そうね。あたし達だって恥ずかしいのを我慢してるんだし、あんたもやりなさい」

ハヅキ  
「お姉ちゃんはハヤトが頑張ってるところが見たいぞ！」

ハヤト  
「なんと言つ四面楚歌。空気にやらざるを得ない。

……が……！ 今回は時間も無いし、ネタも無いからやらないのさ

！」

スバル

「えー、ずるーい!」

ティアナ

「何かやりなさいよ!」

ハヤト

「聞こえんなあ! H A H A H A H A」

ハヅキ

「ハヤトの頑張る姿は見れないのか……」(しょぼーん)

ハヤト

「H A H A H A! ! 悔しいのうw 悔しいのうw

そしてそのままですかさず次のコーナー!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「ツンデレ!ティアナちゃん」「」

ティアナ

「……もう諦めたわ。さっさとやりなさい」

ハヤト

「潔いな。では早速いくぞ。」

第97管理外世界、風都の探偵事務所にお住まいの……サイクロン！ ジョーカー！

PN：神崎はやてさん。

『不味いつて言う割には、さっきから食べてくれてるじゃないか』

」

ティアナ

「だ、だって食べなきゃ材料が勿体無いじゃないの！ だから仕方なくよ、仕方なく！」

スバル

「次はミッドチルダにお住まいの、PN：小狸っていうなー！さん。

『あれ？ それって前に俺がプレゼントしたヤツ？』

ティアナ

「た、たまたまよ！ たまたまこの服に合うから付けてるだけ！別にアンタに貰ったのが嬉しくて付けてる訳じゃないんだからね！？」

ハヅキ

「ナイスツンデレ」(・・)b

スバル

「ナイスツンデレ!」(<>)b

ハヤト

「ナイスブルマ」(\*。。)b

ティアナ

「嬉しくない! つーかハヤトはセクハラしてんな!」(スタンガン攻撃)

ハヤト

「あばばばばば!?!」(びりびり)

スバル

「ああ!?! 漫画みたいにハヤトの骨が見える!?!」

ハヅキ

「ハ、ハヤトオオツツ!?!」

ティアナ

「……TOUDAさん、ありがとうございます。  
お陰でセクハラ魔人を滅ぼせました」

ハヤト(アフロ)

「生きてる……っつの……」

スバル

「あはははは！w アフロ、アフロになってる！！！」

ハヅキ

「そんなハヤトもぷりちーだ！」

ハヤト（アフロ）

「嬉しくねえええ……orz」

ティアナ

「あ、と。もう時間が無くなってきたみたいね。最後にハヅキさん宛てにお便りが届いています。」

ミッドチルダ中央部にお住まいの、PN：梟お化けさん。

『ハヤトさんの将来について、ゆっくり語り合いませんか？』  
「そうです」

ハヅキ

「ハヤトの将来についてか……私とハヤトがどうやったら結婚出来るかを考えてくれるのだろうか？」

それならば喜んでお邪魔したいところではあるが……」

ハヤト（アフロ）

「やめて！ つーか普通になんの話してんの！？」

ハヅキ

「？ ハヤトと結婚する方法だが……」

ハヤト（アフロ）

「俺の意思は無視か！？ なぁおい！！」

ティアナとスバルも止めてくれよ！ ヒロインだろ！？」

スバル

「まあ、ここは本編とは関係ないし」

ティアナ

「このラジオは、本編があたし達が出演している『ドラマ』って設定でやってるから何が起きてても平気よ。

別にここじゃヒロインじゃないしね」

ハヤト（アフロ）

「ぶつちやけた！？ こいつぶつちやけた！？

畜生！！ 明日のドラマの収録で覚えてるよ！ 監督に言ってお前の出番カットして貰うからな！」

ティアナ

「……ハヤト、別に監督さんとそこまで親しくなかつたわよね？」

ハヤト（アフロ）

「そうでした」

スバル

「あ、そんなことしてる間に時間だよ！」

ハヤト（アフロ）

「そうか。それじゃあ最後にお便りのお知らせを、今回は姉ちゃんから」

ハヅキ

「任せておけ！」

この“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーからの便りを待っているぞ。

“なぜなに とあ新”では、メンバーソナリティ3人や、ゲストの方に対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーの皆さんが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレ台詞を返して欲しい、リスナーが考えた台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、私の最愛の弟であるハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定で頼むぞ。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人の収録風景のイラストなども募集しているぞ！

リスナーの皆、張り切ってどんどん送るように！

ティアナ

「次回放送は日曜日〜金曜日までの間のゲリラ放送です」

スバル

「そしてそして！」

次回からは、いよいよ他作者さんのキャラクターをゲストさんにお呼びします！」

ティアナ

「それにあたって、ハヤトからゲスト出演に関するお知らせをいくつか」

ハヤト（アフロ）

「ん。ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、くじによる抽選とさせて貰います。」

これは応募順だと、次回ゲストが誰だか予想出来てしまって面白くないと作者が判断したからです。

そこんとこ、あらかじめご了承下さい。

くじによる抽選なんで、応募したばかりの作者さんのキャラが次回登場するかも！？」

ティアナ

「選ばれた作者さんには、放送の翌日に、こちらからメッセージでお知らせをお送りします」

スバル

「んー……他にお知らせはないかな？」

えっと、それじゃあ今回の放送はここまでですー！」

ティアナ

「お相手はティアナ⇨ランスターと」

スバル

「スバル⇨ナカジマと！」

ハヤト（アフロ）

「ハヤト⇨ロックウエルと」

ハツキ

「ハツキ⇨ロックウエルだったぞ」

スバル

「それでは、次回“リリカル マジカル とあ新らじお”、第4回  
でまたお会いしましょう」

ハヤト&ティアナ&スバル&ハツキ

「「「バイバイ！」」」

ティアナ

「この番組は、

(株)小狸エンターテインメント

(侍)N・E・E・T

(株)シャフーズ

鉄槌ゲートボール推進委員会

(有)メイオー

の提供でお送りしました」

### 第3回『やつべ、この女すげえ扱い辛い!』（後書き）

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

- ・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw
- ・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、PN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・PNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

- ・ ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。
- ・ 出演が決まった作品の作者様には、放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第4回『うわよう、よっよい』（前書き）

なんか書くたびに長くなっていくような……。  
長すぎたら、感想などで苦情を言ってください。自重します。

第4回 『うわよう、よつよい』

ハヤト

「おい、聞いたか？ ティアナ、スバル」

ティアナ&スバル

「何を？」

ハヤト

「今日くる予定のゲストって、どうやら幼女らしいぞ」

ティアナ

「ちっちゃい子ってこと？」

ハヤト

「（。。。）。幼女！ 幼女！」

スバル

「ハヤト、変なことしちゃ駄目だからね？」

ティアナ

「まあ、その時はスタンガンで止めればいいわよ。それじゃあ最初のコーナーいくわよ」

ハヤト&ティアナ&スバル

「励まして！ティアナちゃん！」

スバル

「あ、あれ！？ ティアナちゃん！？」

ティアナ

「PN：たい焼きヘッドさんから提案があったのよ。」

『たまには、コーナーを交換してみたらどうですか？』って。それで、スタッフさんが相談して、面白そうだからって採用になったらしいの。それで、今回はその実験よ」

スバル

「……ふん、そなんだ」

ハヤト

「どうしたスバル？ コーナーとられて寂しいのか？」

スバル

「そ、そんなことないよ！？ じゃ、じゃあ早速最初のお便り！

妄想の中にお住まいの……妄想の中に！？ PN：とあるを読みたい駄文召喚士さん。」

『自分は一応リリなの小説を地味にやっているんですが、

先日のテストは自分でもわかる赤……レッドゾーンにorz

一応存在してくださっているであろう読者の方々様にどうやって

補しゅ……勉強で更新が遅れてしまうという言い訳をしたらいい

いでしょうか？

教えてください！』」

ティアナ

「言い訳なんてしないで、真正面からちゃんと謝りなさい！」

ハヤト

「次のお便り。」

第97管理外世界、東京都世田谷区ウルトラマン商店街にお住まいの……シュワツチ。

PN：監督提督さん。

『とある芸大の演劇専攻に通っているのですが、

鼻が悪い（アレルギー性鼻炎）も手伝って、肺活量がホントに悪いんです

クラスで発生練習やってても、必ず最初に息が切れるし、他にも弊害がチラホラ……

正直凹みますorz』」

ティアナ

「ひとつのことが駄目なら、他の事で勝負しなさい。

他人と自分の優劣を比べてネガティブになるなんてナンセンスよ！」

ハヤト

「……と、言うわけで交換してみたんだが」

ティアナ

「な、何よ!? ちゃんとしてたでしょ!」

スバル

「あれって、励ましてた事になるのかな?」

ハヤト

「いや、むしろ余計追い詰めてるような……」

ティアナ

「そ、そんなことないわよ!」

ハヤト

「駄文召喚士さん、監督提督さん。

ティアナの励ましが不満でしたら、感想、もしくはメッセージで苦情をお願いします」

ティアナ

「こないわよ!」

スバル

「ティ、ティア落ち着いて!」

えーと、それじゃあ“リリカルマジカルとあ新らじお”第4回!」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「『スタートですっ！』」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第4回『うわよう、よつよい』

ハヤト

「はいはいどうも。そろそろお馴染みになってきたかね？」

メインパーソナリティを務める、ハヤトⅡ ロックウエルです」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティを務めます、ティアナⅡ ランスタ―  
です」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバルⅡ ナカジマですっ！」

ハヤト

「いよいよ今回から他作者様のキャラクターをゲストに呼ぶのか…  
…胸が熱くなるな」

ティアナ

「それはいいけど……さっきからスタッフが異様に盛り上がってる  
のはなんで？」

いいか、みんな

(。 )  
— y — )

こぶしを上挙げて「幼」

( )  
— y — )  
≡ 幼

下に降ろして「女」だ

( )  
— y — )  
≡ 女

後はこれを繰り返せ

( )  
。 。 )  
≡ 幼

( )  
。 。 )  
≡ 女

女！ (。 。 )  
≡ 幼女！ 幼女！ (。 。 )  
≡ 幼女！ 幼

≡

≡

スバル

「……ちょっと怖いんだけど」

ハヤト

「気にしたら負けだろ。さて、それじゃあ早速あみだくじで確定したゲストをお呼びしようか。」

『WISH〜王女が願う夢〜』より、魔王の妹君、転生しちゃつてこんにちわ

その可愛さで周りの皆を虜にするリア充少女……。

高町ゆずちゃん(6)です!」

ゆず

「ど、どうも。只今ご紹介に与りました高町ゆず、です」

(。。(。ミ。幼女! 幼女! (。(。(。ミ。幼女!  
幼女!

(。(。(。ミ。幼女! 幼女! (。(。(。ミ。幼女!  
幼女!

ハヤト

「おかしいだろあの熱狂ぶり。」

何? ウチのスタッフはロリコンばかりか?」

ゆず

「少し、怖いですね……」

ハヤト

「ごめんなあ、変人ばっかで……って、ん？」

おいどうしたティアナにスバル。さっきから黙ってるけど」

ティアナ&スバル

「「……………」」

ハヤト

「おい、折角ゲストが来てくれたんだぞ？」

ゆず

「あの、どうかしましたか？」（下から見上げる）

ティアナ&スバル

「「……………」かっ」

ハヤト&ゆず

「「か？」」

ティアナ&スバル

「「可愛い……………っっっ……！！！！」」

ゆず

「「じゃあああああっっっ！？」」

ティアナ

「何この子、すっごく可愛いんだけど！」

スバル

「や〜ん、ほっぺにぷにぷに〜っ!〜!」

ゆず

「や、やめっ、やめてくださいっ」

スバル

「髪もサラサラ〜」

ティアナ

「ちよっともう何よこの子! 反則級に可愛いじゃないの〜!〜!」

ゆず

「ハ、ハヤト殿! 助け……助けてくださいい!〜!」

ハヤト

「……悪い。そうなった女2人を止める術を、俺は知らない」

ゆず

「そんなあああっ!」

〜少女暴走中。暫くお待ち下さい〜

BGM: エア初号機暴走(使徒を……喰ってる……!?)

ハヤト

「……そうしてもう20分経った訳だが」

ティアナ

「サラサラでモフモフ」

スバル

「目もくりくりしててラブリー」

ハヤト

「まーだやってるよ……俺帰っていい？」

ゆず

「い……」

ハヤト

「ん？」

ゆず

「いい加減にせぬかあああああつっ!!!!」

ティアナ&スバル

「「きゃあっ!?!」」

ゆず

「さつきからずっとわらわの話も聞かずにペタペタペタと！  
無礼とは思わぬのか！ このたわけめ!!」

ティアナ&スバル

「「す、すみません!!」」

ハヤト

「えー……あの、ゆず、さん？」

ゆず

「お主もお主じゃ！ 目の前で童わい入が助けを求めているのに、手を貸さぬとは何事か！」

ハヤト

「え！？ 俺も怒られんの！？」

ゆず

「当然じゃ！ 主ら少しそこに座れ！！」

ハヤト

「いやでも、ラジオ放送しないと……」

ティアナ&スバル

「こそ、そうそう」「」

ゆず

「す・わ・れ・っ！……！！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「は、はひひひひひ！！」「」「」

（ 幼女説教中。暫くお待ち下さい ）

BGM：夢想花

（ じどもーろのゆめーはー いろあせないーらくがーきねー ）

ゆず

「がみがみ……………わかったか!？」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……はい、すいませんでした」「」（土下座）

ゆず

「わかったのならば良い。ほれ、気を取り直してラジオを始めるのじゃ」

ハヤト

「なんでちよつと年寄り言葉……………まあいいか。

そいじゃあまずは今回から始まったこのコーナーいこうかね」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……ゲストへの5つの質問!」「」

スバル

「このコーナーは、ゲストに来てくださったキャラクターの皆様へ、質問を答えて貰おう! というコーナーです」

ゆず

「質問、ですか?」

ハヤト

「そうだよ。まあ、そんなに際どい質問はないから、気軽に答え  
ておくれ」

ゆず

「分かりました。頑張ります！」

ティアナ

「それでは早速1つ目の質問です。

『お名前は?』  
「

ゆず

「高町ゆずです。今日はどうぞよろしくお願いします」

ハヤト

「本名?」

ゆず

「本名ですよ。何ですか?」

ハヤト

「いやほら、転生モノの主人公って偽名使ってたりするじゃん?」

ゆず

「私はそんなことは無いですよ」(笑)

スバル

「か、可愛……落ち着けあたし。えーと、それでは次の質問!

『自分を動物に例えると?』」

ゆず

「そうですね……姉上やアリサ殿からよく猫みたいと言われてるんで、猫だと思います。」

……理由は分かりませんが」

ティアナ

「あー、確かに雰囲気猫っぽいかも」

ゆず

「そうですか?」

ハヤト

「その無意識に可愛さフェロモンを出すあたりとかも猫っぽいな。ま、俺は幼女には興味ないから全く効かぬが」

スバル

「ハヤトは感覚がおかしいんだよ。こんなに可愛いのに……」

ハヤト

「うーん? 子供の可愛さってのは良くわからんわ」

ティアナ

「あんたは胸にしか興味ないものね」

ハヤト

「（。 。 ）〇ミ。おっぱい！おっぱい！」

ゆず

「…………変態ですね」

ハヤト

「変態で結構！ そいじゃあっつ目いくぞ！」

『好きな食べ物は？』

ゆず

「母上が作るケーキです！」

今まで生きてきて、あんなおいしい物は食べたことはありません  
ね」

ティアナ

「お母さんって言うと…………桃子さんよね？」

スバル

「なのはさんの実家のケーキ！ アレは絶品だったよ」

ハヤト

「確かに。あそこのを食べると、ちょっと普通のケーキじゃ満足で  
きなくなるな」

ゆず

「私も大好きです。あの絶妙な甘さは癖になります」

ティアナ

「ああもついちいち可愛いわねこの子……。落ち着いてあたし。それじゃあ4つ目の質問！」

『自分の性格を一言で』」

ゆず

「少し頑固……かもしれませぬ。」

心のほうはすでに大人なので、しっかりしているとは思いますが」

スバル

「そつういえば転生したつて設定なんだよね。」

転生する前つて、ゆずちゃんは何歳だったの？」

ゆず

「えつと……確か21歳だったと思います」

ハヤト

「ふむ。ということは精神年齢は27歳……。何だ、結構ババアじや」

ゆず

「失敬なことを言うでないわあつっ！……！」

ハヤト

「うわよう、よつよい……！」

スバル

「な、なんて鋭いカエルアッパー！ ハヤトが縦にグルングルン回転してる！？」

ティアナ

「いいパンチね。将来管理局に欲しい人材だわ。可愛いし」

ハヤト

「げふう！」

ゆず

「言うに事欠いて誰がババアじゃと！？ わらわはまだ6歳！  
前世とて21歳じゃったと言っただろうが！  
まだまだぴちぴちじゃー！」

ハヤト

「ピチピチとか……死語……」

ゆず

「……主、まだ言っか」

スバル

「ま、まあまあ落ち着いて！」

ハヤトは後でじっくりお説教すればいいから、ね！？」

ゆず

「む……何だか納得いかんが、まあ良いじゃろう。  
んんっ。それで、最後の質問はなんですか？」

ティアナ

「（助かったわ……）えーと、それじゃあ最後の質問です。」

『パーソナリティの3人に一言!』」

ゆず

「三人の活躍、いつも拝見しています！」

一人一人の活躍がとてつかっこいいですね。特にハヤト殿の姿は、本当の意味で男らしい、そう感じました。

これからも三人のことを応援し続けていくので、ぜひがんばってください！」

ハヤト

「俺の時代が来たと聞いて」

スバル

「復活はやっ!?!」

ティアナ

「来てないから死んでなさい」

ハヤト

(\*・・・) あ、そうですか……

／  
— ( )  
／

く  
／、  
—

／<／  
／  
／

スバル

「布団はどこから!？」

ゆず

「というか、番組中に寝ていいんですか!？」

ティアナ

「放っておけばいいわよ。そんなことより、あたし達のドラマ、いつも見てくれてたのね」

ゆず

「毎週放送してるの、録画して繰り返し見えます」

スバル

「なんか照れちゃうね」

ティアナ

「そうね。ゆずちゃん、これからも応援よろしくね？」

ゆず

「はい!」

スバル

「それじゃあ次のコーナーいってみようか」

ティアナ&スバル

「「「なぜなに」とあ新！」「」」

スバル

「このコーナーは、リスナーさんからの質問にあたし達で答えていこう！ というコーナーです」

ゆず

「それでは最初のお便りです。

第97管理外世界、山形県日本国にお住まいの、PN:どこかの弓兵さん。

『ハヤトの必殺技の正確な速度と、それにかかる最大演算時間を教えてください。』

それから、初めからその設定のスフィアを構成、もしくは登録すれば、

時間かける必要無くないですか？』」

スバル

「あ、これあたしも気になるー」

ティアナ

「これはハヤトじゃないと答えられないわね。  
ほらハヤト、起きなさい」

< /、 、 、  
| / | | |  
< お断りします

ゆず

「い、いい大人が不貞寝してます……」

スバル

「ハヤトー、起きてー」

< /、 、 、  
| / | | |  
< 超 お断りします

ティアナ

「……あ、あんなところに巨乳の美人が」

ハヤト

「巨乳美女だとう！？」

ティアナ&スバル&ゆず

「……」

ハヤト

「巨乳美女どこ！？ あ、最低でもD以上だよな！？」

ティアナ

「……嘘よ」

ハヤト

「嘘！？ 嘘つつつたか今お前！？」

ふざけんなよ！ 俺がどれだけ期待したと思ってんだなあヲイ！！  
巨乳美女の前でわざと転んで胸に顔を埋めて「えへへ すいませ  
えん」とかやるうと思ってたんだぞ！？」

そんな俺の夢をお前は嘘という泥で汚したんだ！ 何て酷い女な  
んだお前は！！

謝れ！ 全次元世界の巨乳愛好家に謝れ！！！ 謝罪と賠償を要  
求する！！！！」

ティアナ

「五月蠅い」（スタンガン攻撃）

ハヤト

「あははははははははははは」

スバル

「ゆずちゃん見て、あれが変態の末路だよ」

ゆず

「…………哀れですね」

ハヤト（アフロ）

「すいません取り乱しました」

ティアナ

「わかればいいわ。それじゃサクサク答えなさい？」

ハヤト（アフロ）

「へいへい。えーっと、最大速度は大体マツハ2前後。最大演算時

間は32秒だな」

スバル

「なんて言うか……必殺技としては致命傷レベルで時間かかるね」

ティアナ

「そうね。弓兵さんの言うとおり、最初から登録しておけばいいんじゃないの？」

ハヤト

「そもいかねえんだなこれが。」

実際、弾自体はちゃんとソニックムーブ10回かけた構成を登録してるから、そっちにかかる時間は1秒も無いんだよ。時間を喰うのは、弾道計算と反動計算な訳さ。

特に動くものが相手の時は、弾道計算だけで20秒以上かかる時がある。

マツハで動く弾だから、基本的に直線しか飛ばせないだろ？ だから、その分弾道計算には時間が必要なんだよ。

周りの状況で反動とかも変わってくるから、反動計算もそこそこに時間とられるしな。

んで、その反動に合わせて減衰魔法やらプロテクトやらをかけて、弾そのものにも計算した速度で出るだろ？ 衝撃波専用の減衰魔法をかける訳だ」

ゆず

「そついつのを全部飛ばして撃つと、どうなるんですか？」

ハヤト

「まず、撃った時の衝撃で俺が凄い事になる。それで、明後日の方

向にマツハで飛ぶ弾丸が飛来する。

減衰魔法もかけてないから、あたり一体を衝撃波でぶっ壊しながら進んで、最終的に何かに当たって止まる、と。

ちなみに減衰魔法無しで人に当たった場合、9割9分死ぬ。非殺傷設定でもお構い無しに」

スバル

「こわっ!？」

ティアナ

「物騒すぎるわね……」

ハヤト

「だつてお前、かなりの強度を誇る戦闘機だつて、音速を超えた時の衝撃でぶっ壊れる時があるんだぜ？」

人間の体なんて、紙くずみたいなもんだろ」

ゆず

「確かに、マツハを越えた時の衝撃は1tを超えると聞きます。

ちゃんとした対策をとらないと、酷いことになってしまいそうですね」

ハヤト

「そーゆーことだ。てな訳で、どこかの弓兵さん。

俺の必殺技の説明はこんな感じですよ」

スバル

「それじゃあ次の質問！」

軌道拘置所にお住まい……ってこんなところまで放送してるんだ。えー、軌道拘置所にお住まいの、PN:冷蔵庫のイケメルヘンさ

ん。

『3人が思う、六課一の苦労人は？』」

ハヤト

「高町隊長」

ティアナ

「なのはさん」

スバル

「八神部隊長」

ハヤト

「……部隊長は無いだろー」

スバル

「えー、そうかなあ？ いつも忙しそうだけど……」

ティアナ

「その分あたし達をからかってストレス発散してるじゃない」

スバル

「あ、そっか」

ハヤト

「それに部隊長は要領いいからな。ちゃんと時間とって休んだり出  
来てるらしいぞ」

ゆず

「ええと、ハヤト殿にティアナ殿。姉上はそんなに苦勞していらっしやるのでしょうか？」

ティアナ

「あたし達が見てる限りでは、だけどね」

ハヤト

「高町隊長の場合、自分から苦勞を背負い込んでる感じだな。毎日遅くまで仕事してるし、休みも仕事ばっかだし」

スバル

「遊びに行ったりしてるの、見たことないよね」

ゆず

「……姉上、年頃の女性が仕事漬けの毎日というのは、どうなんでしょう？」

ティアナ

「聞いた話だと、なのはさんって私服もあんまり持ってないらしいわ」

スバル

「あ、それあたしも聞いたことある。」

何か、最低限の私服しかなくて、化粧品とかもあんまり持ってないって」

ゆず

「……姉上。ゆずは姉上の将来が心配です」

ハヤト

「部隊長と高町隊長、ハラオウン隊長はなあ。モテるのに浮いた噂の一つも無いもんなあ」

ゆず

「姉上え……」

ティアナ

「だ、大丈夫よゆずちゃん！なのはさんにはスクライア司書長がいるじゃない！」

ハヤト

「10年一緒にいて進展なしだけどなー」

ゆず

「うう……」

スバル

「ハヤト！余計な事言っちゃ駄目だよ！！」

ティアナ

「ふざけてんじゃないわよ！」（スタンガン攻撃）

ハヤト

「そればっかかかかかかかか」

ゆず

「ああ！ハヤト殿が解剖されて電極を通された蛙みみたいな痙攣を……」

スバル

「いいんだよゆずちゃん。あれがハヤトの役割だから」

ゆず

「そういうものなんですか？」

スバル

「そういうものなんだよ」

ゆず

「なるほど、興味深いですね」

ティアナ

「よし。それじゃあ最後の質問いくわよ。」

第97管理外世界、風都の探偵事務所にお住まいの、PN：神崎はやてさん。

いつも投稿ありがとうございます。

『ハヤト君はなんとなく想像つきますが、

スバルとティアナは普段（仕事以外で）何をしているんですか？

町に出るぐらいの時間は無いけど、ちょっとだけ暇って時はど

うしてるんでしょう？』

スバル

「うん。ティアと一緒にラウンジで雑誌見たり、部屋でゴロゴロしたり、かな？」

ティアナ

「そうね。時々シャーリーさんやアルトと一緒に喋ったりもしてるわね」

ゆず

「雑誌って、何を読むんですか？」

ティアナ

「ファッション雑誌なんかを適当に、ね。

あんまり私服を着る機会はないけど、これでもちゃんとオシャレは意識してるのよ？」

ゆず

「そ、それはわかっています。ティアナ殿もスバル殿も、年頃の女性ですから」

スバル

「この間のアイス特集は良かったなあ。あ、ティア。今日収録終わったら行ってみようよ！」

ゆずちゃんも一緒に！」

ティアナ

「そうね。折角の初ゲストだし、奢るわよ？」

ゆず

「そんな、悪いですよ」

スバル

「いーっていーって。お姉さん達に任せなさい！」

ゆず

「ええと……それじゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます／＼／」

ティアナ

「ああもう！ いちいち可愛いわね」の子…」

スバル

「一杯奢ってあげるからね！」

ハヤト

「……………なあ」

ティアナ

「何よ。KY野郎は黙ってなさい」

ハヤト

「ヒドスW いや、女の子トークしてるとこ悪いんだが、ラジオやるうぜ？」

ティアナ&スバル&ゆず

「……あ……」

ハヤト

「ラジオそつちのけでガールストークとかWWW

お前らラジオ舐めすぎWWW ほらスタツフも怒ってるぜ？」

（ …… ） < 幼女は正義！ （ …… ） < 幼女は正義！

（ …… ） < 幼女は正義！ （ …… ） < 幼女は正義！

ハヤト

「駄目だこいつら……早くなんとかしないと……」

ティアナ

「ま、まあ確かにラジオそっこのけはマズかったわね。

えっと、とりあえず暇なときの過ごし方はこんな感じですよ。それじゃ、これで“なぜなに とあ新”はお終い！

それじゃあ次のコーナー」

スバル

「じゃ、ゆずちゃんも一緒にタイトルコールやろっ？」

ゆず

「あ、はい。わかりました」

ハヤト&ティアナ&スバル&ゆず

「「「「チャレンジ！ハヤト」」」」

ハヤト

「えー。まあそういうことで、始めましたこのコーナー。

今回のチャレンジは、第97管理外世界、京都にお住まいのPN：安部晶彦さんの提案したこちら。

『ハヤトさんが目隠しをして何かが入っている箱の中に手を入れ、何が入っているのか当てて下さい』

……つまるどころ、『箱の中身はなんじゃらホイ？ inとあ新  
らじお』という訳だな」

ティアナ

「使用する箱は、スタッフが事前に用意してあるわ。はい、これ」

箱

『…………』

スバル

「それじゃあ、早速目隠ししてね。ハヤト」

ハヤト

「ほいほい」

ゆず

「あの、これって何が入ってるんですか？」

スバル

「あ、この中にはね……………（ひそひそ）」

ゆず

「え？　だ、大丈夫なんですか？」

スバル

「平気だよ。ちゃんと大丈夫なようになってるから。ハヤト、ちゃんと当ててね！」

ハヤト

「へいへい。それじゃ……………」

ティアナ

「時間は30秒。それじゃ、よーい……………スタート！」

箱（innハヤトの手）  
『ガタガタッ！』

ハヤト

「うおっ！？ 何か動いた！ 生き物！？ 生き物入ってんのコレ  
！？

「いつてえ！！ 噛まれた！ 今噛まれたって！！ 毒！？ 毒な  
の！？

「俺死ぬの！？ 嫌だ！ 死にたくねえ！ 死にたくねえよおお！  
！」

ティアナ

「……これ、見てる分には面白いわね」

ゆず

「そ、そうですね。あの焦りっぷりとか、ちょっと可愛いかもです」

スバル

「大丈夫だよハヤト、毒とかはないから」

ハヤト

「あつつっ！？ 何今の熱いの！？ こいつ火でも吐くの！？  
ちよつと俺の指大丈夫！？ 焦げてない！？」

ゆず

「えと、頑張ってください。ハヤト殿」

ハヤト

「いやあああ今度は指舐められたあああ！！ あ、ちよつと気持ち

いいかも……」

ティアナ

「ほらほら、時間無いわよ？ 後12秒」

ハヤト

「うううう。肌触りはちょっとザラザラ……爬虫類系か？

そんで牙があつて、火を吐いて……龍？ 龍か！ 龍たるコレ！

「！

ティアナ

「はい。時間切れー」

スバル

「目隠し取るね」

ハヤト

「うおっ、まぶしっ」

ゆず

「それではハヤト殿、お答えをどうぞ！」

ハヤト

「龍！ どうよ、正解だろ！？」

ティアナ

「……」

スバル

「……」

ゆず

「……………」

ティアナ&スバル&ゆず

「……大正解〜!」

ハヤト

「イヤツツホオオオオオオウ!」

スバル

「この中には龍フリードが入ってました〜」

フリード

「きゅくる〜。きゅくつ。」

(訳:苦しかったっちゅーねん。いてこまずぞワレ)

ティアナ

「協力してくれてありがとね、フリード」

フリード

「きゅきゅ、きゅっくる〜。」

(訳:なんや、礼やったら姉ちゃんの胸揉ませてくれればええで)

ゆず

「……………なんでしょう。何だか凄く不快な事を言っている気がしますよ、この駄龍」

フリード

「きゅく〜! きゅくるー!?!」

(訳：幼女のクセに何ゆーとるんじゃゴルア！  
か、オオ！?)  
××××したろう

ゆず

「……………何か、言ったかえ？」

フリード

「きゅー。きゅー。」

(訳：犬と呼んでくださいませ。姐さん)

ハヤト

「おお、フリードが腹を見せて服従のポーズを！」

ティアナ

「ゆずちゃん、何したの？」

ゆず

「何もしてませんよ？」

フリード

「きゅ、きゅくるる〜……………」

(訳：お、恐ろしいお人や……………)

ハヤト

「まあ何でもいいさね。ほいじゃフリードお疲れ。」

ついでに“チャレンジ！ハヤト”もここで終了！

ティアナ

「時間も無いし、今回は“ツンデレ！ティアナちゃん”はお休みよ。  
やっぱりコーナーが増えたりすると、どうしてもやれないコーナー

「が出てきちゃっわね」

スバル

「だねー。まあ、仕方ないよ。」

交代交代で、あっちもこっちもやっていこう」

ハヤト

「そうだな。され、それじゃあそろそろ終わりの時間が近づいて参りました」

ティアナ

「ゆずちゃん。今日は初めてのゲスト、お疲れ様。ありがとうね」

ゆず

「いえ。こちらこそ、楽しい時間をありがとうございました」

スバル

「終わったら一緒にアイス食べにいこうね」

ゆず

「ふふっ、そうですね」

ハヤト

「ガールズトークすぎて入っていけんどころる。

次回ゲストは是非男性を所望する」

、  
（ー、ー）

— トン  
— ( ) お断りだ ( )  
— /

ハヤト

「……俺の、俺の味方はどこにいるんだ」

ゆず

「え、ええと。私でよければ味方になりますよ?」

ハヤト

「残念だったな。幼女は俺の守備範囲外だ!」

ゆず

「……やっぱりやめました」

ハヤト

「すみません。味方してくださいお願いします」(土下座)

ティアナ

(6歳児に土下座してる17歳……)

スバル

(超シユール……)

ティアナ

「えー、ええと……そ、それじゃあ最後に、ゆずちゃんが主演して

いるドラマの番宣しましょうか!」

スバル

「そうだね! そうしよう!」

ゆず

「あ、番組の宣伝ですか?

えーと、それでは少し失礼して。

タイトルは『WISH〜王女が願う夢〜』。作者は“アーチャー”殿です。

∴ 古き時代の王女は命が消えてゆく瞬間、二人の友のことを思う。

『もう一度、あの二人に会いたい。』そう願った後、王女は戦いの中で消えていった。

そして時代は流れ、王女は高町なのはの妹、【高町ゆず】として生を受ける。

彼女はこの世界で何を願い、何を思うのか…。魔法少女リリカルなのはwish、進みます。

今は無印の前半部分まで物語が進んでいますね」

ハヤト

「よう、よの活躍を見逃すな!」

ティアナ

「言うに事欠いて最初に言うことがそれかああああああっ!?!?!」

ハヤト

「うべらばぶんっ!?!」

スバル

「と、とにかく! ゆずちゃんを中心とした人間模様とか、原作が少しずつ変わっていく描写が秀逸な作品です!

皆見逃さないようにしてくださいね!」

ゆず

「まだまだ未熟な私ですが、主人公として頑張らせていただいてます。

もしよろしければ、皆さん楽しんでくださいね!」

ティアナ

「はい。それじゃあ第4回放送はここまで!

次回放送は、6月5日土曜日の午後9時~12時の間を予定しています!」

スバル

「それじゃ、お便りに関するお知らせを、ゆずちゃんから!」

ゆず

「了解しました。それでは……こほん。

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーからの便りをお待ちしています。

“なぜなにとあ新”では、メインパーソナリティ3人や、ゲストの方に対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーの皆さんが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナ殿にツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤト殿にチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いします。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、ハヤト殿達3人の収録風景のイラストなども募集しています。

送っていただいた場合、このラジオ内で使われるかもしれませんが！リスナーの皆さん、張り切ってどしどし送ってくださいね！

……こんな感じでよかったですでしょうか？

ティアナ

「バッチリよ。ありがとう」

スバル

「えっと、最後にあたしからゲストに関するお知らせを。」

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になってます。

なので、自分より後に応募した作者さんのキャラクターが、次回

ゲストに来る可能性もありますので、そこはご了承ください。

選ばれた作者さんには、放送の翌日に、こちらからメッセージでお知らせをお送りします」

ティアナ

「はい。それではそろそろお別れです」

スバル

「お相手は、スバル」ナカジマと」

ティアナ

「ティアナ」ランスターと」

ゆず

「高町ゆずでした」

ティアナ

「それでは、次回“リリカルマジカルとあ新らじお”第5回で、またお会いしましょう」

ティアナ&スバル&ゆず

「バイバイ！」

ハヤト

「うう……あれ？ 放送終わってる？」

「っておい！ 俺最後の挨拶してねえよ！！」

m 9 ( ^ ^ ) プギヤ

m 9 ( ^ ^ ) プギヤ

m 9 ( ^

^ ) プギヤ

m 9 ( ^ ^ ) プギヤ

m 9 ( ^ ^ ) プギヤ

m 9 ( ^

^ ) プギヤ

ハヤト

「スタッフこの野郎！！！！」

ティアナ

「この番組は、

(株) 夜天お笑い劇場

(侍) ヒテンミツルギスタイル

(毒) 斜丸食堂

(有) 鉄槌日曜大工専門店

(冥) S・L・B

（脱）ザンバーホームラン

の提供でお送りしました」

#### 第4回『うわよう、よつよい』（後書き）

ゆずちゃんをはっちゃんけさせ過ぎた気がする……。

アーチャーさん、何だか上手く書けてないっぽくてすみません。気に入らない点、修正点などありましたら、ご連絡ください。適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、PN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・PNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、

あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第5回 『転生？ 見るのはいいが、体験はしたくない』

ハヤト

「なあ……」

ティアナ

「何よ。そんな深刻な顔して」

ハヤト

「いや実はさ。リスナーからのツッコミで凄いことが分かったんだ」

スバル

「凄い事？」

ハヤト

「俺達いつもお便り紹介する時、PN……って紹介してるだろ？」

ティアナ

「そうね」

ハヤト

「これって、ラジオなんだからRNラジオネームなんじゃね？ ってツッコミが」

ティアナ&スバル

「「い、言われてみれば！？」」

ハヤト

「今までラジオを聞いたことが無かったのが裏目に出たな……とい  
う訳で、今回からはRNでいくぞ！」

では早速最初のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「「「励まして！ハヤトくん」」」

「

スバル

「ええ！？ こ、今度はハヤトにコーナー乗っ取られた！」

ティアナ

「スタッフが気に入ったみたいね。それじゃあ最初のお便り。」

第97管理外世界海鳴市市街地 御剣古美術店にお住まいの、R

N：Hagallazさん。

『来たる6月6日。とある事情で、山手線の周囲をマラソンで走ります。』

マラソン選手でも無いのに、フルマラソンに近い距離を走らせられて憂鬱です。

『どうか励まして下さい！』

ハヤト

「憂鬱になんなよ！ 走るのも大事だよ！  
もつと熱くなれよおおお！！ ネバーギブアップ！！！」

スバル

「は、励ましてるのかなあ……。えと、次のお便りです。

機動六課デバイスメンテナンスルーム調整槽にお住まいの、RN：  
グラディアス・ツヴァイさん。

「最近作者とマスターの暴走を止めるのにほとほと疲れました。

作者は自分の初めての作品をほっぽり出してこちらの方に向  
り込んでいます……

私的には嬉しいんですけど、もうちょっとそっちの方も気にか  
けていただきたい。

マスターはマスターでいつもいつも

「おっぱい最高！」とか「貧乳？存在価値を見出せんや、む  
しろ消えろ」

とか支離滅裂なことを言っています。

こんな二人を止めることに疲れた私を、

スバルさんと先輩デバイスのブレイブハートさんで励ましてく  
れませんか？」

ハヤト

「おっぱいは最高が支離滅裂だ！？ 君は馬鹿か！！ 前と後ろ  
の区別もつかないような貧乳は消えて当然なんだよ！」

何故それがわからない！　がっかりすぎる！！　っーかそれぐら  
い理解し　ウボア」

ブレイブハート

《……時には暴力を使っててマスターを止める。それもデバイス  
の役目ですよ》

スバル

「……ハヤトには二度とあたしのコーナーは渡さないよ」

ティアナ

「そのほうが賢明ね。」

さて、最初のお便りだけど……マラソンかあ。大変よね」

スバル

「何で？　走るのって楽しいじゃん！」

ティアナ

「アンタみたいな体力馬鹿はともかく、普通はそんなに長い距離は  
嫌なのよ。」

Hagalazさん。無理をなさらず、出来る範囲で頑張ってく  
ださいね」

ハヤト（モヒカン）

「げほっ、げほっ……酷い目にあった」

スバル

「何をどうしたらその髪型に!？」

ハヤト（モヒカン）

「気にするな。えーと、次のグラディウス・ツヴァイさんだが……」

ブレイブハート

《 酷く共感できる境遇ですね 》

ティアナ

「ブレイブハートも大変よね。えーと、まあ馬鹿は力づくで止めないと駄目ってことね」

スバル

「だね。ハヤトだっていつもティアとかヴィータ副隊長に怒られてるもん」

ブレイブハート

《 同じデバイスとして、私は応援していますよ 》

ハヤト（モヒカン）

「お前ら酷いな。まあいいや、とりあえず“励まして!ハヤトくん”はここまで。」

そういえば、今日は結構大物のゲストが来てるらしいぞ」

スバル

「大物？」

ハヤト（モヒカン）

「まあ、ゲストをお呼びしてからの楽しみってことだ。」

それじゃあ“リリカルマジカルとあ新らじお”第5回」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「スタートです！」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第5回『転生？ 見るのはいいが、体験はしたくない』

ハヤト

「ふう。とりあえずスタイリストさんに言っ  
て髪型を直してもらっ  
たぜ。」

メインパーソナリティをやってる、ハヤト「ロックウエルです」

ティアナ

「何がスタイリストよ。自分でやってたじゃない。」

えーと、同じくメインパーソナリティを務めます、ティアナ「ラ  
ンスターです」

ハヤト

「バラすなよ……言わなきゃわからんのに」

スバル

「そこで見栄を張る意味がわからないよ……。」

あ、メインパーソナリティの、スバルナカジマです！」

ティアナ

「それじゃ早速ゲストを呼びましょうか。」

今日のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikers』最強の魔導師は転生者』より、

最強だっっていいじゃない！ チートで転生こんにちわ！ 歩けばフラグに当たる主人公！

氷上京谷提督です……って提督！？」

京谷

「よう。邪魔するぞ」

スバル

「お、おおおおお疲れさまでしゅ提督！！」（敬礼）

ティアナ

「お会いできて光栄です！」（敬礼）

ハヤト

「フィオネたんはどこですか？」（ハアハア）

京谷

「お前は会った途端にソレか」

ティアナ

「し、失礼なことしてるんじゃないわよ！」（スパーン！）

ハヤト

「いてえっ!? は、ハリセンとかどっから!?!」

ティアナ

「そんなのはいいから謝りなさい! 失礼でしょ!」

京谷

「いや、気にしてないから別にいいぞ?」

ティアナ

「い、いえ! 提督相手にそんな!」

京谷

「いいからいいから。堅っ苦しいのは抜きでいっつぜ」

スバル

「そういう訳にも……」

京谷

「俺がいつて言ってんだからいいーんだよ。ほれ、さっさと続きやろつぜ」

ハヤト

「フィオネたんはどこですか!?!」 (ハアハア)

京谷

「お前は自重しろ」 (スタンガン攻撃)

ハヤト

「ぶべべべべべべべべべべべ」

ティアナ

「い、いつの間にあたしのスタンガン（名：会苦巢えくすかりばあ仮婆）を！？」

京谷

「ちよつと俺のチート能力をな」

スバル

「能力の無駄遣いな気が……」

京谷

「何を言う！ 無駄遣いしてこそそのチート能力だろう！」

ハヤト（リーゼント）

「チート乙」

スバル

「だから何でそういう髪型になるの！？」

ハヤト（リーゼント）

「ギャグ補正」

京谷

「あー、わかるわかる」

ハヤト（リーゼント）

「さて。じゃあいつまでも遊んでないでこのコーナー行ってみようか」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「ゲストへの5つの質問！」

「」

ティアナ

「このコーナーは、ゲストに来てくださったキャラクターの皆様、5つの質問を答えて貰おう！  
というコーナーです」

京谷

「質問ねえ。どんなのされるのやら」

スバル

「て、提督に失礼があるような質問じゃないのですので！」（敬礼）

京谷

「だからそんな緊張しなくていいって」

ティアナ

「いや、でも、やっぱり提督ですし……」

ハヤト（リーゼント）

「2人が使い物にならないので、俺が変わりに。  
そいでは最初の質問。」

『お名前は?』」

京谷

「氷上京谷だ」

ハヤト（リーゼント）

「意外と普通っぽい名前ツスよね。  
転生系だから、何かこう……同じ読みでも『狂夜』とか、もっと  
香ばしい感じの名前かと」

京谷

「人の名前を普通とか、お前も大概失礼だなおい!？」

ハヤト（リーゼント）

「サーセンw」

ティアナ

「ちょ、ちよつとハヤト! 失礼よ!」

スバル

「そうだよ! クビにされちゃうかもしれないよ!？」

ハヤト（リーゼント）

「いやいや、作品が違うから無理だって。ねえ京谷さん?」

京谷

「……いや、出来なくもないぞ?」

ハヤト（リーゼント）

「マジで!？」

京谷

「ああ、色々と裏技を使ってな」

ハヤト（リーゼント）

「超 すいませんでした」（土下座）

京谷

「冗談だよ。ほら、次の質問しこつぜ?」

ティアナ

「は、はひ! えっと、それじゃあ次の質問です。

『自分を動物に例えると?』」

京谷

「んー……………龍?」

ハヤト

「チートっぽさを表してますねえ」

スバル

「龍みたいに強いですもんね。氷上提督って」

ハヤト

「実際のどのくらい強いんスか?」

京谷

「ふむ。じゃあちよつと実戦してみるか。

おいハヤト、お前ちょっと勝負しようぜ?」

ハヤト

「いや、勝てないですから」

京谷

「ハンはちゃんとつけるって。

俺はここから動かないし、魔法も肉体強化以外は使わない、あと右手しか使わないぞ。

これならどうだ?」

ハヤト

「おお、それなら何とか。で、勝負の内容は?」

京谷

「腕相撲」

ハヤト

「オイコラその提督」

ティアナ

「全力投球じゃないですか!」

京谷

「ハッハッハ。バレたか」

ハヤト

「バレたかじゃねーッスよ……ったく。  
んじゃ、次の質問。」

『好きな食べ物は何？』

京谷

「西瓜だな。うん。あれは美味しい」

スバル

「西瓜？　って何ですか？」

ハヤト

「第97管理外世界にある野菜だ。まあ店なんかだと果物として扱われてるけど」

スバル

「美味しいの？」

京谷

「美味いぞ。今度送ってやるよ」

スバル

「わあ！　ありがとうございます！」

ティアナ

「えと、それじゃ次の質問です。」

『自分の性格を一言で』

京谷

「少し難しいが……まあ仲間を思う気持ちは誰にも負けないな。情に篤いしておくか」

ハヤト

「おお。主人公っぽい性格だ」

ティアナ

「ハヤトも一応主人公じゃない」

ハヤト

「残念ながら、俺はお前らがピンチの時は迷わず見捨てる人間なのだよ」

スバル

「うわ！ 最低だ!!」

京谷

「おいおい、コイツが主人公でホントに大丈夫か？」

ティアナ&スバル

「……自信が無いです」

ハヤト

「( . . . ) <ヒドス」

京谷

「いやまあ、今のは自業自得だろ」

ハヤト

「あまりの孤立無援に全俺が泣いた。  
涙で明日が見えねえ。という訳で最後の質問。」

『パーソナリティの3人に一言!』

京谷

「まあこれからも仲良くやっていけよ。

ま、そんなところかな。仲間はいつだって大事なものだからさ」

ティアナ&スバル

「カ、カツコイイ……／＼／」(胸キュン)

ハヤト

「うおおい!? ちょっと京谷さん!

人の作品のヒロインまで陥落させるのやめて! この無意識フラグ建設野郎め!」

京谷

「は? いやいや、今のでフラグは立たねーだろ」

( . . つ)【ティアナルト、スバルルートが解放されました】

ハヤト

「ほらああああっ!!!!」

京谷

「はあ!? いや、ちょっとまって! 俺か!? 俺が悪いのか!??」

ハヤト

「これだからハーレム野郎は嫌なんだ!

無意識に人の彼女候補を奪っていく!! 謝れ! モテない男同盟の皆に謝れ!」

京谷

「どんな同盟だよソレ!? 落ち着けっつーの!」

ティアナ

「はっ! いけないいけない。危うく氷上提督とフラグが立っちゃうところだったわ」

スバル

「……こ、これが恋愛原子核の力!？」

京谷

「お前らも何言っちゃってんの!？」

「ちよつとスタッフ! 何かこの3人おかしくね!？」

( ) 。 。 ( ) アーアーきこえない

京谷

「聞けよお前ら!!!」

ハヤト

「……ふう。落ち着いた。

「すみません京谷さん、思わず取り乱しました」

京谷

「お!? おお……落ち着いてくれたか。

「そろそろ我慢の限界で、このブース吹き飛ばすところだったぞ」

ハヤト

「（意外と物騒だなこの人）」

「えー、これで5つの質問は終わりだな。そいじゃあ次のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『ツンデレ！スバルちゃん』」

「」

スバル

「えー!? このコーナーをあたしがやるの!?!」

ティアナ

「まあ、前回放送でスバルはコーナーやってなかったものね」

ハヤト

「そういうことになるな」

京谷

「でもよ、スバルにツンデレって無理じゃないか？」

元々スバルって『ツンデレ』よりは『デレデレ』って感じだし」

ハヤト

「む……言われてみれば確かに。そうすると、どうしたもんかね？」

ティアナ

「タイトルを換えればいいんじゃない？」

京谷

「それがいいな。んじゃ、「うづいのはどづだ？」（ヒンヒン）

ハヤト&ティアナ

「「……ふむふむ、なるほど」」

スバル

「あのー。あたしがやる筈なのに、何であたしがのけ者に？」

ハヤト

「気にしたら負けだ。

それじゃあ気を取り直してこのコーナー！

ちなみにコーナーの名前は、RN：ハナサカさんの提案だ！」

ハヤト&ティアナ&京谷

「「「でれでれ！スバルちゃん」

「」

スバル

「「……どういふことなの」」

ハヤト

「まあ、名前の通りツンデレじゃなくてデレデレな台詞を返せってことだよ」

スバル

「何で！？ もうコーナー変わっちゃってるじゃん！！」

ティアナ

「気にしたら負けって言ったでしょ？ それじゃあ早速いくわよ」

スバル

「待つて！ 心の準備が！！」

ティアナ（無視）

「最初のお便りは、コーナー名を考えてくれた、

第97管理外世界、静岡にお住まいのRN：ハナサカさん。

『悪い、急な仕事で遅く……メシ、食わないで待つてくれたのか？』」

スバル

「えっと、えっと……」。

だつて……貴方と一緒に食べないと、ご飯おいしくないんだもん」

ハヤト

「……なんだろう。すっげ恥ずかしい。

えーと、次のお便り。スカリエツティラボ近辺にお住まいの……  
いい加減引越せばいいのに。

RN：検体番号10032さん。

「誕生日に欲しがっていた物をあげた時の一言！ お願いします  
！」

スバル

「わあ！ えへへ……やっぱり、貴方はあたしのこと、一番わかっ  
てくれてるんだね」

京谷

「これ、終わった後にスバルが恥死しないか？

えーと……そんで最後のお頼り。

機動六課デバイスメンテナンスルームにお住まいの……あそこっ  
て住めるのか？

RN：メカニック眼鏡さん。

「服を選ぶのに時間をかけてしまって、待ち合わせに遅れた時の  
一言」

スバル

「だって、どうせなら一番可愛いあたしを見て貰いたかったから」

ハヤト

「……………はい。という訳で一応読み終わったんだが」

スバル

「うううううううううう／／／」（真っ赤）

京谷

「恥ずかしさで死に掛かってるな」

ティアナ

「さ、流石にあれば恥ずかしいわよね／／／」

スバル

「こ、公開処刑だよあんなの！」

ハヤト

「いや、その割に結構ノリノリだったじゃん」

スバル

「だって、やるからにはちゃんとやらないと……………」

京谷

「別に拒否しても良かったんじゃないか？」

スバル

「提督まで!？」

ティアナ

「ま、まあまあ。スバル、頑張ったわね」

スバル

「ティアああああ……ハヤトと氷上提督が虐めるよおおおお」(泣)

ハヤト

「うわー、提督ひでー(棒)」

京谷

「俺!？俺は悪くねえだろ!！」

ハヤト

「うわー、提督ひでー(棒)」

京谷

「と……に……が……ぎく……」(怒)

ハヤト

「あれ？もしかして怒ってます?？」

京谷

「YES」

ハヤト

「殴る気だったりします？」

京谷

「YES」

ハヤト

「み、右ですか？」

京谷

「NO! NO! NO!」

ハヤト

「左ですか？」

京谷

「NO! NO! NO!」

ハヤト

「りよ、りようほーですかあ!？」

京谷

「YES!」

ハヤト

「もしかして、オラオラですか!？」

ティアナ

「YES! YES! YES!」

OH MY GOD……って何言ってるんだろあたし」

京谷

「オラアアアツツ!!!」

「提督オラオラ中。暫くお待ち下さい」

ハヤト（ボコボコ）

「ふいはふえんへひは」

京谷

「次は無いからな」

ハヤト（ボコボコ）

「ふぁひ」

ティアナ

「……あたしより過激なツッコミする人、初めて見たわ」

スバル

「恥ずかしいよう……//」

ティアナ

「アンタもいつまで恥ずかしがってるのよ！  
あたしはアレをいつもやってんのよ!？」

スバル

「ティアのこと尊敬するよ……あたしもう2度とやりたくない」

ティアナ

「……時々コーナー交換はあるだろうから、多分そのうちまたやるわよ？」

スバル

「えええ……やだなあ。」

「はあ、でもやらなきゃクビなんだよねえ」

京谷

「言っても仕方ないだろ。ほら、次のコーナーいかないか？」

ティアナ

「わかりました」

スバル

「それでは次のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「なぜなに」とあ新!」「」」

ハヤト

「えー、リスナーの質問に俺らで答えていこうっていうこのコーナー。何か意外とお便り来るんだよなあ。結構すぐに無くなると思ったのに」

ティアナ

「いいじゃない。ネタ切れするよりマシよ。

じゃあ最初のなぜなに、いくわよ？」

陸士108部隊隊舎にお住まいの、RN：最強のアクセロリータさん。……ロリコン？」

『ハヤトにとってヴィヴィオのタックルと同じ位痛い攻撃は？』」

ハヤト

「ヴィヴィオのタックルと同等ねえ……。

うーん、シグナム副隊長の紫電一閃（殺傷設定）かねえ？」

京谷

「それ、死なないか？」

ハヤト

「だからいつも必死で防御してんすよ。

多分その気になったら、高町隊長も一撃KO可能だと思います」

ティアナ

「ヴィヴィオ……凄いいことになってんのね」

スバル

「殺傷設定の攻撃と同威力って……」

ハヤト

「まあギャグ用の設定だからな。ちなみに俺以外が受けると死ぬらしいぞ。」

そついう訳で次のなぜなに。

25世紀第97管理外世界 ラインアークにお住まいの……未来？

RN：荒神丸さん。

『早速質問ですが、六課メンバー全員』

(ロングアーチとかヴァイスとかザフィーラとかギンガも含む)

で魔法抜きのがチの殴り合いをした場合、上位十位は誰になりますか？

あとついでにハヤトのスリーサイズ教えて下さい(ハアハア)」

ティアナ

「うーん……魔法抜きだと、あたしゃキャロはキツイわね」

京谷

「ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、スバル、ギンガあたりが有力か？」

ハヤト

「そつツスねえ。その5人が上位5位を独占でしょう。」

その下は……俺、グランセニック陸曹、エリオ、高町隊長、ハラオウン隊長あたりかね」

スバル

「なのはさんも?」

ハヤト

「教導隊つてんだから、格闘とかも練習してるっぽいぞ。

さすがに本格的にやってる訳じゃないけど、それでもそこそこいけると聞いた」

京谷

「ま、俺が入れば俺が優勝だけだな」

ハヤト

「チート提督は黙っててください」

京谷

「……酷くね?」

スバル

「は、ハヤト! 失礼だよ!」

ハヤト

「何かもう吹っ切れた。クビにしたきゃするがいいさ!」

京谷

「クビにはしないが、女にしてやるうか?」

ハヤト

「ナマ言ってすみませんでした」(土下座)

ティアナ

「……ここまで土下座が似合う主人公も、中々いないわよね」

スバル

「そうだね。なんていうか、土下座の姿勢も年季が入ってるし」

ハヤト

「ガキの頃は、ほぼ毎日やってたからな！」（ < ・ ） b

ティアナ&スバル&京谷

「「「誇るな！」「」」

ハヤト

「それと俺のスリーサイズだが……残念。大将クラスじゃないと見れないプロテクトがかかっている」

スバル

「なんでそんな嚴重なの!?!」

ハヤト

「主人公だから?」

京谷

「いや、俺に聞かれても困るっつーの」

ティアナ

「はぁ……もういいわ。ええと荒神丸さん、上位十人はそんな感じ  
です。」

ハヤトのスリーサイズは……まあ、諦めてください。

次のなぜなに、いくわよ。第666管理外世界 ボルク工業地区  
にお住まいの、

RN:プロゾンクロウさん。

『「とある新人の」で、本編ではなかったティアナ撃墜イベントが「もしもあつたら」

ハヤトはどのような行動を取っていましたか？

また、その後の和解イベントではどのように立ち回っていたのでしょうか？』

ハヤト

「今日は俺関連の質問ばつかなあ。俺の時代が来たか？」

ティアナ

「来てないからちやつちやつと答えなさい」

ハヤト

「……はい（泣）。んー、そうだなあ。

多分高町隊長を止めたりはしなかったと思う。終わった後、医務室に運ぶぐらいはしてやったと思うけど。

そんでその後、落ち込んでるティアナを徹底的に虐めるだろうな」

スバル

「さ、最低だ」

ハヤト

「知らんがな。人が止めたのに無茶した馬鹿なんだから、虐められて当然だつーの。」

んで、そのあとの仲直りイベントは……原作どおりじゃないかね。基本俺はノータッチだったと思うぞ。

そーゆー面倒なの嫌いだし」

京谷

「でも、そう言う奴に限って裏で色々やったりするんだよな」

ハヤト

「なあっ!?!? ちょ、京谷さん!?!?」

京谷

「俺が思うに、ハヤトは裏でこっそりなのはとティアナを仲直りさせようと、アレコレ思考錯誤してただろうな。」

「それで、シグナムがティアナを殴る場面では、多分ティアナを庇って代わりに殴られたり、もしくはシグナムの手を止めたりとか、意外と王子様な行動をしたと見るね」

ハヤト

「そ、そんなことねーツスよ!」

京谷

「いやいや、お前はいつも馬鹿やってる分、シリアスだと無駄に主人公するじゃねーか。」

「下手したらアレじゃね? ティアナが撃墜される時も、なのはの砲撃邪魔したんじゃない?」

「っーか絶対しただろ」

ティアナ

「そ、そうなんだ…… / / /」

ハヤト

「やらねーから! マジでやらねーから!」

「京谷さんも想像で語らないでくださいよ! 後で困るでしょうが」

「!」

スバル

「照れなくていいのに〜w w」

ハヤト

「スバルてめえ面白がつてんじゃねえ！

あとティアナも勝手に想像して顔赤くしてんじゃねえよ！ やらねーから！！」

京谷

「ツンデレ乙。つか男がツンデレすんなよ、キモイ」

ハヤト

「キモイとかひでえ！？ てかアンタのせいだろうがああああ！！！」

京谷

「うるさい。耳元で騒ぐな」（会苦巢飯婆・強）

ハヤト

「もーじーじーじーじーじーじーじー！」

京谷

「よし、これで静かになったな」

スバル

「ハ、ハヤトが消し炭に……」

ティアナ

「何ですかその凶悪なスタンガンは!?!」

京谷

「チート能力って凄いよな」

ティアナ&スバル

「「また無駄遣いだ!?!」」

京谷

「はっはっは。無駄遣いしてこそそのチート能力だろう!」

ハヤト（消し炭）

「いや、だからそれは違うでしょって」

ティアナ&スバル

「「その状態で喋れるの!?!」」

ハヤト（消し炭）

「ギャグキャラですから」

京谷

「それで済むモンなのか?」

ハヤト（消し炭）

「人を消し炭にしといて何を仰る提督さん」

京谷

「いや、それもそうなんだが」

ハヤト（消し炭）

「とりあえずこの話題はここまで。プワゾンクローウさん、俺の行動はこんな感じですよ。」

京谷さんののは妄想ですから！ 妄想ですからね!？」

京谷

「そこまで過敏に反応したら、認めてるようなもんだろ」

ティアナ

「ええと氷上提督、追い詰めるのはその辺で」

スバル

「それ以上は、さすがに可哀想です」

京谷

「ん、確かにそうだな。それで、次のなぜにはどうする?」

ティアナ

「今回はこれで終わりですね。」

次のコーナーは……ちょっと時間が無さそうですけど……。スタ  
ッフ?」

(・A・)つ【めんどくせえから今日はここまで】

京谷

「……それでいいのかスタッフ」

ティアナ

「ロリコンな上に仕事もしないとか……」

スバル

「駄目スタッフだね」

( 、 ・ ・ ・ ) つ 【失敬な!】

ハヤト(消し炭)

「事実だろうよ」

( A ) つ 【消し炭は黙ってる】

ハヤト(消し炭)

「扱いがどんどん酷くなっていく件」

ティアナ

「ハヤトなもの」

スバル

「ハヤトだしね」

京谷

「ハヤトだからな」

ハヤト(消し炭)

「もういい。身体復元させるから、その間お前らだけでラジオやってる」

京谷

「そこから再生できるとか……お前、生きるロストロギアじゃないか？」

ハヤト（再生中）

「失敬な。人を生きた化石みたいに」

ティアナ

「……否定できないわね」

スバル

「何で消し炭状態から再生できるんだろ……」

ハヤト（再生中）

「ギャグキャラだから、としか言いようが無いな」

ティアナ

「アンタのその再生力は、殆どロストロギアよ」

京谷

「ティアナ、スバル。今度こいつの身体を調べておけ」

ティアナ&スバル

「了解です」

ハヤト（再生完了）

「いや、そこで了解すんなよ」

スバル

「だって、提督さんだし」

ティアナ

「あなたの身体に興味もあるし」

ハヤト

「京谷さん助けて！ 俺あの2人に犯される！！」

京谷

「（・・） 知らんがな」

ハヤト

「味方……味方がいない」

ティアナ

「はいはい。それじゃあ、今回の放送はここまでね」

スバル

「最後に氷上提督、ご出演している番組の宣伝をどうぞ！」

京谷

「ん、もうそんな時間か。」

それじゃあ宣伝させてもらうかね。ハヤト、ポスター持ってきてくれ」

ハヤト

「なにこのAD的な扱い……いや、持ってきますけどね！」

京谷

「俺が主演している番組は『魔法少女リリカルなのはStrike  
rs』最強の魔導師は転生者」

舞台は新暦75年。機動六課設立後、一週間。この機動六課に、あの最強の魔導師が発足した最強部隊が加わる！  
物語はStrikersへと移った！

前作『魔法少女リリカルなのは』の転生した主人公は最強の設定を使う』の続編となっている。

監督、脚本は『Kyo』だ。ま、こんなところか」

ハヤト

「魔改造された六課メンバーの活躍を見逃すな！」

ティアナ

「あたし、あつちの小説だとなのはさん並に強いよね……」

スバル

「あたしも魔改造されて凄い事になってるよ」

ハヤト

「(´・`・´) <俺出てないからどうしようもないのですが」

京谷

「鍛えてやるのか？」

ハヤト

「強くなる前に死ぬと思うんで遠慮します」

スバル

「あはは。それじゃ第5回放送はここまで！」

最後にお便りに関するお知らせを、氷上提督、お願いします」

京谷

「任せとけ。それじゃあ……」

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーからの便りを待っている。

“なぜなに とあ新”では、メインパーソナリティ3人や、ゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定で頼むぞ。

あと、ハヤトの生死に関わりそうなのも勘弁してやってくれ。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人の収録風景のイラストなども募集してるらしい。

送っていただいた場合、このラジオ内で使われる可能性があるスタッフが言っていた。

ま、とにかくどんどんお便りを送ってくれ。

………「こんなんでよかったか？」

ティアナ

「大丈夫です。ありがとうございます！」

ハヤト

「ついでに俺からゲストに関するお知らせもしておこう。」

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になってます。

なので、自分より後に応募した作者さんのキャラクターが、次回ゲストに来る可能性もありますので、そこはご了承ください。

選ばれた作者さんには、放送の翌日に、こちらからメッセージでお知らせをお送りします」

スバル

「それじゃ、そろそろお別れの時間です。」

お相手はスバル、ナカジマと！」

ハヤト

「貴方の心の恋人、ハヤト、ロックウエルと」

ティアナ

「何馬鹿な事言ってるのよ。ティアナ、ランスターと」

京谷

「そういや、結局フィオネ来なかったなあ。氷上京谷でした」

ハヤト

「そいじゃあ、次回“リリカルマジカルとあ新らじお”第6回

で、俺と握手！」

ハヤト&ティアナ&スバル&京谷  
「……………バイバイ！」

フィオネ

「京谷、京谷！」

京谷

「ん？ おうフィオネか。どうした？ こんなところに隠れて来るって行ってたのに来ないから、心配してたんだぞ？」

フィオネ

「……………あれのせいで、ブースに近づけなかったの」

京谷

「あれ？」

（。。。）<オイ！ 動く美少女フィギュアが居たらしいぞ！

！！（。。。\*）ナニーツ！！

（。。。）<捕まえて着せ替えしようZE！

( ˊ ˋ ˊ ˋ ) / < 行くぞお前ら！

> ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) < サー！ イエッサー！

( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) 着せ替え！ 着せ替え！

( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) 着せ替え！ 着せ替え！

( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) ( ˊ ˋ ˊ ˋ ) 着せ替え！ 着せ替え！

京谷

「…………あのラジオのスタッフ、捕まえたほうが良くねえか？」

フィオネ

「さすがに身の危険を感じたよ……………」

京谷

「見つからないうちに帰るとするか。アレには何か勝てる気がしねえ」

フィオネ

「そつだね。何か、消し飛ばしても消し飛ばしても生き返りそつ」

ティアナ

「この番組は

(狸) 腹ブラック

(侍) GU - REN - KAI - NA

(鎚) 劇団聖幼女領域

(犬) ザッファイ&アルフ

(魔) 天地魔闘

(甘) 凜D飲料

(殺) 嫉妬委員会

の提供でお送りしました」

## 第5回『転生？ 見るのはいいが、体験はしたくない』（後書き）

ファイオネさんまで出す余裕が無かった……。

Kyoさん、なんかグダグダで申し訳ないです。

気に入らない点、修正点などあればご連絡ください。

適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、PN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

番外1 『CM集その1 ファタ編』 (前書き)

なんか思いついてしまった……。

番外1 『CM集その1 ファ タ編』

リリカル マジカル とあ新らじお  
番外 『CM集その1 ファ タ編』

「3年A組！ 執務官先生！！」

フェイト

「NANOHA！！」

FW

「……なのは」

ハヤト

「NANOHA……OHANASI、NANOHA！！！！！！」

FW

「……おはなし、なのは」

ティアナ

「……………執務官試験、間に合うかしら」

もうすぐ夏だぜ！ 新 a n t a !

「3年C組！ サムライ先生！！」

シグナム

「近寄ってきたら斬る！ 近寄ってこなくても斬る！」

FW

「……………」

シグナム

「敵が遠くに居ても斬る！ 攻撃される前に斬る！」

攻撃されても斬る！ とりあえず見かけたら斬る！！

何でもいいからとにかく斬れええええっつ！！！！ ……はいコ

コテストにでまーす」

エリオ

「……………やっつけられません」

新学期だよ！ 新 F n t a !  
青じそグレープ出た！

「3年D組！ 眼鏡先生！！」

シャーリー

「新しいデバイスの部品が2割引！ 一括注文で5%OFF！  
今ならポイント還元が13%ついて！ さて！ いくら！？」

キャロ

「……………6割引でした」

夏休みだよ！ 新 F a t a !  
スイカ&キュウリ出た！

「3年G組！ 聖王先生！！」

ヴィヴィオ

「授業だよ！」

FW

「……」

ヴィヴィオ

「この問題分かる人いるかな？ いないのかな？」

デイレト

「はい」

ヴィヴィオ

「頭が高いよ！！！！！！！！！！」

デイレト

「……」

おじいちゃん

「3年J組！ 鉄槌先生！！」

ヴィータ

「漢字テストだゴルア！！ スバル！」

スバル

「は、はい！」

ヴィータ

「先祖が日本人なら読めんだろこんぐらい！！」

スバル

「うう、読めません……」

ヴィータ

「ゲイとポール男色&量産機だああああ！！」

スバル

「……………そんな無茶な」

Fant ! 春なのに！

雪見だいく出た！

「3年H組！ 昼メロ先生！！」

はやて

「上手な広範囲殲滅っちゅーんは……」

なのは

「はやてちゃん！」

はやて

「！？ なんや今更！！」

なのは

「ごめん、私が悪かったよ」

はやて

「……馬鹿っ。寂しかった！！」（ひしっ）

ガラッ

フェイト

「この泥棒猫！」

はやて  
「フェイトちゃん!？」

ギンガ

「……………訓練してください」

ベトベト anta!  
ドリアン出た!

「3年S組! ポイズン先生!！」

ティアナ

「……………っ!」(ぱくっ)

シャマル

「……………」

スバル

「……………っ!」(もぐもぐ)

シヤマル

「……」

ハヤト

「……………っ！（もぐもぐ）　ぐばぁっ！？」

F  
W

（血を吐いた！？）

シヤマル

「掃除当番です」

ハヤト

「そんなのアリかよ……」

ねっとりしたぐい！　F n t a !

「解散式だよ！　部隊長先生！！」

はやて（地上本部制服）

「今日で機動六課も解散　　の！　筈やったけど……！」

シグナム

「紫電一閃……！」（はやての服を斬る）

はやて（六課制服）

「遅刻や居眠りでロスタイムがあるんで、六課をこのまま存続します……！」

FW

「ズコー！」

FW

「もっいゃ……っ……！」

Fanna!　どろり濃厚ビーチ出た……!!

番外1 『CM集その1 ファ タ編』 (後書き)

カッとなって書いた。後悔も反省もしていない。

とまあ、一応こっちではハヤト達は管理局員兼タレントという設定なので、CMをやらしてみました。

そのうちまた思いついたら書くかも知れません。

何かネタがあったら教えてください。

ホットペッパーとジョーアのCMパロは予定してますが……。

ああ、こんなの書いてないで本編更新しなきゃw

第6回『プロッ……これは、青酸カリ!?!』(前書き)

今回、登場人物プロフィール(偽)も更新しました。  
もし良かったらどうぞ。

第6回『ペロツ……これは、青酸カリ!?!』

( 。 。 ) ( 。 。 ) 幼女! 幼女!  
( 。 。 ) ( 。 。 ) 幼女! 幼女!

ハヤト

「……またか」

ティアナ

「ねえ、あの人達フェイトさんに言って逮捕して貰わない?  
それから新しくスタッフを雇うようにして……」

スバル

「うん……何か犯罪を起こす前にどうにかした方がいいかも」

ハヤト

「しかし、スタッフがアレだけ騒ぐって事は、今回のゲストも幼女  
なのか?」

ティアナ

「みたいね。まあ、何かあったら守ってあげましょ」

ハヤト

「そうだな。あ、今回は始める前にすげーいい報せだ」

スバル

「いい報せ?」

ハヤト

「そうだ。なんと！ ついに俺たちの収録風景をイラストにしてくれる人が現れたんだ！！」

ティアナ&スバル

「嘘オツ！？」

ハヤト

「マジだって。描いてくれたのは、第97管理外世界にお住まいの、RN：山田花太郎さん。」

描いてくれたのがこの一枚だ！」

> i 7 9 5 2 | 8 4 6 <

スバル

「わあ〜！！ す、凄いよ！ あたしもティアも、スタッフさんま  
で描いてある！！」

ティアナ

「凄いわね……花太郎さん、ありがとうございます」

ハヤト

「作者も絵を見て、大喜びしながらフライングスピングッドフィン  
ガー土下座してました」

スバル

「こつやって描いて貰えると、何だか凄くうれしいね!」

ハヤト

「ああ。これからも頑張つてラジオやろつって気になるな」

ティアナ

「これからも、楽しくなるように頑張りますよ」

スバル

「うん! それじゃあ最初のコーナーいってみよう!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「」  
「」  
「励まして!スバルちゃん」

スバル

「久しぶりのあたしのコーナーだよ」

ハヤト

「意外と嬉しそうなスバルであった。

それでは最初のお便り。ミッドチルダにお住まいの、RN:高町  
なのは……隊長、なにしてんすか。

『最近管理局の彼方此方で私の事を“魔王”って言う人達が居る  
の……』

それにね何か私と話す時、皆怯えてるんだよね……。  
そんな事が多くてちよつとへこんでます……。  
私ってそんなに怖いのかなあ??」

スバル

「怖いです……じゃ、じゃなくて!

なのはさんはカッコ良くて、美人で、とっても素敵です! そんな噂に負けないでください!」

ティアナ

「……えーと、次のお便り。

軌道拘置所にお住まいの、絶影2010春さんから。

『事故での入院から復帰出来たものの、今だに松葉杖生活で残業三昧……。』

色々とくじけそうな私に励まし……というより闘魂注入をお願いします』ですって」

スバル

「よーし、それじゃあ行きますよ! 歯あ食い縛れ!!」



スバル

「なのはさんも聞いててくれたんだね」

ティアナ

「それは嬉しいけど、この内容は……」

ハヤト

「知らぬは本人ばかりなり、ってな。管理局の白い悪魔って言えば、かなり有名だしなあ。」

それに、実際怖いでしょ高町隊長。ありゃむしろ悪魔よりは冥王だね。」

管理局の白い冥王。話すときに怯えられるのも、OHANASSIの逸話があるから当然だってw」

スバル

「あはは、ハヤト、いくらなんでもそれは言います……ぎ……」

ハヤト

「? どうしたスバル、そんな顔を青くして」

ティアナ

「ハ、ハヤト……後ろ、後ろ!」

ハヤト

「ドリフかつつーの。後ろに誰……が……」

なのは

「へえ。ハヤト君は、私のことそーゆー風に思ってたんだ」

ハヤト

「たたたたたた高町隊長!？」

なのは

「ちよーっと……うん、本当にちよーっとだけ、OHANASSIしよう?」

ハヤト

「やめて! 助けて! 誰かあああああ……」(ずるずる)

スバル

「……行っちゃった」

ティアナ

「見なかったことにしましょう。それで次のお話だけ……」

スバル

「入院した後って、それだけでも精神的に大変なのに、残業ばっかりじゃ辛いよね」

ティアナ

「アンタは経験者だから余計わかるわよね。あれで闘魂注入されたかどうかは微妙だけど」

スバル

「え〜? だいじょぶだと思っけど?」

ティアナ

「あ、何だか続きがあるみたいよ? 何々……?」

『あと投稿とは関係ありませんが、最近両肩が重いですw』……」

スバル

「ゆ、幽霊!？」

ティアナ

「違うでしょ。きっと眼精疲労からくる肩こりよ。」

ちゃんとマッサージして、体調を崩さないようにしてくださいね

スバル

「幽霊怖い、幽霊怖い……」(ガクブル)

ティアナ

「はあ、こんなで今回の放送大丈夫なのかしら……?」

とりあえず、“リリカル マジカル とあ新らじお”第6回

ティアナ

「スタートです! ……ってあたしだけ!？」

リリカル マジカル とあ新らじお

第6回『ペロツ……これは、青酸カリ!?!』

ティアナ

「はい。という訳で始まりました。』とあ らじ』第6回。  
メインパーソナリティのティアナ＝ランスターです」

スバル

「うう、怖かった……。」

あ、えと、同じくメインパーソナリティのスバル＝ナカジマです」

ハヤト

「酷い目に合った……えーと、同じくメインパーソナリティの。

、(。。(ハヤト)。(ノ。(ノくん)。(。。( D E A  
T H  
」

スバル

「何？ その挨拶？」

ハヤト

「いや、個性を出しているんじゃない？」

ティアナ

「ダサイ」

スバル

「カツコ悪いよ」

ハヤト

「orz」

ティアナ

「馬鹿が落ち込んだところでゲストさん呼びしましょうか。」

スバル、お願いね」

スバル

「え？ う、うん。えと……今回のゲストは、

『魔法少女リリカルなのは』ヒヨリの記事。』より、  
見た目は子供！ 頭脳は大人な転生少女！ その名は……

ヒヨリ「R」マクスウェルちゃん（9）です！」

ヒヨリ

「どもー」

昭人

「邪魔するぞ」

ティアナ&スバル

「「え……」」

ヒヨリ

「？」

昭人

「どうかしたか？」

スバル

「いや、えと……どうかしたか？ って言うか……」

ティアナ

「あたし達は、ヒヨリちゃんが来るってしか聞いてないんだけど……  
…貴女は？」

昭人

「ああ、俺は」

(。 。 ) ○ミ 幼女！ 幼女！ (。 。 ) ○ミ 幼女！

幼女！

(。 。 ) ○ミ 幼女！ 幼女！ (。 。 ) ○ミ 幼女！

幼女！

(。 。 ) ○ミ 幼女！ 幼女！ (。 。 ) ○ミ 幼女！

幼女！

(。 。 ) ○ミ 幼女！ 幼女！ (。 。 ) ○ミ 幼女！

幼女！

ティアナ

「スタッフうっさい！ えーと、それで貴女は？」

昭人

「俺は高坂 昭人。ヒヨと同じ作品のサブ主人公だ。

……ちなみに、男だぞ？」

スバル

「ええっ！？ じゃ、じゃあ何で女の子の服着てるの!？」

昭人

「ヒヨが似合うと言ってたからだ」(えっへん)

ティアナ

「いや、確かに似合ってるけど……」。

それって、確かなのはさんが子供の時に通っていた学校の制服よね？」

昭人

「そうだな」

ヒヨリ

「昭人はそーゆーの似合うわよねえ」

スバル

「えーと……ってことは、昭人君は男の子なんだね？」

昭人

「そつだ。れっきとした男だぞ」

ティアナ

「そういうことみたいよ。残念だったわね、スタッフ」

【審議中】

( . . . )  
( . . . )  
( . . . )  
( . . . )  
( . . . )

ヒヨリ

「審議中って……何の審議？」

ティアナ

「さあ？ あのスタッフの事は、あたし達もわかんないわ……」

【シヨタもいいよネ！】

(、・・・、)  
(、・・・、)  
(、・・・、)  
(、・・・、)  
(、・・・、)

ヒヨリ

「……警察呼んだ方がよくない？」

ティアナ

「放送終了後に呼ぼうと思います」

ハヤト

「まあスタッフの対処は後で話し合おうとして、あのコーナーって  
みようぜ」

スバル

「そだね。それじゃあ……」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「……ゲストへの5つの質問!」

ティアナ

「このコーナーでは、あたし達がゲストさんに対して5つの質問を  
していきます」

スバル

「あんまり緊張しないで、気軽に答えてくださいね!」

ハヤト

「ほいじゃ最初の質問。」

『お名前は?』

ヒヨリ

「ヒヨリ=R=マクスウェルです」

昭人

「高坂こうさか 昭人あきと」

ハヤト

「本名?」

ヒヨリ

「本名よ。転生後の、だけどね」

昭人

「俺も本名だ」

ティアナ

「転生つてことは、2人とも本当の年齢はいくつなの？」

ヒヨリ

「24歳よ。今は9歳だけどね」

ハヤト

「見た目は子供、頭脳は大人って奴ですわかります」

昭人

「バーローWWW」

ヒヨリ

「いや、昭人もノらなくていいから」

ティアナ

「えー、では次の質問です。」

『自分を動物に例えると？』

ヒヨリ

「猫？ かな」

昭人

「スカリエツティだな」

スバル

「スカリエツティって動物じゃないんじゃないか……」

昭人

「？ 人間も哺乳類の一種。動物といって差し支えないだろう？」

ハヤト

「いや、そーゆー事とちゃうねん」

ヒヨリ

「んー。まあでも、確かに昭人はスカリエツティと似てるわよね。  
マッドなところとか」

昭人

「それほどでもない」

ティアナ

「誉められてないと思うんだけど……」

スバル

「えと、ヒヨリちゃんは猫なんだ？」

ヒヨリ

「そうね。まあ自分で思ってるだけだけど」

ハヤト

「気まぐれって事ですかね？」

昭人

「ヒヨは猫のように可愛いだということだろう」

ヒヨリ

「もう、そんなに誉めないでよ昭人」

ハヤト

「なんとというバカップル。殺意を抱かざるを得ない」

ティアナ

「子供にヤキモチ妬くんじゃないわよ……」

ハヤト

「いや、でも中身は24+9歳な訳だろ？ ヤキモチ妬いてもよくね？」

スバル

「そうじゃなくて、ヤキモチ妬くこと事態が情けないんだよ」

ハヤト

「馬鹿野郎！ 俺からスケベと妬みを取ったら何も残らないだろう！？」

ヒヨリ

「……ハヤト君で、主人公……よね？」

ティアナ&スバル

「一応」

ヒヨリ

「一応、なんだ……」

昭人

「ヒヨの方が主人公としては相応しいな」

ハヤト

「死ねばいいのに、バカップルめ……」（ギリギリ）

ヒヨリ

「いやいや、そんな本気の殺意を向けられても」

ティアナ

「自重しなさい」（会苦巢飯婆）

ハヤト

「ぎゃーーーーーーー」

スバル

「ハヤトが自重したところで次の質問です。」

『好きな食べ物？』

ヒヨリ

「紅茶とチーズケーキのセット……」

昭人

「ヒヨの作るものならなんでも」

ティアナ

「……昭人君はホントにヒヨリちゃんが好きなのね」

昭人

「そうだな。ヒヨさえ居ればなにも要らない」

ハヤト（ちょんまげ）

「妬ましや妬ましや」（ギリギリ）

スバル

「……突っ込まないからね？」

ハヤト（ちょんまげ）

「ヒヨリちゃんは女の子らしい好みだよなあ。紅茶とチーズケーキ  
って」

ヒヨリ

「そりゃ、女の子ですもの」

スバル

「あたしが流された……」 or z

ティアナ

「でも、ケーキばかり食べてちゃ駄目よ？ 身体に悪いから」

ヒヨリ

「そんな子供扱いしないでよ。見た目はこれでも、中身は3人より  
も大人なんだから」

ティアナ

「あ、そういえばそうだった……」

ヒヨリ

「だから、スタッフさんが『幼女！』って言うのも、実際は違うの  
よ？」

ハヤト（ちよんまげ）

「だ、そうだぞ？ スタッフ」

【審議中】

（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）

スバル

「だ、だから何の審議なの？」

ハヤト

「気にするな。気にしたら負けだ」

【つまり合法ロリですねー！】

（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）  
（、、、） （、、、）

昭人

「…………よし、あいつら殺す」

ハヤト

「落ちて着こつぜ昭人君や。とりあえずぐじぐじ」

昭人

「止めるな。俺のヒヨをいやらしい目で見るとは許せん」(ダッ  
シュ)

ハヤト

「ちよ、まつ！ ああ、行っちゃまった……………ってスタッフもいねえし  
！？」

ティアナ

「え？ ってホントに居ない！？」

スバル

「ら、ラジオどうするの？」

ヒヨリ

「てゆーか、昭人いなくなっちゃった……………」

ハヤト

「…………どうする？ 放送続ける？」

スバル

「でも、スタッフさんいないよ？」

（　　）（　　）（　　）（　　）  
「ただいま」

ハヤト&ティアナ&スバル&ヒヨリ

「帰ってきた!?」「」「」

ヒヨリ

「あれ？ 昭人は？」

（　　）（　　）（　　）（　　）（　　）  
「奴が追いかけているのは、俺らの影分身だつてばよ」

239

ハヤト

「それなんてNARUT?」

ティアナ

「伏字の意味ないじゃない」

ヒヨリ

「ってか、何で使えるのよ影分身」

（　　）（　　）（　　）（　　）（　　）  
「俺らは火影になる男だつてばよ！」

スバル

「いや、なれないから!」

ハヤト

「……スバル、相手にするだけムダだ。諦めて次の質問いこう。  
えーと?

『自分の性格を一言で』」

ヒヨリ

「あ、諦めるんだ……てか昭人は大丈夫なの?」

(.....)(.....) <番組終わったら回収するってばよ

ヒヨリ

「そつか。それじゃあ安心……なのかなあ?  
まあいいわ。えーと、自分の性格は……マイペース?　かな」

ハヤト

「マイペース。機動六課にも多いよなあ」

ティアナ

「アンタとかね」

スバル

「ハヤトとかね」

ハヤト

「そんな誉めるなよ。照れるじゃねえか」

ティアナ&スバル

「「誉めてない」」

ヒヨリ

「あはは！ ハヤト君も大変だね。私でよければ愚痴くらい聞くん？」

ハヤト

「ヒヨリちゃん……」（ジーン）

ヒヨリちゃんに癒されたところで、最後の質問いつてみよう。

『パーソナリティの3人に一言！』」

ヒヨリ

「ハヤト君……思ったよりかっこいいね！

ティアナ、しっかり手綱をひいてないと駄目だよ？ スバルは…

ガンバ！」

ハヤト

「よし、ヒヨリちゃん結婚しよう」

ヒヨリ

「あ、それは無理」

ティアナ

「盛ってんじゃないわよ」（シャイニングウィザード）

ハヤト

「ぶべらっ!？」

スバル

「おお、ナイス膝蹴り！」

ヒヨリ

「ブース内で暴れない方がいいんじゃない……」

ティアナ

「気にしないで平気よ。いつもの事だから」

スバル

「そうそう。それじゃあ、次のコーナーいつてみよう！」

ティアナ&スバル

「「「なぜなに」とあ新!」「」」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーからの質問にあたし達やゲストが答えっていきます」

スバル

「それでは最初のなぜなに！」

第97管理外世界、京都にお住まいの……RN：安部晶彦さん。

『ゲストの方にも質問ですが人には言えない秘密があったら教えて下さい』」

ティアナ

「人には言えない秘密なんだから、ラジオで言うのは変じゃない？」

（w）（っ）【言わなくても俺らがバラすつてばよ】

ティアナ

「何でアンタらが知ってるのよ!?!」

スバル

「ティ、ティア落ち着いて!?!」

ヒヨリ

「私は別にいいよ？ そんなに困ることでも無いし」

ティアナ

「う……ゲ、ゲストにそう言われたら、あたし達も言わない訳にはいかないわね」

ヒヨリ

「それじゃ私からね。」

うん……フェイトに『お姉ちゃん』と呼ばれる事がイヤじゃ無くなつて来た事かな……」

スバル

「お姉ちゃん？」

ヒヨリ

「うん。何でか呼ばれ続けててね……最近じゃ慣れてきちゃったわよ」

ティアナ

「あー、何だか分かるわその気持ち。それじゃスバル、次いきなさい」

スバル

「え？ あたし？ うー……じゃ、ちよつと恥ずかしいケド……。」

最近、ちよつとだけ胸がおつきくなつたんだ」

ティアナ

「は！？ ちよつとそれホント!？」

スバル

「う、うん……ホントにちよつとだけ、だけど……／＼／」

ティアナ

「そ、そう……よかった、わね……」orz

スバル

「うう、恥ずかしい／＼ ティ、ティアは!？」

ティアナ

「あたし？ はいはい……………あー……………最近体重増えたわ。2キロ、はいお終い」

ヒヨリ

「な、何かいきなり投げやりね……………」

ティアナ

「そーねー。ほらハヤト、いつまでも寝てないで答えなさい」

ハヤト

「なんだろう。床の方がお前達より温かいよ」

ティアナ

「あつそ。いいからさっさと答えなさい、ほら」

ハヤト

「ヒドス。えー、人に言えない秘密？

そーだな……………エロ本の隠し場所とかか？ 知りたい？」

スバル

「い、いいよそんなの！／＼／」

ヒヨリ

「興味ないわよ！／＼／」

ティアナ

「言いたければ言えば？」（投げやり）

ハヤト

「ティアナ、お前スバルに胸のサイズ追い越されたからって、そんな投げやりになるなよ」

ティアナ

「……………憤っ！！！」（掌底）

ハヤト

「ぐぼあっ!?!」

ヒヨリ

「ああっ！ ハヤト君がブースの壁にめり込んだ!?!」

スバル

「す、凄い……………じゃなくてハヤト大丈夫!?!」

ハヤト

「げふう」

スバル

「く、口から何か白い気体が出てる！ 何これ魂？ ねえ魂!?!」

ヒヨリ

「お、落ち着いてスバル！ とりあえず壁から外して、それから心臓マッサージ!」

スバル

「う、うん!」

少年蘇生中。暫くお待ち下さい

ハヤト

「……知らない天井だ」

ティアナ

「知ってるでしょ」

ハヤト

「お前人のこと殺しかけていてソレか!？」

ティアナ

「アンタは殺しても死なないでしょ。はい、それじゃ次の質問。

スカリエツティラボ内の生体ポッドにお住まいの……住む場所が悪化してるわね。

RN：検体番号10032さんからのなぜなに。

『メインパーソナリティの三人と、ゲストさんに質問です。

“自分にこんなスキルがあったらなあ”みたいな、

自分が今欲しい特殊スキルが何でも手に入るとしたら、

どんなものを望みますか？(チートも可)』

ハヤト

「そつだなあ……時間制御と、透明化だな。

それがあれば、あんなことやこんなことし放題だぜ……げひひひひ……」

スバル&ヒヨリ

「「うわぁ……………」」

ティアナ

「ハヤトは後で死刑。」

あたしは…………魔力変換資質が欲しいわね。それがあれば、色々と戦術に幅が出ると思うし」

スバル

「ティアはいつでも真面目だね」

ヒヨリ

「ハヤト君ほど煩惱一直線はアレだけど、もうちょっと夢があるのが欲しいわね」

ティアナ

「そう？ でも、過ぎた力を持っても仕方ないでしょ？」

ヒヨリ

「うーん…………私はある意味チートだから、よくわからないかもね」

スバル

「えと、じゃあ次あたしだね。」

そうだなあ…………あ、なのはさんみたいなカッコイイ砲撃してみたい！」

ハヤト&ティアナ

「「無理だろ」」

ヒヨリ

「2人揃って否定した!？」

スバル

「ひ、酷いつ!？」

ハヤト

「スバルが砲撃とかWWWWWWWWW」

スバル

「わ、笑いすぎだよ! いいじゃんか!“手に入ったら”って仮定なんだから!」

ティアナ

「身の程を知りなさいってことよね」

スバル

「ティアも酷い!？ も、もういいよ! 2人とも嫌い!」

ハヤト

「俺らを嫌うとお前は1人ぼっちということになりますが、よろしいですか?」

スバル

「う、うううううう……」

ティアナ

「ま、虐めるのはココまでにしましょ。ごめんねスバル。それじゃあ次はヒヨリちゃん」

ヒヨリ

「近接戦闘ができる身体能力かな。なのは以上に運動オンチなのは辛いです」

ハヤト

「高町隊長？ 隊長って運動オンチだっけ？」

ティアナ

「そうは見えなかったけど……」

ヒヨリ

「皆はS t Sだから、訓練とかで解消されたのかもね。  
こっちでは結構酷いわよ？ 何も無いところで転んだりしてるもの」

スバル

「そ、そんな……なのはさんが……」

ハヤト

「おお。スバルが憧れを打ち砕かれて凹んだ」

ティアナ

「放っておけばそのうち戻るわよ。でも、本当にヒヨリちゃん、そんなに酷いの？」

ハヤト

「どれどれ、ちょっとこっちまで歩いてきてみておくれ」

ヒヨリ

「いや、さすがの私もこんな短い距離で転んだりし……にゃあああああっ！？」

ドンガラガツシャーン

ハヤト

「おお！？ まさか本当に転ぶとは！」

ティアナ

「だ、大丈夫ヒヨリちゃん？」

ヒヨリ

「いったあ……うう、何で転ぶかな私……つてにゃあああつ！？」  
ドンガラガツシャーン

ハヤト

「なんと！？ いつの間にか存在したバナナの皮に足を滑らせて、  
また転んだ！？」

ティアナ

「ドジッ子ね」

ハヤト

「ドジッ子だな」

ヒヨリ

「ドジッ子っていうなああ！ にゅあああつ！？」  
ドンガラガツシャーン

ハヤト

「立ち上がるうとしてまたバナナの皮踏んだ……完璧だ。完璧なド  
ジッ子だ」

ティアナ

「ほ、ほらヒヨリちゃん。あたしの手を握って、ね？」

ヒヨリ

「うう……ありがとうティアナ」

ハヤト

「よし、ヒヨリちゃんがドジツ子だと証明できたところで次のお便り。」

エンドレスフロンティア、不死桜にお住まいのRN：プワゾンク  
ロウさん。

『メンバーソナリティ三人に質問。』

機動六課所属前は、具体的にどのようなフォーメーションを組んでましたか？

また、一番大変だった事件は何ですか？』

スバル

「六課の前？ うーん……どうだったっけ？」

ティアナ

「復活したと思ったら早々に丸投げ？ 仕方ないわねえ。」

災害対策の時は、スバルがワントップで、あたしとハヤトの2人でその援護やフォローをしてました。

時々ハヤトがスバルと一緒に突っ込んだりもしてましたけど」

ハヤト

「まあスバルだけじゃ前衛足りない時なんかはな。お陰でムダに格闘が出来るようになったぜ」

スバル

「あたしがS A教えたんだよね」

シューティングアーツ

ハヤト

「あれは教えたって言わねえよ、お前が一方的に俺をボコボコにしてただろうが」

スバル

「そんなことないもん！」

ヒヨリ

「まあまあ。それで？ 一番大変だった事件は？」

ハヤト

「大変だった事件ねえ……アレか？」

ティアナ

「アレじゃない？」

スバル

「アレかなあ」

ヒヨリ

「いやいや、3人だけで分かり合っていないで。私にも分かるように言っつてよw」

ハヤト

「おおつとすまんこつて。」

一番大変だったのは、ランクA+の脱走空戦魔導師の追跡任務だったかね」

ヒヨリ

「……あれ？ 災害対策チーム、だったよね？」

ティアナ

「ええ。ただ、その時はあたしとスバル、ハヤトの3人が一番現場に近かったら、任せされたの」

スバル

「無理しないように、って言われてね」

ヒヨリ

「大丈夫だったの？」

ハヤト

「いやー、大変だったぞ？」

相手は空飛んでるもんだから、スバルはずっとウィングロード出しっぱなしで」

スバル

「あの時は疲れたよ」

ティアナ

「ま、後はあたしとハヤトで牽制射撃しながら追いかけてたんだけど……」

ヒヨリ

「だけど？」

スバル

「途中で、相手がこっちに向かってきたんだよ」

ハヤト

「あれって何で俺らのほうにきたんだろっなあ？」

ティアナ

「……アンタが「お前の母ちゃんボディビルダー！」って挑発したからでしょ!!」

ヒヨリ

「……その挑発で怒るってのも、どうなの？」

スバル

「あ、あはは……そ、それでね？ あたし達3人で戦って、何とかやっつけたの」

ティアナ

「凄く大変だったけどね」

ハヤト

「まあ、腐ってもA+ってだけはあったよな」

ティアナ

「あ・ん・た・が！ 余計な挑発しなけりゃ、戦わなくてすんだよの！」（会苦巢飯婆）

ハヤト

「しっびっね〜……!!」

ヒヨリ

「へえ。その時の話、もうちょっと聞きたいな」

スバル

「うーん。長くなっちゃうから、それはラジオが終わったら教えるよ」

ヒヨリ

「ホント？ 約束だからね」

ハヤト（七三分け）

「うむ。じっくりねっとり、俺様の活躍を教えてやるっ」

ティアナ

「こいつは……」

スバル

「ティア、もうほっとこうよ。それでは“なぜなに とあ新”はここまで！

一旦CM入りまーす！」

ザッフィー

「ハヤトよ」

ハヤト

「はい？」

ザッファイ

「何故我がお前の携帯なのだ！」

ハヤト

「え」

ザッファイ

「解せぬ」

ハヤト

「解せぬ……って言われましてもW」

ザッファイ

「何故我を選んだ？」

ハヤト

「何故って言われても……何ででしょう？W」

次元世界初！ フルハイビジョン携帯！

MTT BOCCOMO

ハヤト

「まあなんとなくデザインで選びましたWWW」

キャロ

「スパゲッティ食べたでしょ？」

ヴィヴィオ

「食べてないよ」

キャロ

「……ケチャップついてるやん」

ヴィヴィオ

「た・べ・ま・し・た！」

キャロ

「私のクーポン券使って？」

ヴィヴィオ

「使……ったような気がします、クーポンマガジンのブラックペーパー」

タルルートから。

なのは

「ちよっと……頭冷やそうか」

言う事聞かない悪い子を、OHANASIIひとつで躰けます！

(魔) 天地魔闘

ハヤト

「さてさて、今日は騒ぎすぎたせいか、そろそろお別れの時間となつてしまいました」

ティアナ

「主にアンタがふざけてたんだけど？」

ハヤト

「聞こえませーん。ほいじゃあ最後にヒヨリちゃん、主演の番組あるんだよね？」

番宣いってみようか」

ヒヨリ

「あ、その前に。忘れてたんだけど、3人にお土産あるの」

スバル

「お土産？」

ヒヨリ

「うん。私が作ってきた『特製チーズタルト』！」

ハヤト

「へえ、おいしそうだな。今食べちゃってもいい?」

ヒヨリ

「どーぞ。召し上がれ」

ハヤト

「どれどれ……（パクッ）……………うっ!?!」ゴトリ

ティアナ&スバル

「!?!?!」

ヒヨリ

「? どうしたのハヤト君? そんな気絶するくらいおいしかった?」

ハヤト

「……………っ……………っ」

スバル

「け、痙攣してるよティアナ!?!」

ティアナ

「ちょ、ちょっとスバル! ハヤトをブースから出して、スタッフさんに預けてきなさい!」

スバル

「わかった!?!」

ヒヨリ

「? ? どうしたの?」

ティアナ

「う、うん。ヒヨリちゃんのがおいしすぎたんじゃないかしら?」

(シャルル先生以外の料理じゃ倒れたことすらないハヤトを……この子、出来る!)」

ヒヨリ

「そっか。じゃあ後でまた皆で食べてね」

ティアナ

「そう、ね。いただくわ……それじゃヒヨリちゃん。番宣お願い出来る?」

ヒヨリ

「ん、任せてちょーだい。

私が出演してるのは『魔法少女リリカルなのは』ヒヨリの日記。』

主演は私、ヒヨリR、マクスウェルと、高坂昭人の2人。

過去を捨て去った2人が行き着いたのは、漫画と酷似した平行世界だった!?

平和を愛する日和が歩む道とは?

日和が現れたことよって変わる世界。

魔法の世界でうっかりBに苦しみながら歩む、魔力値平凡な女の子の話、始まります。

こんなところかしらね」

ティアナ

「お疲れ様。見所なんかはあるかしら？」

ヒヨリ

「そうだなあ……私や昭人が悩んで、傷ついて、それでも頑張る姿なんかを見て欲しいかな」

ティアナ

「なるほど」

ヒヨリ

「ティアナは見てくれた？」

ティアナ

「ええ。ヒヨリちゃんのうっかりなところもバッチリ、ね」(ニヤニヤ)

ヒヨリ

「そ、それは見なくていいから!？」

ティアナ

「そう? あれも見所だと思うけど」

ヒヨリ

「見所じゃない! 全っ然見所じゃないから!!」

ティアナ

「それじゃアリスナーの皆様、ヒヨリちゃんが犬に追いかけられるところなんかも可愛くて楽しいので、是非見てくださいね」

ヒヨリ

「見なくていいから――――っつ！――！！！」

スバル

「ただいまー、つてもう番宣終わっちゃった？」

ティアナ

「丁度今終わったところよ。これからエンディング」

スバル

「そっか。最後に間に合って良かったよ」

ティアナ

「……ハヤトは？」（小声）

スバル

「何とか一命は取り留めたよ」（小声）

ティアナ

「そう、ならとりあえずー安心ね」（小声）

ヒヨリ

「どうしたの？」

ティアナ

「う、ううん！ 何でもないわよ！？」

スバル

「そうそう！ 何でもないから！」

ヒヨリ

「そ、そうなんだ。えと、それじゃ第6回放送はこれまで、かな？」

ティアナ

「そうね。最後にお便りに関するお知らせを、ヒヨリちゃんお願い」

ヒヨリ

「了解よ。それでは、僭越ながら私が……んんっ！

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーからの便りを待ってます。

“なぜなに とあ新”では、メインパーソナリティ3人や、ゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んじゃったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトクンにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いね？  
あと、ハヤト君が死にそうなお題も勘弁してあげて。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人の収録風景のイラストなども募集してるわよ。

送っていただいた場合、今回みたいにラジオ放送ないで使われるみたいだから、皆頑張って書いてあげてね。

リスナーの皆からの応募、待ってるよ！

……ふう」

スバル

「ありがと、ヒヨリちゃん。続いてあたしからゲストに関するお知らせを。」

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になってます。

なので、自分より後に応募した作者さんのキャラクターが、次回ゲストに来る可能性もありますので、そこはご了承ください。

選ばれた作者さんには、放送の翌日に、こちらからメッセージでお知らせをお送りします」

ティアナ

「はい。それじゃあ第6回“リリカル マジカル とあ新らじお”はここまで！」

お相手はティアナ「ランスターと」

スバル

「スバル「ナカジマと！」

ヒヨリ

「ヒヨリ＝R＝マクスウエルでした！」

ティアナ&スバル&ヒヨリ  
「バイバイ！」

ハヤト

「……甘い、すっぱい、辛い、苦い、しょっぱい……。  
生臭い……ドリアン臭まで……げふうっ」

( -人 - )  
くご臨終です

昭人

「む？ 追いかけてる奴らがいきなり消えたが……ここは、どこだ？」

ヒヨリ

「昭人！。やっと見つけた」

昭人

「ヒヨ？ なあ、追いかけてたスタッフがいきなり消えたんだが、何があった？」

ヒヨリ

「あれはスタッフさんの影分身らしいわよ」

昭人

「……なんでそんな事が出来るんだ、あのスタッフ？」

ヒヨリ

「さあ？ ま、何でもいいわ。帰る前にちょっとこっちの街をブラブラしていきましょ」

昭人

「……そうだな。こちらの技術にも興味がある」

ヒヨリ

「アンタは、ホントそればっかね……」

ティアナ

「この番組は

- (機) ジャンク屋組合
- (狐) 武装兵器百貨店
- (打) ハラオウン電気
- (黒) メガネの4番
- (変) 潜入探偵2
- (殺) ゴルゴ14
- (化) スカリエッティ工房
- (炉) 全次元世界ちっちゃい子愛好会

の提供でお送りしました……どんな会社よ……」

## 第6回『ペロツ……これは、青酸カリ!?』（後書き）

うーむ、前回以上にグダグダしちゃったかなあ？

夏菜さん、何か修正点、気に入らない点などありましたらご連絡ください。

適時修正いたします。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、P.N、住所（架空で構いません）  
ん

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第7回『残念、それは残像だ……』 (前書き)

どんどん長くなっていく……  
どんどんとよなよなの……



「馬鹿が消し炭になったところで、オープニングコーナーいくわよ」

ティアナ&スバル

「励まして！スバルちゃん」

スバル

「それじゃ、早速いつてみよー！」

ティアナ

「そうね。では最初のお便りから。」

ミッドチルダにお住まいの、RN：雷天大壮さん。

『この前ティアナの中の人が出ている某ゲームを買ったところ、その表紙を家族に見られて避けられきみです……何か一言下さい……』

スバル

「よくあることだよ、気にしないで！」

趣味は人それぞれ。理解されなくても恥ずかしくなんてないよ！」

ティアナ

「励まし……なのかしら？」

まあいいわ。それじゃ次のお便りね。

ミッドチルダ、フェイトⅡⅡⅡハラオウン宅にお住まいの、RN：  
烈風の双弓士さん。

……居候？

『なのはのバスターを相殺できる技がないせいでいつも模擬戦で負けちまう。』

俺は一体どうしたら良いんだ？』

スバル

「なのはさんに勝つって無理……じゃなくて！

技が無いなら編み出せばいいんだよ！今は無理でも、きつと見つけられるから！」

ティアナ

「はい。今回の“励まして！スバルちゃん”はここまで。

お疲れ、スバル」

スバル

「今回は励まし方が難しいのが多くて疲れたよ」

ティアナ

「そうね。最初のお便りだけど……あたしの中の人って何よ」

ハヤト（消し炭）

「中 麻衣さんだな」

スバル

「いや、そーゆー話じゃなくてね。

一応ホラ、あたし達ってここでは一個人な訳だし……」

ハヤト（消し炭）

「ま、それは置いといて。

ゲームのパッケージ見られて家族に避けられる……あるあるw」

ティアナ

「アンタも経験あるの？」

ハヤト（消し炭）

「おーよ。うちの家族は結構理解あるほうなんだけど、ギャルゲを買った時は流石に引かれたw」

スバル

「そんなの買ってるんだ」

ハヤト（消し炭）

「二次元は裏切らないからな！」

スバル

「うわ、駄目人間だ……」

ティアナ

「何を分かりきったことを今更言ってるのよ」

ハヤト（消し炭）

「酷っ!?!」

ティアナ（無視）

「それで、次のお便りだけ……」

スバル

「なのはさんと1対1で戦えてるだけでも凄いよね」

ハヤト（再生中）

「ホントな。あの人とタイムマンするくらいなら、俺は死を選ぶね」

ティアナ

「……どんだけなのはさんが怖いのよ」

ハヤト（再生中）

「でも、お前らも何となく分かるだろ？」

スバル

「そ、それは……」

ティアナ

「わからなくもないけど……」

ハヤト（再生中）

「つーわけだから、勝てなくても気にする事ないと思っぜ？」

どうしても勝ちたいっつーならアレだ。頭を使え、としか言えないな」

ティアナ

「アンタが言つと違和感あるわね」

ハヤト（再生中）

「砲撃を相殺しようとするんじゃないで、いかに砲撃を撃たせないか。」

高町隊長相手なら、そつちを考えた方がいいんじゃないかなあ？」

スバル

「ま、まともなこと言ってる!？」

ティアナ

「ちよつとハヤト大丈夫!？ 熱あるんじゃないの!？」

ハヤト（再生完了）

「お前ら……もついいよ。さつさと始めようぜ」

ティアナ

「メディック！ メディーーーーーック！……!」

スバル

「病院つて119だっけ？ 199だっけ!？」

ハヤト

「……落ち着け」（スパーン!×2）

ティアナ&スバル

「「あいたつ!?!」」

ハヤト

「落ち着いたか?」

ティアナ

「…………ええ。ちょっと取り乱したわ」

スバル

「ごめんねハヤト」

ハヤト

「いーけどよ。それじゃ、さっさと始めようぜ」

スバル

「そだね。それでは! “リリカル マジカル とあ新らじお” 第7回!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「スタートです!」」」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第7回「残念、それは残像だ……」

ハヤト

「フーわけで始めました」とあ　らじ』第7回。

メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルです」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティのティアナ＝ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバル＝ナカジマです！」

ハヤト

「さて、それじゃあ早速ゲストを呼ぶとしようか！」

ティアナ

「だから、何でそんなノリノリなのよ」

ハヤト

「巨乳だから！　それじゃあゲスト紹介！　今回のゲストは、

『ACE+リリカルなのは part3 the final』3  
つの欲望と3人目の鍵』より！

気になるあの人とそっくり！　残念それは残像だ！　いやいやド  
ッペルゲンガーだ！

BB&セティスの御二人だぜ！」

B B

「どーもー」

セデイス

「こんにちわ」

ハヤト

「セデイスちゅわん!!!」 (ルパ ダイヴ)

セデイス

「ひいつ!?!」

ティアナ

「嘖ッッ!!!」

スバル

「破あつ!!!」

ハヤト

「おぺろっ!?!」

(。 。 ( < むう……あれは伝説の“助平粉碎拳”!!!

(。 。 ( < 知ってるのか、雷電!?

(。 。 ( < いやゴメン、言ってみただけ。

(。 。 ( < ペッ < 死ねよ

( . . ) < . . . . .

B  
B

「 . . . . . スタッフは何やってんだよ」

セデイス

「 . . . . . や、やっぱりバカハヤ君は変態だあああ」 (ガクブル)

ティアナ

「ご、ごめんねセデイス。大丈夫？」

スバル

「ほら！ 変態は死んだから大丈夫だよ？ ね？」

セデイス

「ホ、ホント！？」

ティアナ&スバル

「「ホントホント！」」

B  
B

「死んだって . . . . . うわ、中々グロい映像が . . . . . ラジオだから伝わんねーけど」

セデイス

「あ、こ、これなら流石のバカハヤ君も大人しくなるよね？」

ティアナ

「そうよ。だから、安心してラジオを楽しんでいってね」

セデイス

「うん！」

ティアナ

「それじゃ最初のコーナーいきましようか。最初のコーナーはこち  
ら」

ティアナ&スバル

「「ゲストに5つの質問！」」

スバル

「このコーナーは、ゲストの方にあたし達で5つの質問をしていこ  
う、っていうコーナーです！」

ティアナ

「肩の力を抜いて、軽い気持ちで答えて頂戴ね」

B  
B

「あいよ。了解」

セデイス

「任せて！」

ティアナ

「それじゃ最初に質問ね。」

『お名前は？』

BB

「BBだ。製造番号がZB・H1937で、BBはイニシャルから取った通称……。まあみんなこっちで呼んでるし、俺もそれで通

してるけど」

セデイス

「セデイスだよ。製造番号はZB・H0026……。ビーちゃんより早く造られたから私がお姉さんってわけ」

スバル

「2人とも本名？」

BB

「ああ、本名は……」

ティアナ

「駄目！ それ以上はネタバレだから駄目！」

セデイス

「え〜？ うちの作者は喋ってもいいって言ってたよ？」

ティアナ

「駄目よ。このラジオは番組の宣伝でもあるんだから、ネタバレは極力控えなきゃ」

スバル

「そ、そうだったね。ゴメン、ティア」

B B

「別にいいんだけどなあ」

ティアナ

「2人が良くても、番組的に駄目なのよ。それじゃあ次の質問ね。」

『自分を動物に例えると?』

B B

「動物ねえ……しっくりくるのが無いけど……強いて言うなら熊あたりか?」

普段はのんびりしてるイメージだけど暴れると物凄いいみたいな感じ?」

セデイス

「私は断然犬だね〜!パパの言葉に忠実に従う忠犬って事で!」

B B

(アネモネとのやり取りを見た後だと猫でもアリな気がするけどな……猫被りの意味で……)

セデイス

「ビーちゃん何か言った？」

BB

「……いんや。何も言っていないぞ」

ティアナ

「BBは熊……ね。熊って怖いわよね。」

正直デバイスなしで会ったら生き残れる自信ないわ」

スバル

「あたしもちよつと無理かなー。戦えるとは思っけど」

セデイス

「私は余裕だよ？ もー秒殺だね、秒殺！」

BB

「俺も余裕だろうなあ」

ハヤト

「いや、君ら一般人とちゃうやん」

セデイス

「ひゃああああっ!?!」

BB

「も、もう復活したのか」

ハヤト

「俺、復活!」

ティアナ

「……ちっ、殴り方が悪かったか」

スバル

「ティア、もっかい逝く？」

ハヤト

「ごめんなさい。自重するんでやめて。ほら、ゲストと話そつよ。ね？」

ティアナ

「……まあいいわ。変なことしたら、全力でいくからね」

セデイス

「ほ、ホントに何もしない？」

ハヤト

「しないしない。いい感じに血が抜けて、今の俺は賢者タイムだから」

BB

「賢者タイムって……オイオイ」

ハヤト

「はっはっは。故に今の俺は、セデイスちゃんのロケットおっぱいを見てもビクともせんのだ！」

セデイス

「セクハラだよ！」

ティアナ

「……ハヤト？」（会苦巢狩婆）

スバル

「自重しようね？」（狩場庵）

ハヤト

「ういつす。えー、セデイスちゃんは犬ね。

犬耳着けてみる？ 一応スタッフが用意してるみたいだけど」

セデイス

「ちよつ、何で用意してあるの!？」

（\*。。（）つ【獣耳カチューシャは全種いつでも揃えてあります】

B  
B

「変態すぎるだろ……常識で考えて」

（\*。。（）つ【俺らはドのつく変態ですから!】

ハヤト

「まあ、あのスタッフは気にするだけ無駄だな。

で、どうする？ つけてみる？」

セデイス

「つけないよ！」

スバル

「だよね〜」

ティアナ

「当然よ」

ハヤト

「ですよねー　　そいじゃあ次の質問。

『好きな食べ物は何？』」

BB

「食べ物ねえ…特にこだわらないけどジャンクフードは結構食うかな？

基本アジトにこもりっぱなしだし…あんまり外出出来ないから

外でも中でも時間が惜しくて簡単に済ませられて時間短縮出来るからって感じで」

セデイス

「ビーちゃんは本当に遊ぶのが好きだからね〜。

その為なら食事の時間も平気で短縮するから〜。

あつ！　因みに私の好きな食べ物は『パパがくれる物なら何でも！』でお願いします〜」

BB

（ファザコンを恥じないってのもある意味凄いよなセデイス姉…）

ハヤト

「ファザコンですねわかります」

セデイス

「いいでしょ別に。ハヅちゃんだって似たようなものじゃない」

ハヤト

「……ああ、そうだな。んで、BBはジャンクフード全般ね。

遊びの為に食事の時間を削る。すっげーその気持ちわかるわ」

ティアナ

「そうね。アンタは訓練校の時に、ゲームしたいからって3食全部抜いたことあるぐらいだし」

スバル

「あたしだったら考えられないよ」

ハヤト

「お前を基準に考えられても困るんだが……」

セデイス

「だよね。スバちゃんは食べすぎだよ」

スバル

「そ、そんなことないもん！ 普通だよ！ ね、ティアア？」

ティアナ

「……食べすぎよ」

スバル

「（。；。；。）」

B B

「まあ、普通の女子が食べる量じゃないわな」

スバル

「……orz」

ティアナ

「そういえばセデイスの好きな食べ物はお父さんの作ってくれたもの全般』だけど……」。

あの人って料理作れたの？」

セデイス

「作れるよ。凄く美味しいんだから！」

ハヤト

「B B、真実は？」

B B

「……ノーコメント」

セデイス

「ビーちゃん？ 美味しいよね？ よね？」

B B

「……あーはいはい。美味しい美味しい」

ハヤト

「なんつーか、今のやり取りで大体わかったわ」

ティアナ  
「そうね」

セデイス  
「なにより、その馬鹿にしたような目は！」

ハヤト  
「気ノセイデスヨ。」  
さて、それじゃあ次の質問いつてみよう！」

セデイス  
「あ、誤魔化した！」

ハヤト  
「えー、では次の質問。」

『自分の性格を一言で』

B B  
「性格？うーん……マイペースで自分勝手に自由気ままで……。尚且つ強い相手とじっくり遊んだ後に叩き潰すのが大好きと……ざっと挙げるとこんな感じかね？」

セデイス  
「無視された……べ、別にいいもん。  
私は……そうだね……家族思いかな？」

B B  
「いやいや。そろそろ自重しようぜ？　つーかそれ悪役の言っ台詞じゃないだろ？」

セデイス

「いいじゃない別に！ 私パパもビーちゃんも大好きだもん！  
特にパパに対してはパパの邪魔をする奴はすぐにぶち殺しに行く  
くらいに……」

B  
B

(……ファザコン通り越して崇拜の域だな最早……)

スバル

「家族思いなら負けないよ！」

ハヤト

「うわ、でたよ。こっちはシスコンか」

スバル

「なにさ！ あたしがギン姉大好きなのが悪いの〜!？」

セデイス

「バカハヤ君のクセに生意気〜！」

ハヤト

「なにこのフルボッコ。俺ちょっと泣きそうなんだけど」

B  
B

「どんまいだハヤト。つかお前ならよくあることだろ」

ティアナ

「そうよ。いつもの事じゃない」

ハヤト

「……もういい、寝る」

ティアナ&スバル&BB&セデイス

「……寝るな!!」「……」

ハヤト

「どないせーっちゅーんじゃー!」

ティアナ&スバル&BB&セデイス

「……ラジオしろよ!」「……」

ハヤト

「ですよー」

BB

「うわ、ウゼエ……」

セデイス

「ちよつとバカハヤ君、一発殴らせて」

ハヤト

「代償としてセデイスの胸を揉むが、覚悟はいいか?」

ティアナ

「セクハラすんな!」(ハリセン)

ハヤト

「あいたあっ!?!」

スバル

「セクハラ駄目！ 絶対！」（狩場庵）

ハヤト

「し～～～～び～～～～れ～～～～る～～～～!!」

セデイス

「節操なしーっ！っ！！！」（会苦巢狩婆）

ハヤト

「なぜにお前がそれを使うっうううっ！？」

B  
B

「……なんという連携攻撃」

ハヤト（木炭）

「お前ら酷いですね。お陰でこんなになっちゃいましたよ」

セデイス

「それで喋れるとか、本当にバカハヤ君は人外だね」

ハヤト（木炭）

「いやあ／＼／」

B  
B

「誉められてないと思っぞ」

スバル

「てゆーか、何で木炭になれるの？」

ハヤト（木炭）  
「俺ですから」

スバル

「な、なんとという説得力」

ハヤト（木炭）

「それはともかく、BBの性格は……バトルジャンキーですわわかります。」

もうシグナム副隊長あたりと結婚しちゃえよ」

BB

「いやあ……シグナムはアレだろ、付き合ったりしたら毎日説教されそうで嫌だ」

ハヤト（木炭）

「あー、わかるわかる。」

俺なんて会うたびに説教されてるもんなあ」

セデイス

「……あー、何となく想像できるわ」

ティアナ

「……まあ、ハヤトだしね。放っておいて次の質問いくわよ。」

『パーソナリティの3人に一言！』

BB

「スバルとティアナはまあ……これからも頑張れよ（少し投げやり）  
あとハヤト、今度俺に姉貴紹介してくれ。一緒に遊びたいから」

至って真剣に）」

セデイス

「ビーちゃんとハヅさんが遊びという名の死合いなんでしたら後始末が大変でしように……。」

スバちゃんはめげずに頑張っ。ティアちゃんはこれからもお幸せに。

あとバカハヤ君は……うん、出来れば早い内にスタッフともども逮捕されるよう願っ。ま。

変態なんかみんな滅んでしまえ!!」

B B

(どれだけ憎いんだよ…今までのやり取り考えれば無理ないけど…)

ハヤト(木炭)

「俺管理局だもん! 逮捕なんてされないもん!」

(。。。)(。。。) <俺たちだっ。逮捕なんてされね。っ。ばよ!」

セデイス

「何でそんなに自信満々なのよ!」

ティアナ

「あのスタッフ、あれでも一応元エリート社員なのよね。だから、そうそう逮捕されるなんてへましないのよ」

スバル

「管理局の上層部にも顔が利くしねえ」

セデイス

「な、何でこんな変態が……」

(。。(。(。<ふはははは！ 恐れ入ったか！

BB

「恐れ入らないっての。つか、そんなに強いなら俺と勝負しようぜ」

(。(。(。<かかってこんかい！

ティアナ

「やめなさい。さすがにブースが消し飛ぶから。」

(機)ジャンク屋組合から修理専門の人が来てくれてるけど、それでもブース全部はさすがにね」

BB

「……ちっ。まあいいか、後でも出来るしな」

ハヤト(木炭)

「喧嘩っ早いなあBBは。もっとまったり行こうぜまったり。」

あ、それと姉ちゃんを紹介しねえぞ。BBと姉ちゃんがガチでやったら、マジに洒落にならん」

BB

「ケチくせえなあ。いいじゃんか別に」

ハヤト

「ヤだよ。その後始末すんの俺なんだぞ？」

B  
B

「いいじゃねーか。いつもの事だろ？」

ハヤト

「だから嫌なんだよ！」

B  
B

「……チツ、しょうがねえ。今回は諦めるか」

セデイス

「それがいいね。あ、そーいえばバカハヤ君。ちょっと質問」

ハヤト

「はいはい、何だセデイス？」

セデイス

「ドラマのほうだと、今はバカハヤ君とティアちゃんがお付き合ひしてるよね？」

ティアナ

「そうね」

ハヤト

「そうだな」

セデイス

「ドラマじゃなくて、プライベートではどっちとお付き合っしてるのかな？」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……!?!?!」

セデイス

「ん？ どしたの？」

ハヤト

「あー、いやその。プライベートは……なあ？」

ティアナ

「そ、そうね／／／」

スバル

「えと……その……／／／」

セデイス

「いーじゃんいーじゃん、教えてよ」

B B

「俺も少し興味あんな。教えてくれよ」

ハヤト

「……どうする？」

ティアナ

「まあ、あたしは別にいーけど……／／／」

スバル

「あ、あたしも……ハヤトがよければ／＼」

セデイス&BB

「「？」」

ハヤト

「ま、2人がいいなら言うけど……」。

「プライベートだと、両方と付き合ってます」

セデイス

「へー……って、ええええええっ!？」

BB

「二股かよ。やるなあ」

ハヤト

「二股ゆーな。どっちも真剣なんだから。」

「それにこっちのミッドは、重婚可能なんだぜ?」

ティアナ&スバル

「「……／＼／」」

セデイス

「そ、そんな……バカハヤ君のクセに……」（ガビーン）

ハヤト

「ヒドスW んじゃまあ、そんなところで次のコーナーいってみるか」

B B

「え〜。そうなった経緯とか教えてくれよ」(ニヤニヤ)

ハヤト

「秘密だ秘密。あーもう！これにて“ゲストへの5つの質問”は終わり！」

次のコーナーいくぞ、次のコーナー！」

B B

「誤魔化したな」(ニヤニヤ)

ハヤト

「うっせ。はいじゃあ次のコーナーはこちら！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『『『『』』』』』」  
「『『『『』』』』』」  
「『『『『』』』』』」

ハヤト

「このコーナーは、RN：遠峰シンが考えてくれた新しいコーナーだ。」

リスナーが応募してくれた『『『『』』』』』というネ

夕に対して、俺らがコメントしていくぞ」

ティアナ

「……ええと、とりあえず最初のお便り読むわね。

(21)とともにいつまでも(キラ)にお住まいの……住所？

RN:妄想厨こと駄文召喚士さん。

コーナー化される前なのに投稿してくださって、ありがとうございます。います。

それでは、最初の『こんなにリカルは嫌だ!』は……

『スバルが増殖した!』」

ハヤト

「……六課壊滅やん」

BB

「間違はなく破産するよな」

セデイス

「スバちゃんが増殖……六課どころか、ミッドチルダの食糧事情が  
凄いことになるね」

スバル

「そ、そんなことないもん!」

ティアナ

「間違はなくそうなるわね」

スバル

「ティアまで!？」

ハヤト

「お前、自分がどんだけ食べるか、いい加減理解しようぜ。デートの度に俺の財布がどんだけダイエツトするか……」

スバル

「い、今言う事ないでしょ!?!?!」

(´・`・)(´・`・)(´・`・)【それ以上は事務所NGですよ】

ハヤト

「マジで? やっべ、社長に怒られる……」

セデイス

「バカハヤ君たちの事務所の社長さんって、誰なの?」

ハヤト

「プレシア=テストロツサ社長。ハラオウン隊長のお母さんだな。普段は親馬鹿で優しい人なんだけどさあ、俺にはめっちゃ厳しいんだよ……」

ティアナ

「アンタが初対面で求婚するからでしょ?」

あの時のプレシア社長の顔、今でも忘れられないわ」

スバル

「ハヤト、凄い怒られてたよね。雷でビリビリされながら」

B B

「……ハヤトって、昔からそんなだったんだな」（哀れみの目）

セデイス

「やっぱりバカハヤ君は、バカハヤ君なんだね」（哀れみの目）

ハヤト

「おやおや？ 何だか凄まじく切ない予感がしてきましたぞ」

セデイス

「気のせいだよ」

スバル

「それじゃあ次の『こんなリリカルは嫌だ！』」

送ってくれたのは、同じくRN：妄想厨こと駄文召喚士さん。

『ハヤトがスタッフを六課に連れて行く』」

ティアナ

「エリオ！ キャロ！ 逃げなさい！」

ハヤト

「あとリイン曹長も逃げた方がいいな」

セデイス

「このスタッフって、変態ばかりだもんねえ」

B B

「あのスタッフじゃなきゃ、普通に捕まってるよなあ」

スバル

「多分、凄い混乱するよねえ」

ハヤト

「エリオとキヤロを守ろうとして、ハラウン隊長が暴走。

リン曹長を守ろうとして、八神部隊長と守護騎士の皆さんが暴走……。」

あれ？ これも六課壊滅しねえ？」

ティアナ

「するわね。しかも確実に」

セデイス

「てゆうか、そもそもバカハヤ君がスタッフを連れて行かなければいいんじゃない？」

ハヤト

「いやセデイス。それゆうたらこのコーナーお終いやん」

BB

「そうだけセデイス姉。これは“もしそうだったら”ってのを仮定しての話なんだからさ」

セデイス

「ん〜、それもそつかあ。でもでも、バカハヤ君だってエリ君とキヤロっちは大事でしょ？」

ハヤト

「そりゃね。可愛い弟分と妹分だし、危ない目にはあわせたくないわな」

ティアナ

「アンタ、プライベートでもあの2人やヴィヴィオ、ルーテシアとは仲良しなものね」

ハヤト

「何故俺はチビっ子にしかモテんのだ……」 or z

スバル

「いいじゃんか。その……あたしとティアにはモテてるんだし／＼」

ハヤト

「……ん、まあそれもそうだな」

セデイス

「はいはい、イチャつかないでね。ムカつくから」

B B

「そうだぜー。イチャつくのはウチの作品の連中だけで間に合ってるっの」

ハヤト

「おおつとスマンスマンw」

ティアナ

「べ、別にイチャついてなんか無いわよ！／＼／」

スバル

「えへへ……ゴメンね2人とも／＼」

セデイス

「はいはいはいご馳走様。

ほら、他の『こんなリリカルは嫌だ!』は？ やらないの?」

ハヤト

「ん。まあ今回はこれくらいだな。

そいじゃあ『こんなリリカルは嫌だ!』のコーナーはこれまで。

次のコーナーいつてみよう!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『チャレンジ!ハヤトくん』」

ハヤト

「ふむ。2回目か」

ティアナ

「やっぱり結構コーナーが出来てくると、やれないコーナーが増えてきちゃっわね」

スバル

「だねえ。そろそろコーナー増やすのはやめておこうか」

ハヤト

「そうだな。ま、それは後で話すとして。

今回のお題はなんだ？」

セデイス

「じゃ〜私が読むね〜。

今回のお題をくれたのは、スカリエツティラボ内の生体ポッドにお住まいの……お、ご近所さんだね。

RN：検体番号10032さん！

『ティアナ&スバルのお色気攻撃に、10分間耐えきって下さい』

だつて」

ティアナ&スバル

「「はあああああつ!?!」」

B  
B

「面白そうじゃん。じゃ、俺がタイム計るよ」

セデイス

「ティアちゃん、スバちゃん、がんばろ」

ティアナ

「いや、ちよつ…… / / /」

スバル

「で、できないよそんなの!」

ハヤト

「ふむ。それじゃこれは俺の不戦勝ということではないのか？」

セデイス

「えー、そんなのつまんなーい！ ぶーぶー！」

B B

「……あ、それじゃセデイス姉がやったらどうだ？」

セデイス

「ええ！？ 私が！？」

ティアナ&スバル

「！！！」

B B

「だってその方が面白そうじゃん？」

セデイス

「ヤゝよ！ バカハヤ君に襲われたらどーすんの！？」

B B

「その時は俺が助けるからさ、どう？」

セデイス

「う〜〜〜……まあ、ビーちゃんがそう言うのなら……」

ティアナ

「や、やっぱりあたしとスバルでやるわ！」

スバル

「だから、セデイスは座ってて！」

セデイス

「そう？　じゃあ、私は座ってるね〜」（ニヤリ）

B  
B

「だな、2人がやるならセデイス姉がやる必要もないし」（ニヤリ）

ハヤト

「ゲスト2人が『計画通り』的な笑みを浮かべてる件」

ティアナ

「そ、そんなのどうでもいいわよ！」

「じゃあ始めるわよ!?　スタッフ！　タイムカウント準備、いい!?」

（。。。）  
くえ!?　あ、はい……

セデイス

「それじゃ〜……スタートッ！」

〜以下、お色気攻撃をダイジェストでお送りします〜

ティアナ

「こ、これならどうよ?」(胸元を開けて胸を寄せる)

ハヤト

「(・・・)」

スバル

「え、えと……こーゆー感じ?」(胸の間にハヤトの腕を挟んで抱きしめる)

ハヤト

「(・・・)」

ティアナ&スバル

「これでどーだ!」(二人でハヤトの膝に乗り、耳たぶを甘噛み)

ハヤト

「(・・・)」

ティアナ

「ええい!」(限界までスカートを上げる)

スバル

「こーなったらヤケだよ!」(下着を見せる)

〈10分後〉

セデイス

「は〜い、タイムオーバー！」

ティアナ

「……………くっ、耐え切られた」

スバル

「うう……………あたし達の魅力足りなかったのかなあ……………」

B B

「ハヤト、よく耐え切ったなあ……………ん？ ハヤト？」

ハヤト

「……………今の俺なら、真のスーパーモードを使うことが出来る」

B B

「まさに明鏡止水……………か」

セデイス

「あのバカハヤ君が、欲望を我慢するなんて……………。明日は雨だね」

ハヤト

「ふっ……………水の一滴ひつぽくが見えたぜよ」

ティアナ

「何よ。別に、我慢しなくてよかったのに」

スバル

「そっだよ。ハヤトの馬鹿」

ハヤト

「えーと……アレだ。とりあえず収録後に付き合えお前ら」

ティアナ

「……ふん。別に、いいけど?」

スバル

「あたしも、いいよ?」

セデイス

「………ビーちゃん。殺っちゃっていい?」

BB

「あー、まあいいんじゃない? さすがに俺もムカついてきたし」

セデイス

「おっけー……くししし、全力でいっちゃっよー」

ハヤト

「あ、ヤベ。地雷踏んだ」

セデイス

「くらえー……っつ!?!」

ティアナ&スバル

「ハヤトバリアー!」

ハヤト

「ちょwww お前らwww」

ひぎゃー！ー！ー！ー！！！！」

セデイス

「……ティアちゃんもスバちゃんも、自重しようね？」

ティアナ&スバル

「ごう、ごめんなさい」

ハヤト（パンチパーマ）

「オイ、俺のこの惨状に何か言う事はないか？」

セデイス

「自業自得」

B  
B

「因果応報」

ハヤト（パンチパーマ）

「……ふふ。わかってた、わかってたよ」

スバル

「あ、あははは……。でも、これでハヤトの2連勝だね」

ハヤト（パンチパーマ）

「そーだな。てかこのコーナー、最終的に俺になんかメリットあるの？」

（……）【10連勝したら、最新型のBSPP各色あげるよ】

ハヤト（パンチパーマ）

「マジで!？」

セデイス

「うわー、凄く嬉しそう。」

バカハヤ君は、ホントにゲームが好きなんだね」

ハヤト（パンチパーマ）

「応ともの！ 3度の飯よりゲームが好きだ！」

B B

「気持ちはわからなくてもないけどな」

ティアナ

「ハヤトのは、中毒って言うのよ」

スバル

「だよね〜。ゲームがないと、本気で死んじゃいそうだもん」

ハヤト（パンチパーマ）

「ゲームがなかったら、1日で死ぬ自信があるぜ」

B B

「うわー、自慢になんねえ〜」

セデイス

「てゆーか、病院入れた方がよくない？ 精神病の一種だよ、もうこれ」

ティアナ

「そんなんで治るなら、とっくに入れてるわよ」

スバル

「お医者さんも見離してたもんね……」

B  
B

「重症すぎるだろ常識で考えて！」

セデイス

「さすがバカハヤ君と言うべきか、呆れるべきか……」

ハヤト（パンチパーマ）

「H A H A H A！ 崇め奉るがいい！！」

ティアナ

「なんでよ」（ハリセン）

ハヤト（パンチパーマ）

「あふんっ！」

スバル

「と、とりあえず、“チャレンジ！ハヤトくん”はここまで！

CMを挟んでからエンディングトークです」

ヴァイス

「ブラック家族24て何ですか？」

ティアナ

「はい。家族への国内通話が24時間無料になるんです」

く自宅く

ティアナ

「ふう」

シヤマル

「ねえティアナちゃん、ブラック家族24てなあに？」

ティアナ

「えく、家でも仕事の話？」

ティーダ

「ボクモ知リタイ」

ティアナ

「お兄ちゃんも？ お兄ちゃん今日帰り遅くなるって言ってなかった？」

ティーダ

「聞イテマセンデシタ」

ティアナ

「もー、何言ってるの？ だから」

ザッフィー（犬）

「俺も知りたいな」

ティアナ

「お父さんも？」

シャマル

「あなたは知らなくてもいいわよ」

ザッフィー

「何で！」

ティーダ

「H A H A H A H A」

ザッフィー

「何がおかしい！」

ティーダ

「スミマセヌオ父サン」

シャマル

「で、ブラック家族24て何なの？」

ティアナ

「え？」

家族への国内通話が24時間無料。  
Hard bankから。

私達は健やかな子供の育成を応援しています。

(侍) N・E・E・T

ティアナ  
「はい。それではそろそろお別れの時間です」

スバル  
「何だか回を追う毎にカオス度合いが凄くなってるね。  
リスナーの皆、ついてこれてるかなあ……？」

ハヤト  
「いんじゃないね。だってほら、この番組って作者の気晴らし半分だろ？」

BB  
「ぶつちやけんよ。一応番組なんだからさ」

セデイス

「そ〜だよ〜」

ティアナ

「そうよね。ハヤト、自重しなさい」

ハヤト

「へーい。てか、そーいや今日はスタッフ大人しかつたなあ。  
いつもだったらもっと騒ぐのに」

(´・`・´) くだって幼女じゃないんだもん

セデイス

「……………変態すぎるよ」

BB

「マジで捕まえたほうがよくな？ 被害が出る前によ」

ハヤト

「いや、もう諦めてる。それにあのスタッフ、一応分別はあるみた  
いだし」

(´・`・´) <YES! ロリータ!!

(´・`・´) <NO! タッチ!!

ハヤト

「……奴らは紳士なんだよ」

B B

「なるほどな……。紳士道を貫く奴らだったか」

セデイス

「ちよつ、ビーちゃんまで何でわかりあってるの!?!」

ハヤト & B B

「男にしか分らんことさ」

ティアナ & スバル & セデイス

「……これだから男って」

ハヤト

「ま、冗談はさておき。最後に番宣いってみようか。」

B B、セデイス。どうぞ」

セデイス

「はいはい。私とビーちゃんが出演してるのは

『ACE+リリカルなのは part3 the final』3つの欲望と3人目の鍵』だよ」

B B

「ロボットアクションゲーム『Another Century's Episode』シリーズとリリカルなのはのクロスオーバー小説の最終章。」

主人公のベルクトとその一行が突如9年後の世界：Strike RSの舞台へ飛ばされ、そこで巻き起こる今まで以上の混乱：」

セデイス

「最終章という事でACEオリジナルキャラだけに留まらず、ACE出演の著作権作品のキャラ達も多数登場し、StrikerS編では影

の薄かった「あのキャラ」が主役級だったり……。

私とビーちゃんみたいなオリジナルキャラも現れたり、の壮絶力才  
ス極まりない戦い！

果たして六課は…そしてベルクト達は生き残れるのか〜！？

………とまあこんな感じでいいかな？」

BB

「俺とセデイス姉は親父と一緒にスカリエツティ側の悪役で登場している

特に物語後半で大暴れだからな。そのへんもまあよろしくって事で」

ハヤト

「主人公のベルクトと、ハラウン執務官のいちゃいちゃパラダイスつぷりも見所だぞ」

ティアナ

「いや、そこ以外にもあるでしょ見所。

例えば最終章から仲間になった人達の活躍とか」

スバル

「敵側の人達の変化とかね」

ハヤト

「ま、それもそうだな。

んじゃ、続いてお便りとゲストに関するお知らせを、BBとセデイス頼むな」

BB

「めんどくせえな……まあいいか。

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーからの便りを待つてるぜ。

“なぜなにとあ新”では、メインパーソナリティ3人や、ゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定で頼む。

あと、ハヤトが死にそうなのも勘弁してやって……死ぬのかこいつ？

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人の収録風景のイラストなども募集してるぞ。

送って貰った場合、こっちのラジオで使われるみたいだな。そんな訳でリスナー諸氏、どんどん送ってくれ」

セデイス

「じゃあ私からゲストに関するお知らせだね」。

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選なんだって。

だから、応募した順番が後の作者さんのキャラクターが、次回ゲストに来る可能性もあるから、そこは我慢してね

選ばれた作者さんには、放送の翌日あたりにこっちからメッセージでお知らせを送るよ」。

こんな感じでよかったかな？」

ハヤト

「上出来上出来。んじゃ、“リリカルマジカルとあ新らじお”第7回はここまで、だな」

ティアナ

「セデイスもBBも、今日はありがとね」

BB

「ん、まあ俺らも楽しかったぞ」

セデイス

「バカハヤ君もスタッフも変態だったけど、私も楽しかったよ」

スバル

「あたしも楽しかったよ！ あ、この後一緒に遊びにいかない？」

セデイス

「いいね〜。どこいこうか？」

ハヤト

「ほら、そーゆー相談は後にしろ。一回締めるぞ」

スバル&セデイス

「は〜い」

ハヤト

「それじゃ、今回はここまで。

お相手はハヤト⇨ロックウエルと」

ティアナ

「ティアナ⇨ランスターと」

スバル

「スバル⇨ナカジマと」

B B

「B Bと……台詞短っ！」

セデイス

「セデイスちゃんでした〜」

ハヤト&ティアナ&スバル&BB&セデイス

「「「「「バイバイ！」」」」」

ティアナ

「この番組は

(糖) 万事屋銀ちゃん

(仁) かぶき町四天王会

(脇) ティーダ・ランスターとドワーエと巴武蔵と柿崎速雄を愛する会

(狸) 夜天お笑い愛好会

(侍) 悪・即・斬

(笑) 盾の守護獣

(槌) 巨乳は敵同盟

(悪) クアットロ眼鏡店

(聖) ヴィヴィオオリジナル

の提供でお送りしました」



第7回『残念、それは残像だ……』 (後書き)

すっげえカオス……。

黒仮面さん、何か凄い事になってて申し訳ないです。

何か気にいらぬ点や、修正して欲しい点などありましたらご連絡ください。

適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いません)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、

あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第8回『この子はお父さんだ……ちよちゃんの』

ハヤト

「イラスト紹介のコーナー！」

＼ワーワー／＼ドンドンドン／＼パフパフ／

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーの皆様から送っていただいたイラストを紹介します」

スバル

「今回送ってくれたのは、

第97管理外世界、風都の探偵事務所にお住まいのRN：神崎はやてさん。

送ってくれたイラストはこちら！」

> i 8 1 5 3 | 9 4 2 <

ハヤト

「……なんで俺殴られてんの？」

スバル

「えーっと何々……？」

『巨乳ゲストにハヤト君がセクハラする ティアナ怒る 殴る  
ハヤト吹っ飛ぶ

スタッフはスタッフでゲストが幼女じゃないので、幼女を出せ  
と要求している』

ってシチュエーションなんだって」

ティアナ

「日常風景ね」

スバル

「そだね」

ハヤト

「（。°。°）なんですと!?!」

ティアナ

「自覚してない訳? ……まあ、馬鹿は放っておきましょう。

神崎さん、イラスト投稿ありがとうございます。これからも頑張  
つていきますので、応援よろしくお願いしますね」

スバル

「作者さんもブースの外でライティング天元突破土下座してます!」

ティアナ

「それでは、今回のイラスト紹介はここまで。」

「続いてはこちらのコーナー」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『励まして！スバルちゃん』」

スバル

「今回も頑張って励ますよ！」

ティアナ

「最近乗り気ね。それじゃあ頑張って励ましてもらおうかしら？  
最初のお便り読むわよ。」

第97管理外世界、渋谷108にお住まいのRN：梶お化けさん。

『……最近、介護の仕事に身体が耐えられなくなって来ました。」

特に夜勤明けでは、電車と事故を起こす寸前の事態に。」

『……私はどうしたらいいのでしょうか？』」

スバル

「仕事も大切だけど、貴方の身体の方が大切だよ。」

どうしても辛い時は、お仕事を休むのも大事じゃないかな？」

ハヤト

「ほいほい。んでは次のお便り。

スカリエツティラボ内の生体実験室にお住まいの、RN：検体番号10032さん。

……住む場所がどんどん悪化してね？

『この所、何をすることも運が悪く、

何かしようと決意した次の日には決まって雨と言うことが続いています。

最早、この右手はイマジンプレイカーならではの……と思いつつあります。

スバルちゃん、励まして下さい！お願いします！！』」

スバル

「そげぶ！」

ティアナ

「励ましになってない！」（スパーン！）

スバル

「あてっ！？」

ティアナ

「検体番号10032さん、タイミングが悪いのが重なる時もありますから、あんまり気にしすぎない方がいいですよ」

ハヤト

「だな。一度気にし始めると、何でもそのせいだって思えちまうかな」

スバル

「うう……痛い」

ティアナ

「ふざけてるからでしょ、まったく。」

それにしても、梟お化けさんは大変みたいね」

ハヤト

「事故つて梟お化けさんが入院でもしたら元も子もないし、一度思い聞いて長めに休みを取るとかした方がいいかもなあ」

スバル

「ハヤトなんて、意味もなく1週間ぐらい休む時あるもんね」

ハヤト

「意味はあるわい！ ゲームの攻略に1週間かかったんだよー！」

ティアナ

「余計悪いわよ」  
ダインスレイヴ  
（墮淫酢隷腐）

ハヤト

「天元突破!？」

スバル

「わぁ、ハヤトがドリルに突かれてギョルンギョルン回ってる!」

ハヤト

「ケ、ケツがあぁ……」

スバル

「次のお便りはそげぶ……じゃなくて検体番号10032さんだね」

ティアナ

「あんたまで何でそげぶを言い出すのよ」

スバル

「えへへ。この間ハヤトの部屋で見せてもらったんだ」

ティアナ

「……はぁ。どんどん悪影響が広がってくわね」

ハヤト

「女は度胸! 何でも試してみるものさ!」

ティアナ

「シネ」(会苦巢狩婆)

ハヤト

「にゃー……っ!」

ティアナ

「ふう。いつも通りのショートコントも終わったし、始めましょう」

か

スバル

「りよ〜かい！ それじゃ “リリカル マジカル とあ新らじお”  
第8回！」

ティアナ&スバル

「スタートです！」

リリカル マジカル とあ新らじお

第8回『この子はお父さんだ……ちよちゃんの』

ハヤト

「何かもうボロボロになるのがデフォになってきたなあ。

どーも、メインパーソナリティのハヤト ロックウェルです」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティのティアナ ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバルナカジマです！」

ティアナ

「そんな訳で始めました、とあらじ第8回。

それでは早速ゲストを呼びましょうか」

ハヤト

「あいよ。今回のゲストは、『とある最強系主人公達の放蕩記』よ  
り！」

友達と一緒に最強転生！ あつちじゃティアナの親父さん！

御剣 仁さんだ！」

御剣

「お邪魔するぞ」

スバル

「こんにちわ、御剣さん！」

御剣

「ああ、こんにちわ。スバル」

ティアナ

「初めまして、御剣さん」

御剣

「こちらでは初めましてだな、ティアナ」

ハヤト

「モテる秘訣を教えてください」

御剣

「お前は一度死んだほうがいいぞ、ハヤト」

ハヤト

「（。 。 ） くん……だと……？」

ティアナ

「いきなりアホな事言い出すから悪いんですよ」

スバル

「どっだけー……」

ハヤト

「いつもの事ながら、自分の孤立無援ぶりに泣ける」

御剣

「自業自得という言葉を知っているか？」

ハヤト

「（。 。 。 ） 」

ティアナ

「ハヤトが落ち込んだところで、こっちのコーナーいきましたよっか」

ティアナ&スバル

「ゲストに5つの質問!」

ティアナ

「このコーナーは、私達がゲストに5つの質問をしていくコーナーです」

スバル

「簡単な質問なので、軽く答えてくださいね!」

御剣

「了解した」

スバル

「それじゃあ最初の質問!

『お名前は?』

御剣

「御剣 仁だ。仁では無い」

ハヤト

「本気になるスーパー仁くんになるんですね。」

「それでミスすると例の音楽と共にボツシユートされるんですねわかります」

御剣

「お前をボツシユートしてやるつか」

ハヤト

「H A H A H A。出来るもんならどつぞー！」

御剣

「ボツシユート」

チャラツチャラツチャ~~~~ン

ハヤト

「N O O O O O O O O O オオ~~~~」 (落下)

ティアナ

「ブースに穴が!？」

スバル

「ハ、ハヤトが例の音楽と一緒に落ちちゃった!？」

御剣

「大丈夫だ。ラジオが終わったら戻すよ」

ティアナ

「いやいやいやいや! そーゆー問題じゃないですから!」

スバル

「そうですね！ ブースに穴あけないでください！」

ティアナ

「そっちでもない！」

御剣

「穴なら大丈夫だ。ちょっと空間を切り取って異次元に繋げただけだからな」

ティアナ

「そーゆー問題じゃなくてすね！」

ああもっつ！ とりあえずハヤトは後回しで次の質問！！

『自分を動物に例えると』！？

御剣

「何故そんなに怒ってるんだ……？」

動物……自分では分かりにくいけど、黒峰に虎と言われた事ならある。

曰く、猫っぽいのがそれにしはこつ過ぎるからだ、とか。

そう言う意味では、ネコ科の大型動物なら大抵当てはまると思っ  
がな」

スバル

「ライオンとかも似合いそうですね！」

御剣

「そつだな。そちらも時々言われるよ」

ハヤト

「ふんぎぎぎぎぎぎ……」（穴から出てくる）

ティアナ

「あ、出てきた」

御剣

「なっ!? その穴はそう簡単に出てこれる代物じゃないぞ!？」

ハヤト

「俺に不可能は無い!」

御剣

「ならばもう一度ボツシュートだ」

ハヤト

「なんだとおおおおおっつ!!?!?」（落下）

スバル

「ああ! ハヤトがまた例の音楽と一緒に!」

ティアナ

「御剣さん! だからハヤトを穴に落とすのはやめてください!」

御剣

「む……すまない。次出てきた時は別の方法で屠るとしよう」

ティアナ

「だから! ハヤトを「き者」にしようとしないうでくださいってば!」

御剣

「なに。これも保護者の務めだよ」

スバル

「わあ、さすが御剣さん。」

自分の作品だとティアのお父さんをやってるだけではありませんね」

御剣

「はっはっは。そんなに誉めないでくれ」

ティアナ

「……誉めてないです……はあ。何か今日は余計に疲れる……。ええっと、次の質問は……？」

『好きな食べ物は何？』

御剣

「好き嫌いは特に無い。時節に応じた物ならば何でも食べるぞ？  
強いて言えばあっさりした味の物だな」

スバル

「あ！ あたしも好き嫌いありませんよ。お揃いですね」

ハヤト

「お前と一緒にされると、御剣さんも心外だと思っが」

御剣&スバル

「「！？」」

ティアナ

「ハヤト、アンタさっきよりも戻ってくる速度早くなってるじゃない？」

ハヤト

「異次元の生き物と友達になったからな。送って貰えた」

御剣

「くっ、中々に手強い……」

ハヤト

「それにしても、あっさり味が好きなんて爺くさ」

御剣

「何だつて？」

ハヤト

「H A H A H A。何でもありませんよ」

さくって次の質問！

『自分の性格を一言で』

御剣

「誤魔化すか……まあいい。

我が侂だな。自分のしたい様にする。後は…身内に甘い。

我が事ながら理解し難いが、一度気に入った人間を嫌いになれない。

気に入った奴は、例え敵に回っても嫌いにはなれんな」

スバル

「主人公っぽい性格ですね！」

御剣

「そうか？　こんなに我が侂な主人公は、そう居ないと思うが……」

ティアナ

「そんなこと無いと思いますよ？」

それに身内に甘いとかが、気に入った人を嫌いにならないっていうのも主人公っぽいと思いますし」

ハヤト

「……あれ？　その理論で行くと俺って嫌われてる？」

御剣

「別に嫌ってはいないさ。まあ、今回ののはちょっとした意趣返しと思ってくれ」

ハヤト

「意趣返しで異次元送りにされる俺って……」

スバル

「いつもの事じゃない？」

ティアナ

「……まあ、いつもの事よね」

ハヤト

「お前ら酷いですね！？　泣くぞ？　慟哭するぞ!?!」

ティアナ

「好きにしたら?」

スバル

「別に励ましたりしないよ？」

ハヤト

「……orz」

御剣

「さ、さすがにそこまで虐める事は無いと思っが……」

ティアナ&スバル

「「いつものことですから」「」

御剣

「そ、そうか……（流石に可哀想だな）」

ハヤト

「ぐすん……。それじゃあ最後の質問。

『パーソナリティの3人に一言』！」

御剣

「スバルは……そうだな、何かと苦勞しそうだが、頑張れ。

その内良い事あるさ。

ティアは……幸せになれ。私からはそれくらいしか言っ事は無い。  
馴れ馴れし過ぎるかもしれんが。

さて……ハヤト……2人を幸せにすると誓え。いつ、いかなる時  
も2人を支える。

……こんな所か。説教臭くなつてしまつたな」

ハヤト

「そりゃ勿論ですよ。俺だって男ですし、好きな女2人くらい幸せ

にする甲斐性はありますって」

スバル

「……えと、が、頑張ります！」

ティアナ

「心配してくれて、ありがとうございます。御剣さん」

ハヤト

「なんだろう、この恋人の親に挨拶しに行ってる気分」

御剣

「まあ、ある意味あっているかも知れんぞ？」

ハヤト

「勘弁して下さい。ゲンヤさんにフルボッコされた記憶が……」  
(ガクブル)

スバル

「あはは……全治3週間だったよね」

ハヤト

「ギンガまで参戦してきやがって……マジであの世逝きになるかと思っただっつーの」

御剣

「親なんてそんなものさ」

ハヤト

「そんなもんですかねえ？ って何この親子面談的な会話!？」

ラジオしようぜラジオ!!」

ティアナ

「はっ!?!? そ、そうだったわね。

つい雰囲気の流れされて和んじやったわ」

スバル

「じゃあ“ゲストへの5つの質問”はこれまで!

次のコーナーは……」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……なぜなに とあ新!」」

ハヤト

「このコーナーでは、リスナーから寄せられた質問に俺たちが答え  
ていくぞ」

ティアナ

「じゃ、最初のなぜなにいくわよ?

最初のなぜなには……八神はやての背後にお住まいの、RN:祝  
の風さん。

……背後霊!?!?

『いままでで、一番後悔した事はなんですか？』

スバル

「アイスショップを全制覇しようとしたら、お金が足りなかった時！」

御剣

「……ああ、まあスバルはそんな感じだと思っていた」

ハヤト

「ですよー」

ティアナ

「まあ、スバルだしね」

スバル

「なにさ！あの時の悲しみがわからないの!？」

ハヤト&ティアナ&御剣

「「「わからん」「」」

スバル

「う……うわーん！スタッフさああんっ！」

(ノ、) (、) (。 (ヨチヨチ

ティアナ

「何してるんだか。」

あたしは……新しい服を買った時にサイズ確認してなくて、着れなかった事かしら。

結構高かった上に、返品も出来なくて参ったわ」

ハヤト

「太った？」

ティアナ

「違うわよ！ 元々小さかったのよ！」

御剣

「ティア。ちゃんとウェイトコントロールはしないと駄目だぞ」

ティアナ

「だから違いますってば！」

ハヤト

「えー。だって女がそう言う時って、大概太って いや悪かった。」

謝るから会苦巢狩婆と狩場庵の二刀流はやめる。お願いだから」

御剣

「私も謝る。だからこっちに向けて火花を飛ばすのはやめてくれ」

ティアナ

「……今回だけですよ。それで？ ハヤトは何？」

ハヤト

「後悔した事ねえ……。」

訓練校時代、女子のシャワールームを覗こうと男同士で画策した

のに、結局失敗したことだなあ。

くっ、あの時先生が都合よく巡回にさえ来なければ……」

ティアナ

「御剣さん。ボツシユートお願いします」

御剣

「ハヤト、ボツシユート」

ハヤト

「甘いっ！ 聖闘士と同じ技は2度と通じん！」

スバル

「さつき2回ボツシユートされてた気が……」

ティアナ

「いいから落ちろ」(げしっ)

ハヤト

「ひにゃー」(落下)

ティアナ

「馬鹿が減んだところで次に行くわね。」

次のなぜなには、ネオジャパン在住のRN：いろはさんから。

『もし、ラジオのMCの皆さんが一日だけ階級がいくらでも上げれるとして、

どの階級を名乗りたいですか？』

スバル

「一等空尉！　なのはさんとお揃いだから！」

御剣

「ふむ。なのはには憧れているスバルらしい答えだな。

ティアはどうだ？」

ティアナ

「そうですね……やっぱり、執務官です。長年の夢でしたから。勿論自力でなってみせますけど」

御剣

「そつだな。お前ならきつとなれるさ。

さて、ハヤトは……って、ボツシュートしたんだつたな」

ハヤト

「名乗るんならやっぱり中将だな」

御剣

「もう戻ってきただとっ!？」

ハヤト

「ふつ。言ったでしょ、御剣さん。聖闘士と同じ技は効かない、と」

ティアナ

「漫画が違うから。てかアンタ、中将になりたいの？」

ハヤト

「いや別に。何か『ちゅーじょー』って響きが好きだから言ってみただけ」

スバル

「中将の肩書き選んだ理由そんなん!？」

ハヤト

「別に階級とか二等陸士でいいって。

階級上がったらその分仕事も増えるだろうしさあ」

御剣

「面倒ごとが増えるのは確かに嫌だな。気持ちはわかるぞ」

ティアナ

「御剣さんも分からないでください!」

スバル

「ハヤトの駄目人間思考に毒されますよ!」

ハヤト

「( . . . )」

御剣

「( . . . )」

ティアナ&スバル

「「手遅れっばいー!」!」(ガビーン)

ハヤト

「まあ冗談はさておいて、次のなぜなにについてみよう。

次のお便りは……第97管理外世界、高町家に無断在住中のRN：  
ゼロティスさん。

うおおい! 無断在住は駄目だろ!?

『私、とある事情で使い魔的なことをやってるんですが、主にちよっかい出すとぼこぼこにされてしまいます。』

そこでハヤトさんは、色々な人にちよっかいを出すときに何を心がけていますか？

回答よろしくお願いします！』『』

ティアナ

「……ちよっかい出さないって選択肢は無いのかしら？」

御剣

「無いから聞いているんだと思うぞ」

ハヤト

「ちよっかい出すときに心がけることねえ……」。

とりあえず、怒られた時に即座に逃げられるように、逃走経路の確保だな。

それと相手が怒る限界を見極めると、一発でキレる言葉をチエツクしとくかな。

それで相手の怒るタイミングを操作したりすると、結構逃げやすいぞ」

スバル

「何か無駄に考えてる！？」

ティアナ

「何でその思考力を、普段の訓練に生かさないのよ！」

ハヤト

「ちなみにギンガは『脳筋』って言うと一発でキレるな」

ティアナ&スバル

「無視すんなー！っ！！！」

御剣

「ふむ。ちなみにティアとスバルの禁句は何だ？」

ハヤト

「ティアナは『暴力オレンジ』、スバルは『アイス馬鹿』ですかね」

ティアナ&スバル

「ぶつ殺すっ！！！」

ハヤト

「ほら、切れたでしょっ！ それじゃあここで一旦CM！  
その間俺は逃げますんで！！！」

ティアナ&スバル

「あああああてええええええええええっ！！！！！」

シヤマル

「ホントに土佐いくの？」

ザッファイ

「ああ」

ティアナ

「クロおじちゃんまで？」

クロノ

「くるちゃん、DEATH！ HAHHA！！  
イエア、サムライスピリット！！」

ザッファイ

「こいつは本気だ」

クロノ

「サムライソード！ フォウツ！！  
ハイ~~~~！！ アタタタアアツ！！！！」

シヤマル

「落ち着いて」

クロノ

「ハイ……」

P i P i P i P i ……

ティアナ

「電話だ」

ピッ

エイミー

『クロ、居る?』

シヤマル

「奥さんよ」

クロノ

「やべっ!?!?」

エイミー

『クロ?』

クロノ

「くるチャン、DEATH。ハイ」

エイミー

『早く帰ってこおおいつつ!?!?!?!?!』

クロノ

「ハイ!」(ダダダダダッ)

ザッファイ

「おいおい」

携帯に繋ぐスピーカー貰えます。  
Hard bank。

ヴィヴィオ

「私のママがくれた、初めてのキャンディー。」

それはヴィヴィオオリジナルで、私は6歳でした。

その味は甘くてクリーミーで、こんな素晴らしいキャンディーを貰える私は、きっと特別な存在なのだと感じました。

今では私がママ。

娘にあげるのは、もちろんヴィヴィオオリジナル。

なぜなら、この子も特別な存在だからです」

甘くてとろける特別なキャンディー。

ヴィヴィオオリジナル。

ティアナ

「さて、次のなぜなにに行きますね」（スッキリ）

スバル

「そだね。今日はまだ時間あるし、もうちょっといこうか」（スッキリ）

御剣

「……ワタシハナニモミナカッタ」

ティアナ

「次のなぜなには、第97管理外世界 静岡にお住まいのRN：ハナサカさん。」

『ハヤトさんは巨乳好きとして有名ですが、

魔乳、超乳、奇乳の類は、愛でる対象なのでしょうか？』

スバル

「ハヤト、質問だよ？ ホラ起きて」

ハヤト（屍）

「はい……。そうデすネ。」

あんまり大きすぎるのは、流石に愛でる対象二八なりません。  
理想トシテは、D以上G以下ぐらいでしょうカ」

ティアナ

「そういえば、アンタって胸が大きければキャロくらいの子でもいいの？」

ハヤト（屍）

「ふむ。それについてはちょっと持論があつてな。」

長くなるが聞いてくれ。」

個人的にロリとロリ巨乳は似て全く非なるものだと思つてる。

「ロリ巨乳」は基本的に「ロリ」からではなく、「巨乳」から派生した属性なんだと思う。」

出発点はロリじゃなく巨乳からなんだよ。ロリに巨乳が付いてるのではなく、巨乳にロリ要素が付加されてるんだ。」

そして、何故そんなミスマッチなものを付加するかと問われれば、「その方が乳が際立つから」に他ならない。

お汁粉に塩を少量加えると逆に甘みが増すだろ？ あれと同じさ。Gカップの大人とGカップの子供、どちらの方が乳が目立つと思っう？ 後者だろ？

要するにロリ巨乳ってのは乳を最高に際立たせる組み合わせなのさ。

それに、巨乳というのは胸だけに限定された属性なのに対し、ロリというのは必ずしも貧乳である事だけで表現されるものではないから、巨乳にロリという要素を付加することによって、胸以外の空白の要素を補完しつつ、胸以外の部分でロリ要素もある程度楽しめる訳だ。

つまり一粒で二度美味しい上に、巨乳好きにとってはメインで楽しむ味が濃くなる、と良い事尽くめなわけだなこれが。

ただ、その分ロリの方の味は確実に薄まるから、ロリ好きにとっては邪道に感じられるのは尤もだろう。

それどころか、詰まるところロリをサブ属性扱っている訳だから、腹が立つのも頷ける。

理解してくれとは言えないが、そういう嗜好もあるということだけは一応認識しておいてくれ。

まあ長くなっただが、結論としては胸が大きければ子供でも大丈夫という事だな

ティアナ

「よし分かった。死ね」

スバル

「塵も残さず消滅するといいいよ」

御剣

「世界の為に、こいつはココで殺るべきだな」

ハヤト（屍）

「え？ ちゃんと答えただけなのに何コレ？」

ティアナ

「御剣さん、お願いします」

御剣

「<sup>エクス</sup>約束された」

ハヤト

「ちょまつ！ ブースが吹っ飛ぶ！ マジで吹っ飛ぶから！！」

御剣

「<sup>カリバー</sup>勝利の剣アアアアアアアッ！！！！」

ハヤト

「ぎゃああああああっ！？」

く 現在電波が乱れています。少々お待ち下さいく

御剣

「おお……あれだけ破壊されたブースが、僅か数分で元に戻るとは」

ティアナ

「（機）ジャンク屋組合から派遣されたコバヤシマルさんが、一分でやってくれました」

（ w ） b

スバル

「す、すっごく顔怖いよ!?!」

ティアナ

「いら。そういつこと言わないの」

（ T W T ）

ティアナ

「ほら、泣いちゃったじゃない!」

スバル

「あわわわ、ごめんなさい!」

（ w ） < い い つ て じ と よ ー !

御剣

「意外と余裕があつたな」

ティアナ

「ですね。それじゃあ、今回の“なぜなに とあ新”はココまで。  
次のコーナーいつてみましょ」

スバル

「それじゃあ、御剣さんも一緒にタイトルコールを！」

御剣

「私も？ まあ……たまにはいいか」

ティアナ&スバル&御剣

「「ツンデレ！ティアナちゃん」」

スバル

「このコーナーは、リスナーさんのお題にティアがツンデレ台詞を返すコーナーです！」

御剣

「少々楽しみだが……気恥ずかしい気もするな」

スバル

「それじゃあ最初のお便り！」

あ、御剣さんはこっちを読んでくださいね。

えーと、最初のお便りは、江戸の万屋にお住まいの、RN…監督  
提督さん。

『俺がそばにいてやる。だから、泣くな……』』

ティアナ

「な、泣いてなんか……ないわよ。

それに、アンタが側にいたって……別に、嬉しくなんて……無い  
んだから」

御剣（鼻血）

「……すまん、ちょっと今はお便りは読めん。

スバル、かわってくれ」

スバル

「ええ！？　ってすごい鼻血！！　だいじょぶですか!？」

御剣（鼻血）

「だ、大丈夫だ」

スバル

「ええと、なら次のお便り読みますね？」

次のお題は、冥界三途の川三丁目13番地にお住まいのRN:T OUDAさんから。

3つも応募してくれてありがとうございます！

『喧嘩した後仲直りする時のツンデレセリフ』

『ゲーセンで取った景品を上げた時のツンデレセリフ』

『今度映画を観に行かないか？』

ティアナ

「さつきは……その、悪かったわよ。でも！ アンタだって悪いんだからね!？」

「ふ、ふん。別にこんな欲しくなかったわよ……でも、ありがとう」

「アンタがどうしてもって言うから行くんだからね!？ ホントよ!？」

スバル

「今回は以上でした」。

御剣さんどうでした？ ……って!？」

ティアナ

「え？ ……って!？」

御剣

「……………」(ペアア)

ティアナ&スバル

「「凄く良い笑顔で鼻血出しながら昇天してるーっ!?!」」(ガビーン)

御剣

「大丈夫だよティア、もう、答えは見つけたから……………」

ティアナ

「何の答えですか!?! ちょっと、戻ってきてください御剣さん!」

スバル

「そっち逝っちゃ駄目ですーっ!?!」

御剣

「…………ハッ!? す、すまない。」

ティアのツンデレがあまりにも破壊力があつたもので、つい昇天してしまつた」

スバル

「どんだけですか!?!」

御剣

「語つていいのか? 小一時間はかかるが……………」

ティアナ

「恥ずかしいからやめてください!?!」

御剣

「そうか……」（シユン）

スバル

「えーと、それじゃあ“ツンデレ！ティアナちゃん”はこれで終わり！」

ティアナ

「はぁ……疲れた……」。

もう一度CMを挟んでから、エンディングトークにいきますね」

人気アイドル“ディレト”のデビュー3周年記念アルバム『アンリミテッド・デザイン』

6月22日、いよいよ発売！

予約特典として、ディレト直筆のサイン入り特別写真集を同封！  
手に入るのはこのアルバムだけ！

さあ、今すぐお近くのショップへダッシュだ！

（株）小狸エンターテインメント

ティアナ

「はい、それではエンディングトークです」

スバル

「今回はラジオ始まってから、初めてブースが消し飛んだね」

御剣

「そうだったのか？ てっきりもう何度か吹っ飛んでいるものと思っ  
っていたが」

ティアナ

「さすがに今まで、あそこまで私達が怒ることが無かったですから  
ね。」

怒っても、大概はこの会苦巢狩婆で消し炭にしてみましたし」

御剣

「駄目だぞティア。女性たるもの、もう少し淑女を心がけなくては」

スバル

「いや、ブースを吹き飛ばした御剣さんに言われても説得力が無い  
ような？」

御剣

「いやいや、あれは2人がやれと言うからだな……」

スバル

「いやいやいや、それでも実行したのは御剣さんですし」

御剣

「いやいやいやいや……」

スバル

「いやいやいやいやいや……」

ティアナ

「いー加減にしろ！」（スパーン！×2）

スバル&御剣

「「あいたあつ！？」」

ティアナ

「スバルも御剣さんも！遊んでたらいつまでもラジオが終われないじゃない！」

スバル&御剣

「「す、すみませんでした」」

ティアナ

「全くもう。それじゃあ最後に御剣さん、番宣をお願いします。

……ふざけちゃ駄目ですよ？」

御剣

「わかっているぞ。」

私が出演しているのは『とある最強系主人公達の放蕩記』だ。

私を筆頭に、3人の主人公がリリなの世界に転生する。

タイトルの通り最強主人公モノなので、その点注意して貰いたい。因みに、今はSetS序盤だ。

私達は普段、骨董品屋をやっているが、機動六課に派遣される為に今は本局監査として動いている。

原作よりも強化されたフォワード陣。同様にスカリエッティの戦力も強化されている。

更に現れた第三勢力『影』シャドウ。事態は混迷を極めていく……

と言った感じか」

スバル

「原作より強くなったティアの活躍が見所だよ！」

ティアナ

「それに、なのはさん達と御剣さん達の活躍もね」

スバル

「番宣も終わったし、次はお便りとゲストに関するお知らせだね。

じゃあまずあたしからお便りに関するお知らせを！」

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーからの便りを待っています！

“なぜなに とあ新”では、あたし達メインパーソナリティ3人や、ゲストさんに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーさんが凹んじやったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いしますね。

あと、ハヤトが死にそうなのは……いっかな。ハヤトだし。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーさんが考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、あたし達3人の収録風景のイラストなども募集してま  
すね！

送って貰った場合、今回みたいにラジオで使ったりしますよ！  
リスナーの皆さん、どんどん送ってください！！」

ティアナ

「次にあたしから、ゲストに関するお知らせを。

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になっています。

なので、応募した順番が後の作者さんのキャラクターが、次回ゲストに来る可能性もありますので、そこはご了承ください。

選ばれた作者さんには、放送の翌日あたりにこっちからメッセージでお知らせを送ります。

……うん。こんな感じかしらね」

御剣

「では、これで第8回は終わりかな？」

スバル

「そうですね。御剣さん、今日はありがとうございました」

御剣

「いや。私も色々と楽しませてもらったよ。

ハヤトの覚悟を聞くことも出来たし、色々と制裁も加えられたしな」

ティアナ

「そうですね（笑）

それでは！ “リリカル マジカル とあ新らじお”、今回はここまで！

お相手はティアナ＝ランスターと」

スバル

「スバル＝ナカジマと！」

御剣

「御剣 仁でお送りした」

ティアナ&スバル&御剣

「バイバイ！」「」

ハヤト（消し炭）

「……なあ、俺忘れられてね？」

m9（^ ^）プギヤー

ハヤト（消し炭）

「てめこのスタッフ！ 大体今回はお前らも影薄かっただろうがよ  
！」

（．．．）<俺ら元々裏方だし

ハヤト（消し炭）

「ちくしょおおおおつ！ 開き直れるその根性が羨ましい！」

（．．．）<ばーか

（．．．）<ばーか

（．．．）<ばーか

（．．．）<ばーか

ハヤト(消し炭)

「身体が再生したら覚えてるよおおおおっ!!!!」

ティアナ

「この番組は、

(有) 御剣古美術店

(氷) 凍根瑠弩氷菓(読み方:こうねるとひょうか)

(探) アコース探偵事務所

(財) 月村猫愛好会

(叉) 台所からの物体X

(狼) Hard bank

(聖) おかつぱ暴力シスター

(脇) 脇役救済委員会

(覗) エロスは正義協会

の提供でお送り……したくないわ……はぁ」



## 第8回『この子はお父さんだ……ちよちゃんの』（後書き）

キャラ崩壊させすぎたかも……（汗）

Hagailazさん、何か気に入らない点、修正して欲しい点などありましたらご連絡ください。

適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第9回『別に倒してしまっても構わんだろっ?』(前書き)

今回は、後書きの最後にちょっと宣伝があります。

第9回『別に倒してしまっても構わんのだろっ?』

ハヤト

「1週間ぶりの放送だな」

ティアナ

「先週はとあ新本編の収録忙しかったもの」

スバル

「最終回近いから、一気に収録したもんね」

ハヤト

「ま、その分また今回から頑張っていくとしよう。

それでは早速、イラスト紹介のコーナー!」

／ワーワーノ／ドンドンドンノ／パフパフノ

ティアナ

「今回はイラストが2通も来てるわね。ありがとうございます」

スバル

「今回送ってくれたのは、第97管理外世界にお住まいの、RN：山田花太郎さんと、

同じく第97管理外世界にお住まいの、RN：朧木さんです！送っていただいたイラストはこちら。まずは花太郎さんのイラストから!」

ティアナ&スバル

「誰このカツコイイ人？」

ハヤト

「俺だよ！ ハヤト！ ロックウエル君だよ！！」

ティアナ&スバル

「またまたご冗談を（嘲笑）」

ハヤト

「冗談じゃねえよつ！！」

ティアナ

「だつて……ねえ？」

スバル

「こんなにカツコイイの、ハヤトじゃないよ」

ハヤト

「どういうことなの……（泣）」

「じゃあ、次は朧木さんのイラストをば」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「おお」」」

ティアナ

「ハヤトの妙にスカしたポーズがムカつくわね」

ハヤト

「そこ!？」

スバル

「後ろのスタッフさん、お肉焼いてるね」

ハヤト

「上手に焼けました」

ティアナ

「てゆうか、お酒飲んでる人もいるじゃない!!」

( 〃 〃 ) つ【大吟醸・幼】

ハヤト&ティアナ

「いや、飲むなよ!」

スバル

「あ、それお父さんも飲んでたお酒だ」

ハヤト&ティアナ

「飲んでたんかい!」

スバル

「結構おいしいって言ってたよ?」

ハヤト

「そういう意味じゃなくて……あー、まあいいや」

ティアナ

「更には幼女って合唱してるし」

ハヤト

「さすがスタッフ。中々に変態だな」

スバル

「だね」

(、・・・)つ【俺たちは変態と言つ名の紳士だ!】

ティアナ

「いや、結局変態ってことじゃない!」

ハヤト

「違うぞティアナ。ただの変態と、変態と言う名の紳士との間には、ベルリンの壁よりも高い壁があるんだ」

スバル

「ハヤトが何言ってるのかわかんないよ……」

ティアナ

「馬鹿は放っておきなさい。それじゃ、イラスト紹介はここまで。」

“リリカル マジカル とあ新らじお” 第9回、スタートしまし  
ようか」

スバル

「あ、あれ? あたしのコーナーは?」

ハヤト

「今回はお休みだな。まあ、今まで皆勤賞だったんだし、たまには  
いんじゃない?」

スバル

「え」

ティアナ

「いいから、さっさと始めるわよ?」

ハヤト&スバル

「はーい」

ハヤト

「そんじゃま、”リリカル マジカル とあ新らじお” 第9回」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートです！」

リリカル マジカル とあ新らじお

第9回『別に倒してしまっても構わんのだろう？』

ハヤト

「あ、そっぴや俺久しぶりに無傷でオープニング終わったな。

どーも。メインパーソナリティのハヤト”ロックウエルです」

ティアナ

「アンタが馬鹿なことやらなきや、いつだって無傷よ。」

同じくメインパーソナリティのティアナ「ランスターです」

スバル

「うう、あたしのコーナー……。ええと、同じくメインパーソナリティの、スバル「ナカジマです！」」

ハヤト

「いつまで拘ってんだよ。いいじゃねえか。俺やティアナのコーナーなんて、あたりなかつたりなんだぞ？」

スバル

「だけど」

ティアナ

「いつまでもグダグダ言わない」（スパーン）

スバル

「あいたっ！」

ハヤト

「ハリセンが炸裂したところで、ゲストを呼ぶぜ。今回のゲストは『魔法少女リリカルなのは 夢幻の妖狐』よ

公！  
煌く頭脳で畏を張り、さわやか笑顔で敵を嵌める！ 新感覚主人

「ロウ「アイアス君と！」」

スバル

「無口な美少女！ アイギスちゃんです！」

ロウ

「どーもー」

アイギス

「（＝・・＝）」

ハヤト

「ロウ君おひさ〜」

ロウ

「お久しぶりですハヤトさん」

ハヤト

「本編後書き以来だねえ」

ロウ

「そうですね」

ティアナ

「アイギスちゃんは初めましてかしら？」

アイギス

「…………」（くくくく）

スバル

「可愛い〜」（抱きつき）

アイギス

「（＊、＊）」

ティアナ

「くっ、本気で可愛いわね」

ハヤト

「スタッフも大喜びしてるぞ」

キタアアア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）  
ハア（、 ）ハア（；、 ）ハアハア  
キタアアア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）  
ハア（、 ）ハア（；、 ）ハアハア  
キタアアア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）ア（。 ）  
ハア（、 ）ハア（；、 ）ハアハア

アイギス

「（（；。 ）ブルブル」

ロウ

「あはは、相変わらず面白いなあ。ここのスタッフさんは」

ハヤト

「だよなあ」

ティアナ

「……慣れてきた自分が怖いわ」

スバル

「あたしも……」

ハヤト

「しかしスタッフよ、アイギスちゃんは幼女じゃないんだが、いいのか？」

（。。。）つ【見た目幼女っばければ何でも良し！】

ティアナ&スバル

「節操無し！！」

ハヤト

「さすがスタッフ。俺達に言えないことを平然と言っただけ」

ロウ

「そこに痺れる憧れるウっ！！」

アイギス

「。。。（）、。。。」

ティアナ

「ああもっ！ スタッフが怖がらせるから泣いちゃったじゃない！」

スバル

「だ、大丈夫だからね？ ああの怖い人達はこっちこないから」

ハヤト

「いや、たまに突撃してくるぞ？」

ロウ

「そしたらアイギス襲われちゃうかも知れないね」

アイギス

「。。。。(ノ \\*)。。。。」

ティアナ&スバル

「泣かすな！！」（会苦巢飯婆&狩場庵）

ハヤト&ロウ

「ぎゃーーーーーっつっ！！！！」

ティアナ

「全く。悪ノリする人が増えると手が付けられないわね」

ハヤト（木炭）

「ゲストに手をかけるとは、酷い奴らだ」

アイギス

「(。；。；。；。；)」

ロウ

「僕は平気ですけどね」

ハヤト（木炭）

「何故!？」

スバル

「そりゃ、ゲストさんには手加減するもん。」

「それよりハヤト、何で木炭になるの？ 人間だよな?」

ハヤト（木炭）

「俺にもよくわからん。まあいいから、とりあえずコーナー始めようぜ」

ティアナ

「ま、ハヤトだしね。」

「それじゃあ最初のコーナーはこちら」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『『『ゲストに5つの質問!』』』」

スバル

「このコーナーは、あたし達がゲストさんに5つの質問をするコーナーです!」

ティアナ

「2人とも、軽い気持ちで答えてね？」

ロウ

「了解です」

アイギス

「く(〓、、〓)ノ

ティアナ

「それでは最初の質問。」

『お名前は?』

ロウ

「僕がロウ〓アイアス。そして、こっちが」

アイギス

「(〓。。(ノ【アイギスです】」

ハヤト(木炭)

「いつの間にフリップを!?!」

アイギス

「(〓。。(ノ【スタッフさんがくれたよ?】」

(、。・。・。(ノ b<アイギスたんの為ならば!

ティアナ

「点数稼ごうと必死ね……」

スバル

「なんか、いつそ哀れだね」

ハヤト（木炭）

「まあいいじゃねえか。この方がコミュニケーションとりやすいし」

ロウ

「僕としても、この方が助かりますね。

余計に喋らなくていいし」

スバル

「ラジオのゲストに有るまじき発言!？」

ハヤト（木炭）

「それは置いといて次の質問!」

『自分を動物に例えると?』

ロウ

「狐とか蛇ですかね? どちらも化かしたり狡猾だったり、他人を陥れると言われる動物ですよ」

アイギス

「……?」

ロウ

「アイギスはリスですね。好奇心旺盛で忘れっぽかったりすると」  
るがよく似てると思いますよ」

アイギス

「○（＊、＊）○」

ハヤト（再構築中）

「いや、微妙に誉められてなくね？」

ティアナ

「た、確かに……忘れっぽいとか……」

スバル

「シート！ 本人が満足してるんだからいいんだよ！」

ロウ

「一応誉めたつもりなんですけど」

アイギス

「○（＊、＊）○」

ティアナ

「ま、まあ本人が幸せそうならいいかしらね。  
とりあえず次の質問行くわ。」

『好きな食べ物？』

ロウ

「面白い触感とか味とかだったら何でもOKですね」

アイギス

「(、・・・)(ノ【タマゴ料理!】」

ハヤト(再構築完了)

「そんな2人にコレ。」

シャマル先生が作ったタマゴ料理(?)だ!」

(。。。)(=)(、。。)……

ハヤト

「な、何をする!?!」

ロウ

「それは『食べ物』じゃないですから」

アイギス

「(#。。。)(ノ【タマゴ料理を冒読したら駄目!】」

ティアナ

「……まあ、コレは……ねえ?」

スバル

「何か変なオーラ出てるしね……」

ハヤト

「ただの目玉焼きなんだがなあ」

ティアナ

「この料理は、このあとスタッフがおいしくいただきます」

(。 。 一一一) < えっ、ちよっ……

ティアナ

「それでは次の質問。」

『自分の性格を一言で』

ロウ

「僕はひねくれ者。アイギスは良くも悪くも子供ですな」

アイギス

「( \* '、 \* ) /

ティアナ

「いや、だからねアイギスちゃん。誉められてないわよ？」

スバル

「でもそんなトコも可愛いなあ」 ( ナデナデ )

アイギス

「 ( \* '、 \* ) /

ハヤト

「馬鹿な子ほど可愛いってことか」

ロウ

「ああ、まあそんな感じかもですね」

アイギス

「(#。。(」

ハヤト

「あ、あれ？ アイギスちゃん怒った？」

アイギス

「(#。。(」(ガブツ)

スバル

「あ、ハヤト噛まれた」

ティアナ

「怒って噛むなんて、本当に子供なのね」

ロウ

「あ、でもアイギスって毒持ってますよ？ 致死性高いヤツ」

ティアナ&スバル

「「!?!?」」

ハヤト

「あー……何か気持ちよくなってきた……」

ロウ

「しかも即効性も高いんで、直ぐに効いてきますよ？」

スバル

「ちよつ、ハヤト!？」

ハヤト

「じいちゃん、ばあちゃん、久しぶりー……うふふ……あはは……」

ティアナ

「戻ってきなさい！ そつち逝っちゃだめよ!！」

ロウ

「ほら、アイギス。そろそろ離してあげなさい」

アイギス

「(・・)ノ【はい】」

ハヤト

「お前はの間死んだ犬のジョナサン〓ジョースターじゃないか…

…」

ロウ

「犬にその名前ってどうなんでしょう?」

スバル

「そんなトコに突っ込んでる場合じゃないよ!

誰かお医者さん呼んできて! お医者さー!ーんっ!ー!」

く少年蘇生中。しばらくお待ち下さいく

ハヤト

「あー、死ぬかと思った」

ロウ

「アイギスの毒を受けて死ななかったのはハヤトさんが初めてですよ。」

流石ハヤトさん」

ハヤト

「いやあ／＼／」

アイギス

「（．．．）【仕留め損なった】」

ティアナ

「駄目よアイギスちゃん。仕留めたら犯罪だから」

スバル

「ハヤトだからそうそう死なないと思うしね」

ハヤト

「いやあ……／＼／」

ロウ

「誉められてないですよ。ハヤトちゃん」

ハヤト

「分かってる。分かってるから何も言わないロウ君、泣きたくなるだろ。」

んでは最後の質問。

『パーソナリティの3人に一言!』

ロウ

「今日は面白い時間をありがとうございました、スタッフの皆さん。管理局を退職したら是非ともここに再就職したいのですが可能でしょうかね？」

あ、ついでに三人も面白かったですよ」

ハヤト

「ついででw」

ロウ

「あはは、冗談ですよ。」

ハヤトさんの暖かく面白い感性は憧れですし、ティアナさんの優しい優しさは素晴らしいと思います。

そしてスバルさんの強い心はどんな絶望の中でも夜闇に浮かぶ灯台のように皆に道を示すことでしょうかね。

この三人が揃えば乗り越えられない壁はないと思いますよ」

アイギス

「」

ハヤト

「ロウ君が真面目な事言ってる!？」

落ち着けロウ君! 君は俺と同類の筈だろう!」

ティアナ  
「失礼よ」

スバル  
「失礼だよ」

ロウ  
「心外です」

アイギス  
「（。。。）ペッ」

ハヤト  
「酷くね！？何かみんな酷くね！？」

ロウ  
「え？だってハヤトさんですし」

スバル  
「ハヤトだしねえ」

ティアナ  
「いつも通りよね」

アイギス  
「（。。。）つ【マスターを馬鹿にしないで】」

ハヤト  
「うっ……うっ……うわあああああんっっ！」（泣）

ロウ

「あ、逃げた」

ティアナ

「放っておけばそのうち帰ってくるわよ。  
というかロウ君、スタッフに入りたいの？」

ロウ

「出来るなら。可能ですかね？」

スバル

「どうなの？ スタッフさん」

(・・・) 【執務官試験並みの難しさと倍率の試験があるよ】

ティアナ

「執務官試験並み!？」

スバル

「そんな倍率高いの!？」

(・・・) 【仮にも元エリート同員の集まりです】

ロウ

「なるほどなるほど。他には？」

（´・`・´）（つ）【そのあと、紳士度検査をして、私達と直接面接して合否が決まります】

アイギス

「（。°。°）？【紳士度検査？】」

（´・`・´）（つ）【変態と言う名の紳士かどうかを調べる検査だよ】

ティアナ

「聞きたくないけど……どんな内容なの？」

（´・`・´）（つ）【48時間耐久可愛い幼女鑑賞会。ハアハアしたら失格】

ティアナ&スバル

「変態だー!?!」(ガビーン)

ロウ

「なるほど。紳士たるもの、それくらいは出来なくちゃ駄目ですよ  
ね」

スバル

「納得するんだ!?!」

ティアナ

「どう考えても変態よ!?!」

アイギス

「?」

スバル

「アイギスちゃんは、まだ知らなくていいよ」

ティアナ

「純粋なまままでいてね」

アイギス

「……?」(ニクニク)

ティアナ&スバル

「可愛い」(抱きつき)

アイギス

「(\*´、\*´)」

ロウ

「スタッフさん、試験で気をつけるところは……」

ハヤト

「何このカオス」

ロウ

「あ、ハヤトさんお帰りなさい」

ハヤト

「うん、ただいま。で、何このカオス？」

ロウ

「かくかくしかじか」

ハヤト

「まるまるうしうし、か。なるほど……ラジオしろよ」

スバル

「だって、アイギスちゃん可愛いんだもん」

ティアナ

「仕方ないでしょ。女の子は可愛いものが好きなのよ」

ハヤト&ロウ

「「女の子（笑）」」

ティアナ&スバル

「「あゝあゝ!?!?」」

ロウ

「って、ハヤトさんが言っていました」

ハヤト

「（。・。）」

ティアナ

「……後で覚えてなさい」

スバル

「酷い目に合わせるからね」

ハヤト

「え、ちよつ、ま……っ」

ティアナ

「それでは次のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「なぜなに」とあ新！」「」」

スバル

「このコーナーでは、リスナーの皆さんから寄せられた質問に、あたし達が答えていくコーナーです！」

ティアナ

「まずは早速最初のなぜなに。」

次元の狭間（アルハザード前）にお住まいの、RN：ツンデレ同盟会員その1さん。

どうやって送ってきたのかしら？

『自分の弱味や弱点などを教えてください。』

あとティアナさん付き合ってください！』」

ハヤト

「弱味や弱点、ねえ。」

俺はやっぱ『ゲーム』だな。ゲーム人質に取られたら、即座に降伏する自信がある」

ティアナ

「まあ、アンタはそうよね」

スバル

「次はあたしが答えるね。」

あたしの弱点は、ティアが使う幻術系かな。全然見分けつかなくて」

ロウ

「じゃあ、僕とは相性最悪ですね」

スバル

「そだね。だから、ロウ君とは戦わないよ?」

ティアナ

「次はあたしね。あたしは……特に無いかしら。」

弱味になりそうなところも無いし、弱点って言われてもパツと思  
い浮かばないもの。

それとツンデレ同盟会員さん、御免なさい。あたし、今はハヤト  
って人がいるので」

ハヤト

「おいおい、さりげなく『欠点無し』アピールかよ」

ロウ

「いやですねえ。欠点の無い人って」

ティアナ

「そ、そういうつもりじゃないわよ。ただ、思った事を言っただけ  
で」

ハヤト

「(ヒソヒソ) 聞きました奥さん?」

ロウ

「(ヒソヒソ) 聞きましたよ。いやねえ、最近の若い子って」

ティアナ

「あんた等も若いでしょうが!」

ロウ

「確かにw 次は僕ですね。」

色々ありますが、やっぱり攻性行動の制限ですね、人間には攻撃できないように造られましたから。

あ、コミュニケーション程度でしたら問題ありませんよ」

スバル

「アイギスちゃんは？」

ロウ

「アイギスは蛇素体のせいかな寒いのが苦手ですね。あとすっぱい物も」

ハヤト

「あー、蛇は変温動物だからねえ」

ロウ

「付き合わされるコッチは色々大変なんですけどね。寝不足になったりしますよ」

アイギス

「？」

ロウ

「ああ、気にしなくいいから。大丈夫だよ」

アイギス

「」

ハヤト

「うむ。麗しき主従愛だな。

んでは次のなぜなに。第97管理外世界・京都にお住まいのRN：

安部晶彦さん。

『スバルさん、ティアナさん、ハヤトさん、そしてゲストさん、コンバツパ〜』

ハヤト&ティアナ&スバル&ロウ

「コンバツパ〜」

アイギス

「（・・）っ【コンバツパ〜】」

ハヤト

「僕には歳の離れた兄ちゃんが居るんですがゲームくらいしか兄ちゃんに勝てるモノが在りません。」

偶に喧嘩もしたりしますが勝てません

スバルさん達も御兄弟姉が居るそうですが“これだけは負けたくない”って言うもの

“未だに敵わない”って言うものって何ですか？

それと、スタッフの皆さんに質問ですが、何歳までがロリ&シヨタなんですか？

それとも歳ではなく身長なんですか？」

スバル

「うん……負けたくないのも、未だに敵わないって思うのも、どっちもSAかな。」

ギン姉は憧れで、目標だもん」

ティアナ

「アンタはホントにギンガさん大好きよね。」

それで、ハヤトは？」

ハヤト

「俺？ 俺ねえ……姉ちゃんには戦いに関することは何一つ勝てる気がしねえ。」

マジあの人チートだもん」

ロウ

「じゃあ、コレだけは負けたくないっていうのは何ですか？」

ハヤト

「ゲームだろうな。つか、それまで負けたらマジで俺終了のお知らせだし」

ティアナ

「ハツキさんって本当に凄いわよね。  
でも、ハツキさんに弱点ってないの？」

ハヤト

「姉ちゃんの弱点？ わからんなあ。  
どこぞのオーガ並みに、出来ない事とかが思いつかない」

ティアナ&スバル

「……確かに」

ロウ

「僕の幻術とかならどうでしょう？」

ハヤト

「何か姉ちゃんなら、気合で解きそつで怖い」

ロウ

「どんだけですかw」

ティアナ

「まあ、ハヅキさんだものね。」

それともうひとつの質問だけど……どうなの？ スタッフ」

（ …… ） < 語っていいですか？

スバル

「短く」

（ …… ） < 年齢と身長とちがひでも。

年齢なら10歳まで。身長は140cm以下でしようか。

ハヤト

「意外とこだわりあったんだ」

ロウ

「さすが紳士。ちゃんとこだわりを持っているんですね」

ティアナ

「ごだわり……っって言つのかしら？」

スバル

「言わないと思うよ？」

アイギス

「？」

ロウ

「アイギスはまだ知らなくていいよ」

アイギス

「……」（こくこく）

ハヤト

「んでは、今回の“なぜなに とあ新”はここまで。

次のコーナーに行く前に、CMはさみまーす」

ティアナ

「ありがとうございました。次の方、どうぞ」

ティーダ

「ティアナ」

ティアナ

「お兄ちゃん!？」

ティーダ

「ティアナ、聞キタイコトガアル」

ティアナ

「何よわざわざ」

ティーダ

「ヒトツ聞イテモイイデスカ？」

ティアナ

「だから何よ」

ティーダ

「ブラック家族24テナニ？」

ティアナ

「それは、家族への国内通話が24時間無料になるってことよ、凄いでしょ？」

ティーダ

「スツゴイ! デモ、ナンデ? ワカンナイ」

ティアナ

「私だつてわかんないわよ。何でお父さんが犬なのかも」

ザッファイ

「全てのモノには理由がある」

ティアナ

「理由？ 理由って何よ、お父さん」

ザッファイ

「お前にはまだ早い！」

家族への国内通話が24時間無料。

Hard Bankから。

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「「こんなリリカルは嫌だ！」「」」」

ハヤト

「このコーナーは、リスナーが送ってくれた“こんなリリカルなのは嫌だ！”というネタに、俺達が色々コメントしていくって

コーナーだ」

スバル

「ではでは、早速最初のお便り！」

エンドレスフロンティア、バレリアネア塔在住のRN：プワゾン  
クロウさん。

『ヴィータとチンクが大人になった』

『エリオが女の子になった』」

ティアナ

「最初のは別に嫌じゃないわよね？」

ロウ

「スタッフさん的には嫌でしょうけど、他の人からしたら別につて感じですよね」

ハヤト

「俺的にはむしろ嬉しいぞ」

(´；；´) くちっちゃくないヴィータたんもチンクたんも嫌だ！

ティアナ

「黙れ変態」

ハヤト

「それは置いといて、エリオが女の子になるのは嫌だなあ。  
FWの中で男が俺一人になっちまうし」

スバル

「ハヤトが寂しくなっちゃうもんね」

ティアナ

「あたし達は楽しそうでもいいかも。女の子が増えるし」

ハヤト

「畜生！ 何で六課は女性率高いんだよ！

もっと男性局員雇えよ！」

ティアナ

「あら、男性局員なら居るわよ？ ただ、物語に関わるような重要  
ポジションには居ないっただけで」

ロウ

「確かに。六課始動の時の集会では、結構男の人が居ましたもんね」

ハヤト

「FW陣に男を入れるー！ 出来れば俺と同類！」

ティアナ&スバル

「却下」

ハヤト

「何でだよ！」

ティアナ

「疲れる」

スバル

「色々大変そう」

ロウ

「六課が大混乱しますよね」

アイギス

「（\*。°。） つ【皆大変】」

ハヤト

「……orz」

ティアナ

「ハヤトが落ち込んだところで次のお便り。

第97管理外世界の聖域サンクチュアリにお住まいの、絶影2010春さん。

……聖闘士？

『六課入りと同時に改造手術を受けさせられる』

『キャラクターデザイン、作画が板垣恵介』』

『魔王様「あと一回、あと一回だけ…私はフェイトちゃんより多く変身できるの」』』

ハヤト

「……どれもこれも嫌すぎる」

スバル

「改造手術って、あたし元々改造されてるんだけど……」

ティアナ

「更に改造されるってことね。どうなるのかしら?」

ロウ

「やっぱり変形合体でしょう」

ハヤト

「ギンガとスバルで姉妹合体、ギンガスバルだな」

スバル

「そんな天元突破しそうな嫌だよ!」

ロウ

「ギンガさんは左手ドリルになってましたし、案外似合ってますね」

スバル

「嫌だつてば!」

ハヤト（無視）

「次は作画が板垣さん……か」

ロウ

「すごい事になりそうですね。」

スカリエツティシャオリが消力とか使ってきたらどうします?」

ティアナ

「フェイトさんのホームランの時に、身体をクルクル回して無効化するのね」

ハヤト

「全員が無駄に筋肉質なんだろうなあ……想像したらめっちゃキモイ」

スバル

「最後は……ねえ」

ティアナ

「フェイトさんが「私の戦闘力は53万です」って言う役なのね」

ハヤト

「勝てる気が欠片もしねえ」

ロウ

「てか、最終形態ってどんなのでしょうか?」

ハヤト

「そりゃやっぱアレだろ。メイ オーだろ」

スバル

「覚醒、熱血 敵陣突っ込む 覚醒 メイ オー 熱血 メイ オ  
ーですねわかります」

ロウ

「バランスブレイカーでしたね」

ティアナ

「ホント、アレは反則よね……って話がズレてる!」

ハヤト

「おっと。ついゲームの話なってしまった。  
ん、それじゃあ次でラストにしようか」

スバル

「最後のお便りは！

管理外世界0番世界在住の、RN：いろはさん。

『デバイス同士が結婚する』だって」

ハヤト

「デバイス同士ね。

だとしたら、レイジングハートさんとバルディッシュさんは確実に夫婦だな」

ティアナ

「長い付き合いっぱいしね。

きつとレイジングハートさんは凄くいい奥さんになると思うわ」

スバル

「それじゃあ、マツハキャリバーのお嬢さんはクロスミラージユかな？」

ロウ

「でも、デバイス同士が結婚して寿退社しちゃったら大変じゃないですか？」

ハヤト&ティアナ&スバル

「！！！！」

ハヤト

「そ、それは困るな」

ティアナ

「そうね……やっぱり、デバイス同士の結婚は無しでいきましょ」

スバル

「賛成！」

ハヤト

「よし。意見がまとまったところで今回の“こんなリリカルは嫌だ！”は終了。

もういっちょCM挟んでから、エンディングトークだ」

私達スカリエッツティ工房では、世界を滅ぼそうとする同士を募集しています。

我こそはと思うその君！ 今すぐ応募しよう！！

応募する人は - x x - まで！

スカリエッツティ

「君の力を待っているよ！」

フェイト

「させないよ!?!」

ハヤト

「さて、そろそろお別れの時間だな」

ティアナ

「1週間ぶりだから疲れたわね」

スバル

「そう？ あたしはすっごく楽しかったよ！」

ハヤト

「お前は体力馬鹿だもんな」

スバル

「失礼だよ！」

ティアナ

「それじゃあ最後にロウ君、出演作品の番宣お願いね」

ロウ

「わかりました……とはいえ、自身をもって宣伝する自信が無いと言いますか、宣伝し始めると半日は語ってしまいそうなので書き込まれた感想を發表しますね。

Mさん

『ロウ君の偽悪と優しさがよく解る、良いエピソードでした。何というか、ロウ君はある意味、魔導交渉人と言う方がピッタリくるのではと思ってしまいました』

Rさん

『アイギス、いいキャラですね。  
無口なりに色々と感情表現してて、凄く可愛かったです』

Tさん

『こういうひねくれた性格好きです。  
ロウのことは人工的なペルソナの認識なんですが、チヨイとAI寄り？ですかね？』

もう一人のRさん

『ロウ君とプレシアの会話がとても面白かったです。  
まるで取り調べのようで、しかも理にかなっていました。今後の展開が気になります』

とまあこのぐらいですよ。

やたらと設定が分かりにくいかもしれませんが、立ち寄っていた  
できれば幸いですね」

ハヤト

「策士、ロウ＝アイアスの戦い振りを見逃すな！」

スバル

「みんな、今すぐ映画館にダッシュ！」

ティアナ

「いや、映画館じゃないから……って、さっきからアイギスちゃんが静かね？」

アイギス

「（´-`-´-´）スピー」

ロウ

「あ、寝ちゃってますね」

スバル

「寝顔も可愛い」

ティアナ

「…………お、お…………」

ハヤト

「？」

ティアナ

「おっ持ち帰りいいいいいい……!!」

ハヤト

「落ち着け！」（スパーン!）

ティアナ

「痛っ!？」

ハヤト

「中の人ネタしてんじゃねえよ、つたく」

ティアナ

「ご、ごめん。取り乱したわ……」

スバル

「えと、じゃあティアがこれ以上暴走する前にお便りとゲストに関するお知らせだね。」

今回もあたしからお便りに関するお知らせを！

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーさんからの便りを待ってます！

“なぜなに とあ新”では、あたし達メインパーソナリティ3人や、ゲストさんに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーさんが凹んじゃったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いしますね。

あと、ハヤトが死にそうなのは……いつかな。ハヤトだし。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーさんが考えた“こん

なりりカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、あたし達3人の収録風景のイラストなども募集してま  
すね！

送って貰った場合、今回みたいにラジオで使ったりしますよ！  
リスナーの皆さん、どんどん送ってください！！」

ハヤト

「んじゃ、次に俺からゲストに関するお知らせを。

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによ  
る抽選になっています。

なので、応募した順番が後の作者さんのキャラクターが、次回ゲ  
ストに来る可能性もありますので、そこはご了承ください。

選ばれた作者さんには、放送の翌日あたりにこっちからメッセー  
ジでお知らせを送ります。

……つとまあ、こんな感じかね」

ティアナ

「それじゃ、これで“りりカル マジカル とあ新らじお”第9回  
は終わりね」

スバル

「ロウ君、アイギスちゃん。今日はありがとう！」

ロウ

「いえいえ。僕も楽しかったですよ。」

アイギスは寝ちゃいましたけど（苦笑）」

アイギス

「（´・`・´）スピー」

ティアナ

「……」（プルプル）」

ハヤト

「またティアナが暴走する前に終わるぞ。それじゃあ“とあ　らじ  
” 今回放送分はここまで！」

お相手はハヤト＝ロックウエルと」

スバル

「スバル＝ナカジマと！」

ティアナ

「竜宮レ……じゃなくてティアナ＝ランスターと」

ロウ

「ロウ＝アイアスと、使い魔のアイギスでした」

ハヤト&ティアナ&スバル&ロウ

「『『『バイバイ！』』』」

ティアナ

「おっ持ち帰りーーーーっ！！」

ハヤト

「だからやめろっの！！」

スバル

「ティア、落ち着いて！！」

ロウ

「中々興味深い……」

アイギス

「（、 - -、）スピー」

スバル

「この番組は！」

(狙) 唾憂流13

(甘) 菓子工房 白き梟

(悪) 秘密結社シヨツカー

(魔) 光子力研究所

(脳) 評議会観光

(狼) Hard Bank

(化) スカリエツテイ工房

(炎) 劣化の将

(勇) ゴルディオンハンマー

(謎) シャマル冷凍食品

の提供でお送りしました！」

ハヤト

「……もう駄目だろ、この提供会社」

## 第9回『別に倒してしまっても構わんのだろっ?』(後書き)

朧木さん、こんな感じでどうだったでしょう?

何か気に入らない点、修正点などございましたらご連絡ください。  
適時修正いたします。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いませ  
ん)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ!ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

## 宣伝

本編で前に言った『とあ新18禁版』を書き上げて投稿しました。  
最初の投稿はハヤト×ティアナです。

ノクターンノベルスで「リリカルなのは」と検索すれば、そのものズバリのタイトルで見つかると思います。

ヌルイですが性表現がありますので、18歳未満の方はご覧にならない様をお願い致します。

第10回『リハビリって大事だよね』

ハヤト

「いやー、なんかこのブースも久しぶりな気がすんなあ」

スバル

「実際久しぶりだもんね。えーっと……大体2週間ぶりかな？」

ティアナ

「ドラマの収録、最後が長引いたものね」

ハヤト

「ま、とりあえず暫くはドラマ収録もねーし、ラジオでのんびりやるっぜ」

ティアナ

「そうね。それじゃあ早速、最初のコーナーいってみましょうか」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『励まして！ スバルちゃん』」

ハヤト

「そんじゃま最初のお便り。」

六課屋根裏にお住まいのRN：ヤトーさん……って屋根裏！？

『最近勉強に全く手が付きません。』

人生かかっているんで必死にならなければいけない事は分かっているんですが、

付いて来ない結果に全部投げ出したくなります。

どうか、励ましてください。』」

スバル

「今は結果が出なくても、いつか必ず実を結ぶよ！

それに、貴方が頑張っているってことを見てくれてる人だっているからね！」

ティアナ

「はい、それじゃあ次のお便りです。

第132管理外世界 武練都市アバンデイスにお住まいの、RN：セツナ・フォーリングさん。

『なのはSTSの小説を書いているのですが、

最近誰をヒロインにしているかわからなくなりました……

当初はホームランさんを正ヒロインにしようかと考えていたのですが、

最近はロリッ子や毒物生産者や冥王などもいいと思ってしまう

……

パーソナリティの皆さん、一体誰をヒロインにすればいいのですか!？」

ハヤト

「え？ ハーレムでよくね？」

スバル

「ハヤトは黙ってて！ えーと、最初の予定通りの方がいいと思いますよ！」

ティアナ

「そうね。最初に考えてたヒロインの方が、物語として筋が通った展開になると思うし」

ハヤト

「ん。ではもう一通。

デンライナーにお住まいの、RN：吉田眼鏡さん……最初からクライマックスだぜ！」

『自分はPSPのカバーを持っていないのでPSPを巾着袋にしまっていたのですが……』

先日、それが仇になって洗濯機で洗濯してしまいましたorz

こんなバカ自分ですが、励まして下さい(´・`・´)『

スバル

「ど、どんまいです！ ハヤトのBSPでよければ、ひとつ送りますよ？」

ティアナ

「今回のお便りは以上ね」

スバル

「うー、久しぶりだから緊張したあ……」

ハヤト

「てかお前、勝手に人のBSPあげようとすんなよ!？」

スバル

「いーじゃん。ハヤト沢山持ってるし、ひとつづくらい」

ティアナ

「スバル、こっちと向こうじゃ規格が違うかもだし、送っても無駄かもよ？」

スバル

「あ、そっか」

ハヤト

「そーゆー話じゃねえっ!!」

ティアナ

「ま、そっちは置いていて。

セツナさんのお便り……ヒロインか、やっぱり大変よね。重要な  
選択だし」

スバル

「そうだね。とあ新はあたしとティアの2人で最初から固定してた  
みたいだけど」

ハヤト

「まあ、ハーレムじゃないなら、最初に決めてた人がヒロインで安  
定だよな。

最初に考えてたって事は、ストーリー自体の骨組みがそのヒロイ  
ンを主軸にしたモノになってるかもだし」

ティアナ

「下手に途中でヒロインを変えると、そのせいでストーリーがグダ  
グダになったりするかも知れないものね」

ハヤト

「そーゆーこつた」

スバル

「えと、最後はヤトーさんのお便りだけ……勉強、大変だよね」

ハヤト

「ああ。俺も訓練校時代は大変だった」

ティアナ

「アンタはゲームばっかやってたから当然でしょ。そのクセあたし達と成績は同じぐらいってどういう事よ」

ハヤト

「一夜漬けは得意です！」

ティアナ&スバル

「威張るな！！」

ハヤト

「でもアレだよな。結果が出ないと、努力ってする気失せるよなあ」

スバル

「だよな〜」

ティアナ

「でも、努力は人を裏切らないわ。ヤトーさん、頑張ったら頑張った分、それは貴方の将来の為になりますよ」

ハヤト

「おー。真面目っ子が真面目な事言っつてやがる」

ティアナ

「いや、真面目なお使いなんだから、真面目に返すのは当然でしょ」

ハヤト

「どんな時でも笑いを忘れずに！それが俺！！」

ティアナ

「自慢にならないわよ……はあ」

スバル

「ま、まあまあ。ハヤトなんだし、仕方ないよティア」

ティアナ

「そうね……ハヤトだもんね」

ハヤト

「うぐつ！？ と、とりあえず『励まして！ スバルちゃん』はここまで！

2週間ぶりの『とあ新らじお』、スタートしようぜ！」

スバル

「誤魔化した……」

ティアナ

「誤魔化したわね」

ハヤト

「うるせえ！ とにかく！ 第10回『リリカルマジカル』とあ新らじお』！！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートです！！」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第10回『リハビリって大事だよね』

ハヤト

「とうわけで始まりました、2週間ぶりのとあ新らじお。  
メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルです」

ティアナ

「久しぶりよね。同じくメインパーソナリティの、ティアナ＝ラン  
スターです」

スバル

「本当に久しぶりだよねえ。何だか凄く懐かしい気分だよ。  
あ、同じくメインパーソナリティの、スバル＝ナカジマです！」

ティアナ

「今回は2週間ぶりってことで、他の作者さんの作品からのゲスト  
は呼んでないのよね？」

ハヤト

「ああ。でも、流石にゲスト無しってのは寂しいんで、特別ゲスト

を呼んであるぞ」

スバル

「特別ゲスト？」

ハヤト

「それではご紹介しよう！

魔法少女リリカルなのは初代ラスボス！ 実は優しいお母さん！  
俺達の事務所の社長、大女優プレシア！！ テスタロツサさん！！

そしてその愛娘、アリシア！！ テスタロツサ&フェイト！！ テスタロツサの3人だ！！」

プレシア

「あら、意外とまともな紹介ね？ ハヤト」

アリシア

「こんにちは〜」

フェイト

「こ、こんにちは」

ティアナ

「じゃ、社長！？」

スバル

「アリシアさんに、フェイトさんも！！」

ハヤト

「あれ？ お前ら聞いてなかった？」

スバル

「聞いてないよお……」

ティアナ

「社長が来るって知ってたら、最初のトークとかもって頑張ったのに」

プレシア

「気にする事はないわ。2人とも十分良かったわよ？」

アリシア

「そうそう。凄く面白かったよ」

ティアナ&スバル

「あ、ありがとうございます！」

ハヤト

「あれ？俺は？」

プレシア

「貴方はもっと頑張りなさい」

アリシア

「お馬鹿ネタばかりだと、そろそろ飽きられるよ？」

ハヤト

「(´・`・´)」

フェイト

「か、母さん。アリシアも……ハヤトだって頑張ってるんだから、  
そういう事言っちゃダメだよ」

ハヤト

「フエ、フエイトさん！」

プレシア

「ダメよフエイト。この子は優しくするとつけ上がるんだから」

ティアナ

「そうですねフエイトさん。ハヤトだからいいんです」

フエイト

「え、ええ……と」

ハヤト

「(´・`・´)」

スバル

「えと、それじゃあそろそろ最初のコーナー行ってもいいですか？」

プレシア

「構わないわ。私達は今回ゲストですもの、貴女達のタイミングで  
進めて構わないわよ」

スバル

「りよ、了解です！ それでは！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……なぜなに！ とあ新」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーの皆さんから寄せられた質問に、私達が答えていきます」

アリシア

「あれ？ 『ゲストに5つの質問』はいいの？」

ハヤト

「あ、アレは他の作者さんの作品からのゲスト限定なんですよ。なのでアリシアさん達の時は、普通にコーナーを進めていく予定です」

アリシア

「えー。せっかく色々考えてきたのにー」

スバル

「う、ごめんなさい」

プレシア

「いいのよスバル。これは貴女達の番組なのだから、貴女達の思うようになさい。

アリシアも、そういう言い方をしては駄目よ？」

アリシア

「はい。でも残念だよなー、フェイト？」

フェイト

「え？ う、うん」

プレシア

「もう、2人ともいい大人なのに仕方ないわねえ」

ハヤト

「……なんとなく良い母親。プレシアさん、俺を旦那にする気はありませんか!？」

プレシア

「6千回ほど生まれ変わって出直してきなさい」

ハヤト

「(´・`・´) < なんてやねーん」

ティアナ

「えーと、それじゃ始めます。」

「まずは最初のお便り……ってコレ『ふつおた』コーナー宛てじゃない」

【質問だから、まあこっちでいいかなって思いました】

ティアナ

「い、いい加減な……。まあいいわ。」

機動六課女子寮にお住まいの、RN：キャロルルシエさん…  
…ってキャロ！？

『エリオ君とけんかしちゃって仲直りしたいのに気持ちを伝えられませんか。』

と言つか、やっぱり男の子って胸の大きな人が好きなのでしようか？

スバルさん、ティアナさん、ゲストさん。胸を大きくするにはどうしたらいいですか？』

スバル

「……キャロも大変だね」

アリシア

「それで、どうなの？ この場で唯一の男の子」

ハヤト

「え？ 大きく無い胸って胸じゃないでしょ？」

プレシア

「私や娘達の胸を凝視しながら言うのをやめなさい。……もぎ取るわよ？」

ハヤト

「どこを！？」

ティアナ

「ま、まあまあ！ 社長、落ち着いて！」

スバル

「でも、社長もアリシアさんもフェイトさんも、凄く大きいですよね。」

何か特別なこと、してるんですか？」

アリシア

「うーん？ 特にしてないと思うなあ。フェイトは？」

フェイト

「わ、私も特には……」

ハヤト

「つまり遺伝ということですね！」

プレシア

「サンダースマッシャー」

ハヤト

「うべらばっつー……！」

スバル

「ああっ！ ハヤトが撃ち抜かれて吹っ飛んだ!？」

ティアナ

「……なんかこーゆーやり取りも久しぶりね」

プレシア

「毎回こんなやり取りをしているの？」

ハヤトには、番組が終わった後でじっくりとお話が必要みたいね」

フエイト

「母さん？ あんまり過激な事は……」

プレシア

「大丈夫よフエイト。ちょっと6時間ほど社長室で正座させるだけだから」

フエイト

「あ、それくらいなら……」

アリシア

「ただし！ 下にはギザギザの石を置いて、膝の上には1時間ごとに1個ずつ石を置いていくけどね！」

ティアナ&スバル&フエイト

「……それ拷問！ それ拷問！！……」

プレシア

「ハヤトなら大丈夫でしょ？」

アリシア

「そうそう」

ティアナ

「いや……確かにハヤトなら、大丈夫だとは思いますが……」

プレシア

「なら問題は無いわね。それじゃあ次のお便りよ。クラナガンにお住まいのRN・ザンバーさん」

ティアナ&スバル

（（勝手に進められた！？））

プレシア

「ええと、何々？」

『ハヤトたちオリキャラ+スバル、ティアナの現在の戦闘力を某龍球風に表すとどうなりますか？』

それと、ハヤトが勝てる二次元のキャラクター（主人公に限る）はいますか？』」

アリシア

「うーん。龍球風って言うと、やっぱり戦闘力かな？」

スバル

「そうだと思いますけど……これってあたし達じゃ答えられないよ  
うな？」

ティアナ

「そうね。なので、今日は更に特別ゲストとして、とあ新の作者であるラモン氏に、特別にお越し頂きました」

作者

【どーもー】

フェイト

「い、いきなり出てきた！？」

作者

【作者ですから】

フェイト

「り、理由になってないですよ!？」

作者

【作者ですから。一般局員の戦闘力を1000とし、コレを基準として表します。

ハヤト …… 1800

スバル …… 3100

ティアナ …… 2800

ディレト …… 10000

ハヅキ …… 7500

なのは …… 9000

フェイト …… 9000

はやて …… 9500

とまあ、こんな感じですかね】

ティアナ

「ハヅキさん、意外と低いのね。チートなのに」

作者

【ハヅキは魔力でどうこうじゃなくて、レアスキルと技術で闘う人だから】

アリシア

「へ〜。でも、ディレトちゃんは本当にチートなんだねえ。

なのはやフェイト、はやてよりも強いんだ」

作者

【まあ、今回は純粹な魔力値だけで判断したからね】

プレシア

「……………めないわ」

スバル

「？ 社長？」

フェイト

「母さん？」

プレシア

「こんな結果認めないわ！ うちのフェイトが最強で最高に決まってるじゃない！」

ティアナ

「ちよっ！？ お、落ち着いてください社長！ ブースが壊れますからー！！」

プレシア

「修正なさい！ フェイトが最強になるように！ 今すぐ！」

フェイト

「か、母さん落ち着いて！ 私は別に気にしてないから！」

プレシア

「修正なさー……………いつっっっ……………！」

「母親暴走中。暫くお待ちください」

フェイト

「落ち着いた？ 母さん」

プレシア

「ええ。ごめんなさい、ちょっと取り乱したわ」

ティアナ&スバル

（あの暴走を“ちょっと”で済ました！？）

アリシア

「あはは。えーと、それで作者さん。

ハヤト君が勝てる漫画やゲームの主人公って、誰か居るのかな？」

作者

【うーん……ドラクエのLV1主人公ぐらい？】

ハヤト

「おかしくね！？ 俺魔力持ち主人公なのにおかしくね！？」

アリシア

「あ、復活した」

ティアナ

「相変わらず不死身ね……」

フェイト

「母さん、割と本気で攻撃したのに」

スバル

「それがハヤトクオリティですよ、フェイトさん」

プレシア

「次はもう少し本気で撃たなきゃ駄目ね」

ハヤト

「そんな事はどうでもいい！ それよりも作者！

俺だって勝てる奴はいるだろう！？ ほら、某そげぶの人とか！」

作者

【あー……うん、まあ上条さんならギリギリ。

お前は魔法無しでも、一応管理局仕込みの体術とかあるしな】

ハヤト

「だよな、だよな！？」

作者

【でも主人公補正で負けると思っよ？】

ハヤト

「おかしくね！？ 俺も主人公なのにおかしくね！？」

プレシア



「ひいつ！？ け、消し炭なのに喋った！？」

アリシア

「おー。ラジオでは聞いてたけど、ホントに喋れるんだねえ。凄いや、ハヤト君」

ハヤト（消し炭）

「どもども」

ティアナ

「えーと……と、とにかくそんな感じですよ。ザンバーさん。作者さんもうもありがとうございました」

作者

【はいはい。それじゃねー】

アリシア

「それじゃあ次のなぜなに、いっくよー！」

ティアナ&スバル

（（な、なんか、ラジオを乗っ取られてる気がする……）（

アリシア

「次のなぜなににはー、山形県から逃亡中のRN……どこかの弓兵さん！……何か悪いことしたのかな？」

『ハヤトのデバイスであるブレイブハートですが、登録されている魔法までレイジングハート・エクセリオンと同じなのでしょうか。』

魔力量さえあれば、S・L・Bを撃てる……『的な』だって。

「どうなの？ ハヤト君」

ハヤト（消し炭）

「撃てますよ。一発撃つたら魔力切れで昏倒しますけど」

スバル

「いいな。なのはさんとお揃い」

ティアナ

「スバルは戦闘スタイルが違うんだからしょうがないでしょ？  
ま、あたしも教えて貰ってるから、撃てるんだけどね」

スバル

「うっ、ズルイよ！ 2人ばかりお揃いで！」

ハヤト（消し炭）

「いいじゃん、一応ディバインバスター（偽）はあるんだし」

スバル

「そうだけどさあ」

プレシア

「じゃあ解決したところで次のなせなに、行くわよ。  
はい、このお便りはフェイトが読みなさい」

フェイト

「あ、うん」

ティアナ

(……本気で乗っ取られ始めてるわね)

スバル

(ど、どうしよう……)

フェイト

「えっと、次のなぜなにです。」

第97管理外世界、風都の探偵事務所にお住まいのRN：神崎はやてさん。

『ハヤト君の好きな食べ物は何ですか？ 今度ウチのリオスに作らせて送ります』

今日はハヤトに関する質問ばかりだね」

ハヤト(消し炭)

「俺の時代が来たってことですかね？」

ティアナ&スバル&プレシア&アリシア

「……それは無い」「」「」

ハヤト(消し炭)

「(……)」

フェイト

「あ、あはは……えと、それでハヤト。ハヤトが好きな食べ物って？」

ハヤト(消し炭)

「うーん、強いて言うなら辛いもの全般ですかね。激辛カレーとか好きかも」

プレシア

「刺激物ばかり食べているから、馬鹿なのね」

アリシア

「脳細胞が死滅してるんだねー」

ハヤト（消し炭）

「アンタら酷いなライ！？ ティアナもスバルも、何か言ってやれ！」

ティアナ

「……………まあ」

スバル

「事実だし？」

ハヤト（消し炭）

「くそっ……………（泣）」

フェイト

「流石にハヤトが可哀想だよ、皆」

ハヤト（消し炭）

「フェイトさんの優しさが身に染みるぜ……………」

アリシア

「んー、フェイトがそう言うなら仕方ないかな」

プレシア

「そうね。今回はこれで勘弁してあげるわ」

ハヤト（再生中）

「フェイトさんは、本当にこの2人と血が繋がってるんですか？  
性格的に正反対なんですわが」

プレシア

「当然よ。アリシアもフェイトも、私の自慢の娘だわ」

アリシア

「フェイトは私の自慢の妹だよ！」

フェイト

「……………／／／」

ハヤト（再生中）

「はいはい。後は家に帰ってからやってください。

「そんでは今回の『なぜなに！』とあ新』はここまで。1111でCM  
挟みますぜー」

シャーリー

「エコカーの減税って、どれくらい安くなるんですか？」

ハヤト

「車を購入されると」

エリオ

「その説明は私から」

ハヤト

「ごども店長！」

エリオ

「もっと分かりやすく説明しないと」

ハヤト

「すみません」

エリオ

「簡潔に申しますと。」

車によっては、アイスクャンディー千本買えるぐらい減税になるんです！」

シャーリー

「……？」

エリオ

「これから目線で、是非エコカーに！」

シャーリー

「アイスクャンディー、好きなの？」

エリオ

「はい。3度の飯より」

フェイト

「こら！ またグリンピース残して！」

キャロ

「もうアイスクャンディー買ってあげないって」

エリオ

「そんなぁ……」

ハヤト&シャーリー

「……」

これから目線で見に行こう！  
YOYOTAのお店へ！

スカリエッティ

『この惑星の住人は、古来から伝わる“田植え”という方法で、食物を作り出している。』

極めて重労働だ。ただ、この惑星の農村は

沁みる』

士郎

「……お前、跡継ぎにならんか？」

なのは

「……！」

スカリエツティ

「……」

士郎

「……」

スカリエツティ（脳内）

『跡継ぎ>>>>調査』

このろくでもない、すばらしき世界。

缶コーヒーの、BSS。

アリシア&フェイト

「こたえて！ プレシアさん」

アリシア

「このコーナーでは、リスナーから送られてきた台詞に、お母さんが答えていくよ！」

プレシア

「ええ！？ ちょ、聞いてないわよ！？」

アリシア

「うん。だって、今さっき決めたんだもん」

ティアナ

「つ、ついにコーナーも取られた！？」

スバル

「ラジオ完全に乗っ取られてるよ！？」

ハヤト

「アリシアさん……伊達にうちの事務所のNO.1じゃないな」

アリシア

「それじゃあサクサクいくよー」

プレシア

「ちょ、ちょっと待ってアリシア！ こ、心の準備がまだ……」

フェイト

「母さん、諦めた方がいいと思うよ？」

アリシアがああなったら、どうしようも無いから……」

プレシア

「そ、そうね……うう」

アリシア

「はい。じゃあ最初の台詞！ ハヤト君、読んで」

ハヤト

「え？ あ、はい。」

えーと最初のお便りは第97管理外世界、光写真館にお住まいのRN：やつぱ巨乳は浪漫だよさん。

巨乳には、男の夢と希望と浪漫が詰まってるんだよ！

『どうしてそんなに可愛いんだよ、お前は』

プレシア

「可愛いなんて言われて、喜ぶような歳じゃないわよ。

……でも、ありがとう」

アリシア

「サクサク進むよ！ 次のお便りはティアナ！」

ティアナ

「は、はい！」

次のお便りは、エンドレスフロンティア、バレリアネア塔在住の、  
プワゾンクロウさん。

『今日は、格別綺麗だな』」

プレシア

「あら？ こんなおばさんにお世辞を言っても、何も出ないわよ？」

464

アリシア

「次！ スバル！」

スバル

「ひゃい！」

えと、えと……スカリエツティラボ内の生体ポッドにお住まいの、  
検体番号10032さん！

『好きだ！他の誰でもない、お前が好きなんだ！』」

プレシア

「……………何言ってるのよ、馬鹿／＼」

アリシア

「最後は私！

お便りは、『ツンデレ！ ティアナちゃん』要員の！

第97管理外世界、風都の探偵事務所に住む、神崎はやてさん！！

『行きたくないとか言っついて、なんで着いて来るわけ？』」

プレシア

「私がどこに行こうと、私の勝手でしょう？

別に、貴方に着いていつている訳じゃないのよ？」

アリシア

「ふい〜……………うん、満足！」（ツヤテカ）

プレシア

「……………これ、思っていた以上に恥ずかしいのね」（げっそり）

フェイト

「か、母さん。大丈夫？」

プレシア

「ええ、何とかね」

ティアナ

「……何なの、この妙な敗北感」

ハヤト

「まあ、プレシア社長と比べても仕方ないだろ。

引退したとはいえ、社長って一時はミッドチルダ芸能界最高って  
言われた大女優だぜ？」

ティアナ

「そうよねえ。でも、やっぱりちょっと悔しいわ」

スバル

「ティアナならいつか追い越せるよ！ ガンバ！」

ティアナ

「はいはい」

アリシア

「よしっ！ 私が満足したから、次のコーナーいつてみよー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

（（（もう完全に乗っ取られてるよ、このラジオ……）（）（）

アリシア&フェイト

「「こんなリリカルは嫌だ!!」」

フェイト

「えと、このコーナーではリスナーから寄せられた『こんなリリカルは嫌だ!』というネタに、私達でコメントしていきます」

アリシア

「それじゃあ行くよー!

最初は、時の庭園の最下層にお住まいの、RN：アルフォンス様のパートナーさん。

『機動六課内全員が女、もしくは男』

『六課宿舎が小さい。(個人ルームなしの4人部屋)』

ハヤト

「……全員って事は、俺も?」

ティアナ

「でしょうね。でもまあ、それだとある意味平和よね」

スバル

「だね。着替えの時とかに、覗かれてるかも……って心配する必

「要ないし」

アリシア

「まあ、元々女性オンリーみたいな感じだしね。六課って」

ハヤト

「んで次が『六課隊舎が小さい』か」

ティアナ

「4人部屋だと、FWメンバーは1人余るわね」

スバル

「ハヤトが廊下で寝ればいいんじゃないかな？」

プレシア

「それが妥当でしょうね」

ハヤト

「廊下！？ ロウラン准陸尉とかと同じ部屋ですらなく！？」

ティアナ&スバル&プレシア&アリシア

「『当然』」「『」

ハヤト

「フエ、フエイトさん！」

フエイト

「ま、まあ……ハヤトだし、仕方ないのかな？」

ハヤト

「神は死んだ！」

アリシア

「ハヤト君が泣いたところで、次のお便り！」

次も同じく、時の庭園の最下層にお住まいのRN・夏菜様のパートナーさん。

『ゼストとレジアスのくんずぼぐれず』

『スケバンのフェイトさん』

プレシア

「ゼスト×レジアスかしら？」

ティアナ

「いや、ここはレジアス×ゼストでしょう」

スバル

「えー。ゼストさんが攻めだよ」

アリシア

「いやいや、ああいう強面は意外と受けだって」

フェイト

「私は……ゼスト×レジアス派かな？」

ハヤト

「腐女子自重……っつっ!!!」

何普通に公共の電波でカップリング談義してんだよ!？」

プレシア

「あら、「めんなさい」

アリシア

「まあ少なくとも、女性陣的には……」

女性陣

「「「「「あると思います!」「」「」

ハヤト

「ねーよ!」

アリシア

「次は『スケバンなフェイト』かあ……」

ハヤト

「無視!?!」

アリシア

「フェイトがグレたら、お母さんが泣いちゃうよね」

フェイト

「う、うん。だから、スケバンになんてならないよ?」

プレシア

「フェイト……本当に良い子に育って……」(感涙)

ティアナ

「あの、それだとこのコーナーが成り立たないんですが」

アリシア

「んー？　じゃあフェイト、ちょっとこの台詞言ってみて？」

フェイト

「え？　うん……えーと？」

『アンタら、舐めたらアカンぜよー！』

スバル

「……違和感が凄いです、フェイトさん」

フェイト

「あう……」

ハヤト

「まあ、無かったことに」

フェイト

「……うん、お願い」

ハヤト

「それじゃあ『こんなリリカルは嫌だ！』はここまで。

CMを挟んでから、エンディングトークです！」



ハヤト

「とゆう訳で、エンディングトークのお時間です」

アリシア

「今日は楽しかった」

ティアナ

「そりゃまあ、あれだけラジオを乗っ取れば、面白いとは思いますが……」

フェイト

「ご、ごめんねハヤト、ティアナ、スバル」

スバル

「そんな、フェイトさんは悪くないですよ」

ハヤト

「悪いのは、貴女のお姉さんとお母さんです」

プレシア

「ハヤト。何か言ったかしら？」

ハヤト

「サー！ 言うておりません！ サー！」

プレシア

「よろしい」

スバル

「本当にハヤトは社長に弱いなあ」

ティアナ

「まあ、分からないでもないけどね」

ハヤト

「さて。それじゃ番宣……って、何かあります？ 社長」

プレシア

「そうね……ああそうそう。来週末、アリシアとフェイトが組んだユニット『NANA MIZUKI』のアルバムが出るわ」

ティアナ

「あ、御二人って歌手としてもデビューしてましたもんね」

アリシア

「そのとおり！」

今回のアルバムは、今まで出したシングルCD12枚分+アルバムオリジナル曲1曲を入れた、全13曲構成だよ！」

フェイト

「もしよろしければ、買ってくださいね」

アリシア

「てゆーか、1人10枚は買ってね！」

ハヤト

「いや、10枚は流石に……」。

まーいいか。それじゃあ、ラストにお便りとゲストに関するお知らせを。

まずは俺からお便りに関するお知らせだ。

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーさんからの便りを待ってるぜ。

“なぜなにとあ新”では、俺達メインパーソナリティ3人や、ゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んだエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ティアナにツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、俺にチャレンジして欲しいお題を。ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定で頼むぜ。

あと、俺が死にそうなのは勘弁してくれ。復活できるとはいえ、痛いのは嫌だ。

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、普通のお便りを。

その他に、俺達3人のイラストなども募集してるぞ！

送って貰った場合、ラジオで使ったりするからな。リスナーの皆、  
どんどん送ってくれよ!!」

スバル

「それじゃ」

アリシア

「それじゃあ私からはゲストに関するお知らせを！」

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になっています。

なので、応募した順番が後の作者さんのキャラクターが次回ゲストに来る可能性もあるけど、そこは許してね！

選ばれた作者さんには、放送の翌日あたりにこっちからメッセージでお知らせを送るよ!!」

スバル

「うう……最後の最後まで……」

ティアナ

「今日はもう諦めましょう。

それじゃあ、これで“リリカル マジカル とあ新らじお” 第1  
0回は終わりです!!」

スバル

「プレシア社長、アリシアさん、フェイトさん、ありがとうござい  
ました！」

プレシア

「いいえ。私達も楽しませて貰ったわ」

フェイト

「迷惑かけてごめんね？」

アリシア

「うーん、次回も来ようかな？ 楽しいし」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『勘弁してください』」

ハヤト

「つてな訳で今回はこれまで！

お相手はハヤト『ロツクウエルと』

ティアナ

「ティアナ『ランスターと』

スバル

「スバル『ナカジマと』

プレシア

「プレシア『テストロツサと』

アリシア

「アリシア『テストロツサと』

フェイト

「フェイト『テストロツサでした』

ハヤト&ティアナ&スバル&プレシア&アリシア&フェイト

「「「「「バイバイ！」」「」「」

アリシア

「この番組は、」

(電) イノベーター

(刹) 俺がガンダムだ！

(狙) 狙い撃つぜ！

(重) 楽しいよなあ、アレルヤア！！

(女) 万死に値する！

(乙女) 今の私は、阿修羅をも凌駕する存在だ！

の提供(?)でお送りしました」

フェイト

「……どう考えても、これって00的な台詞集だよな?」

アリシア

「細かい事言いつつ無し無し」



## 第10回『リハビリって大事だよね』（後書き）

リハビリなんで、今回はちょっと大人しめでしたね。  
多分次回放送までは、リハビリになると思いますです。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

- ・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw
- ・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いま

せん。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合も  
あります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第11回 『まだ本調子じゃないなあ』 (前書き)

1日遅れの更新で申し訳ないです。

第11回 『まだ本調子じゃないなあ』

ハヤト

「いやあ、先週は大変だったなあ」

ティアナ

「そうねえ。まさか社長が来るなんて思わなかったわ」

スバル

「緊張したよ」

ハヤト

「ま、今週も身内ゲストだけど、連続で社長ってことは無いだろうから安心だな」

ティアナ

「だといいけど……それじゃとりあえず、恒例の最初のコーナーいくわよ」

ハヤト

「おうよ」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「励まして！ スバルちゃん」」」

ハヤト

「ほいではまず最初のお便り。

地球の埼玉の温泉亀が生息する女子寮近くにお住まいの、RN：  
彼女いない歴〃年齢な華燐さん。

ラッキースケベの居る女子寮ですわかります。

『つい最近僕はバイト先でFF（ファーストフードの事。ロー  
ンだからあげくんとか）

を入れ忘れて、かなりお客様に怒られてしまいました。はげま  
してください！』」

スバル

「ミスしたっていいじゃない！ 人間だもの！」

ハヤト

「みつを乙」

ティアナ

「それでは続いております。

機動六課デバイスルームにお住まいの、RN：レクイエム・エテ  
ルナムさん。

『私のマスターは、私を使って任務に向ったびに大怪我を追うか意識不明になります。』

私は、このままマスターのデバイスを続けてもいいのでしょうか？』

ブレイブハート

《マスターをフォローしてこそこのデバイスです。》

それは貴方にしか出来ない役目なのですから、きっちりと役目を果たしましょう》

スバル

「え、ちよっ！ ブレイブハート!？」

ティアナ

「駄目よブレイブハート。スバルのコーナーなんだから」

ブレイブハート

《申し訳ありません。ですが、同じデバイスからの相談でしたので》

ハヤト

「だからってコーナー取っちゃ駄目だろ。ホラ、スバル泣いちゃってるじゃないか」

スバル

「な、泣いてないよ!？」

クロスハート

《 そうですよお姉様。スバルさんが振ってくれた時に喋らないと  
》

ブレイブハート

《 それもそうですね。スバルさん、申し訳ありません 》

スバル

「いいよいいよ。やっぱり同じデバイスの方が、相談に乗ってもらったほうもいいだろうしね」

ブレイブハート

《 恐縮です 》

ハヤト

「ん。それではおさらいといこう」

スバル

「最初は華憐さんだね」

ハヤト

「年齢〓彼女いない暦 m9 (^ ^) プギヤー」

ティアナ

「やめなさい、失礼でしょ!」 (墮淫酢隷腐)

ハヤト

「ギュルンギュルン言ってる!？」

スバル

「あ、ハヤトが天元突破された。

まあいつもの事だから放っておこうかな。でも、ん〜……アルバイトかあ。

あたしはした事無いなあ、そう言えば」

ティアナ

「あたしはあるわよ？ ファーストフードやコンビニも何回か」

スバル

「そなんだ。でも、ティアってこういう失敗したことある？」

ティアナ

「そりゃあね。でも、失敗は成功の母、失敗しなくちゃ成功しないですよ。華憐さん」

スバル

「それで次は……えっと、レクイエムさん」

ティアナ

「デバイスとしては辛いわよね。マスターを手助けできないって言うのは」

ハヤト

「なあ。でもこれってマスターを守れないのが悔しいから言ってるのか？

俺的には『このままだと自分の身も危ないから』じゃないかと思うんだが……」

ティアナ&スバル

「「……………あ」」

ハヤト

「どうよ?」

ティアナ

「……………と、とにかく今回の『励まして! スバルちゃん』はここま  
で!」

スバル

「そうだね! それじゃあ『リリカルマジカルとあ新らじお』  
第11回!」

ティアナ&スバル

「「スタートです!」」

ハヤト

「……………誤魔化すなよ」

ティアナ&スバル

「「五月蠅い!」」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第11回『まだ本調子じゃないなあ』

ハヤト

「さてさて始まりました、とあ新らじお。

メインパーソナリティのハヤトはロックウエルです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバルはナカジマです！」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティのティアナはランスターです」

ハヤト

「そんな訳で始まりました」とあ新らじお『第11回。  
今回もまあ、リハビリみたいなモンですな」

スバル

「だねー。作者さん、燃え尽き症候群でイマイチ筆が進んでないみたいだし」

ティアナ

「困ったわね。あたし達にもスケジュールがあるのに」

ハヤト

「だよなあ。俺も早いトコ収録の日時とか教えて貰わないと……っ  
てそれは置いといて。」

「んでは早速今回のゲストを呼ぶとしようぜ」

ティアナ

「そうね。今回のゲストは、またまた身内から。」

「次世代バカツプルの竜騎士&竜召喚師！ エリオ、キャラと」

スバル

「普段は無口！ なのにいつの間にもやらギャグキャラに、のルーち  
やん！」

「3人揃ってvividバーションでご登場です……！」

ルーテシア

「呼ばれて飛び出て私、参上！」

キャラ

「ば、バカツプルって何ですかあっ！」

エリオ

「そうですよ！」

ハヤト

「だって……なあ？」

ルーテシア

「だよねー」

キャラ

「な、何でお兄ちゃんとルーちゃんだけで納得してるの!？」

ルーテシア

「まあまあ。それじゃハヤト兄にい、最初のコーナーいつてみよー!」

ハヤト

「応ともよ! それじゃあ最初のコーナー!」

ハヤト&ティアナ&スバル&ルーテシア

「コッコッこんなりリカルは嫌だ!」「」「」

エリオ&キヤロ

( (強引にスルーされたー! ) ) (ガビビーン

ハヤト

「さてさて、それじゃあ早速最初のお便りいくぜー。

ミッドチルダ北西部にお住まいの、RN：地下勢力と酔拳で闘っているはさん。

『会う人全員がディレト』

『六課全員が借金まみれで全員力〇ジ状態に』

ティアナ

「ディレトばかりって……あたし達も嫌だけど、ハヤトとかもう致命傷じゃない？」

ハヤト

「毎日ヤンデレに追われるとかマジ嫌なんですけど」

ルーテシア

「あはは〜。ハヤト兄、ディレトちゃんにはモツテモテだもんね」

スバル

「羨ましくはないけどねー」

ハヤト

「ホントだよ……あの会う人全部ディレトだと思うだけで気が滅入る……」

キヤロ

「あの……」

エリオ

「えーと……」

ハヤト

「さて、次は『六課全員が イジ状態か』」

エリオ&キヤロ

（（また流された！？））

ハヤト

「きつとこんな感じなんだろうな……」

く以下、ハヤトの妄想く

ハヤト

「あちゃくく。なんだよ……………、こいつら……………」。

どいつもこいつもマイナスのオーラに満ちてやがんの。

しかし まあ…………… 考えてみりゃ…………… うんざりするほど借金がかえ  
て返済不能。

そういうダメ人間の集まりだもんな 無理もねえか……………」

はやて

「アンタ達は、負け続けてきたから、貧窮し、ウジウジと、

人生の底辺を、這って、這って、這って、這って、這っているんや……………」。

ゴキブリのように……………」

なのは

「ティアナ……………。泣くな……………、見苦しい……………」。

……………それから……………あまり私を舐めるな……………<sup>魔王</sup>……………っ！

フェイト

「わかってくれ……………」。

わかって……………死んでくれ……………。エリオ、キャロ……………」

スバル

「勝たなきゃ駄目だ……勝たなきゃ悲惨がむしろ当たり前。  
勝たなきゃ誰かの養分……。それは六課も外界も変わらない……  
！」

ティアナ

「さえずるなっ……！ アンタらにその資格はないっ……！  
さえずらずただ黙って出せっ……！」

エリオ

「ふ……ふざけるなよ……！ 戦争だろうが……。  
疑っているうちはまだしも、それを口にしたら……戦争だろうが  
っ……！」

キャロ

「金もいらないうっ……！ 何もいらないうっ……！  
40まで借金でもいい……ただ生きたいっ……！」

シグナム

「大詰めで弱い人間は信用できぬ……！  
つまりそれは管理はできても勝負のできぬ男……。  
平常時の仕事は無難にこなしても、緊急時にはクソの役にも立た  
ぬというっ……！」

ヴィータ

「おまえのように頭で非情ぶってる奴ほど、実は甘ちゃん……。いいカモだ……」

シヤマル

「質問すれば答えが返ってくるのが当たり前か……？  
バカがっ！ とんでもない誤解だっ！  
世間というものは、とどのつまり……肝心なことは何一つ答えたりしない……っ！」

スカリエッティ

「命はもつと粗末に扱うべきなのだ……！  
命は、生命は……丁寧に扱いすぎると澱み腐る……！」

カリム

「勘違いするなっ……ガキめらっ……！！  
世間の大人どもが本当の事を言わないなら私が言ってるっ！  
金は命より重い……！」

〈妄想終わり〉

ハヤト

「とまあ、こんな感じか」

キャロ

「こんな殺伐とした六課、嫌ですよ……」

エリオ

「というか、僕とキャロ死ぬの!？」

ティアナ

「というか、三点リーダーが多すぎよ!」

スバル

「ティア、それはしょうがないよ。だってカイだし」

ティアナ

「えええ……」

ルーテシア

「てゆうかハヤト兄!　なんで私はいない訳!？」

ハヤト

「めんどい」

ルーテシア

「ひどっ!？　ハヤト兄ひどっ!？」

ハヤト

「っつかさ、騎士カリムが全く違和感感じないのはどういう事だ」

ティアナ

「ああ、確かに。何か普通に言いそうよね」

スバル

「なのはさんも結構違和感ないね」

エリオ

「さつきから僕とキャロがスルーされ過ぎている!」

ルーテシア

「私の扱いも適当すぎっ! ゲストなんだよ!」

ハヤト

「やかましいチビっ子3人衆! Vivid板でちょっとでかくなつたからっていい気になるな!」

エリオ&キャロ&ルーテシア

「!」  
「!」  
「!」

ハヤト

「大体だな、お前らはVividでも14歳。俺達より年下なんだぞ。」

「貴様ら、もっと敬意を示せ、敬意を!」

ルーテシア

「ハヤト兄相手に?」

エリオ

「兄さん相手に?」

キャロ

「お兄ちゃん相手に?」

ティアナ&スバル

「ハヤト相手に？」

ハヤト

「（・・・）<やだ……なにこれ、どういふことなの……？」

ルーテシア

「はいはいそれでは次のお便り！」

第132管理外世界、武練都市アバンディスのRN：セツナ・フ  
オーリングさん！

『ティアナがデレデレ、またはヤンデレ』

『キャラ、エリオが酷い地方訛り。後守護騎士達がずっと古代ベ  
ルカ訛り』

スバル

「？ ティアってハヤトの前だとデレデレじゃない？」

キャラ

「そうですね。ドラマ以外の場所だと、ずっとデレデレですよね」

ルーテシア

「恋する乙女って顔だよねえ」

ティアナ

「な、はっ……そ、そんなこと無いわよ……！」

スバル

「嘘だあ。毎日ハヤトから貰った時計眺めてニコニコしてるじゃん？」（ニヤニヤ）

ルーテシア

「ハヤト兄から電話くると、収録中でも飛んでいくよねえ？」（ニヤニヤ）

ティアナ

「~~~~っ!!」

ハヤト

「……エリオ見ておけ。アレが世間が言う『乙女空間』。  
俺達男が立ち入れぬ絶対不可侵のフィールドだ。その強固さは、  
かのATフィールドと同等以上と聞く」

エリオ

「また口からでまかせでしょ、兄さん」

ハヤト

「ちつ。14歳になったら急に生意気になったな」

エリオ

「そりゃあ4年間も兄さんの弟分をやってればね」

ハヤト

「……………えーと次は訛り関係か」

エリオ

（あ、逃げた）

ハヤト

「訛りねえ。ウチには既に八神部隊長っていう訛り枠があるからなあ」

エリオ

「でも、シグナムさん達が古代ベルカ訛りだと、色々困りそうだね」

ハヤト

「まず会話が成立しないよな。てか、A・S始まらないんじゃない？」

ヴォルケンリッター出現 言葉通じない 逮捕

的な流れで」

エリオ

「確かにWでも、流石にはやてさんなら警察には連れて行かないと思うけど……」

ハヤト

「フーか古代ベルカ訛りってなんだよ！ どんな喋り方だよ！」

エリオ

「“けふは良き天気なれば、空飛ぶ雲もいとをかし”とか？」

ハヤト

「ふつーに古い日本語やんけ」

ルーテシア

「ってハヤト兄！ エリオ！ 何私たちを差し置いて盛り上がったんの！？」

スバル

「そーだよ！ 仲間はずれ禁止ー！」

ハヤト

「何だと！？ お前らが先に乙女空間作って、俺ら男2人を仲間はずれにしたんだろーが！」

ティアナ

「何よ乙女空間って……」

キヤロ

「お、乙女空間！？」

ルーテシア

「ぬう、知ってるのか雷で……じゃなかったキヤロ！？」

キヤロ

「お兄ちゃんに聞いた事があります、乙女空間とは男の子が絶対に立ち入れない空間。」

その強固さは（以下略）……だって」

ルーテシア

「ハヤト兄のでまかせって、なんで中途半端に説得力あるんだろう」

ティアナ

「え？ 説得力あった？」

ルーテシア

「あったでしょ？ ティアナさんは思わなかった？」

ティアナ

「全然」

ルーテシア

「ふっ、ティアナさんのハヤト兄への愛もその程度か」

ティアナ

「なんですって!?!」

スバル

「そんな事ないよ! ティアはハヤトの事大好きだもん! もちろんあたしも!」

キヤロ

「……ふ、2人とも大胆ですね(照)」

エリオ

「公共の電波でそんな事言っなんて……(照)」

ティアナ&スバル

「「あ……」」

ルーテシア

「計画通り」

ハヤト

「よくやったぞ、ルールー」

ルーテシア

「任せてよハヤト兄！」

ハヤト

「よし。それじゃあ次のお便りだ。

ベルカ自治区にお住まいの、RN：遠峰 シンさん。

『デバイスを受け取る代わりに矢で貫かれてスタンドが目覚めるFW陣』

『スカルエツティが可愛いどじっ子幼女』

ティアナ

「スタンドねえ。あたしのは何かしら？」

ハヤト

「セックス・ピストルズ一択だろ。弾丸的に考えて」

スバル

「あたしはやっぱりスタープラチナかな？ 殴る的に考えて」

エリオ

「ザ・ワールドかも知れませんか？」

キャロ

「それはすずかさんじゃないかな？ 吸血鬼的に」

ルーテシア

「確かに、すずかさんの方が似合ってるね。

んー……エリオはシルバー・チャリオッツで、キャロはエアロスミスって感じ？」

エリオ

「ええっ!?! 僕、ポルポルなの!?!」

キャラ

「うーん、エアロスミスって事は、戦闘機の変わりにフリードが飛ぶのかな?」

エリオ

「スルー!?!」

ハヤト

「だろうな。高町隊長は……なんだ?」

ティアナ

「砲撃系の主人公スタンドは居ないから……射撃型って事でハイエロファントグリーンとか?」

ハヤト

「“半径20メートル、S・L・Bなの!”とか言うのか……超こええ……」(ガクブル)

エリオ

「フェイトさんは何でしょうね?」

ルーテシア

「んー……スピードって事で考えると、メイド・イン・ヘブンじゃない? 加速出来るし」

キャラ

「微妙に合っていない様な……どちらかと言えば、フェイトさんこそチャリオッツなんじゃ？」

ハヤト

「脱衣で早くなるしな」

エリオ

「え、そうすると僕のスタンドは!?!」

ハヤト

「無し。波紋でも使うといいよ」

エリオ

「ひ、ひどい……（泣）」

スバル

「次は八神部隊長かぁ。何かぴったりのあるかな？」

ハヤト

「バッド・カンパニー。中隊の代わりにヴォルケンリッター全員出てくる感じで」

ティアナ&スバル&エリオ&キャロ&ルーテシア

「……「ああ……」「……」」

スバル

「ぴったりすぎて言葉が無いよ」

ルーテシア

「本当にバッド・カンパニーだね。」

なんて言うか、はやてさんが女ボスっぽい」

ハヤト

「バララ カの姐御みたいな感じ？」

ルーテシア

「Exactly(その通りでございます)」

ハヤト

「あはははははっっ！！ そりゃあぴったりだ！！ あははははははは！！」

ティアナ

「さて、じゃあ最後は今馬鹿笑いしてるハヤトのスタンドね。皆、何か意見は？」

スバル

「ホイール・オブ・フォーチュン」

エリオ

「ホイール・オブ・フォーチュン」

キャロ

「ホイール・オブ・フォーチュン」

ルーテシア

「ホイール・オブ・フォーチュン」

ティアナ

「その心は？」

スバル&エリオ&キャロ&ルーテシア  
「……嗚ませ犬」「……」

ティアナ

「まあ、妥当なところね」

ハヤト

「……………（、・、）」

ティアナ

「何か反論が？」

ハヤト

「いえ、無いです」

ティアナ

「そ。それじゃあ次の『スカリエツティが可愛いドジっ子幼女だったら』ね」

（、・、） <幼女と聞いて！

（、・、） <幼女と聞いて！

（、・、） <幼女と聞いて！

ティアナ

「帰れ」

(´・`・´)  
(´・`・´)  
(´・`・´)

ティアナ

「そ、そんな切なそうな顔しないでよ。」

わかったわよ。ホラ、何か意見があるなら言ってみなさい」

ハヤト

「お、ツンデレだな」

スバル

「ツンデレだね」

ルーテシア

「極上のツンデレ頂きました」

ティアナ

「そこ！ うっさい！ー！」

(´・`・´) < 私達の見解では、多分こんな感じのスカリエツ  
ティになります。

く以下、スタッフの妄想く

スカリエツティ

「あわわ……ど、どうしようの。ゆりかご壊れちゃった」

ウーノ

「大丈夫ですよドクター。私が直しておきますから」（ハアハア）

スカリエツティ

「あ、ありがとう。えへへ、優しいね、うーの！」

ウーノ

「……ぶはっ！！」（鼻血）

スカリエツティ

『さあ、いよいよぶっかちゅ……あう、ぶっかつの時だ』

ハヤト

「……噛んだ」

はやて

「噛んだなあ」

スカリエツティ

『わたし……わたしのスポンサーよし』

レジラス

（スカたん萌え萌えや……ハアハア）

オーリス

(駄目だこの爺、早く何とかしないと……)

スカリエッティ

『そして、こんなせかいを創りだした管理局のしょくん!』

ウーノ

(ああ、小さい胸を精一杯張って演説するドクター……あ、鼻血が)

クアットロ

(お姉様! カメラに鼻血を付けないでくださいませ!)

スカリエッティ

『ぎぜんのへーわを……うーの、これ何てよむの?』

ウーノ

『うたう、ですよ。ドクター』

スカリエッティ

『そっか、ありがとうーの……ごほんっ!』

ぎぜんのへーわをうたう聖王教会のしょくん!』

カリム

「ねえシャツハ。あの子攫ってきて」

シャツハ

『申し訳ありません騎士カリム。私は空戦魔導師ではないので……』

フェイト

「はあああああっ！」（ザンバーホームラン準備）

スカリエツティ

「ふえっ……………」

フェイト

「!？」

スカリエツティ

「お、おねえちゃん……………それで、わたちのこと、叩くの？」

フェイト

「……………っ」「ぷるぷるるる」

スカリエツティ

「叩くの？」（涙目）

フェイト

「叩かないっ！ 叩かないから泣かないで！ お願いだから!！」

〜妄想終了〜

（……………） <こんな感じですが、どうでしょう?…

ルーテシア

「……なんだろう、その光景があつという間に目に浮かんできた」

エリオ

「……悪くない」

キヤロ

「エリオ君？」

エリオ

「な、ナンデモナイヨ!？」

ハヤト

「しかしまあ。うちのスタッフの妄想力も大したもんだ」

スバル

「そうだね。この力を別の場所に生かせばいいのに」

ティアナ

「それをここのスタッフに望むのは、無駄だと思わない？」

ハヤト&スバル

「……確かに」

ハヤト

「でも、これだと戦い難くて仕方ないだろうなあ」

ティアナ

「ホントにね。けど、なんかこのスカリエツティなら、あたし達が動かなくても自滅しそうじゃない？」

エリオ

「ゆりかごの起動に失敗して、その挙句に自首してきそつですね」

キャロ

「それはそれで可愛いかも」

ルーテシア

「このドクターとこっちのドクター、交換て出来ないのかな？」

ハヤト

「それは良いな。ぶっちゃけあのスカは要らん」

ルーテシア

「だよー。チェンジして、着せ替えとかやって遊びたい」。

涙目になるくらい虐めたい」

ハヤト

「うむ、それでこそ我が妹分。俺の資質をしつかり継いでくれているな」

ティアナ

「……あの兄妹、どうにかした方がいいんじゃない？」

スバル

「無理だよ。もう手遅れだよ」

エリオ

「そうだと思います。今のルーは、もう兄さん2号ですから」

キャロ

「性格なんて瓜二つですもん」

ティアナ

「……………メガーヌさんが泣かなきゃいいけど」

ハヤト

「？ 何してんだ？」

ティアナ

「何でもないわよ」

ハヤト

「そうか。ならとりあえず『こんなリリカルは嫌だ！』、今回はこ  
こまで！」

ルーテシア

「それじゃあ次のコーナー、いっくよ〜」

ハヤト&ルーテシア

「「チャレンジ！ ハヤト」」

ティアナ

「ねえ、あの兄妹ノリノリ過ぎない？」

スバル

「なんかもう、完璧な兄妹だよな」

エリオ&キャロ

「……むう」

ルーテシア

「じゃあ、今回のチャレンジいくよ。ハヤト兄、覚悟はいい!？」

ハヤト

「任せとけ！ 何ほでもこんかい!!」

ルーテシア

「その意気や良し！ それでは今回のお題はこちら！

聖王のゆりかご内の駆動路にお住まいの、RN：検体番号10032さん！

『今からスバル&ティアナをヤンデレ化させるので、

二人の本気の殺意を込めた攻撃に対して、10分間生き延びて下さい。

ちなみに、ヤンデレ化した時点からハヤトのギャグ補正は一時無効化されますので、

そのつもりで」

ハヤト

「……………え？」



『やられたらやり返す』というその態度は私の正義に反するものではありません。

だから、その覚悟があるというのなら……戦争を、しましょう」

(文房具全身装備)

ハヤト

「……………生きる為の逃走!……!」

ルーテシア

「頑張つて〜」

ティアナ&スバル

「「逃がすかあああああああああああつっつっ!……!……!」」

ハヤト

「逃げるわあああああああつっ!……!……!」

エリオ

「……………ブースから出て行っちゃったけど」

キャロ

「ラジオ、どうしようっ?」

ルーテシア

「何言ってるの二人とも。ここからは、私達がメインパーソナリティだよ?」

エリオ

「ええっ!?!」

ルーテシア

「その為にわざわざあのお題を選んだんだしね」

キャロ

「……ルーちゃん。恐ろしい子っ!」

ルーテシア

「とはいえ、このコーナー終わらないと次に行けないし……とりあえずCM!」

エリオ

「うわ、丸投げだ」

ティアナ

「あ、お父さん!」

ハヤト

「え!？」

ザッフィー(?)

「……」

ティアナ

「えっと、ただ友のハヤト」

ハヤト

「あのー、ティアナにはいつも無料で通話させて頂いています」

ティアナ

「怒ってる?」

ザッフィー(?)

「……」

ハヤト

「あのですね、勿論健全なお付き合いを」

ザッフィー

「こら!」

ハヤト&ティアナ

「!!」

ザッフィー

「それはただの青い犬だ!」

ティアナ

「え!？」

犬

「ワン!」

ティアナ

「あら」

ザッフィー

「まったく……」

ハヤト

「あ、こっちがお父さん？ あ、どうも」

シヤマル

「ふふふ、ティアナったら彼しか見えてないのね」

ティアナ

「そうかな？」

シヤマル

「いらっしやい。ご馳走してあげる」

ザッフィー

「え？」

シヤマル

「さ、行きましょ」

ザッフィー

「おーい、どこ行くんだ。待ってくれ！」

シヤマル

「あらあらつぶつぶ」

ザッファイ

「おーい！」

犬

「わんわんお！」

ザッファイ

「お前ついてくんな！」

ただ友万歳。Hard Bankから。

なのは

「始めよう！ 最初で最後の、本気の勝負！」

伝えたい言葉がある

フェイト

「勝つ……勝って、母さんのところに帰るんだ！」

譲れない誓いがある

なのは

「受けてみて！　これが私の、全力全壊！！」

撃ち抜く魔法に、殺意想いを乗せて　。

魔法少女リリカルなのは　The MOVIE 1st  
20010年1月23日、全次元世界一斉ロードショー

なのは

「劇場で、私と握手なの！」

ルーテシア

「は〜い　CMやってる間に10分経ちました〜。

さてさて、結果はどうか？　現場のエリオさん！」

エリオ

『はい、現場のエリオです。』

今僕は収録スタジオの屋上に来てるんですが……えーと』

ルーテシア

「どうしましたエリオさん？　ちゃんと伝えてくださ〜い」

エリオ

『何て言ったらいいんだろう……。言葉が出てこないや』

ルーテシア

「いいから、とりあえず伝えられる範囲で伝えてください」

エリオ

『えーと、はい。結果としては、兄さんはやられちゃってボロボロなんだけど……』

キャロ

「なんだけど？」

エリオ

『今は、ティアナさんとスバルさんに膝枕されてる。何ていうか……すごく……空気が甘つたるいです』

ルーテシア

「……ああ、うん。それは伝えづらいね」

キャロ

「そうだね」

エリオ

『……ブースに戻っていい？  
砂糖の吐きすぎで死にそうなんだけど……』

ルーテシア

「いいよ」。そのバカップル空間に居るのは、辛いよね」

エリオ

『うん……ありがとう。本当に、本当にありがとう』

キヤロ

「エリオ君、この短時間であんなに憔悴して……」（ホロリ）

ルーテシア

「はい。そんな訳で今回のチャレンジは失敗でした。」

「ハヤト兄、残念だったね」

キヤロ

「というか、ギャグ補正無しでも生き延びられるんだね。お兄ちゃん」

ルーテシア

「ギャグ補正の代わりに、主人公補正でも出たのかな？」

キヤロ

「お兄ちゃんの主人公補正じゃ、さっきのティアナさん達相手は無理だよ」

ルーテシア

「あはは、だよな」 それじゃ『チャレンジ！ ハヤト』はこころまで……！

あとは……もう時間も無いし、エンディングトークでメだね」

キヤロ

「エリオ君が戻るまで待ってようか？」

ルーテシア

「ん〜。時間も無いし、私達だけでメチャおっ!」

キヤロ

「い、いいのかな……?」

ルーテシア

「ヘーキヘーキ。」

それじゃあとりあえず番宣しよっか」

キヤロ

「えと、私は無いんだけど……ルーちゃんはあるの?」

ルーテシア

「……私も無かった。てへ」

キヤロ

「もう、適当なんだから。ええと……それじゃあ最後にお便りとゲストに関するお知らせです。」

最初に私からお便りに関するお知らせを。

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーさんから  
の便りを待ってます。

“なぜなに とあ新”では、お兄ちゃん達メインパーソナリティ  
3人や、ゲストさんに対する質問を。

“励まして!スバルちゃん”では、リスナーが凹んだエピソード  
を。

“ ツンデレ！ティアナちゃん ” では、ティアナさんにツンデレで返して欲しい台詞を。

“ チャレンジ！ハヤト ” では、お兄ちゃんにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこの収録スタジオの中で出来ること限定でお願いします。

あと、お兄ちゃんが死にそうなのはNGです……って、今回のNGじゃなかったんだ。

“ こんなリリカルは嫌だ！ ” では、リスナーさんが考えた“ かなりリリカルは嫌だ ” というお題を。

そして“ ふつおたコーナー ” では、普通のお便りを。

その他に、お兄ちゃん達3人のイラストなども募集しています！送って貰った場合、ラジオで使ったりしますよ。リスナーの皆さん、どんどん送ってくださいね！！」

ルーテシア

「それじゃあ次は私からゲストに関するお知らせを！

ゲストにお呼びする順番は、応募順ではなくて、あみだくじによる抽選になっています。

なので、応募した順番が後の作者さんのキャラクターが次回ゲストに来る可能性もあるけど、そこは許してね！

選ばれた作者さんには、放送の翌日あたりにこっちからメッセージでお知らせを送るよー！」

キャラ

「えと、次回からは他作者さんのキャラクターをゲストにお呼びする予定です。」

リハビリ中なので予定が変わる可能性もあつて、時間が掛かるかも知れませんが、のんびり待っててくださいね」

ルーテシア

「それじゃ、これで“リリカル マジカル とあ新らじお” 第11回はしゅーりょー！」

キャラ

「お相手はキャラ〓ル〓ルシエと」

ルーテシア

「ルーテシア〓アルピーノでした！」

キャラ&ルーテシア

「「はいはい！」」

ルーテシア

「この番組は、

(殺) 匂宮雑技団

(闇) 闇口衆

(鬼) 零崎一賊

(番) 薄野武隊

(虐) 墓森司令塔

(掃) 天吹正規庁

(死) 石凧調査室

の提供でお送りしました……って、この人達って提供できるの?」

キャロ

「出来ないと思う……」

## 第11回『まだ本調子じゃないなあ』（後書き）

うらむ、中々文章が浮かばないなあ。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いま  
せん。

・ お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・ 出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします。

第12回『女体化？ 馬鹿野郎！ 男の娘だからいいんじゃないか！』

ハヤト

「さてさて、今週からはまた他作者様のキャラがゲストだな」

ティアナ

「そうね。頑張っていきましょう」

スバル

「それでは早速最初のコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『励まして！ スバルちゃん』」

ティアナ

「最初のお便りです。」

機動六課前線指揮総括官、執務デスク在住のRN：ブレイブレオ  
ンさん。

『主が女性の好意に対して異常に鈍感だ。』

我は必死に補佐をするのだが……主とはいえ、流石に疲れる。

スバル殿。劳いの言葉を一つ』」

スバル

「鈍感なのは困るよね……わかるよ、その気持ち」

ティアナ

「心底同情するわ……頑張って」

ハヤト

「ほいでは次のお便り。」

機動六課寮にお住まいの、エリオ＝モンディアル……エリオ、何しとん。

『昨日、ヴァイス陸曹が持ってきたゲームと一緒にやってたら、はは裸のオオオオオ女の人が……。そこへキャラが来て喧嘩になってしまい、

謝りたいのに聞いてもらえません。

僕……どうすればいいんですか？（泣）』

スバル

「えと、頑張って……としか」

ティアナ

「いえないわよね……これって」

ハヤト

「ん。今回はこの2通だけだな」

ティアナ

「てゆうか2通目は、普通に身内からの相談じゃない……」

スバル

「ヴァイス陸曹、何渡してるんですか……」

ハヤト

「エリオに本番で失敗しないように教育してくれたんだよ。  
流星はグランセニックの兄貴だぜ！」

ティアナ

「黙れこのスケベ」

ハヤト

「酷いつ!?!」

スバル

「死んじゃえばいいよ」

ハヤト

「もっと酷いつ!?!」

ティアナ

「とまあ、ハヤト虐めはこれくらいにして、と。」

エリオ。取りあえずはキャラロが落ち着くのを待ちなさい。話をするのはそれからよ。」

スバル

「多分キャラロも、びっくりしちゃってるんだと思うしね。」

ハヤト

「あとそのソフトは俺が没収するからよこせ。」

ティアナ

「アンタは何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

スバル

「変態なの？ ド変態なの？」

ハヤト

「……………人よりちょっと情熱が多いだけです。すみませんでした。えー、それでブレイブレオンさんのお便りだが……………」

ティアナ

「鈍感な主人公の標準装備とはいえ、度が過ぎると罪悪よね。」

スバル

「本当にね。まあ、それがテンプレだから仕方ないのかもしれないけどさ。」

ティアナ&スバル

「「はあ……………」」

ハヤト

「何故そこで俺を見る」

スバル

「コレだもんね」

ティアナ

「ホント、嫌になるわ」

ハヤト

「え？ 何？ 俺が悪いの？

スタッフまで何で溜息吐いてるの？ ねえ……」

ティアナ

「さて、それじゃ “リリカル マジカル とあ新らじお” 第12回、  
始めましょうか」

スバル

「そうだね。それじゃあ！」

ティアナ&スバル

「「スタートです！」」

ハヤト

「ねえ……誰か答えて……」

リリカル マジカル とあ新らじお

第12回『女体化？ 馬鹿野郎！ 男の娘だからいいんじゃないか！』

ハヤト

「気を取り直して。どうも、メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルです」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティの、ティアナ＝ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバル＝ナカジマです！」

ティアナ

「それではゲストをお呼びしましょう！

今日のゲストは、『魔法少女リリカルなのはStrikers  
（氷翼の天使）』より。

記憶喪失だったけど、最近記憶が戻ってさあ大変！

リオス＝コーネルド君と」

スバル

「無口で純粹？ リオス君大好きなエミリアちゃん！」

ハヤト

「そして、残虐非道！ 輝く笑顔で虐殺天使！ レーネちゃんだ！」

リオス

「ど、どうも……」

エミリア

「……」

レーネ

「やつほー」

ハヤト

「……？ エミリアちゃんとレーネちゃんは分かるが、君、誰？」

リオス

「リ、リオスです」

ハヤト

「え？ リオス君って男だったよな？」

決して君みたいにボンキュッボン（死語）の女の子じゃなかったよな？」

リオス

「それはその……大人の事情で」

ティアナ

「……大変ね」

リオス

「ええ……」

ハヤト

「ふむ。ま、事情があるならいいや。

それじゃあ最初のコーナーいってみよー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「ゲストへの5つの質問！」

ハヤト

「このコーナーでは、ゲストに5つの質問をして答えていってもらうぞ」

スバル

「3人とも、気軽に答えてね」

レーネ

「はいはい！」

エミリア

「……ん」

リオス

「え？ あれ？」

ハヤト

「？ どうしたリオス君。そんな鳩が北斗百 拳喰らったみたいな顔して」

リオス

「いやそれ死んでます…… ってそうじゃなくて。あの、ハヤトさん。僕に何もしいないんですか？」

ハヤト

「何もって……何を？」

レーネ

「つまり、いつもやってるセクハラとかしないの、って聞いているんだよ」

ティアナ

「そういえば、アンタいつもなら飛び掛ったりするわよね？」

ハヤト

「ああ。だってリオス君、中身男じゃん？ たとえ見た目は女でも、男に欲情とかしないって」

スバル

「へ〜……ハヤトもそーゆーの気にするんだ？」

ハヤト

「……お前ら、俺のことなんだと思ってるんだ？」

ティアナ

「スケベ」

スバル

「節操なし」

リオス

「ケダモノ」

レーネ

「ドのつく変態さん」

ハヤト

「………エミリアちゃんは？ エミリアちゃんはそんなこと思っ  
てないよね？」

エミリア

「………どうでもいい」

ハヤト

「………。」

もういいよ！ お前らなんか相手してやらないよ！ このおたん  
こなす！

ばーかばーか！ お前らのかーちゃんでーべそー！……！」

スバル

「あ………出てっちゃった」

ティアナ

「子供みたいな捨て台詞ね……」

リオス

「え、ええと……良いんですか？」

レーネ

「いーんじゃない？ そのうち戻ってくるよ」

エミリア

「……どうでもいい」

リオス

(……流石に可哀想になってきたなあ)

ティアナ

「それじゃあ、気を取り直して最初の質問いくわね。

『お名前は？』」

リオス

「いいのかなあ……？ ええと、リオス＝コーネルドです」

エミリア

「……エミリア」

レーネ

「レーネです」

ティアナ

「リオス君って、こっちは初めてだけど本編後書きは2回くらい出てたわよね？」

リオス

「そうですね。まさか女体化して出演するとは思いませんでしたけど……」

スバル

「ど、どんまい……」。

「レーネちゃんとエミリアちゃんは初めてかな？」

レーネ

「そだね。今日はよろしくー！」

エミリア

「……よろしく」

スバル

「……あれ？　そういえば、スタッフさん達静かだね。」

「レーネちゃんがいるから騒ぐと思ってたんだけど……」

ティアナ

「そういえばそうね……久しぶりのちっちゃい子だから、半狂乱になると思ったけど……ひいつ！？」

レーネ

「！？」

(\*、\* )ハアハア (\*、\* )ハアハア

( \* 、 \* ) ハア ハア  
( \* 、 \* ) ハア ハア

スバル  
「ブ、ブースのガラスに顔密着させてハアハアしてるー！ー！  
！」

ティアナ  
「キモッ!？」

リオス  
「す、凄い光景ですね……」

レーネ  
「気持ち悪いつてレベルじゃないわよ!？」

エミリア  
「……………ふうっ」(気絶)

スバル  
「あわわわ、エミリアちゃーんっ!?!」

ティアナ  
「ちよつとスタッフ! 自重しなさい!」

( \* , 、 \* ) ハア ハア  
( \* , 、 \* ) ハア ハア

リオス  
「ぜ、全然聞いてませんよ!？」

ティアナ  
「……しょうがないわね。あたしがちょっと“お話”してくるから、  
待ってて」

レーネ  
「お話？」

スバル  
「ティ、ティア？」

ティアナ  
「大丈夫だから。待ってなさい」

リオス  
「い、行っちゃった……」

ティアナ

『受ける！　これが我が師より受け継いだ、ミラーージュ幻影座のティアナ、最大の拳！』

スターライト・ブレイカー  
星光破砕拳アアア！！！！！！』

(；；；( <うっぎゃああああっ！！

レーネ

「……………何あの 세인트 なセーヤ的台詞？」

スバル

「……………あ、あたしもわかんない」

リオス

「ていうか、ブースの高さ的に有り得ない高度までスタッフさんが舞い上がってるんですけど」

エミリア

「……………頭から、落ちた」

レーネ

「アレが噂に聞く『車田吹っ飛び』ね」

リオス

「何で知ってるの!？」

レーネ

「いい女には、秘密がつきものなんだよ」

ハヤト

「憑き物と申したか」

スバル&リオス&レーネ&エミリア

「「「「!？」」「」」」

ハヤト

「? どうした？」

リオス

「い、いつ戻ってきたんですか？」

ハヤト

「ついさっき。まあとりあえず、あつちは放っておいて次の質問な」

レーネ

「え、いいの？」

ハヤト

「いいのいいの。てか、ラジオ進めない方が駄目だろ。」

はい、んでは次の質問。

『好きな食べ物は何?』

リオス

「……えーと、好きな食べ物ですよね。  
ハンバーグ。……子供っぽいかな？」

エミリア

「天使が作るお菓子」

レーネ

「私は……うーん、迷うけど、苺のケーキかなあ？」

スバル

「リオス君の作るお菓子、美味しいよねえ」

エミリア

「うん」

ハヤト

「何度か差し入れて貰ったけど、確かに絶品だったな」

スバル

「だよなー」

(、・・・) <喰らえ！  
幼女ロリータ・コンプレックス愛好拳！！！！

ティアナ

『甘い！ 魔導師に同じ技は通じないわー！！』

ハヤト

「……まだやってんのかあいつら」

スバル

「てか、ティアって射撃型だよな？ 何であんな格闘型顔負けの格闘戦やってるの？」

リオス

「普通に拳が見えませんか？」

レーネ

「凄いねー」

エミリア

「……人間、やめてる」

ハヤト

「関わるところちも怪我するから、無視しとけ。  
それで、リオス君はハンバーグだったっけ？ 好きな食べ物」

リオス

「あ、はい。子供っぽいかなー、とは思ったんですけど」

ハヤト

「いやいや。その年で漬物が好きとか言われるよりはマシだ」

スバル

「？ お漬物もおいしいよ？」

レーネ

「はいはい。スバルは食べればなんでもいいんだから、ちょっと黙ってて」

スバル

「ひどっ!?! レーネちゃん酷いつ!」

レーネ

「酷くありません。事実です」

ハヤト

「まあそれはどうでもいいが、レーネちゃんは苺のケーキか。ちよつと意外だな」

レーネ

「そう? 子供なんだから、当然じゃない?」

ハヤト

「いや、何かイメージとしては紫色の液体を飲んでるイメージが」

レーネ

「どんなイメージよっ!?!」

ハヤト

「そんなイメージだよ」

レーネ

「失礼なっ!」

ハヤト

「失礼ですよ」

レーネ

「鸚鵡返しするな！」

ハヤト

「鸚鵡返しさせてもらいましょうか」

リオス

「レ、レーネ落ち着いて。遊ばれてるから！」

スバル

「そうだよ、ハヤトとマトモに言い合っちゃ駄目だよ。疲れるだけだから」

レーネ

「……………くっ、そうね。ここは退いてあげるわ」

ハヤト

「はい。軍配が俺に上がったところで次の質問。」

『自分の性格を一言で』

リオス

「性格ですか……………誠実、ですかね。よく言われます」

エミリア

「……………無口」

レーネ

「うーん、純粹無垢かな」

ハヤト

「純粹無垢（爆笑）」

レーネ

「笑いたければ笑うがいいわ。  
ただしその頃には、あんたは八つ裂きになっているだろうけどね」

ハヤト

「どこの鑢さんだよ」

スバル

「ちえりおー」

エミリア

「……ちえりおー」

リオス

「ふ、二人もノらないでいいから」

ハヤト

「まあ冗談はさておき。純粹無垢、ね。  
ディレトもアレで純粹さが売りだったりするし、アレですか。狂  
気キャラは純粹無垢が付属品ですか」

リオス

「そういう訳じゃないと思いますけど……」

スバル

「あとエミリアちゃんのこと……性格？」

エミリア

「……………じゃあ、寡黙」

ハヤト

「じゃあ、てw」

エミリア

「どっちでもいい」

ハヤト

「はいはい、じゃあ寡黙な無口っ子というわけで、では次の質問いってみよう。」

『最近困っていることは？』

リオス

「六課の皆様になにかと女装させられそうになることです。……………今は女装どころか女体化してますけど」

ハヤト

「まあ、似合うから仕方ないよなあ」

スバル

「そうだよねえ。今は女の子だけど、男の子の時も可愛かったもん」

リオス

「嬉しくないんですけど……………」

ハヤト

「しかし、見事なまでの女体化だよな。胸とかも本物？」

リオス

「そ、それは……まあ……」

スバル

「ハヤト、触ってみれば？」

ハヤト

「嫌だよ。いくら女体化してるとはいえ、何が悲しくて男の胸を触らなきゃならんのだ」

リオス

「……ハヤトさんが、そんなに分別のある人とは思いませんでした」

ハヤト

「リオス君。不用意な発言すると、ガチで揉むぞ」

リオス

「い、いいですよ！ 覚悟はしてきましたもん！」

ハヤト

「……………馬つ鹿野郎おおおお！」（もにもにもにもにもにもに）

リオス

「ひゃあああああつー！？」

ハヤト

「嫌がらない奴にセクハラしても、面白くもなんともねーだろうが！  
嫌がって頬を染めながら小さい声で「い、嫌あ……」とか言っ  
てるのを、「げへへ、よいではないか」とか言いながらセクハラする  
のがいいんだろうが！！」

スバル

「うわあ……」

レーネ

「うわあ……」

エミリア

「ないわあ……」

ハヤト

「おやおや？ 何だか女性陣から絶対零度の視線が来ましたよ？」

（もにもに）

スバル

「むしろ、今の発言でそーゆー視線が来ないと思うほうがおかしい  
よ？」

レーネ

「男として、って言うよりも人として終わってるわよね」

エミリア

「……変態」

ハヤト

「お前ら……ぞとばかりに酷いなヲイ！」（もにもに）

リオス

「あ、あの……っん、それは、いいですから……あんっ。  
いい加減、手を動かすの……おっ、やめ、てください!」

ハヤト

「ん？ ああゴメン。中々揉み心地が良くて」（もにもに）

リオス

「だ、だから！ 離してくださいってば!」

スバル

「いー加減にしろっ!」（会苦巢飯婆）

レーネ

「女の敵っ!」（狩場庵）

エミリア

「……天使を、いじめるな」（墮淫酢隷腐）

ハヤト

「まさかの三連撃っっ!?!?!」

リオス

「おお、ハヤトさんがまるで檻褻切れのよつに……」

スバル

「……悪は滅んだ」

レーネ

「虚しい戦だったね」

エミリア

「……嫌な事件、だった」

スバル

「さて、それじゃあ質問の続きだけど……エミリアちゃんとレーネちゃんは？」

エミリア

「……皆、鬱陶しい」

リオス

「えー、翻訳しますと。僕としか話そうとしないので、他の皆が何か話しかけるのを最近鬱陶しく思ってるみたいです」

レーネ

「私は……そうだなあ、子ども扱いされることかな。失礼しちゃうよね、全く！」

ハヤト（襤褸切れ）

「いや………見た目、子供ですよん………」

レーネ

「ああん！？ 何か言ったかゴルアツ！！」

ハヤト（襤褸切れ）

「ひぎん」

リオス

「ああっ！ ハヤトさんが今度はサッカーボールの様に蹴飛ばされた!?」

スバル

「余計なこと言うから……」

レーネ

「自業、自得」

リオス

(……ここまで味方が居ない人って、本当に珍しいなあ。僕も自業自得だと思うけど)

ティアナ

「ふう。スタッフの癖に中々梃子搦らせてくれたわ……ってハヤト、どうしたの？」

「随分とボロボロだけど」

ハヤト(しかばね)

「……」

スバル

「いつものことだよ」

ティアナ

「そう。把握したわ」

リオス

「それで把握できるんですか!?!」

スバル

「長い付き合いですから」

リオス

「は、はあ……」

ティアナ

「それで？ どこまで進んだの？」

スバル

「ええとね、今4つめの質問が終わったところだよ」

ティアナ

「随分かかっているわね？」

スバル

「色々あって……」

レーネ

「ハヤトがセクハラしたり、馬鹿やったりで」

ティアナ

「……ハヤト」

ハヤト（しかばね）

「……いや、それ、誤解……」

リオス

（しかばねなのに喋れるんだ）

エミリア

(……人間、やめてる)

レーネ

(身体の構造とかどうなってるんだろ?)

ティアナ

「まあいいわ。そこら辺はラジオが終わってから、じっくりねちねち問い詰めてあげるから」

スバル

「それじゃあ、最後の質問だね。」

『パーソナリティの3人に一言!』」

リオス

「皆さんの出演作品、いつも楽しく見させていただいてます! 今後とも、どうかお体に気をつけて、いい作品を世に送り出してくださいね!」

エミリア

「……………楽しみ」

レーネ

「ハヤトく、スバルとティアナ、泣かすんじゃないわよ?」

あとスバルとティアナの方も、ハヤト、絶対離しちゃ駄目なんだからね!」

ハヤト(ザオラル中)

「むしろ俺の方が泣かされてる(物理的に)件」

ティアナ

「そりゃあ、離すわけ無いわよ」

スバル

「いざとなつたら監禁すればいいもんね」

ハヤト（ザオラル中）

「……………なんだろう、この漠然とした将来への不安は」

リオス

「いいじゃないですか、愛されてて」

レーネ

「バカップルだねえ」

エミリア

「……………熱々」

ハヤト（ザオラル中）

「愛と憎悪って紙一重じゃね？　と思う今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか」

ティアナ

「アンタだけよ、そんな風に思うのは」

ハヤト（ザオラル成功）

「そうかあ？　まあいいや。

とりあえず、長くなっちゃったし“ゲストへの5つの質問”はこれで終了！



釘打ちならお任せ！

(株) ゴルディオンハンマー

シグナム

「働きたくないでござる！ 絶対に働きたくないでござる！」

はやて

「シグナム、お願いやから働いて！ もう、今月も生活費が大赤字やねんで！？」

「シャマルもヴィータもザフィーラも、働きすぎて身体壊してもーて……」

シグナム

「働きたくないでござる！ 絶対に働きたくないでござる！」

はやて

「もういやや……こんな生活……」

働かない家族に困っているその貴方！

(株) 劣化の将に相談してみよう！

シグナム

「仕事楽しいWWW」

はやて

「これで毎日が安心や！」

ぴったりの仕事、お探しします。

(株) 劣化の将

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「「「こんなにリリカルは嫌だ！」「」」」」」

ハヤト

「このコーナー、ムダに投稿数が多いんなあ。ま、人気コーナーって事でいいんだけど。」

さて最初のお便りは、超銀河ダイグレンの第一艦橋にお住まいの、RN：ゆうたんぺさん。

兄貴iiiiiiiiっつー!!!

『ヴィヴィオがグレル』『』

ティアナ

「……なのはさんとフェイトさんが泣きそうね」

リオス

「きつと泣くね。号泣」

スバル

「六課が機能しなくなりそうな……」

レーネ

「てゆうか、ヴィヴィオがグレたらどうなるのかな？」

ハヤト

「アレじゃね。聖王モードになって、タバコとか吸ったり酒飲んだり。」

「そんで、エリオとかに「ちょっとお前パン買ってこい。金？ てめえが出すに決まってるだろ！」とか」

エミリア

「……イメージが、一昔前」

ハヤト

「いいんだよ！ 全世界共通認識なんだから！」

ティアナ

「ま、まあアレよね。スカリエツティ達に攫われる心配がなくなつて、いいかもしれないわね」

ハヤト

「攫いに来たルーテシアに「あゝん!?」とかガン飛ばしそうだな」

レーネ

「あははっ、そんで泣いて帰っちゃうんだね?」

ハヤト

「そうそう」

リオス

「……物語が滅茶苦茶になりますって」

ハヤト

「だから“こんなにリカルは嫌だ!”なんだって。さて、じゃあ次のお便りいつてみよう」

ティアナ

「次のお便りは、第97管理外世界、現在龍騎の世界にある光写真館にお住まいの、RN：綾崎さん。」

『なのはさんが常に魔王モードW』」

ハヤト

「Wじゃねえよ! ふざけんな!」

ティアナ

「絶対嫌よ! 絶対嫌!」

スバル

「助けてええええええっつ!」

リオス

「さ、3人とも落ち着いて！」

レーネ

「本編中では魔王モードになったことないのに、何でトラウマになつてるのよ!？」

エミリア

「……さすが、魔王」

リオス

「エミリアも落ち着いてないで、手伝って!」

ハヤト

「ごめんなさい隊長! 訓練サボりませんから!

だから笑顔でS・L・Bは勘弁してください!! 死にますから

!」

ティアナ

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

スバル

「先生だぞ! 先生なんだぞ!」

リオス

「ちよつ、スタッフさん！ スタッフさーんっ！んっ！！」

（、・・・、）<あ、俺らは基本ブース内にはノータッチなんで

レーネ

「こつちに丸投げするつもり!?」

（、・・・、）<まあ、そうなりますねw

エミリア

「……………外道」

リオス

「ああもつ！ こつなったら力づくで！」

レーネ

「気絶させて止めるしか！」

少年少女鎮圧中。しばらくお待ちください

ハヤト

「……………すみません、何かヤバイ領域に逝ってました」

ティアナ

「何かひぐらしの鳴き声が聞こえました」

スバル

「何かちっちゃい天才先生になってる夢を見てました」

リオス

「え、ええと……とりあえず、正気になってくれてよかったです」

レーネ

「勘弁してよね。ゲストが疲れるってどーゆーことなのよ」

スバル

「面目次第もないです。えー、それでは気を取り直して次のお便りを。」

クラナガンにお住まいの、RN：ザンバーさん。

『ガジェットが人間サイズの工 大量産型』」

リオス

「……勝てくないですか？」

ハヤト

「無理だよなあ。あいつ等再生するし」

ティアナ

「気絶とかも無理だろうし……」

レーネ

「細切れにしちやえば？」

エミリア

「……爆破」

スバル

「二人とも物騒すぎるよ……てゆうか、女の子がそんな血生臭いこと言ったらいけません！」

ハヤト

「それに、多分どっちにしても再生しそうだ」

ティアナ

「ミッドチルダ終了のお知らせね」

ハヤト

「ああ……次はサードインパクトだ」

レーネ

「うほっ、いいアンチATフィールド」

リオス

「ところで僕のS2機関を見てくれ。コイツを見てどう思うっ？」

ティアナ

「すぐく………第14使徒です」

スバル

「そろそろ関係各所から怒られそうだから、やめない？」

エミリア

「……みんな、自重」

ハヤト&ティアナ&リオス&レーネ

「……すいませんでした」「」

スバル

「といた所で“こんなリリカルは嫌だ！”はここまで！  
CMやってから、エンディングトークだよ！」

諸君 私は少女が好きだ

諸君 私は少女が好きだ

諸君 私は少女が大好きだ

幼女が好きだ

ロリっ子が好きだ

あどけない少女が好きだ

ボーイッシュな少女が好きだ

おませな少女が好きだ

恥ずかしがる少女が好きだ

縞パンを穿いた少女が好きだ

真っ白なパンティの少女が好きだ

10歳以下の幼女が好きだ

学校で 街道で  
校庭で 公園で  
自宅で 団地で  
海岸で 山野で  
泥中で 湿原で

この地上に存在する ありとあらゆる少女達が大好きだ

長い黒髪を風に靡かせる少女が 風に流された髪を押さえる仕草が  
好きだ

普段男言葉のボーイッシュな少女が 初めてスカートを着いて恥ず  
かしがっている時など心がおどる

天真爛漫な少女が穿いた縞々のパンティが ふとした拍子にチラリ  
と見えるのが好きだ

お化け屋敷悲鳴を上げて 私の腕に抱きついてきた少女を  
優しい言葉をかけて抱きしめたりした時など胸がすくような気持ち  
だった

穿きなれない少女に穿かれたスカートが 道行く大きいお友達の視  
線を釘付けにするのが好きだ  
興奮状態の馬鹿者が 見えないと分かっているスカートの中を  
何度も何度も見ようとしてしている様など感動すら覚える

巨乳主義の愚か者達がロリコンになっていく様などはもうたまらない  
泣いて喜ぶ同志達が 私の降り下ろした手の平とともに  
風に巻き上げられたスカートから覗いた白いパンティを見て ばた

ばたと薙ぎ倒されるのも最高だ

哀れな抵抗者達が 雑多な巨乳工口本で健気にも立ち向かってきたのを

ロリコン必須のコミックL.Oが

その愚かしい巨乳主義ごと木端微塵に粉碎した時など絶頂すら覚える

20を超えたババアの集団に滅茶苦茶にされるのが好きだ

必死に守るはずだった尊厳が蹂躪され

マイサンが犯され萎びていく様は とてもとても悲しいものだ

巨乳の物量に押し潰されて興奮させられるのが好きだ

脂肪の塊に追いまわされ 豚の様に鼻息を荒くするのは屈辱の極みだ

諸君 私は少女を 天使の様な少女を望んでいる

諸君 私に付き従う少女愛好者諸君

君達は一体 何を望んでいる？

更なる桃源郷を望むか？

情け容赦のない 天国の様な桃源郷を望むか？

鉄風雷火の限りを尽くし 三千世界の巨乳を殺す 嵐の様な闘争を望むか？

「ロリータ 幼女！！ ロリータ 幼女！！ ロリータ 幼女！！」

よろしい ロリータコンプレックス ならば少女愛好だ

我々は満身の力をこめて 今まさに屹立せんとする男の象徴だ  
だがこの暗い闇の底で半世紀もの間堪え続けてきた我々に  
ただの少女では もはや足りない！！

少女よりも幼女を！！ 一心不乱になれる程の素晴らしい幼女を！！

我らはわずかに一個大隊 千人に満たぬマイノリティにすぎない  
だが諸君は 一騎当千の古強者だと私は信仰している

ならば我らは 諸君と私で総兵力100万と1人のロリコン集団と  
なる

我々を二次元の彼方へと追いやり 眠りこけている連中を叩き起こ  
そう

髪の毛をつかんで引きずり降ろし 眼を開けさせ思い出させよう  
連中に少女の良さを思い出させてやる

連中に幼女のぷにぷにした太腿の素晴らしさを思い出させてやる

少女とババアのはざまには 奴らの哲学では思いもよらない事があ  
ることを思い出させてやる

一千人の少女のアイドル集団で

世界を萌やし尽くしてやる

「最後の少女愛好家 大隊指揮官より全空中艦隊へ」

第二次愛・少女作戦ロリコンは正義 状況を開始せよ

征くぞ 諸君

(炉) 全次元世界ちっちゃん子愛好会

リオス

「何ですかこのCM!？ ちょ、ええ!？」

ハヤト

「……おい、スタッフ号泣してんぞ」

ティアナ

「あたし、ちょっとフェイトさんに連絡してくる」

レーネ

「それよりも、あのスタッフぶち殺すのが先決じゃない?」

エミリア

「……?」

スバル

「エミリアちゃんは見ちゃ駄目だよ。教育に悪すぎるから」

ハヤト

「何かもつ、俺らがやってきた事を全部持っていかれた気がするな」

ティアナ

「はぁ……………なんか、もの凄く疲れたわ。」

リオス君。こんな状況で悪いけど、番宣お願いしていい？」

リオス

「え？ あ、はい。えーと……………」

僕が出演しているのは『魔法少女リリカルなのはStriker

S ～氷翼の天使』です。」

時はJS事件の直前。機動六課に保護された記憶喪失の青年、リオスが、

記憶を取り戻すために六課の人々とともに奮闘する物語。漸くリオスの知られざる過去が徐々に明らかに！

是非読んでください！」

ハヤト

「それじゃ、次にお便りに関するお知らせを……………レーネちゃん。頼むわ」

レーネ

「はいはい。まずはお便りに関するお知らせ！

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーさんからのお便りを待ってるよ。

“なぜなに とあ新”では、ハヤト達メインパーソナリティ3人

やゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んじやったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定だって。  
ハヤトはどうやっても死なないだろうから、多少無茶なお題でもオツケーだよ。

“こんなにリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人のイラストなども募集してるよ！

送って貰ったら、ラジオで使ったりするから、リスナーの皆、どんどん送ってね！

スバル

「それじゃあゲストに関するお知らせを、エミリアちゃん、お願いできる？」

エミリア

「……ん。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじの抽選。

だから、応募した順番どおりにゲストに来れるとは限らない。  
選ばれた作者さんには、放送翌日ぐらいにメッセージでお知らせ。

これで、いい？」

ティアナ

「大丈夫よ、ありがとね。」

それと、ちょっと大事なお知らせです」

ハヤト

「えー。作者が調子にのってコレも含めて3つも連載した結果。

頭が着いてこないという自体に陥りました。なので、これからは  
この“とあ新らじお”の更新が、超不定期になりそうです。

まあ、流石にゲストに応募して下さってる人達がまだまだ大勢  
いるんで、最低でも月1で放送はしますけど」

スバル

「楽しみにしてくれてるリスナーの皆さん、本当にごめんなさい！」

ティアナ

「お便り自体は応募を待ってるので、これからも送ってくださいね」

ハヤト

「それじゃあ、“リリカル マジカル とあ新らじお”第12回は  
ここまで！」

ティアナ

「リオス君、レーネちゃん、エミリアちゃん。今日はありがとう」

リオス

「いえ、こっちも楽しませて貰いました。……セクハラもされましてけど、うう……」

レーネ

「まあまあ。アレくらいで済んでよかったじゃない？」

エミリア

「……ハヤト、嫌い」

ハヤト

「エミリアちゃんからの視線が痛すぎる。

はい、それじゃあ今回はこれでお終い！ お相手はハヤト＝ロッシ  
クウエルと」

ティアナ

「ティアナ＝ランスターと」

スバル

「スバル＝ナカジマと」

リオス

「リオス＝コーネルドと」

エミリア

「……エミリア、と」

レーネ

「レーネちゃんでした」

ハヤト&ティアナ&スバル&リオス&エミリア&レーネ

「バイバイ！」

ハヤト

「あ、リオス君。帰る前にもっかい胸揉ませて」

リオス

「嫌ですよ！」

ティアナ

「この番組は、」

(株) ゴルディオンハンマー

(株) 劣化の将

(炉) 全次元世界ちっちゃん子愛好会

(上) その幻想をぶち壊す!

(電) 無視すんなやこらーっ!!

(涙) うーいーはーるー!!

(白黒) お姉様ー!!

以上の提供でお送り……したくなかったわ…… (泣)

ハヤト

「どんまい」

第12回『女体化？ 馬鹿野郎！ 男の娘だからいいんじゃないか！』(後書き)

えー、という訳で、暫くこちらは不定期更新となりそうです。すみません。

4つも5つも連載持つてる人は凄いなあ……。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いません)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限らせて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

第13回 『フラグ大魔王、来る!!』 (前書き)

後書きにゲスト立候補の確認があります。

立候補した作者の皆様、よろしければ確認してみてください。

第13回『フラグ大魔王、来る!!』

ハヤト

「おー、このブースも久しぶりだなあ」

ティアナ

「そうねえ。何だか1年ぶりみたいな気がするわ」

スバル

「実際は1ヶ月とちょっとぶりだけどね」

ハヤト

「いよつし！ そいじゃあ時間も勿体ねえし、早速いくか!！」

スバル

「りょーかいつ！ それじゃあ最初はお馴染みのこのコーナー!！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「励まして！ スバルちゃん!！」

ハヤト

「最初のお便りは、いつでもあなたのうっしゅるに居る、RN：  
武闘鬼人さんから！」

……武闘鬼人！ 貴様、見ているなっ!？」

「こんにちはスバルさん。聞いてください

この間、友人とこの小説の話をしていて、このコーナーのことも話題に出たのです。

その時友人の一人が「え？ スバル禿げたの？ 禿げ増してスバル？」

とか言ってきましたので、思いの限りぶん殴り続けましたが、これ以上どうやってやろうか思いつきません。

ブースの外に放置したのでどうすればいいか実践で教えてください  
さい」

スバル

「は、禿げてないもんっ！ 禿げてないもんっ！！」

ハヤト

「スバル落ち着け！ とりあえず他のお便りに返事してからブースの外に行けっ！」

ティアナ

「それでは次のお便り。

聖王のゆりかご内の駆動路にお住まいの、RN：検体番号10032さん。

……毎度のことだけど、あそこの何処に住んでるのかしら？

『夏の暑さにやられてグロッキー状態です……。  
外を歩けば外気の熱と直射日光の熱でオーバーヒート、  
自転車をこげば熱風が吹き付け、室内には熱が籠もり続ける…  
…。  
スバルちゃん、助けて下さい……。』」

スバル

「そんな時こそアイスだよっ！ アイスを食べて、残暑も乗り切る  
ーっ！！」

ハヤト

「そいじゃ、ラストいくぞー。  
ラストのお便りは、クラナガンにお住まいの、RN：ザンバーさ  
ん。

『主人公にユニゾンデバイス（に近い存在）と契約させたのです  
が、  
主人公はユニゾンできる事を知りません。  
どうしたら良いですか？』」

スバル

「無理矢理ユニゾンさせちゃえばいいじゃない!!」

ティアナ

「は〜い。それじゃあ今回の“励まして！スバルちゃん”はここのま  
で」

スバル

「ちよつとブースの外行ってくる！」

ハヤト

「……武闘鬼人さんの友人が、人生からログアウトしました」

ティアナ

「いや、流石に殺したりはしないでしょ。

それにしても、今年の夏は暑かったわよねえ」

ハヤト

「ああ。ミッドも酷かったもんなあ……ガチで死ぬかと思った」

ティアナ

「キャラも熱中症で倒れちゃうし、フリードなんて茹で上がって真  
っ赤になってたものね」

ハヤト

「白龍ならぬ赤龍になってたもんな」

ティアナ

「ただ、スバルとヴィータ副隊長は平気だったのが不思議よね」

ハヤト

「あれだろ？ やっぱアイス食べまくってたからじゃね？」

あとヴィータ副隊長は、リイン曹長使って天然クーラーやってたし」

ティアナ

「ああ……後で部隊長に怒られてたわね」

ハヤト

「中々どうして見物だった。」

さて、ザンバーさんからのお便りだが……ユニゾンに近い存在、ねえ。

あれか？ フュー ヨンなのか？」

ティアナ

「んなワケないでしょ」（スパーン）

ハヤト

「おふっ！ なんか懐かしい」

ティアナ

「そっぴや、ハリセンツツコミも久しぶりね。」

最近はや会苦巢飯婆とか、あっち系ばかり使ってたし」

ハヤト

「だなあ……ってそれは置いていて。」

ユニゾン出来るのに気付いてないんだったら、無理矢理ユニゾンするしかない状況においこんで、何かの拍子で偶然ユニゾン……と

かでいいんじゃないか？」

ティアナ

「どこのギャグ漫画よ！」

ハヤト

「甘いな。とあるスカイなライダーさんは、変身と空を飛ぶという2つの出来事を、全て偶然で起こしたという伝説があるんだぞ！」

ティアナ

「大御所になんてこと言ってんのよ！」（会苦巢飯婆）

ハヤト

「あばばばばば」

ティアナ

「ふう……あ、スタッフ。今の部分カットしていてね？ え？ 生放送だから無理？」

いいからやれ」

スバル

「ただいま。OHANASHIしてきたよー」

ティアナ

「……一応聞くけど、何してきたの？」

スバル

「垂直落下式DDT、コブラツイスト、619、RKOとかかな」

ティアナ

「何で全部プロレス技なの!？」

てゆーか、619とかRKOとか、プロレス知らない人にはわからないでしょ!!!」

スバル

「え〜? これくらい常識だよ〜」

ハヤト

「619、RKOが分からない人は、ググってみよう!!!」

ティアナ

「復活早いわね……」

ハヤト

「久しぶりだから、色々と溜まってるんだよ。再生力とか、その他諸々」

スバル

「あ、じゃあチョークスラム覚えたから、試してみたい?」

ティアナ

「だから何でプロレス技なの!??」

ハヤト

「チョークスラムは勘弁。

さてさて、それじゃあそろそろ始めるとするか!」

スバル

「1ヶ月ぶりの“リリカル マジカル とあ新らじお”!!!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートでっっす!!!」

リリカル マジカル とあ新らじお

第13回『フラグ大魔王、来る!!!』

ハヤト

「1ヶ月ぶりのらじお放送!

どうも、メインパーソナリティのハヤト!! ロックウェルです」

ティアナ

「お久しぶりです。同じくメインパーソナリティの、ティアナ!! ランスターです」

スバル

「プロレスって面白いよね! 同じくメインパーソナリティの、スバル!! ナカジマです!」

ハヤト

「んでは早速ゲストのご登場。

今日のゲストは、『魔法少女リリカルなのはStrikers  
Remem ber my heart』より。

フラグ大魔王ここに極まれり！ 女性陣は気をつける！ なフィ  
ル「グリード君」

スバル

「そして、フィル君のデバイスで、今回はユニゾン・デバイス（人  
型）状態でご登場のプリムちゃん！」

ティアナ

「それからもう一人。

if endingでまさかの擬人化！ 元気な僕っ子、フリー  
ドです！」

フィル

「って、ちょっと待てー！ーゐ！！

何だその悪意に満ち満ちた紹介文は！？」

プリム

「まあ、否定できないのが悲しいところですね……」

フリード

「そだね。だってフィルだし」

フィル

「味方からまさかの裏切り！？」

ハヤト

「そりゃあなあ、最新のif endingじゃ、俺の姉ちゃんも  
落としてるぐらいだし……」

スバル

「さすがフラグ大魔王！」

ティアナ

「アレで否定出来るんなら、たいしたもんよ」

フィル

「ぐっ……そこまで言われると、否定している自分が間違ってる気がしてきた……」

フリード

「大丈夫だよ！ フィルがフラグ大魔王でも、ボクはフィルの事大好きだからっ！」

フィル

「あ、ありがとう……」

プリム

「あーっ！ フリード、抜け駆けはダメですよっ！？ 私だって、フィルの事大好きなんですから！」

フィル

「プ、プリムまで……」

ハヤト

「……………リア充禿げて？ げて抜れて爆発しろ」

フィル

「そこまで言われることか!?!？」

ティアナ

「僻みだから気にしないで頂戴」

スバル

「そんなに僻まなくてもいいじゃん。ハヤトは、あたしとティアナにはモテモテなんだし！」

ハヤト

「向こうのif endingじゃ、2人ともフィルとイチャついてたけどな……」

フィル

「しつこいなお前も！」

プリム

「まあまあ、モテない男の悲しい僻みですよ」（嘲笑）

フリード

「だよね。フィルの方がずっとカッコイイもん！」（純真な笑み）

ハヤト

「やべえ、心壊れそう」

スバル

「あ、あはは……」

ティアナ

「あーもー、收拾つかなくなる前に最初のコーナーいくわよー！」

ハヤト

「うへーい」

スバル

「それじゃあ最初はこのコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「ゲストへの、5つの質問！」」

ハヤト

「このコーナーは、俺達が用意した5つの質問をゲストに答えてもらうコーナーだ」

ティアナ

「3人とも、そんなに緊張しないで答えてね」

フィル

「りょーかい」

プリム

「了解です」

フリード

「わかった！」

スバル

「それじゃあ最初の質問！」

『お名前は？』

フィル

「最初の紹介で言ってた気もするけど……フィル＝グリードだ」

プリム

「プリムです。プリンじゃないですよ」

フリード

「フリードだよ」

ハヤト

「……フリード、お前女だったんだな」

フリード

「そっだよ！　もしかして、ハヤトもボクの事男の子だと思ってたの！？」

ハヤト

「いやまあ、男ってか……雄？　だと思ってた」

フリード

「酷いよ！　お（自主規制）はついてなかったじゃん！」

フィル

「わーっ！」

プリム

「おおお、女の子が何てこと言ってるんですかぁっ!?!?」

フリード

「え? (聞かせられないよ!)ん、って言ったんだけど? ダメだった?」

ティアナ

「駄目に決まってるでしょ!?! ちょっとフィル! どーゆー教育してんのよ!?!」

フィル

「いや、俺に言われても!?!」

(\*、\* (っ) 【カンペ】 <フリードたん、コレ読んで

フリード

「んう? カンペ? いいよ。」

なにになに…… 『ふにゃあ………ボクのお腹、たぶたぶなのお』 『

ハヤト

「スタッフ自重おおおおっ!?!?!」

ティアナ

「いきなり出てきてなんてことやらせてんのよおおおおっ!?!?!?」

フィル

「フリードも読まなくていいから！ てか、読んじゃいけません！」

フリード

「そうなの？ でも、カンペで出てたし……」

プリム

「いいですかフリード。あのスタッフはドのつく変態だけしかいませんから、何を言われても無視しなきゃいけませんよ？ わかりました？」

フリード

「ん〜……うん。わかった！」

ティアナ

「スバル！ ちょっとあのスタッフ懲らしめてきて！」

スバル

「おっけー！ あたしのパワーボムが火を噴くよ！！」

ハヤト

「結局プロレス技かい……あ、行っちゃった」

ティアナ

「これで悪は滅ぶわ。それじゃあ、あつちはスタッフに任せて次の質問よ。」

『好きな食べ物？』

ファイル

「えーっと……チーズケーキかな。未来でティアナが作ってくれたものは、特に」

プリム

「むっ！ 私だってチーズケーキぐらい作れます！」

フリード

「ボクも作れるーっ！」

ファイル

「あ、ああうん。わかってる、わかってるから。ほら、2人も答えないと」

プリム

「誤魔化されたような……まあいいです。私は和食ですね。

第97管理外世界、地球の和食は絶品です」

ティアナ

「なのはさんの故郷よね？ 確かに、あのオスシってのはおいしかったわ」

ハヤト

「俺は蕎麦だなあ。アレ結構好き」

プリム

「ちっ、にわか和食好きめ……」

ハヤト

「何か黒い!？」

フリード

「ボクはね〜、チーズハンバーグっ！」

ハヤト

「子供だな」

ティアナ

「子供ねえ」

フリード

「子供じゃないよっ！」

フィル

「お、落ち着けフリード。大丈夫、俺はフリードが子供じゃないって知ってるから」

フリード

「フィル〜 だから大好きだよっ！」

フィル

「あ、うん、サンキュー……でもあの、抱きつくのは勘弁してくれない？」

プリム

「こらフリードッ！ マスターを独り占めしないでくださいっ！！」

フリード

「へへ〜ん、早い者勝ちだもんねーっ！」

プリム

「そ、それなら私もっ！」

フィル

「どわあっ!?! プ、プリムまで抱きつくっ!?!」

ハヤト

「……………」(イラスト)

ティアナ

「……………」(イラスト)

フィル

「パーソナリティ2人の目つきが凄い事に!?!」

「ちよっ、ちよっプリムもフリードも離れるっ! あん目は何かヤバイ!」

プリム

「いいじゃないですか。何かあっても“私が”守ってあげますから

」

フリード

「ボ、ボクだってフィルの事守ってあげるもんっ!」

ハヤト

「……………」フィルの処刑は後にするとして。次の質問」

フィル

「ちよっと待て! 処刑って何さ!?!」

ハヤト

「次の質問。」

『自分の性格を一言で表すと？』」

フィール

「無視かよ！……まあいい、ハヤト相手なら何とでもなるか。  
んー、性格ね。真面目だとは思っよ、自分でも」

プリム

「そして超鈍感で」

フリード

「フラグ大魔王だね」

フィール

「もうそのネタやめない!？」

プリム

「私は……そうですね、マスター至上主義です。マスターの為だったら、この命だって惜しくありません」

フィール

「無視!？ ねえ、無視なの!？」

フリード

「ボクはねえ、皆から凄く元気って言われるよ!」

フィール

「無視だよ……完全に無視だよ……（泣）」

ハヤト

「プリムは元がデバイスだからなあ、何となくわかるわ。  
ウチのブレイブハートもそうだったし」

ティアナ

「そうね。勿論、フィルが大好きだから、っていうのもあるでしょ  
うけど?」

プリム

「もちろんです!」

フィル

「……/ / /」

プリム

「マスター、愛してますよ!」

フィル

「……うん、俺も」

ティアナ

「……撃ッテイイカナ?」(イラッ)

ハヤト

「……イインジヤネ?」(イラッ)

フィル

「ちよっ!? 何その物騒すぎる会話!?!」

スバル

「たっただいま〜！ ……って、どしたのこの空気？」

ハヤト

「おう、おかえりスバル」

ティアナ

「助かったわ。あとちょっとで、思わずS・L・B撃つところだったもの」

フィル

「そんなに！？ そんなにムカついてたの！？」

ハヤト

「当たり前じゃね？」

ティアナ

「当たり前よね？」

プリム

「御二人も似たようなものでしょうに……。マスターに八つ当たりするのは理不尽じゃありませんか？」

フリード

「フィルを虐めたら駄目なんだから！」

ハヤト

「うっせーぞフリード！ その生意気なおっぱいを揉みくちやにしてやるっか！」

フリード

「ひっ!?!」

フィル

「やめるよコラ! それは俺のだ!」

フリード

「お、俺のって……/ / /」

プリム

「私のもっ! 私のもマスターだけのものですよ!?!」

ハヤト

「……揉んでいいよね? 答えは聞いてない!」

ティアナ

「やめなさいっ! スバル!」

スバル

「おっけーっ! おりゃあああっっ!」

ハヤト

「おべらっ!?!」

プリム

「おお! 素晴らしいデスバレーボム!」

フィル

「わーん! つー!?! すりー!?!」

カンカンカンカン!!!

スバル

「だっしゅー！」

プリム

「勝者、スバルさん！ いやあ、一瞬でしたね。どうですか、解説のティアナさん？」

ティアナ

「デスバレーボムを防げなかったのが敗因ね……ってあたしを巻き込むな！」

フィル

「……なんか思わずカウント取っちゃったぜ」

フリード

「ノリって怖いね」

ハヤト

「……………お前ら、被害受けた俺は無視か？」

全員（ハヤト除く）

「……自業自得って知ってる？」「」「」

ハヤト

「まあいいけど。再生力溜まってるから、速攻で復活できるし」

フィル

「……ハヤト、マジでこのラジオだと人間やめてるな」

ティアナ

「あたし達はもう慣れたけどね」

スバル

「ねー」

ハヤト

「はいはい。それじゃ次の質問だ。

『憧れている有名人は？（2次、3次問わず）』」

フィル

「俺はキラハヤマトかな」

プリム

「私はラクス＝クラインですね」

フリード

「ボクは……特に居ないかなあ？」

ハヤト

「吉良さんと申したか」

フィル

「な、何だよ？ 悪いか？」

ハヤト

「悪くは無いけど……ホラ、あの人って評判微妙じゃん？」

ティアナ

「2作目で主人公の地位を奪ったりしたしねえ」

スバル

「EDの一番上に吉良さんの名前を見たときは唾然としたよ……」

フィル

「う、うるさいな！ いいだろ別に憧れるくらいっ！！」

ハヤト

「まあそつだな。あーだこーだ言い過ぎた、悪い悪い。」

「それで、プリムは教主様だっけ？」

プリム

「失礼な言い方しないでください。ラクスさんは平和を訴えた素晴らしい方ですよ」

ティアナ

「まあ……うん……」

スバル

「間違っではないよね〜」

フリード

「？ ラクスさんって、あのおっぱい揺らして歌ってた人？」

ハヤト

「フリード。それは偽者だ」

フリード

「うん、知ってる。ラクスさんはおっぱい小さいもんね！」

ハヤト

「ハハハこやつめ。ハハハ」

フリード

「ハハハ！」

ティアナ

「そう言えばフリードって憧れてる人いないのね？」

フリード

「うん。だって、あんまり知らないし」

フィル

「そういえば、フリードってアニメとか見ないもんなあ」

ハヤト

「そんなフリードにこの人をご紹介」つ【バハムート零式】

フリード

「……わあ、わあーっ！ カッコイイ！！」

フィル

「おお、目がキラキラしてる」

プリム

「同じ龍同士、何か感じるモノがあったんでしょう」

ハヤト

「計算どおり」

ティアナ

「何でどこぞの新世界の神みたいな顔してんのよ」

スバル

「悪い顔してるね、ハヤト！」

ハヤト

「何となくしてみたただけでした。さて、それじゃあラストの質問。

『パーソナリティの3人に一言！』」

フィル

「あ、コレは作者から貰ってきたんで、俺が代表して読むぞ。  
えーと……なにになに？」

『スバルとティアナへ、あんまりハヤト君をボコボコにしないこと。』

照れ隠しも良いけど、いくらギャグ補正がかかっていても死んじやうからw』

だつてさ。よかつたなハヤト、味方が居て」

ハヤト

「うう……アルフォンスさん、アンタ本当にエエ人や……」

ティアナ

「照れ隠しって言うか……制裁？」

スバル

「だよねえ……照れ隠しだった時ってあったっけ？」

プリム

「ラジオ中ではあんまり無いでしょうね。というか、ハヤトさんて死ぬんですか？」

フィル

「確かに。そうそう死なないと思うんだが」

ハヤト

「……ラジオなら確かに死にくいけどさ！ けど俺だって死ぬとは思うよ！？」

何か最近自分でも『人間止めてきたなあ』とか思っちゃうけども！！！」

ティアナ

「さ、不死身の化け物は放っておいて、次のコーナーいきましょるか」

フィル

「そうだな。人類の規格から外れてる奴は放っておこう」

プリム

「私も微妙に人間じゃないですけど、ハヤトさんに比べれば十分人間ですね」

フリード

「ボクもー！」

スバル

「あたしもーっ！」

ハヤト

「……………（´・`・´）＜俺は人間じゃないのか」

ティアナ

「その訳わかんない再生能力無くしてから寝言を言いなさい」

ハヤト

「ぐすん…………次のコーナー行く前にCMだよちくせう」

in箱根

リンディ

「みんなに話があります」

ティアナ

「結婚でもするの？」

リンディ

「どうしてわかったの？」

シャマル

「え！ 再婚！？」

ザッフィー

「え？」

リンディ

「かたん携帯が使いやすくて、つい話が弾んで」

ザッフィー

「弾みすぎですよ……」

ティアナ

「今日来るとか言わないよね？」

リンディ

「貴女すいいわね〜」

ピッ

リンディ

「あ、ちょっと入って」

ザッフィー

「入ってって！」

ガラッ

エリオ

「……………」

ザッフィー

「へえ〜っ!？」

リンディ

「新しいおじいちゃんです」

エリオ

「よろしく」

ティアナ

「あたしより若い……………」

シャマル

「湯気まで出てる……………」

ザッフィー

「風呂入ったからだ!」

リンディ

「これが、息子のザッフィーです」

エリオ

「ザッファイ君、いい名前だ！」

ザッファイ

「……」

かんたん携帯、Hard Bank。

ハヤト&ティアナ&スバル

「『ツンデレ！ ティアナちゃん』」

スバル

「このコーナーでは、リスナーの皆さんから送られてきた台詞に、ティアナがツンデレな台詞を返してくれるよ」

ハヤト

「ではでは最初の台詞、フィル、頼んだ！」

フィル

「俺かよ!? ま、まあいいか。」

えーと、最初のお便りはデンライナーにお住まいの、RN・吉田眼鏡さん。

時間の波をつかまえて、今すぐに行こう約束の場所!

『足、怪我してるじゃないか! ほら、肩貸してやる。立てるか?』  
「」

ティアナ

「べ、別にいらないわよっ!

で、でもその、アンタがどうしてもって言うなら……借りてやらないこともないわ!」

616

スバル

「いいねいいね。それじゃあ次の台詞を、プリムお願い!」

プリム

「任せてください。とんでもなく恥ずかしいのを用意してありますよ!」

ティアナ

「何でそんなノリノリなのよ!?!」

プリム

「次のお便りは……どこぞのよろず屋の巨大な犬の胃の中に在住の、RN：監督提督さん！」

……食べられてるんですね、わかります。

『可愛いヤツに可愛いって言って、何が悪いんだ？』」

ティアナ

「なっ!?!? ばっ、馬鹿っ!」

そんな事いきなり言われたって、嬉しくなんかないんだからねっ!?!?」

ハヤト

「そいじゃもう一丁同じくRN：監督提督さんから！」

これは……シヨタっ子って設定らしいから、精神年齢的にフリード頼む!」

フリード

「ボクそんなに子供じゃないんだけど……まあいいや。」

『おねえちゃん、一緒に寝てもいい……?』」

ティアナ

「しょうがないわね。今日だけよ？」

ハヤト

「よし。今回はこんなモンだな」

ティアナ

「……最近コレに恥ずかしさを覚えないあたりに危機感を感じるわ」

フィル

「まあしょうがないだろ。ティアがツンデレ要員なのは、今に始まったことじゃないし」

プリム

「無印、A・Sではアリサさんが居ましたけど、S t Sではティアナさんだけですもんね」

フリード

「諦めって大事だよね」

ティアナ

「くう……っ！自分で薄々感じているだけに、言い返せないのが悔しいっ！」

ハヤト

「でもクリームゾン！」（ビクンビクン！）

スバル

「下ネタ禁止ーっ！」

ハヤト

「ぎゃあああああ！」

フィル

「おお、今度はリバース・インディアン・デスロック！」

プリム

「さっきは投げ技で、今度は締め技をチョイスですか」

フリード

「流石スバル！」

ティアナ

「アンタらも、何でそんな詳しいのよ……」

フィル

「いやまあ、ホラ。ラジオに来るに当たっての予習というか」

プリム

「スタッフから資料渡されました」

ティアナ

「メタなこと言ってんじゃないわよっ！ ああもう、とりあえず」  
レで“ツンデレ！ ティアナちゃん”は終わり！！ 次のコーナー  
いくわよー！！」

ハヤト

「次って言っても、そんな時間ないぜ？」

スバル

「そだねえ。じゃ、ふつおた読もうよ。結構溜まってるよ？」

ハヤト

「お、そうか？ どれどれ……。」

ベルカ自治区にお住まいの、RN：遠峰シンさんから。

『ゲストさん、パーソナリティ皆さんは占いはやったりしますか？  
先日、某サイトでブラックの契約者能力占い、と言うサイトがあったので、

勝手ながら三人を占ってみたんですが、面白い結果が出たので報告させて戴きます。」

・契約者 スバル「ナカジマ さんの能力

？能力

「締切日の改ざん」

？対価

「全身に洗濯バサミを装着」

・契約者 ティアナ「ランスター さんの能力

？能力

「えっちな妄想」

? 対価

「幼女への告白（アグネスの目の前で）」

・契約者 ハヤト＝ロックウエル さんの能力

能力

「蘇芳のタイツを奪う」

対価

「ひどい下痢」『』

スバル

「能力は凄く欲しいけど……全身に洗濯バサミは嫌だよ……」

プリム

「絶対はやてさん辺りに紐つけて引っ張られますよね」

フィル

「あー……絶対やるだろうなあ」

ティアナ

「てゆうかあたしの能力何よ!? えっちな妄想って!」

フリード

「むっつりスケベ?」

ティアナ

「違っわよっ!」

ハヤト

「あれだろ？ 妄想で高町隊長×自分とかやってるんだろ？」

ティアナ

「ぶっ殺すわよ！？」

プリム

「まあ、ティアナさんも思春期ですからねえ。致し方ないでしょう」

フィル

「気にするなよティア。俺は気にしないから。思春期だもんな、仕方ないよ」（あたたかい目）

ティアナ

「違うっつってんでしょ！？ ぶっ飛ばすわよ本当に！！」

ハヤト

「つか俺の能力も微妙じゃね？」

「タイツを奪うのが蘇芳ちゃん限定で……せめて隊長陣のにしてくれよ。」

「そしたら対価もよろこんで払うのに」

フィル

「変態だな」

プリム

「変態ですね」

フリード

「ド変態だね」

スバル

「死ねばいいのに」

ティアナ

「てゆうーか死ね」

ハヤト

「（；；；）」

フィル

「な、泣くなよ。冗談だったの」

プリム

「え？ 私本気でしたけど」

フリード

「ボクも」

スバル

「あたしも」

ティアナ

「同じく」

ハヤト

「フィル！ お前のそのフラグ大魔王資質をわけてくれ！ そうしたら味方が増える気がする！」

フィル

「わけてって言われてわけられるかよ！ 出来るんならむしる貰って欲しいくらいだったっのー！」

ハヤト

「貴様、自分は好きでモテてる訳じゃないっつーのかゴルア！？」

フィル

「そうだよ！ フラグ大魔王とか呼ばれる方の身にもなれっつーんだ！」

ハヤト

「ギギギギ……貴様は今、全国のモテない男子を敵に回したからな！ 明日っからお前ん家の郵便箱に、揚げ物が一杯に詰まってギトギトになった紙袋が毎日届くからな！！！」

フィル

「何だそのみみっちい嫌がらせ！ でも地味に嫌だなオイ！」

ハヤト

「きーーっ！ 妬ましい！ 妬ましい！ 妬ましい！ たら妬ましい！ ぱるぱるぱるぱるぱるぱるぱるぱるぱるぱる！！！」

ティアナ

「黙りなさいその似非パルスィ。東方ファンを敵に回す気？」

ハヤト

「だってフィルが羨ましすぎてえ……」（号泣）

スバル

「そ、そんなに本気で泣かなくても……」

フリード

「ハヤトは馬鹿だなあ（笑）」

あ、カンペだ。えっとなになに…… 『CM入ります、終わったらEDトーク』 だって」

プリム

「はいはい。それじゃあその嫉妬神は置いて、CMいきまーす」

ユーノ

「新シーズンが始まったら、出番がなくなったその貴方！」

エイミィ

「ポジシヨン的にはもっと出てもいいのに、出番が全く無くなったその君！」

ザッファイ

「人間になれるのに、すでに人間と認識されなくなったそのお前！」

シグナム

「働いてるのにニート侍と呼ばれるその貴様！」

全員

「「「「脇役救済委員会で、ともに主役の座を勝ち取るっ！」「」「」

(脇) 脇役救済委員会

超人気の新人女優、スバルがいよいよCDデビュー！

デビュー曲『I LOVE ICE』、9月25日遂に発売！！

予約特典はスバルの等身大ポスターと、スバル直筆サイン入りの水着ポストカード！！

更に更に！ CDに同封されている応募券を贈れば、抽選で10名様にスバルからの愛の囁きが入った特別CDをプレゼント！  
さあ！ 今すぐ近くのCDショップへ行って予約しよう！！

(株) 小狸エンターテインメント

ハヤト

「はい。とゆー訳でエンディングトークだぜ」

フィル

「何かもう、すっげー疲れた……」

プリム

「大丈夫ですかマスター？ マッサージします？」

フリード

「お風呂にする？ それとも……」

プリム&フリード

「わ・た・し？」

ハヤト

「……殺ッテイイカナ？」

ティアナ

「イインジヤナイ？」

スバル

「ムシ口殺口ウヨ？」

フィル

「ほ、ほら2人も！ あっちがまた何かヤバイから！ な！？」

プリム

「はい」

フリード

「ぷー」

ハヤト

「……まあいい。それじゃあフィル、番宣頼むぜ」

フィル

「オーケー。俺の出演している作品は、

『魔法少女リリカルなのはStrikerS』Remember my heart』だ。

ゆりかご決戦に負けた管理局は、何とか生き残ったティアナとフィルを中心に最後の決戦に挑んだ。

クアットロを倒し、すべてが終わったかに見えたが……。

この物語は、オリジナル主人公の俺、フィル「グリードが女神の力を借りて逆行し、再びスカリエッティに戦いを挑んでいく物語だ。本編は完結済みで、今はありえたかも知れないif endingを更新中だ」

ハヤト

「ちなみに、今やってるのは他の作品のヒロインとのif endingだな。」

最新更新だと俺の姉ちゃん、ハヅキ「ロックウエルがフィルといちやいちやしてるぞー！」

プリム

「読んで損はありませんから、是非読んでみてくださいね」

スバル

「それじゃ、次にお便りに関するお知らせを、フリードお願い」

フリード

「おっけー！

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーさんからの便りを待ってるよ。

“なぜなに とあ新”では、ハヤト達メインパーソナリティ3人やゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んじゃったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定だって。

ハヤトはそうそう死なないだろうから、多少無茶なお題でもオッケーだよ。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人のイラストなども募集してるよ！

送って貰ったら、ラジオで使ったりするから、リスナーの皆、どんどん送ってね！」

ティアナ

「最後にゲストに関するお知らせね。プリム、お願い」

プリム

「了解です。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選です。

なので、応募した順番通りにゲストに呼ばれるとか限りません。

そこはご了承くださいね。

選ばれた作者さんには、ラジオからメッセージでお知らせが届きますよ〜。

それとゲスト立候補に関して少し条件を加えさせてもらいました。ゲスト立候補する作品は、最低でも10話以上更新されていて、月に1回程度は更新されている作品だけとします。いちおう番宣も兼ねてるから、ってことみたいですね〜。

……こんなところでしょうか」

ティアナ

「ありがと。それじゃあ、今回の“リリカルマジカルとあ新らじお”はここまでー！」

そしてちょっとお知らせです！」

ハヤト

「次回のとあ らじ、俺達のスケジュールが合いそうもないんで、特別にメインパーソナリティが別の人になる予定だ。気になる俺達の代役パーソナリティは……」

スバル

「作者さんの新作、『私が最強モノを書いたら、こんなん出来ました。』の主人公。」

イシュメイル「バルファさんです！」

ティアナ

「それではそろそろお別れの時間です。お相手は、ティアナ「ランスターと」

ハヤト

「ハヤト「ロックウエルと」

スバル

「スバル「ナカジマと！」

フィル

「フィル「グリードと」

プリム

「超絶美少女、プリムと」

フリード

「フリードでお送りしました！」

ハヤト&ティアナ&スバル&フィル&プリム&フリード  
「「「「「バイバイ！」」「」「」「」

ティアナ

「この番組は、

(狼) Hard Bank

(脇) 脇役救済委員会

(株) 小狸エンターテインメント

(海) 粉碎！玉砕！大喝采！

(海) 強靱！無敵！最強！

(海) 全速前進DA

(海) ふつくしい……

(海) ゴッドハンドクラッシャー！

の提供でお送りしました。

……これ、むしろ海 コーポレーションでいいじゃない」



### 第13回『フラグ大魔王、来る!!!』（後書き）

今回のパーソナリティは、私の新作の主人公になりましたw  
次回ゲストに選ばれたキャラは、性別によっては大変なことになり  
そうです。

最後に、ちよつとゲスト立候補の確認を。

沢山の応募があったので、私自身が見逃してしまった場合もありますので。

漏れていた場合は、メッセージか感想でお知らせください。  
では、列挙していきます。

- ・高町龍也（魔法少女リリカルなのは 朱の英雄）
- ・たい焼きヘッドさんorレナード（魔法少女リリカルなのは 伝説を継ぐ者）
- ・藤井優斗（魔法少女リリカルなのは 次元を操りし者）
- ・ジョーカー&ジャンガ&ガールン（リリカルヒーローズ 金色の閃光と毒の爪）
- ・アウルIIアパレシオン（魔法少女リリカルなのはStriker S 亡霊の弾丸）
- ・月城 朔也（魔法少女リリカルなのはStrikerSとあるガンナーの報告書）
- ・ロイドIIアーヴィング（リリカルなのは 君と響きあう物語）
- ・ヒスイIIハーツ（魔法少女リリカルなのはStrikerS 天を撃ち抜く烈風）
- ・草薙 烈（魔法少女リリカルなのはStrikerS 紅闇の少年と機人の少女）
- ・リック・ハラオウン（魔法少女リリカルなのはStrikerS

紅き聖騎士)

・監督提督さんの作品(魔法少女リリカルなのは O G - A S T R A Y S)

(リリカル銀魂 Another ) 魔法と少女  
とかぶき町ライフ)

・紫苑 or セレナ(魔法少女リリカルなのは Strikers ) 最強の魔導師は転生者)

・ユウ&ミツキ(魔法少女リリカルなのは Strikers ) 影の守護者)

・黒崎大河(魔法少女リリカルなのは Strikers 最高の守り手)

・田上執斗&村咲紫(Card Devizer ) 苦しみと哀しみを超えて)

・トータスII ヴィレン(死神騎士の6課の日々)

・ナナシ&ヴァイス(他)(魔法少女リリカルなのは Strike r S ) 炎の墮天使)

一応私が把握しているのは、この方々です。

立候補したのに列挙されてないぞーって作者さんは、お知らせください。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま

います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いま  
せん。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合も  
あります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・ゲストに立候補できる作品は、最低10話以上更新され、

更新停止をしていない（少なくとも月1更新程度）作品に限定  
させていただきます。

第14回『あの女に関わると碌な目に会わない(金銭的に)』

イーちゃん

「……へえ、これがラジオブースというものか。初めて来たけれど、中々に広いものだね」

ディレト

「あら？ わたくしは2回目ですからそんなに気になりませんが、そんなに狭いと思ってましたの？」

イーちゃん

「まあね。基本的には椅子に座って喋っているだけだろう？」

それこそ、四畳半くらいの部屋だと思っていたよ」

ディレト

「狭すぎですわよ！ 四畳半の部屋じゃ、ゲストが呼び出されませんわー！」

イーちゃん

「言われてみれば、確かにそうだね。さて、では最初にイラストの紹介をしましょうか」

ディレト

「そうですね。折角送ってくださったんですもの、紹介しない訳にはいきませんわ」

イーちゃん

「送ってくれたのは、死後の学園にお住まいの、RN：クルセイドさん。」

……死んだ後にも学校生活があるんだねえ。興味深い」

ディレト

「送ってくださったイラストはこちらですわよ」

> i 1 2 5 8 1 — 1 7 7 0 <

イーちゃん

「おお、ラジオの雰囲気が良く出ているね」

ディレト

「ハヤト様の鎖骨ハヤト様の鎖骨ハヤト様の鎖骨……」（ハアハア）

イーちゃん

「ディレトちゃん、自重しなさい。まだ始まったばかりなのに飛ばしすぎだよ」

ディレト

「ハッ！ し、失礼しましたわ」（ジュルリ）

イーちゃん

「よだれも拭いてね。しかし、このイラストでもスタッフは相変わ

らず良い仕事をしているようだ」

ディレト

「あら？ イシユメール様はあまり驚きませんか？

普通はあのスタッフを見ると、大概の方が驚いてドン引きしますのじ」

イーちゃん

「うん？ ああ、彼らをこのラジオのプロデューサーに紹介したのは私だからね。

それほど驚いたりはないさ」

ディレト

「……イシユメール様が元凶でしたの。という事は、イシユメール様もロリコンなんですの？」

イーちゃん

「残念ながら、私はそれなりに成熟した女性が好きな人間だよ。

彼らとは趣味嗜好が違うとはいえ、同じ紳士として同盟を組んでいるだけさ」

ディレト

「嫌な同盟ですわね……」

イーちゃん

「それはともかく、私達に割り振られたコーナーをやってしまうとしよう。」

まずはこのコーナー」

イーちゃん&ディレト

「「なじって！ ディレトちゃん！」」

イーちゃん

「このコーナーは、『励まして！ スバルちゃん』宛てに届いたお便りに対して、ディレトちゃんがS心全開でお返事をするというドMには堪らない企画だね」

ディレト

「一応、ちよつとだけ励ましたりもして差し上げてよ？」

イーちゃん

「それでは最初のお便り。」

ミッドチルダ首都クラナガンの高級マンション12階にお住まいの、RN：サリエル・フォーゼオンさん。

高級マンションとは、中々に良い暮らしをしているようだね。

『最近久しぶりにとあるオンラインゲームに復帰したのですが、前のデータがすべて消えていました。かなりやり込んだキャラだったのでメガツサ凹みました……。』

こんな不幸な俺に、立ち直れるように気合いが入る励ましをお願いします『「」

ディレト

「オーツホッホッホ！ 無様ですわね！ オンラインゲームなんてやるつと思っからですわ！」

「べ、別に自分が出来ないから悔しい、って訳じゃないんですのよっ！？」

「……ま、まあ。またゆっくりやり込めばよろしいのではなくて？ ゲームは逃げたりしませんわ」

イーちゃん

「ツンデレと励まし、なじりの入った素晴らしいコメントだよディレトちゃん。」

「では次のお便り。150ガバラストレートの鞘の中にお住まいの、RN：監督提督さん。」

「……宇宙空間での呼吸は大丈夫なんだろうかね？」

「『お金が無いんです。切実に。何か気の利いた励ましを下さいm

』———m

ちなみに、「お金よりも大切なものがあるよ！」はテンプレなのでそれ以外で1つ」

ディレト

「励ましてもらう立場なのに、随分と偉そうですわねえ？」

「お金が無いのなら、ケーキを食べればよろしいのよっ！ それが

嫌ならゲームのソフトでも漫画でも家財道具でも売ってしまえばよ  
ろしいのですわっ!」

イーちゃん

「……お金が無いんだから、ケーキも買えないんじゃないかい？」

ディレト

「へ? ……あ」

イーちゃん

「ディレトちゃん……お馬鹿だお馬鹿だと聞いてはいたけれど……」

ディレト

「そ、そんな哀れみの目で見ないでくださいませっ! わ、わざと  
ですわ! わざとっ!」

イーちゃん

「そうだね。そういう事にしておこうね。」

さて、では次で最後のお便り。そこはきつと……エデンさ、にお  
住まいのRN:武闘鬼人さん。

これは住所なのかな? 随分とユニークだね。

『今までほとんど毎日のように小説を更新してきました……。  
このペースを続けたいのに元気が……』

ああ……もう……ゴールしても……いいですか? 『「

ディレト

「何を寝言をほざいてますの？ 貴方に休む暇なんて与えられてなくてよ？」

さあ！ 今すぐ馬車馬の様に働いて続きを書きなさい！  
少しでも休んだらわたくし直々におしおきですわ！」

イーちゃん

「はい。今回はここまで……と言っても、次回は多分ないだろうけどね」

ディレト

「ふふん。ちゃんと出来ましたわ！」

イーちゃん

「……そうだね。ケーキはお金が無いと買えないって分かったものね」

ディレト

「だ、だから！ あれはわざとだと言っているでしょう!？」

イーちゃん

「はっはっは。そういう事にしておこうね。  
けれど、今回は『励まし』よりも『なじる』方が主体になっていたから、もしかすると苦情がくるかも知れないなあ」

ディレト

「知りませんわよ。わたくしは言われた通りの仕事をしただけ  
もの」

イーちゃん

「確かにそうだね。私達は言われた仕事をしただけだし、苦情はス  
タッフが何とかしてくれるだろう。」

それでは、“リリカル マジカル とあ新らじお” 第14回……」

イーちゃん&ディレト

「スタートです(ですわ)」「」

リリカル マジカル とあ新らじお

第14回 『あの女に関わると碌な目に会わない(金銭的に)』

イーちゃん

「さて、そんな訳ではじまった第14回。

今回限りのメインパーソナリティを務める、イシユメール「バル  
ファです」

ディレト

「同じく！今回限りのメインパーソナリティ、ディレトですわ！」

イーちゃん

「それでは早速今回のゲストを呼ぶことにしよう。」

今回のゲストは、『魔法少女リリカルなのは』伝説を継ぐ者』から。

生ける伝説の孫にして作品の主人公。

最近ちよっといけない方向に目覚め始めて困っている、レナード

「レイ＝マグナス君。」

そして、レナード君の部下で、天才美少女魔導師。

色々とちっちゃい女の子、未亜＝アウステラちゃんだ」

ディレト

「更に更に！なんと作者であるたい焼きヘッド様もお越しですわ！

それでは、どうぞ〜」

レナード

「えーと、とりあえず一言。」

何スカその紹介！？色々と誤解されるでしょうが！〜」

未亜

「色々小さいって何よ！アタシはまだ成長期なのっ！これがらなのっ！」

たい焼きヘッド

「いやー、未亜は無理じゃないかな。作者的に」

未亜

「作者自らアタシの希望を断つな――っ！――っ！――っ！」

イーちゃん

「はっはっは。未亜ちゃんは元気だねえ、何かいいことでもあったのかい？」

未亜

「そこっ！ さりげなく化物語ネタを入れるなっ！」

ディレト

「鋭いツッコミですわね……ティアナ様に勝るとも劣りませんわ」

未亜

「誉められても嬉しくないっ！」

イーちゃん

「まあまあ、ディレトちゃん。あんまり虐めると泣いてしまうっよ？」

未亜ちゃんは泣き虫さんらしいからね」

未亜

「泣き虫じゃないもんっ！ ……ぐすっ」

ディレト

「……っ／＼／」（ゾクゾクッ）

レナード

「あ、ディレト……さんの変なスイッチ入った」

たい焼きヘッド

「恐らく、未亜の泣き顔がツボに入っただと思われな。ドSなディ

レトにはツボだったんだろう」

ディレト

「ほーらほーら、泣きますわよ？」

「すぐ泣きますわよ？ 絶対泣きますわよ？ ホラ、泣きますわよ？」

未亜

「ううううう……………」

レナード

「うわぁ……………すっげー楽しそう」

たい焼きヘッド

「素晴らしいS顔だ。さすがラスボス」

イーちゃん

「とはいえ、ここで泣かれてしまったてはラジオが進まないなあ。

ホラ、ディレトちゃん。今はそこで止めておきなさい。弄るなら、後でゆっくりと、ね？」

ディレト

「そうですねえ。オフレコのところまで、じっくりたっぷりねっとりもっちり弄って差し上げますわ」

未亜

「お、お断りよっ…！」

イーちゃん

「よし。話が纏まったところで、定番のコーナーといっつ。それで

は……」

イーちゃん&ディレト

「「ゲストへの5つの質問！」」

ディレト

「このコーナーでは、ゲスト様に対してわたくし達が5つの質問を  
していきますわ」

イーちゃん

「特に難しい質問はないので、気軽に答えてくれると助かるよ」

レナード

「ういっす」

たい焼きヘッド

「オツケーですよ」

未亜

「うー……わかったわよ」

イーちゃん

「それでは、最初の質問。」

『お名前は？』

たい焼きヘッド

「どうも。たい焼きヘッドです」

レナード

「レナード。レイ。マグナスです」

未亜

「み、未亜。アウステラです……」

たい焼きヘッド

「名乗るたびに緊張してるな？」

未亜

「るさいっ！」

イーちゃん

「未亜ちゃんは恥ずかしがり屋なのかな？」

未亜

「そんなことないわよっ！」

ディレト

「あらあら？ そんなに真っ赤になって言っていたら信用できませんわねえ？」

未亜

「うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ……」

ディレト

「その反応、堪りませんわぁ……」（ゾクゾク）

レナード

「……あの人やっぱ怖えよ」

たい焼きヘッド

「そうか？ ちょっと弄ってるだけだろ、アレくらい」

イーちゃん

「まあ女性は女性同士で絡ませるとして。レナード君のマグナス姓は、例のあの小説、もしくはアニメを見た人からすれば、結構馴染みの深い名前らしいね？」

レナード

「まあ、一応伝説の魔道士って設定らしいですね」

たい焼きヘッド

「ちなみに、彼の中には魔王の7分の1が封印されていたらしいぞ」

イーちゃん

「魔王を封印していた故に強かったのか、強かったが故に魔王を封印されたのか……」。

原作を知らない私には、なんとも区別がつかないところだね」

たい焼きヘッド

「まあ、詳しいことはアニメか小説でってことで」

レナード

「さりげなく商業作品を宣伝すんな！」

イーちゃん

「まあまあ、いいじゃないかレナード君。と、そういえば女性陣はどうしたかな？」

ディレト

「ヲホホホホ！ そんな小さい身体で私に歯向かおうなんて100飛んで10年早いですわよ！」

未亜

「飛んでないじゃない！ あと身長だってそんな変わらないしっ！」

ディレト

「ヲホホホホホホ！ 負け犬が何かホザいてますわねえっ！」

未亜

「うううううう……」

ディレト

「泣きますの？ 泣いちゃいますの？」

未亜

「な、泣かないわよっ！」

イーちゃん

「……楽しそうで何よりだ」

レナード

「いや、楽しそうで済ましちゃ駄目っしょ！？ 完璧イジメじゃないッスか！……」

たい焼きヘッド

「ま、確かにこのままじゃラジオ進まないもんなあ。ほら、未亜。一旦やめてこっち戻って来なよ」

イーちゃん

「ディレトちゃんもだよ。一旦終わって、司会を手伝ってくれるかな？」

未亜

「うー……命拾いしたわねディレト！ 後でギッタギタにしてやるから！」

ディレト

「ああ、楽しかったですわあ。さて、それじゃあ次の質問いきますわよ？」

未亜

「無視すんなっ！」

ディレト

「次の質問はこちら！」

『無人島に何かひとつだけ持っていけるとしたら、何を持っていく？』

たい焼きヘッド

「無人島……」

レナード

「食いもん」

未亜

「即決っ!？」

レナード

「デカイ方がいいな。クジラとか」

たい焼きヘッド

「色々敵に回す発言はよせ……」

イーちゃん

「海の馬とかに怒られてしまっよ?」

ディレト

「イシユメール様も、あまり固有名詞を出しては駄目ですよ」

イーちゃん

「おっと、これは失敬。それで、未亜ちゃんは何を持っていくのかな?」

未亜

「アタシは……そうね、エイギス持ってくわ」

レナード

「デバイスか? 夢のねえ答えだな……」

未亜

「アタシ飛べるしね」

ディレト

「質問の意図を理解しきれない、お子ちゃまの答えですわねえ。これは『脱出できない』という大前提がある状態での質問なんですわよ?」

未亜

「知らないわよ。そんな前提があるなら、最初に書いておけばいいんだわ。」

書いてない以上脱出だって出来るのよ。文句ある!??」

ディレト

「ありませんけどお、未亜様がお子ちゃまって事が証明されただけですわよねえ?」

イーちゃん

「……私はノーコメントということぞ」

レナード

「同じく」

たい焼きヘッド

「同じく」

未亜

「なっ!?!? そ、そこはアタシを庇いなさいよっ!?!」

イーちゃん

「たい焼きヘッドさんは何を持っていきますか?」

未亜

「だから無視すんにゃー！ー！ー！ー！！！」

たい焼きヘッド

「んー。俺は目一杯高い酒でも持つてつて最後の晚餐だな」

レナード

「オメーはもう少し自重しろ」

未亜

「アンタらも人の話を聞けー！ー！！！」

イーちゃん

「最後の晚餐か。しかし、酒だけでは味気ないのでは？」

たい焼きヘッド

「いやいや、無人島から見える夜空の星の輝きと君の笑顔さえあれば、他に肴はいらないさ」

レナード

「甘あー！ー！ー！ー！！！」

未亜

「ネタが古いつ！」

ディレト

「……未亜様はホントにツッコミ気質ですわねえ。ティアナ様と勝負させてみたいですよ」

イーちゃん

「そうだねえ。まあ、涙目になっちゃっているあたり、ティアナち

やんに比べて打たれ弱いみたいだけれど」

ディレト

「涙目の未亜様……ああ、もっとキャンキャン鳴かせてみたいですわあ……」

未亜

「アンタも何うつとりした顔でふざけた事言ってるのよ!？」

ディレト

「わたくしのモットーは、『自分の欲望には正直に』ですもの」「えっへん」

未亜

「胸を張るな! 自慢そうな顔するな! そのどや顔やめなさいよっ!」

イーちゃん

「はっはっは。未亜ちゃんは本当にツッコミが上手いね。どこかで訓練したのかい?」

未亜

「してないっ!」

レナード

「……ところで、イシユメールさん」

イーちゃん

「? どうしたんだい、レナード君」

レナード

「何か今回、スタッフが静かじゃないですか？」

未亜の容姿から考えるに、すっげー暴走しそうだと思ってたんですけど」

イーちゃん

「ああ、スタッフならあっちだよ？」

たい焼きヘッド

「あっち………ってうおおおっ！？」

？（、 - -、） 【我が生涯に、一片の悔い無し！！】

レナード&たい焼きヘッド

「すっごい満ち足りた顔で天に還ってる……っ！？」（ガビーン）

イーちゃん

「未亜ちゃんの泣き顔がディレトちゃん以上にツボに入ったようだね。」

幼女+泣き顔というコンビに、精神力やその他諸々全てを削り取られたんだろう」

レナード

「変態ここに極まれり、ってヤツですか」

たい焼きヘッド

「違う！ アレは紳士道！ 紳士ゆえに、人は苦しまねばならん！」

レナード

「お前も何どこぞの聖帝様みたいなこと言ってるの！？」

イーちゃん

「はっはっは。やはりたい焼きヘッドさんとは馬が合いそうですね」

たい焼きヘッド

「いやいや全く」

レナード

「……はあ。もういいや」

イーちゃん

「紳士についての話題はとりあえず置いておいて、次の質問にいつてみようか」

レナード

「置いていてって……ああ、もういいや」

イーちゃん

「それでは次の質問。

『自分の性格を一言で』

たい焼きヘッド

「一言でなら』適当」

レナード

「ダメ人間じゃねえか……」

たい焼きヘッド

「それも可」

イーちゃん

「まあ、小説を書く人にはある程度適当な人の方が向いているかも知れないね。」

ウチの作者のように無駄に考えてしまう人だと、一度考えでドツボに嵌ってしまうと中々抜け出せなくなってしまっしね。より良い文章を書こうとして仕事中也考えに耽ってしまったり……」

ディレト

「頭が固いんですわよねえ」

イーちゃん

「作者の悪口はここまでとして。次は未亜ちゃんかな？」

未亜

「えっと、アタシはねえ……アタシはあ……」

レナード

「泣き虫」

たい焼きヘッド

「弱虫」

未亜

「ちつがああうっ！！ア、アタシは……ほら、カンペキ……とか」

たい焼きヘッド

「どこがだ」

レナード

「全くだ」

イーちゃん

「自分で完璧と言ってしまつのは、流石にちょっと恥ずかしいと思  
うよ?」

ディレト

「完璧WWW」(嘲笑)

未亜

「うるさいわよっ! レ、レナードはどうなのよっ!」

レナード

「オレかあ? うーん。一応、強気の突撃思考って設定にやなつて  
る」

イーちゃん

「レナード君の実力を鑑みるに、そういう思考になつても仕方ない  
のかも知れないね」

ディレト

「主人公が弱気じゃ、イマイチ盛り上がりませんものね」

未亜

「あ! あと、妙などこ優しかったりするわよね?」

レナード

「んー。なのはにも言われたな。それも有りだろ」

イーちゃん

「時折見せるレナード君の優しさに、女性陣はコロリとってしま  
うわけだね」

たい焼きヘッド

「汚いなさすがレナードきたない」

ディレト

「仏の顔を二度までという名言を知りませんか？」

レナード

「黙れそのブロンティスト2人！」

未亜

「いや、それがわかるレナードも何なのよ？」

レナード

「そこはツツコむな！」

イーちゃん

「はっはっは。レナード君もさりげなくブロンティストなのは確定  
的に明らかだね」

未亜

「イシユメイルさんも微妙にブロント語入ってませんか？」

イーちゃん

「まあ、それは言いつつ無しということに頼むよ。未亜ちゃん。さてさて、それでは次の質問だ。」

『憧れている有名人は？（二次、三次問わず）』

たい焼きヘッド

「玉木宏」

レナード

「またスゲー答えが…」

たい焼きヘッド

「憧れるのは勝手だろ」

イーちゃん

「そこは本人の自由意思だからね。しかし玉木宏さんか……私はのめカンタービレと、MWしか知らないね。」

ドラマなどは余り見ない方だから、新ドラマのギル イゝ悪魔と契約した女ゝも見ていないし」

ディレト

「その割には、ちゃんと知ってますのね」

イーちゃん

「私も好きな俳優さんだからね。一応チェックはしているのさ。それでは、次はレナード君。頼むよ」

レナード

「オレですか？ オレはまあ……本編でも言ってますが、なのはッ

スね」

未亜

「へえ？ そうなんだ」

レナード

「んで？ お前は？」

未亜

「アタシはそうねえ。 初音ミクさんが……」

たい焼き

「……………」

レナード

「……………」

イーちゃん

「……………」

ディレト

「……………」

未亜

「な、何で黙るのよっ！ 作者のアタシのイメージボイスIVがっ！」

イーちゃん

「いや、別に何故という理由は無いのだがね」

ディレト

「『ミックミックにしてやんよ』ならぬ、『みつあみあにしてやんよ』とでも言つつもりですの?」

未亜

「そんなつもり無いわよっ! 何よ! 何か文句あるのっ!?!」

イーちゃん

「……レナード君は、なのはちゃんか。同じ広範囲攻撃が得意、というところもあるのかな?」

レナード

「そうツスねえ。それよりも、やっぱりアイツの考え方とか生き方とか……そっち方面ツスかね」

ディレト

「なのは様の生き方に憧れるなんて……レナード様、ドMですか?」

たい焼きヘッド

「まあ、そんな感じも無きにしてもあらずって感じだけだな」

レナード

「やめるよ!?! 本気にする人いるだろ!?!」

未亜

「……無視した」

たい焼きヘッド

「気にするな、俺は気にしない。ってことで次だ次」

イーちゃん

「ふむ。まあ人それぞれ、ということだしね。  
それでは時間も時間だし、たい焼きヘッドさんの言つとおり最後の質問にいくとしよう。」

『パーソナリティの2人に一言』どうぞ

レナード

「……セクハラは控えたほうがいいと思います。イシユメールさん。  
あとディレト……さんにはどうも恐怖が先立つ」

イーちゃん

「アレはセクハラでは無いよ、レナード君。成年男子のお茶目というモノさ」

レナード

「だから余計にダメな気がするんすけど……」

ディレト

「普通だったら捕まりますわよねえ。何で捕まらないんですの?」

イーちゃん

「まあ、色々と手があってね」

たい焼きヘッド

「汚いなさすがイーちゃんきたない」

イーちゃん

「それほどでもない」

レナード

「だから何故にプロント語……」

未亜

「……無視したあ」

たい焼きヘッド

「お前はジワジワ泣き顔になるな……。イーちゃんとはいい飲み仲間になれそうな気がします。」

ディレトは出番ないけど頑張れ！」

レナード

「その飲み会にはぜってえ行かねえ。そしてそこ触れるな。ディレトがかわいそうになってくる……」

ディレト

「放っておいてくださいな！」

わたくしはもう、ティアナ様のルートでラスボスをやったから別にいいんですよ！」

イーちゃん

「確かにそうだねえ。一度ラスボスという大役をやったんだし、出番が無くなっても仕方ないね」

たい焼きヘッド

「マジどんまいディレト」

ディレト

「だから放っておいてくださいなっ！」

未亜

「グスツ……」

レナード

「ああもっ、泣くなって……ほら。お前の番だぞ？」

未亜

「うん……ぐすっ。お二人とも頑張ってください」

たい焼きヘッド

「コメント投げ槍……。まあ、二人の活躍は今後も期待しています。特にディレト」

レナード

「だからそこは触れるなあっ!!」

ディレト

「いつまで引つ張るつもりですか!?! 未亜様を虐めますわよ!?!」

未亜

「な、何でアタシなのよお……」

ディレト

「その泣き顔がゾクゾクくるからですわ!」

未亜

「う、う、う、う、う……っ」

ディレト

「~~~~っ!!!!/!/」(ゾクゾクゾクゾクッ!)

イーちゃん

「それでは、ディレトちゃんが恍惚の表情になったところで、このコーナーは終わりとしようか」

レナード

「そうツスね。そうしないと、色々收拾つかなさそうですし」

たい焼きヘツド

「それはそれで面白いけどなー」

ディレト

「うふふふふ……未亜様あ、こっちにいらしてくださいな」

未亜

「い、嫌よ！ 絶対に嫌っ！」

イーちゃん

「では、ここで一旦CMだ」

ザッフィー

「考え直してくださいよ！ 母さん！」

リンディ

「あらく、恋に歳の差なんて」

エリオ

「たったの 歳ですよ」

ザッフィー

「ふんっ！」

シャマル

「でも素敵ね」

エリオ

「あ。これ、君に似合うと思って」つ【サツマイモ】

リンディ

「あら素敵なお芋」

シャマル

「ロマンチックねえ」

ザッフィー

「我は反対です！」

ティアナ

「でもいいじゃない。24時間通話無料の家族が増えるんだから」

ザッフィー

「~~~~~ん」

ティータ

「僕ヨリ若イオジイチャンDEATH」

ガラガラッ（横並びになった布団2つ）

エリオ

「おっ」

ザッファイ

「え!？」

エリオ

「？」

ザッファイ

「……ゴクリ」

エリオ

「どうした？ ザッファイ」

ザッファイ

「もういい!」

シヤマル

「あなた？」

ザッフィー

「あ—————っ!?!」

国内の通話24時間無料。

Hard Bank。

イーちゃん

「さて、時間は無いけれどこのコーナーについてみようか」

イーちゃん&ディレト

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

イーちゃん

「このコーナーでは、リスナーから送られてきた『こんなリリカルは嫌だ!』というネタを読んで、私達が色々コメントを返していきますよ」

ディレト

「ではでは、時間もありませんしさっさと読みますわよ?」

最初のお便りは、龍騎の世界のミラーワールドにお住まいの、R  
N：神崎はやて様ですわね。

今この瞬間に消えてないのか心配ですわね。

『六課隊舎の自販機の飲み物が、全てリンディ茶』

『フェイトさんが常に黒化している』だそうですわよ?」

レナード

「リンディ茶はマズイ。アレは色んな意味でマズすぎる」

たい焼きヘッド

「自販機全部とか……下手すりゃ暴動起きるぞ」

未亜

「そうなの? アタシは飲んだことないからわかんないけど……」

イーちゃん

「アレを飲まないでいられるのなら、私は全財産を投げ打つ覚悟があるね」

ディレト

「……なんだか凄まじいですわね」

イーちゃん

「今度ディレトちゃんにも飲ませてあげようか？ リンディさんからリンディ茶を貰ってきてね」

ディレト

「遠慮しますわ」

未亜

「遠慮します」

レナード

「そうしとけ。暫くの間、何食べても甘いとしか感じられなくなるぞ」

たい焼きヘッド

「ええと、次は……フェイトが常に黒化か。どうなるんだろうな？」

イーちゃん

「フェイトちゃんの事だ、ある程度分別は持ってくれると思っけれどね」

ディレト

「黒化はわたくしの専売特許ですわ！ フェイト様に譲るなんて出来ませんわ！」

未亜

「いや、そーゆー話じゃ無いような……」

イーちゃん

「とりあえず一番苦労するのは、きっとなのはちゃんだね」

レナード

「そうだろうなあ。多分、なのに対してヤンデレ化すると思うし」

ディレト

「ヤンデレもわたくしの専売特許でしてよ!？」

たい焼きヘッド

「はいはい。わかったわかった」

レナード

「次のお便りだ次」

ディレト

「無視するんじゃないですわよ!！」

未亜

「次のお便りは、ガジェットの中にお住まいのRN・ラッキーブレイカーさん。」

『シグナムと目を合わせるたびに模擬戦』

『ゆりかごを一人でつぶす』だって」

たい焼きヘッド

「うわ……それは嫌だな」

レナード

「そうか？ オレは別に平気だけど」

イーちゃん

「私もまあ、何とかかなりそうだね」

ディレト

「わたくしも余裕でしてよ？」

未亜

「……まあ、3人はチートだし」

たい焼きヘツド

「この3人だと、むしろシグナムが可哀想になってくる不思議」

未亜

「ゆりかご逃げて。超逃げて」

レナード

「失礼な。一応手加減くらいはするっての」

イーちゃん

「シグナムと模擬戦した場合、代価として下着は頂くがね。上下共に」

レナード

「盗るんスか……」

未亜

「あ、そういえばイシユメールさん、今日は下着盗んでませんね」

イーちゃん

「未亜ちゃんは洒落で済みそうに無いからね。盗ってもいいなら、」

盗るよ?」

未亜

「いや、いいです! 絶対にやらないでくださいね!?!」

たい焼きヘッド

「イーちゃん、是非やってみせてくれ! 神技の実物をこの目で!」

未亜

「ちょーーーっ!?!」

イーちゃん

「了解した。では……」

未亜

「? 別になにも……ってああああっ!?!」

イーちゃん

「ふむ。未亜ちゃんは白に犬のアニマルプリントか。11歳にしては、ちょっと幼いかな?」

たい焼きヘッド

「おおおお……!」「これが神技!」

レナード

「いや、ホントにやっちゃダメっしょ!? マジ犯罪ツスよ!?!」

未亜

「何でもいいから見な……っ!?! あと返しなさいよ!

「!!」

ディレト

「犬ちゃんパンツなんて、未亜様は可愛いですわねえ」

未亜

「見るな見るな見るな……っ!!」

たい焼きヘツド

「いいじゃん別に。減るモンじゃないだろ」

未亜

「アタシの乙女の恥じらいが減るわよ……っ!!」

「!!」

ディレト

「……うふふふふ、未亜様。良い表情ですわぁ……」(ゾクゾク)

未亜

「ここにアタシの味方は居ないわけ!？」

レナード

「いや、一応オレ居るんだが」

未亜

「そ、そうだった! レナード、取り返してよ!……」

レナード

「多分無理。作者とチート主人公が組んでるんじゃないなあ……」

未亜

「こ、このヘタレ主人公！ 自分の部下が下着盗られたのよ！？  
何とかしてよっ！…！」

レナード

「すまん。諦めてくれ」

未亜

「う、う……うわああああんっっ！…！」

【ここは俺たちに任せろー！ーっ！ー！】

イーちゃん

「むっ！？」

たい焼きヘッド

「だ、誰だ！？」

( つ ・ ・ )

<颯爽登場！ 銀河美スタッフ！！

レナード

「あ、そーゆーのいいんで。お引き取り下さい」

未亜

「とっとと帰れ！」

「……<………そうですか。何かすみません。」

イーちゃん

「い、今は流石にスタッフが可哀想な気がするのだけれど？」

未亜

「イーから！ さっさと返しなさいよーっ！」

イーちゃん

「返した方が良いかな？ たい焼きヘッドさん」

たい焼きヘッド

「神技を見せてもらったお礼つてことで、受け取ってください」

イーちゃん

「だ、そっだよ」

未亜

「う、うう………作者の馬鹿あああっ！」

ディレクト

「あ、出て行っちゃいましたわよ？」

レナード

「皆して虐めすぎだろっ！？　ちょ、オレ追っかけてくる！」

イーちゃん

「……レナード君も行ってしまったね。それじゃあ“こんなにリカルは嫌だ！”はここまでにして、エンディングトークといこうか」

ディレト

「ですわねー。あ、それが終わったら、わたくしも末亜様を追いかけてよろしいかしら？」

たい焼きヘッド

「？　何で？」

ディレト

「……捕まえて、別室に監禁……隔離して、もっとキャンキャン鳴かせたいんですわ」

たい焼きヘッド

「却下で」

イーちゃん

「そうだね。これ以上は流石に可哀想だ」

ディレト

「ぶーぶー。ふーんだ。それじゃ、さっさと終わりにしますわ。

ではではたい焼きヘッド様。最後に貴方様の作品の番宣をどうぞ！　ですわ」

たい焼きヘッド

「なんか自分で自分の作品を番宣するのはちょっと恥ずかしいけど、

えー……それでは。

僕が書いているのは、『魔法少女リリカルなのは』伝説を継ぐ者』という小説です。

北海道某所に存在する、とあるファミレス「ワグナリア」……って違うっ！？

武装隊所属の特殊陸戦小隊隊長に就任したレナード。

マグナス式の実戦配備と研究を主目的として、今日も書類仕事に明け暮れる……。

特殊小隊設立の理由、魔族の狙い、そして「魔王」レナードの運命や如何に！？」

イーちゃん

「現在はアニメで言う二期目に突入していますね」

ディレト

「レナード様の活躍に乞うご期待！ ですわ」

イーちゃん

「それでは次に、お便りに関するお知らせをたい焼きヘッドさんからお願いします」

たい焼きヘッド

「りょうか〜い！ それでは。」

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーさんからお便りを待ってます。

“なぜなに とあ新”では、ハヤト達メインパーソナリティ3人

やゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが凹んでしまったエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いします。

まあハヤトはそうそう死なないだろうから、多少無茶なお題でもオツケーだと思いますけどね。

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人のイラストなども募集しています！

送って貰えたら、今回の様にラジオで使ったりするから、リスナーの皆さん、どんどん送って下さいね！

ディレクト

「次にゲストに関するお知らせを、わたくしからしますわよ！」

未亜

「ちよー！ー！と待ったああつ！」

ディレト

「!?!」

未亜

「颯爽登場！ 銀河美少女！！ 未亜！！アウステラ！！！」

レナード

「ぜえつ……ぜえつ……ちよつ、未亜、速すぎ……」

未亜

「ゲストのお便りはアタシが読むわ！ セクハラ大魔王と、ドS変態女はどいてなさい！」

イーちゃん

「な、何だか随分と強気になって帰ってきたねえ。

まあ、そこまで言うなら、未亜ちゃんにお願いしようかな？」

未亜

「ふふん！ まっかせときなさい！」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選よ！

なので、応募した順番通りにゲストに呼ばれるとか限らないわ。

そこは了承しなさいよね！

選ばれた作者さんには、ラジオからメッセージでお知らせが届くわよ。

それと、ゲスト立候補に関してあ少し条件があるわ。

ゲスト立候補する作品は、最低でも10話以上更新されていて、

月に1回程度は更新されている作品だけ。それ未満の話数だったり、2ヶ月以上更新停止してる作品だと、応募しても抽選には加わらないから気をつけなさい!」

イーちゃん

「ありがとうございます」

未亜

「全然いいわよ! だからパンツ返しなさい!」

イーちゃん

「お断りします」

未亜

「うー……番組手伝ったんだから、いいじゃない」

イーちゃん

「これは正当な報酬だよ。後でディレトちゃんのも貰うしね」

ディレト

「はあ!? 聞いてませんわよ!??」

イーちゃん

「言っていないからね。それでは、今回の“リリカルマジカルとあ新らじお”はここまで」

レナード

「えっと、次回からはまたメインパーソナリティがいつもの3人に戻るらしいぞ。」

まあ、イシユメールさんがやり続けてたら、ガチで犯罪が起きそ

うだしな」

たい焼きヘッド

「それはそれでちょっと残念だが、まあ仕方ないな」

イーちゃん

「それでは、お相手はイシユメール」バルファと」

レナード

「レナード」レイ」マグナスと」

たい焼きヘッド

「たい焼きヘッドと」

ディレト

「ナンバーズ??、ディレトと」

未亜

「未亜」アウステラでした」

イーちゃん&ディレト&レナード&未亜&たい焼きヘッド

「「「「「バイバイ!」」」」」

未亜

「イシユメールさん！ アタシのパンツ返してくださいよ！」

ディレト

「わたくしのパンツを盗るってどーゆー事ですよ！？」

イーちゃん

「はっはっはっは！ それではサラダバー！」

レナード

「いや、それを言うなら」「さらばだ」「……っ……っ」「このやりとり何処かで聞いたような？」

たい焼きヘッド

「気にしたら負けだぞ」

イーちゃん

「この番組は、」

- (勇者) エクスカイザー
- (太陽) ファイバード
- (伝説) ダ・ガーン
- (特急) マイトガイン
- (警察) ジエイデッカー
- (黄金) ゴルドラン
- (指令) ダグオン
- (聖戦) バーンガーン
- (王) ガオガイガー
  
- (犬) H a r d B a n k

以上の提供でお送りしたよ」

未亜

「だから！ アタシのパンツ返してくださいってば……！」

ディレト

「説明してくださいませ……！」

レナード

「……あの人、何でマジで捕まらないんだろ」

たい焼きヘッド

「イーちゃんだからさ」

レナード

「説明になつてねえええ……！」



第14回『あの女に関わると碌な目に会わない(金銭的に)』(後書き)

今までで一番の長さになってしまった……。

たい焼きヘッドさん、何か変な部分があったら、メッセージや感想でお知らせください。適時修正しますので。

……未亜ちゃんのキャラが、何か微妙に違う気がしますね(汗)

さて。次回からはまたいつもの3人に戻ります。

もし今回の評判がよければ、時々交代したりするかもかも。

うーん、1ヶ月ぶりって事もあつてはっちゃけ過ぎたかな？

まあ、いっか！(笑)

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いませ  
ん)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、

他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・ゲストに立候補できる作品は、最低10話以上更新され、更新停止をしていない（少なくとも月1更新程度）作品に限定させていただきます。

第15回 『ハヤトの正妻争奪戦!?!』

ハヤト

「……………なあ」

ティアナ&スバル

「何?」

ハヤト

「何で今日はそんなに殺気立ってんだ? つか、何故2人揃ってシヤドーボクシング?」

ティアナ

「ちよつとね」

スバル

「今日来るゲストと、O H A N A S H I しなきやいけないかもだから」

ハヤト

「物騒すぎんだろ!? ゲストに何するつもりだよ!!」

ティアナ&スバル

「黙ってる」

ハヤト

「(･･････)くすいません」

ティアナ

「わかればいいわ」

スバル

「あたし達、ちょっと準備が忙しいから、ラジオはハヤトが進めておいて」

ハヤト

「いや、仕事しませんか？ お二人とも……」

ティアナ&スバル

「「あゝん!?」」

ハヤト

「（´；；´）<ホントすいませんでした」

スバル

「じゃあ、後はよろしくねー」

ハヤト

「……ガチで怖かった。あー、それじゃあ最初のコーナーやってみようかな」

ハヤト

「励ますぜ！ ハヤト君……!」

ハヤト

「……………一人ぼっちのタイトルコールが寂しすぎる。

えーと、今回このコーナーはスバルの代わりに俺が励ますぜ！

男は要らないって？

苦情は一切受け付けん！！！！

そんな訳で最初のお便り。管理局ちつさい者同盟本部（安部隆浩の家）にお住まいの、

RN：チンク、リン、ヴィータ、アギト、隆浩他多数……………って  
連名かよ！？」

「『飲み屋にこのメンバーで居たんだが何処も酒を出してくれないんだ！！』

我等／私達／おいら達は／大人だアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

チツクシヨウ！見た目で判断してんじゃねえよこの野郎オ！！！！

スバル！ティアナ！ハヤト！お前達もそう思うよな！！！！こうなつたらやけ酒だアアアアアアア！！！！』」

ハヤト

「まあ、確かに人間見た目よりも中身の方が重要ツスよね。偉い人にはそれがわからんのですよ。」

「てーか、全員身分証見せればよかったんじゃ？ 次はそうしてみるといいツスよ。」

「それでも駄目な時は…… すんません、俺にはどうしようも無いツス。ヴィータ副隊長他多数の皆さん。」

さて、んでは次のお便り。

管理局本局女子寮にお住まいの、RN：フェイト「T」ハラオウンさん。

ハラオウン隊長、本名出しツスか…… いや、いいんですけどね！」

「『エリオが最近一緒にお風呂に入ってくれないんだ……。』」

それに一緒に寝ようって言っても嫌がるし…… 私の事嫌いになっちゃったのかな？

…… やっぱり、私には母親は無理なのかな？ …… (涙)

『

ハヤト

「ハラオウン隊長。エリオはちゃんと隊長の事が好きツスよ。」

そーゆー反応するのは、隊長が好きだからですつて。本気で嫌いなら、そもそも相手しないですもん。

エリオも男なんで、恥ずかしかってんですよ。わかってやってください。俺の知る限り、隊長はちゃんとエリオのお母さんをやってると思いますよ？ 自信持つてください！

…………… エリオ妬ましいな爆発してチ コもげてエリーちゃんになりやがれ（ぼそっ）。

それはさておき次のお便り。

次のお便りは、陸士隊独身寮にお住まいのRN：死神さん。

もしかして鯽な人なのか！？ サインください！！」

「『爺さんが現役の魔導師なんだが…………… デバイスが冷凍本マグロ…………… つまりカジキマグロなんだ…………… 。

オマケに3ちゃん和管理局板にも載る始末だし…………… すこし恥ずかしいです』」

ハヤト

「あー、見たことある見たことある…………… じゃなくて。

カジキマグロでもいいと思うツスよ？ 実際冷凍されたマグロって、殺傷力めっちゃ高いらしいですし。

どうしても恥ずかしいなら、やっぱり直談判するか……最悪食べるって手も！ あ、でもデバイスだから食べたなら腹壊すかなあ……？ で、でも3ちゃんでは結構人気だったみたいですし、気にしない方がいいツスよ！

これで、何とかなったか？

えー、さて。では次でラストのお便り。

最後のお便りは……スカリエツティラボ付近の木にお住まいの、

RN：羽のない鷹さん。

鷹……王下七武海の人ですねわかります。え？ 違う？ こまけえことはいいんだよ！」

「『最近自分の作品のキャラが凄く反骨精神を露わにして虐めてきます、

どうかこの駄目な私を励まして下さい！』」

作者

【わかります！ その気持ち、凄くよく分かります！

頑張ってください。マジで頑張ってください！ 出演権を盾に脅せば、多分言う事聞きますよ？

それでも駄目な時は、本気で出番を減らしてやればいいんです！

！】

ハヤト

「……いきなり出てきてなんだお前は」

作者

【いやあ、あまりにも身につまされるお便りだったもんで、つい。いいかハヤト。作者つてのは偉いんだぞ、何せお前を造りだした創造主なんだから。

だから逆らうな！ いいな！？】

ハヤト

「え？ 嫌だけど？」

作者

【何で！？】

ハヤト

「だってお前だろ？ ほら、他のリスナーさんは知らないだろうけど、俺はお前の色んな部分を知ってるからなあ……小説書けないつてのにゲームやってたりとか……」

作者

【（、・、・、）】

ハヤト

「わかったら帰れ。お前と羽のない鷹さんではレベルが違うんだよ」

作者

【ちくしょおおおっ！ もう、とあ新本編でお前の出番なんてぜ

口にしてやるからなああああつ!!】

ハヤト

「そうしたら困るのお前だろに……。  
えーと、羽のない鷹さん、反抗するってのは貴方が好きって気持ちの裏返しかも知れないツスよ？」

キャラの反抗も、ツンデレと思えばアラ不思議！ あっという間に萌え要素に!!」

(´・`・´) <なんねーよ

(´・`・´) <馬鹿かお前

(´・`・´) <萌え舐めんな

(´・`・´) <ぶち殺すぞ、ヒューマン

ハヤト

「スタッフっさい！ てか今、どっかの吸血鬼混じってなかった!?!」

(´・`・´) <いいから進めろよ。ゲストの方がお待ちだったの

ハヤト

「くっ、スタッフが進行を優先させるのは正しい筈なのに、何故か凄まじく悔しい！

でもクリムゾン!! (ビクンビクン)

……ツッコミ役が1人もいないと切ないなヲイ。

まあいいや、とりあえず『励ますぜ！ ハヤト君』はここまで。  
それじゃあまあ、俺しか居ないけど始めるとするかね。ゲストが  
来れば、あいつ等も戻ってくんだろ。

てな訳で、『リリカル マジカル とあ新らじお』第15回！！」

ハヤト

「スタートでーっす！！」

リリカル マジカル とあ新らじお  
第15回 『ハヤトの正妻争奪戦！？』

ハヤト

「はい。そんな訳で始めました『リリカル マジカル とあ新ら  
じお』第15回。」

「どうも、メインパーソナリティのハヤト＝ロックウェルです」

ティアナ

「準備は万端ね。どうも、同じくメインパーソナリティのティアナ  
「ランスターです」

スバル

「これでゲストさん対策も万全だね！ 同じくメインパーソナリ  
イの、スバル「ナカジマです！」

ハヤト

「えー……では、果てしなく不安だが早速ゲストをお呼びする  
ようか。」

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikers』  
亡霊の弾丸』より。」

主人公のアウル「アプレシオンさんと」

スバル

「体はデバイス！ 心は乙女！ アウルさんをからかいながらし  
かりサポートするタスラムさん！」

ティアナ

「以上の御二人です」

ナハト

「ちよつと待て！ 露骨に我を無視するな！！」

ティアナ&スバル

「「……ちっ」「」

ハヤト

「何だその露骨な舌打ち！？ え、えーと……ゲストはもう1人。  
アウルさん最大のライバルキャラにして、大人の魅力満載なお姉

さん！ ナハトさんです！」

ナハト

「ハヤト……！ 我は今！ 猛烈に！ 感動しているぞおおおお  
っ！！」

ハヤト

「どわああっ！？ ちよっ、いきなり抱きつかんでください！！  
すっげえ嬉しいけど！！」

ナハト

「まさか、ハヤト自らが我を『素敵で無敵で抱きたい女性ナンバー  
1』と紹介してくれるとは！！」

ハヤト

「した覚えねーツスよ！？ どんな空耳！？」

ナハト

「さあハヤト！ あつちにベッドを用意してある！！ いざ、メイ  
クラブといこうじゃないか！！」

ハヤト

「ちよっ！？ え、どーゆーことツスか！？」

ティアナ

「ちよっとなハトさん」

スバル

「……あたし達がお相手しますよ」

ナハト

「ふん。側室などに用はない。ここは正妻の我に任せ、お前達はラジオを進めるがいい」

ティアナ

「そんな事認められる訳ないでしょ!!」

スバル

「ハヤトの正妻はあたしだもんっ！」

ティアナ

「なっ!?! あ、あたしよっ!!」

ナハト

「ふざけるな! 正妻の座は絶対に譲らんぞ!!」

ギヤーギヤー ワーワー

アウル

「……えーっと」

タスラム

《 こうなるから、早く出ないと駄目だと言ったんです。主は全くホントにもう 》

アウル

「いや、まさかここまでの規模になるとは……」

ハヤト

「ぐほう……やっと抜け出せた。あ！ アウルさん！」

アウル

「やあ、ハヤトさん。今日はお招きいただいて、ありがとうございます」

ハヤト

「いやいや、こちらこそ来てくれてありがとうございます」

何かあつちはカオスになってますけど……」

タスラム

《 恋する乙女というのは、遅いモノなのですよ。ハヤト氏 》

ハヤト

「遅いってレベルじゃない気がするんですけど？」

タスラム

《 〽 》

ハヤト

「デバイスなのに口笛吹いた!？」

タスラム

《 それは兎も角、そろそろあちらを止めてラジオを進行しませんか? 》

ハヤト

「いや、それはそうなんですけど……アレ、止めるんスか？」

ティアナ

「スターライト……ブレイカアアアアアアアアアッッ！！！」

スバル

「デイベイイイイイン……バスター……ツツッ！！！」

ナハト

「甘い、甘いぞー！……その程度、どうということはないー！！！」

アウル

「……まあ、止めなきゃ駄目でしょうね」

ハヤト

「どうやって止めます？」

タスラム

《ハヤト氏が「全員俺の嫁だあああああ！」と叫べば良いのでは？》

ハヤト

「え、なにそれこわい」

タスラム

《まあまあ、いいじゃないですか。ユー言っちゃいなYO！》

ハヤト

「その後の收拾は誰が付けると思ってたんスカ!？」

タスラム

《 ハヤト氏。これはお願いじゃないんです……命令ですよ? 》

アウル

「こらこらタスラム。無理を言ったらいけないよ」

ハヤト

「アウルさんありがとう! 抱いて!!」

アウル

「それはちょっと……」

ハヤト

「とまあ、冗談はともかく止めましょうか。

アウルさんはナハトさんを頼みます。俺はティアナとスバルを止めてくるんで」

アウル

「了解です」

暴走抑止中……。

ハヤト

「っ、疲れた……」

ナハト  
「疲れたのなら、我のこの豊富な胸で癒してやるっか？ その小娘共では物足りんだろっ？」

ティアナ

「（むっ）……お、大きいだけと歳をとってから垂れるんですよ？」

スバル

「そうですね。それに、ハヤトはあたし達の胸でも満足みたいですしっ」

ナハト

「（# ^ ^）ピキピキ」

ハヤト

「ギスギスしすぎだろワイ！！ もうちょっと楽しくいきましようよ！？

このラジオは楽しさが売りなんですよ！？」

ティアナ

「……それもそうね。ちょっと色々と熱くなりすぎたわ」

スバル

「だねっ、えへへ、ナハトさんもごめんなさい」

ナハト

「……ふっ。気にすることはない。我も少し熱くなりすぎた」

ハヤト

「よし、何かわからんがいい感じに纏まった！  
それじゃあ、仕切りなおしでまずはこのコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「ゲストに5つの質問！」

ハヤト

「このコーナーでは、俺達がゲストに質問をしていくぞ」

ティアナ

「御三方とも、緊張せずに答えてくださいね」

アウル

「はい。任せてください」

タスラム

《 どれだけ面白い回答を出せるか。それが勝負どころですね……》

ハヤト

「なにそれこわい」

ナハト

「我のハヤトに対する愛を教えてやるうではないか」

ティアナ

「楽しみにしてますね」

スバル

「ホントに楽しみにしてます」

ハヤト

「不安だ……果てしなく不安だ……」。

えー……と、まあいいや。とりあえず最初の質問。

『お名前は?』

アウル

「アウル」アパレシオンと申します。階級は一等陸佐。本日はお招きありがとうございます」

タスラム

《そして私がアウル専用デバイスのタスラムです。趣味は主の盗撮ですね》

アウル

「……え?」

ナハト

「我が名はナハト。アウル最大の敵にしてハヤトの正妻ぞ」

ティアナ&スバル

「( # ^ ^ )ピキピキ」

アウル

「……まだ言うの？ ティアナとスバルに怒られるよ？」

ナハト

「フン！ ハヤトなら分かるはずだ、オトナの魅力というものが」

ハヤト

「いや、ええまあ……確かにそのおっぱいは個人的にすっげー魅力を感じますが」

タスラム

《ハヤト氏、何故貴方はそうやって火に油を注ぐんですか》

ナハト

「はっはっはっは！ それ見たことか！ やはりこの胸は最大の武器となるのだな！！！」

スバル

「……ハヤトのえっち」

ティアナ

「変態」

スバル

「おっぱい星人」

ティアナ

「ドスケベ」

タスラム

《へタレ》

ハヤト

「ちよつと待って!?! なんでタスラムさんまで!?!」

タスラム

《んー、ノリですかね?》

ハヤト

「どういづことなの……」

アウル

「こら、タスラム。自重しなきゃ駄目だよ」

タスラム

《すみません》

ティアナ

「……ま、まあいいわ。細かいことは後にしましょう。」

それでは次の質問。

『最近ハマッている事は?』

アウル

「ブーム、ですか……。そうですね、やっぱり新しいスイーツの創作ですね」

ナハト

「む、奇遇だな。我も同じだ」

タスラム

《正直似合いませんね》（失笑）

ナハト

「タスラム貴様アツ!!」

ハヤト

「ま、まあまあナハトさん落ち着いて。俺はいいと思いますよ？  
女性らしくして」

ナハト

「ハ、ハヤトオオオツツ!!」

ティアナ

「スバルガード!」

スバル

「にゃあつ!?!」

ナハト

「なっ、何イイイイ!?!」

ティアナ

「ハヤトじゃなくて、スバルに抱きついてなさい!」

ナハト

「くっ……む？ い、意外と柔らかいじゃないか」

スバル

「にゃああああ……ちょ、ちょっと強いですよ」

タスラム

《 スバル×ナハトの百合本……これは今年の冬コミで流行る!!  
》

アウル

「いや、発想が奇抜すぎない!？」

ハヤト

「タスラムさん。それ、印刷終わったら一冊貰えます?」

アウル

「ってハヤトさんも何でノリノリ!？」

タスラム

《 ハヤト氏も好きですねえ。ちゃんと御代は頂きますよ? 》

ハヤト

「へへへ、それはわかってますぜ」

アウル

「ああ、何だかもうグダグダだ……」

ハヤト

「話がついたところで、タスラムさんのマイブームは何ですか?」

タスラム

《 私の最近のブームは、イシユメイル氏の神技をマスターする事  
ですね 》

アウル

「いや、タスラム。あれは普通に犯罪だからね？　というか、どうやってマスターするんだ。」

タスラムには手が無いじゃないか」

タスラム

《愛しさと切なさで心強さで何とかかります》

アウル

「ならないから。仮になつたとしても私が止めるから」

ハヤト

「さすがタスラムさん。俺達に出来ないこと平然とやってのける！

そこに痺れる！　憧れるうううっ！！」

タスラム

《私に惚れたら、火傷しますよ？》

アウル

「うう、何だろっ。このタスラムが2人に増えたような感覚は……」

ハヤト

「えー。そんな訳で次の質問いってみよー。」

次の質問はこちら。

『自分の性格を一言で』

タスラム

《私はいつまでも少女の気持ちを忘れませんから、天真爛漫ですかね》

スバル

「あ！ あたしも！ あたしも天真爛漫です！」

タスラム

《 スバルさんは子供なだけだと思いますよ？ 》

スバル

「っ！？」（ガーン）

ハヤト

「まあ、確かにスバルはなあ。どっちかっつーと純粹無垢とかの方じゃないか？」

ティアナ

「そうね、子供っぽい成分の方が多いわよね」

スバル

「うう……ハヤトもティアも酷い」

ナハト

「……フン。我自身の性格を口にするなどおこがましい」

タスラム

《 いい子ぶりっ子ですか？ だからキャラ立ちが中途半端なんですよ 》

ナハト

「な、何だと！？ 完全主義者の我に向かって何を言うか！」

アウル

「何で仲良く出来ないかな……。はあ……」

ティアナ

「まあ自分で“完全主義者”って言ってるあたり、キャラは立ってますよ。」

主に痛い方向性で、ですけどね」

ナハト

「な、何だとおっ!?!」

ハヤト

「大丈夫ですっ! 大丈夫ですからっ!! ちゃんとキャラ立ってますから!」

俺はわかっていますからっ!!!」

ナハト

「ハヤト……抱いてくれっ」

ティアナ

「スバルガード!」

スバル

「またあああっ!?!」

ナハト

「……………くっ、中々いい抱き心地じゃないか」

スバル

「ふにゃあああ……」

タスラム

《 REC 》

アウル

「何を撮ってるのタスラム!？」

ハヤト

「まあまあ、ほっといて大丈夫ですよアウルさん。タスラムさんも、流石に冗談でしょうし」

アウル

「そ、そうかなあ……?」

ナハト

「うむ。堪能した」

スバル

「お、お粗末様でした……はふう」

ティアナ

「スバル。良くやったわ」

ハヤト

「さて、じゃあ後はアウルさんの性格かな?」

アウル

「え? ……そうですね、おおらか、とでも言いますか……」

タスラム

《で、ロリコンで》

アウル

「違うよ!?!」

ナハト

「腹黒くて」

アウル

「ええツ!?!」

タスラム

《ああ、隠れドSも忘れてましたね》

アウル

「……………うう。ハヤトさん、助けて……………」

（……………）

（……………）

（……………）  
<この素晴らしきロリコン空間>

（……………）

（……………）

アウル

「そっちには絶対行きませんかからね!?!」

タスラム

《 大丈夫ですよ主。もう片足突っ込んでますから 》

アウル

「突っ込んでないからね!? 誤解招くようなこと言わないでくれるかな!」

ティアナ&スバル

「「アウルさん……」」

アウル

「違いますから! そんな蔑むような目で見ないでください!」

ナハト

「ふっ……無様だな」

ハヤト

「やめ、やめたげてよおっ!」

ナハト

「む。ハヤトがそう言うのならばやめよう。我は良き妻だからな、夫のいう事は聞くぞ」

ハヤト

「何か色々ツツコミたいけど、とりあえずありがとっございます」

タスラム

《 え? 私は聞きませんよ? 》

ハヤト

「タスラムさん。ここにウチのスタッフが盗さ……もとい極秘入手した、六課隊員の弱味ノートが」

タスラム

《嫌ですなあ。私が本気で主を虐める訳ないじゃないですかあ》

ハヤト

「これにて、一件落着！」

アウル

「うう、ハヤトさんありがとう……何か危険なノートがタスラムの手に渡った気がするけど、今はありがとう」

スバル

「それでは次の質問です！」

『言ってみたいアニメ・漫画の台詞は？』

タスラム

《そうですね、『颯爽登場！ 銀河美デバイス』です》

ハヤト

「アプリボワゼ……！」

タスラム

《颯爽登場！ 銀河美デバイス、タスラム……》

ジャキーン……！！

ハヤト

「き、決まった……」（じーん）

タスラム

《これ以上ない位に決まった……》（じーん）

ティアナ

「何してんのよハヤト。タスラムさんも。てゆうかタスラムさんが  
タウバーンポジなんだ。何か名前の呼び方もタウバーンっぽく伸び  
てたし……てか、タスラームって語呂悪い気が……」

スバル

「か、かつこいー！」

ティアナ

「いや、ちよっ……」

アウル

「まあまあティアナ、良いじゃないか。言いたいのには本人の自由だ  
しね」

ティアナ

「それはそうなんですけど……まあいつか。ハヤトだし」

ナハト

「我は『幾久しく』、そして『立ち止まる事吾が許さん！』だな」

スバル

「セキレイですか。あれは私も好きです」

ナハト

「うむ。相手は勿論ハヤトに決まっているぞ！」

スバル

「それは駄目です！」

ナハト

「ふつ、決めるのはハヤトだ。お前達が決めることでは無いな」

スバル

「うー……それはそうですけど……」

ティアナ

「まあまあ、後でゆっくりO H A N A S H Iすればいいわよ。  
えっと、アウルさんは何かありますか？」

アウル

「うーん……。特に無いかなあ」

タスラム

《 なら『狙い撃つぜ！』はどうですか？ 》

ナハト

「キャラでは無いだろう」

ハヤト

「『おまえに足りないものは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！  
そして何よりも……速さが足りない！』とかはどうですかね

？」

タスラム

《 それこそキャラじゃないですよ。というか何故選んだし 》

ハヤト

「昨日徹夜で見直してたもんで」

ティアナ

「うーん、それじゃあ……」

『 てめえらずつと待ってたんだろ！？ インデックスの記憶を消さなくてもすむ、

インデックスの敵にまわらなくてもすむ……そんな誰もが笑って、

誰もが望む最高のハッピーエンドってやつを。

今まで待ち焦がれてたんだろ？ こんな展開を……

何のためにここまで歯を食いしばってきたんだ！？

てめえのその手でたった一人の女の子を助けて見せるって誓っ

たんじゃねえのかよ？

お前らだつて主人公の方がいいだろ！？

脇役なんかで満足してんじゃねえ、命を懸けて

たった一人の女の子を守りてえんじやないのかよ！？

だつたら、それは全然終わってねえ、始まってすらいねえ……

ちよつとくらい長いプロローグで絶望してんじやねえよ！

手を伸ばせば届くんのだ！ いい加減に始めようぜ、魔術師！！

『 とかはどうです？ 』

タスラム

《 上条さんパねえッス。というか長いです 》

アウル

「いや、うん……一番私に合っていないと思うよ？　というか、覚えきれない……」

スバル

「『そんな装備で大丈夫か？』」

ハヤト

「大丈夫だ、問題ない……ってそれは違うだろ」

スバル

「えへへ。何か言ってみたくなくなっちゃった」

アウル

「……あれ？　作者メモが。何々……『今度こそ、君だけは幸せにしてみせるよ』？」

ナハト

「……カヲルか」

アウル

「カヲル？」

タスラム

《カヲルですね》

ハヤト

「裏切ったな！　僕の気持ちを裏切ったんだ！」

ティアナ

「ここぞとばかりにシンジ君の真似するんじゃないわよ」

スバル

「あはは、ハヤト意外と好きだもんね。新劇場版もDVD買って  
たし」

ハヤト

「まあな。あの時はお陰で金が無くなって困ったが、後悔も反省も  
していない」

ティアナ

「……あたしにお金借りたんだから、反省はしなさいよ」

スバル

「だね。えっと、それでは最後の質問いきます！

『パーソナリティの3人に一言！』」

タスラム

『では私から。スバルは自分らしさ　その明るい性格を大切に、  
ハヤト氏を支えてあげて下さいね。』

ティアナは暴走しがちなハヤト氏のストッパーとして、  
そして愛する者としてありのままの彼を大切に。　ハヤト氏はか  
なり自重してください　』

ハヤト

「何で俺にだけそんな冷たいんスカ！？　さっき一緒にスタードラ  
イバーごっこした仲なのに！！」

タスラム

《これが大人の世界ですよ、ハヤト氏》

ハヤト

「何てこった……これが大人の世界のほろ苦さってヤツか……くうっ」

ティアナ

「はいはい。コントはそこまでにしときなさい。それじゃあ次は……」

ナハト

「次は我だ。ハヤトよ、お前が時折見せる真剣な眼差し、あれはいいものだ。ギャップ萌えとはまさにこれだな。二人に飽きたら何時でも我に連絡しろ。オトナの愉しみを教えてやろう」つ【連絡先】

ハヤト

「うっひょーい！」

スバル

「振・動・拳！！」

ハヤト

「ああああああつ！？ 折角の連絡先メモが振動破碎で粉々に！ ついでに俺の右手も粉々に！！」

ティアナ

「ナハトさんもいい加減自重してください！」

ナハト

「むう、いいではないか。今更1人や2人増える程度……まあいい。

スバル、ティアナ……。

癪だが、貴様ら二人の想いは本物のようだな。少しは好敵手として認めてやるう……／＼／＼」

タスラム

《 今度はツンデレですか 》

ハヤト（右手再生中）

「ツンデレ枠はティアナが居るんで、出来れば違う枠の方がいいッスねえ」

アウル

「いや、折角いいところなのに台無しにしなくても……。

えーと……では、僭越ですが私も。

ハヤトさんの言葉に、行動に、いつも勇気と元気をいただきます。これからも自分らしさを貫いて下さい。あ、それから私は何時でもハヤトさんの味方です。困った事があったら、気兼ね無く私を頼って下さい。

スバル、それからティアナ。ハヤトさんがこうしてハヤトさんらしくいられるのも、間違いなく二人が支えてくれているからだよ。ずっと、大切にね。

三人の幸福が永久に続きますように、心から祈ります。

それと……ええと、ディレトさんよろしくお伝えください／＼」

ティアナ&スバル

「「アウルさん……」」（じーん）

ハヤト（右手再生中）

「ええ人や……ええ人や……っ」（泣）

タスラム

《さすが主、いい事言いますね》

ナハト

「ふん。まあ、確かにな」

ハヤト（右手再生中）

「デイレトには俺から必ず伝えます！　そしてアウルさんの事をめっっちゃアピールしておきます！」

アウル

「あ、ありがとう……な、何か照れるな」

ハヤト（右手さいせ　「その幻想をぶち殺す！」　再生中）

「よし！　キレイに纏まったところでこのコーナーは終わり！」

CMを挟んでから、次は久しぶりの『なぜなに？　とあ新』のコーナーだぜ！」

グツグツ……

シヤマル

「はい」

全員

「うわあ〜!!」

リンディ

「ふー、ふー……はい、どつぞ」

エリオ

「ありがとう、リンディ」

ザッファイ

「母さん呼び捨てに!!」

シャマル

「いいじゃない、夫婦なんだら」

ティーダ

「夫婦デ、フーフー」

ザッファイ

「まだ夫婦じゃない!!」

ティアナ

「新しいおじいちゃんは、何をしてるんですか?」

エリオ

「自然保護隊員です」

シャマル

「でも大変でしょう?」

エリオ

「ええ。でも夢があるんです」

ザッフィー

「夢じゃ食えないよ」

リンディ

「お金の事は平気よ。ザッフィーがいるんですもの」

ザッフィー

「こいつの金を我が稼ぐんですか!?!」

リンディ

「コイツじゃないでしょ、お父さんでしょ?」

エリオ

「駄目だぞ! ザッフィー!」

ザッフィー

「くそっ!」

シヤマル

「さあさあ、お鍋が煮えましたよ。はい、ぐんぐん」

ザッフィー

「あっついよ!」

土鍋、貰えます。

HARD BANK。

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「なぜなに？ とあ新！」「」」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーの皆様から寄せられた質問に、あたし達が答えていきます」

スバル

「ではでは最初のなぜなに！

万屋の犬の口の中にお住まいの、RN：監督提督さん。……食べられてるのかな？

『MCお三方に質問です。現在とあ新スバルトでハヤトが眼鏡にこ　されたり、

改造されたり洗脳されたりキスされたり、その他外道な所業の数々により

「クアットロテラウザス」な状況になっていますが、皆さん個人的にはどう思いますか？

あと、プライベートではクアットロとはどのような関係ですか？

教えてください』だって」

タスラム

《確かに、本編では色々大変な感じになってますねえ》

ナハト

「ふん。私のハヤトに手を出すなど、百度殺しても殺したりんところなのだな」

アウル

「ま、まあまあ。それで、実際どうなんだい？」

ティアナ

「あたし達は別に……そりゃまあ、流星にちょっとイラつと来る時もありますけど」

スバル

「うーん、あたしは別に気にしてないかなあ。あれはお芝居だー、つて分かっているからね」

ハヤト

「おい、あんま本編の空気台無しにするような事言つなよ。まあ、少なくとも俺はイラつくぜ？」

「ああいう展開ってマジ嫌いだもんだよ」

タスラム

《まあ、あまり気持ちの良い展開ではありませんよね》

ナハト

「ふむ。それで、プライベートの眼鏡はどうなのだ？ あのままの

性格なのか？」

ハヤト

「そうツスね。大体あのままですよ、性格」

スバル

「彼女にしたくない女優ランキング”で5年連続不動の1位だもんねー」

ティアナ

「“嫁にしたくない女優ランキング”でも5年連続不動の1位よね。しかも2位以下にかなりの票差をつけて」

アウル

「何というか……酷いもんだなあ」

タスラム

《 自業自得でしょう。あれは仕方ないですよ 》

ナハト

「確かにな。しかし奴の性格からすれば、逆に喜びそうだ」

ハヤト

「あー、うん。確かになんか喜んでました」

スバル

「ちなみに、あたし達とクアットロさんはプライベートだとあんまり接点ありません。」

所属してる事務所が違うので」

ティアナ

「あたし達はプレシアエンターテインメント。クアットロさんはレジラスエージェンシーですね」

ハヤト

「そーゆー訳で、まあプライベートでの関係はアドレス知ってる、つてくらいですかね。」

「一応ティアナルート完結後の打ち上げに一緒に行ったりはしましたけど」

ティアナ

「あたしも、あんまり話したこと無いわねえ。ドラマも大概は別撮りだし」

スバル

「そだね。えと、あたし達3人とクアットロさんはあまり親しくはありません！

それでは次のなぜなに！ 機動六課隊舎裏にお住まいの、RN：クルセイドさん。

……隊舎裏？

『ハヤトに質問です。』

お姉さんのハヅキさんですが、今まで色恋沙汰などはあったんですか？

よければお聞かせ下さい』だって」

タスラム

『あ、それは確かに気になりますね。あの超絶ブラコンなお姉さんに、色恋沙汰があったのかどうか』

ナハト

「ハヤトよりいい男など存在せんのだから、ありえんだろう」

タスラム

《 はいはい。貴女は黙っててくださいね 》

アウル

「タスラム、いちいち焚きつけないでくれないかな。えーと、それでどうなのかな、ハヤトさん」

ハヤト

「姉ちゃんの色恋沙汰……あ、一回だけありますね。

確かアレは姉ちゃんが18の時に、相手は執務官だったかな？

何か、初めて姉ちゃん相手に勝った人らしくて……確か名前が、

イ……イ……なんだったっけ？ まあ忘れちゃったけど、その人に告白してられたって話を聞いたことあったな」

ティアナ

「あのハヅキさんをフるって……ある意味凄い人よね」

スバル

「ハヤト、名前思い出せないの？」

ハヤト

「ん~~~~……イで始まるのは覚えてんだけどなあ、悪い、思い出せんわ」

アウル

「へえ、ハヅキさんもちゃんとした恋愛をしたことがあるんですね。ちよつと意外でした」

タスラム

《 てつきり、ずっとハヤト氏一筋かとばかり 》

ハヤト

「まあ、その人にフられてからより一層ブラコンが酷くなったんスけどね……ハハッ」（諦）

ナハト

「仕方あるまい。ハヤトの方が良い男だからな」

スバル

「ですね〜」

ティアナ

「……ま、まあ確かに」

タスラム

《 はいはい、そっちの恋する乙女3人は放っておいて、次いきましよう次 》

ハヤト

「え？ あ、了解ツス。

えっと次は……っと、今回のなぜなにはこれでお終いみたいです  
ね。

んー、でも時間余ってるみたいだし、次のコーナーいつてみましようか。じゃあ、タスラムさん、アウルさん、一緒にタイトルコールお願いします」

アウル

「あ、私もですか？」

ハヤト

「そのとおり！　じゃあ、せーのー！ー！」

ハヤト&アウル&タスラム

「『『 チャレンジ！　ハヤト 』』」

ハヤト

「このコーナーでは、俺がリスナーから送られてきたお題に挑戦するぜ。」

ちなみに10連勝すると、スタッフから新型BSP10台がプレゼントされる予定だ。

「えーと、今は何連勝中だっけ？」

(´・`・´) <こないだ失敗したから、0連勝だよ

ハヤト

「マジで！？　あー、そーいや失敗したっけか。

んじゃまあ、気を取り直していこうかね！」

タスラム

《 頑張ってくださいね。ハヤト氏。それでは今回のお題はこちら。  
機動六課隊舎の中庭にお住まいの、RN：イツキさんから。》

『特注品、辛さ対比甘口の10000分の1の激甘カレーの完食  
(飲み物なし)』だそうですね《

アウル

「えっとタスラム？ 何で普通にMCしてるのかな？」

タスラム

《 あちらの恋する乙女3人組が、ハヤト氏について惚気あってる  
からですよ。》

このまま番組乗っ取っちゃいませうか。主と私とハヤト氏で

《

アウル

「いや、流石に駄目だからね!？」

タスラム

《 冗談ですよ、冗談。……チツ 》

アウル

「あからさまな舌打ち!？」

ハヤト

「えー、そんな感じでアウルさんとタスラムさんがコントをしてく  
れてる間に、特注品の何かもの凄いことになってるカレーが用意で  
きたみたいだな」

(････) <ジエバンニが一晩でやってくれました

ハヤト

「デスノ乙。えーと？ これを全部食べばいいんだよね？」

アウル

「お便りによれば、そういう事みたいだね」

ハヤト

「よーよー　　まずは連勝の足がかりに(もぐもぐ)じばあっ  
!？」

タスラム

《 うわっ、汚っ!？ 》

ハヤト

「あつま!! 何コレあつま!!! カレーじゃねえぞヲイ!？」

タスラム

《 ですから、激甘カレーって書いてあったじゃないですか 》

ハヤト

「限度があるっしょ!？ 何コレ!？ 砂糖よっか甘いんだけど!!  
ガムシロ一気飲みしても、こっちはならねーぞ!!」

アウル

「どれどれ、私もちよっとだけ……(ぺろっ)……っ、これは酷い」

タスラム

《 甘さ対比が分からないリスナーさんの為に解説しますと、甘さはリンディ茶の約78倍です 》

ハヤト

「78倍って……やけにリアルだなあ。くっ……だが、これもBS Pの為！」

見事完食してやらああああああああっっっっ！……！」

タスラム

《 おお。ハヤト氏がまるでバーサーカーに立ち向かう『兵』のような顔に 》

アウル

「例えが生々しいよ。しかし、凄いなハヤトさん。あれだけの甘さをものともせずに食べている……！」

ナハト

「そんな姿もまた愛おしい……！」

アウル

「うわあっ!?! い、いつの間に!?!」

ティアナ

「ええと、ハヤトが一口食べて吐き出した辺りからですね」

スバル

「チャレンジ！ ハヤトは久しぶりなんで、ちょっと見てました」

アウル

「ああ、なる程。と、そう言っている間にも何とか半分まで来たみ

「ただね」

ハヤト

「かゆ……あま……」

タスラム

《 おお、あまりの甘さにハヤト氏がついに「かゆ……あま……」しか言わなくなりましたよ？ 》

アウル

「え？ あれ止めなくていいのかな？ 何だか顔色が土気色になってるんだけど」

ティアナ

「ハヤトなら大丈夫ですよ」

スバル

「多分1時間もあれば復活しますし」

ナハト

「うむ。流石はハヤトだな」

アウル

「い、いいのかなあ……？」

タスラム

《 信じるって、大事ですよ？ 主 》

アウル

「そんな良い台詞みたいに言われてもね……」

ティアナ

「とりあえず、ハヤトが食べ終わるまでもう少し掛かりそうですから、一端CMですー!」

スバル

「CMが終わったら、そのままエンディングトークですよ」

ハヤト

「かゆ……あま……」

総制作費10億円!

初日観客動員数全米ナンバー1!

全米が泣いた、あの話題作がついに映画化!!

「……俺には、これしかないから」

監督、ラルゴ＝キール

「でもっ！ それでも私は、貴方と一緒にいたいの！！」

脚本、カリム・グラシア

「 貴方を、愛しています」

主演、ティーン・ダランスター。

それは桜が舞う季節、3人の男女の間に起きた奇跡の物語。

100万部を売り上げた大ベストセラー小説を、奇才ラルゴ・キールが奇跡の実写化！

『桜の花が舞う頃に』

2011年春、全国一斉ロードショー。

君は、時の涙を見る……。。

ティアナ

「そんなこんなで、エンディングトークの時間です」

スバル

「うーん、今回はナハトさんとオハナシしてはっかりだった気がするなあ」

ナハト

「奇遇だな。我もそう思っていたところだ」

タスラム

《 いや、実際そうでしたよ？ 》

アウル

「……えっと」

ティアナ

「ま、たまにはそういうのもいいと思いますよ？ やっぱり、たまにはあたし達も楽しないと」

タスラム

《 そういうものでしょうかね 》

スバル

「そーですよー。それに、ナハトさんとも仲良くなれましたし」

ナハト

「ふん。ハヤトの正妻の座は譲らんがな」

ティアナ

「あたし達だって、そろそろ譲りませんよ?」

ナハト

「望むところだ」

アウル

「あのー……」

タスラム

《 何ですか主? どうかしましたか? 》

アウル

「いや、あの。ここで倒れてるハヤトさんは放置?」

ハヤト(だった物体)

「かゆ……あま……」

ね。(。・。・。)<あ、一応完食したみたいなんで1連勝みたいです

スバル

「ハヤト、おめでとー」

ハヤト(だった物体)

「かゆ……あま……」

ナハト

「うむ。ハヤトも喜んでるな！」

ティアナ

「そうですね。それじゃあ、最後に番宣いきましようか」

アウル

「放置なんだね……」

スバル

「今回の番宣はあたし達が担当しますよ〜！ アウルさん達が出演している作品は、

『魔法少女リリカルなのはStrikers 〜亡霊の弾丸〜』  
です」

ティアナ

「機動六課に配属された青年 アウル・アパレシオン。

その隠された過去と真実は、JS事件と共に静かに動き出す……。  
深い闇に染まったアウル・アパレシオンの未来は、果たして？  
決して語られる事のない物語が、いま明かされる……。

シリアス率98%の、Strikers再構成二次小説です」

スバル

「シリアスながらも引き込まれるストーリー、そして細かな心理描写などが見所ですよ！

是非是非読んでみてくださいね！」

ティアナ

「それでは次に、お便りやゲストに関するお知らせです。

ではまずナハトさん、お便りに関するお知らせをお願いしますね」

ナハト

「む、我か。任せておけ。

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、貴殿らリスナーからの便りを待っているぞ。

“なぜなに とあ新”では、ハヤト達メインパーソナリティ3人やゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが励まして欲しいエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定だそうだ。

勿論、ちゃんとハヤトが出来そうなことで、というのも条件だぞ。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告や普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人のイラストなども募集している。  
送った場合は、ラジオで使われたりするらしいので、リスナーの  
諸君、どんどん送ってみるといいぞ」

スバル

「では次にゲストに関するお知らせを、アウルさんとタスラムさん、  
お願いします！」

アウル

「はい。それでは……ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選  
となっております。

なので、応募した順番通りにゲストに呼ばれるとか限りませんの  
で、ご了承くださいね。

選ばれた作者様には、ラジオからメッセージでお知らせが届くよ  
うになっています」

タスラム

《それと、ゲスト立候補に関しては少し条件が儲けられています。  
ゲスト立候補する作品は、最低でも10話以上更新されていて、  
月に1回程度は更新されている作品だけ。

それ未満の話数だったり、2ヶ月以上更新停止してる作品です  
と、

応募しても抽選には加わらないので、気をつけてくださいね》

アウル

「こんな感じでよかったですかな？」

ティアナ

「十分です。ありがとうございました。

それでは！ 今回の“リリカル マジカル とあ新らじお”はこ

ここまで！

お相手は私、ティアナ＝ランスターと」

スバル

「スバル＝ナカジマと！」

アウル

「アウル＝アパレシオンと」

タスラム

《銀河美デバイス！ タスラムと》

ナハト

「ハヤトの正妻、ナハトと」

ハヤト（だった物体）

「かゆ……あま……」

ティアナ

「でお送りしました！」

ティアナ&スバル&アウル&タスラム&ナハト  
「「「《バイバイ！》「「「

ハヤト（らしき物体）

「かゆ……あま……がくっ」

ティアナ  
「この番組は、

(勇) GGG

(天) SSS

(軽) HTT

(涼) SOS

(二) NOS

(犬) HARD BANK

の提供でお送りしました。

……律っちゃん可愛いわよね」

スバル

「ムギちゃんと遷ちゃんの可愛いよ！」

タスラム

《 いやいや、一番は和ちゃんですよ 》

ナハト

「甘いな。やはり王道の唯だろっ」

(´・`・´)  
(´・`・´) <あずにゃん!  
(´・`・´) <あずにゃん!  
(´・`・´) <あずにゃん!  
(´・`・´) <あずにゃん!  
(´・`・´) <あずにゃん!  
(´・`・´) <あずにゃん!

ナハト

「ロリコンは黙っている」

(´・`・´) <あ、はいすみません……

ハヤト(数分前までは)

「返事がない。ただの屍のようだ」

アウル

「ハ、ハヤトさんが!? メディック! メディーーック!……!」

## 第15回『ハヤトの正妻争奪戦!?!』（後書き）

なげーよ！ どれだけ長くすれば気が済むんだ私！！  
EXAMさん、何か気になる点などありましたら、メッセージや感想でお知らせください。適時修正します。

えーと、来月更新予定ですが、もしかすると来月は更新無しかも知れませんが。

というのも、とあ新本編が最終決戦編に突入したので、そちらの更新を優先的にやっつけていこうと思っっているからです。

もちろん、余裕があったら更新するつもりではありますが、もしかすると来月のらじお更新は無いかも……とだけお知らせしておきます。でも、個人的にはクリスマス特番なんかをやりたいような（笑）

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。

・出演が決まった作品の作者様には、放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・ゲストに立候補できる作品は、最低10話以上更新され、更新停止をしていない（少なくとも月1更新程度）作品に限定させていただきます。

第16回『その出会いはまるで、流星のようだ……』(前書き)

今回、ゲストについてちょっとしたお知らせがございます。

第16回『その出会いはまるで、流星のようだ……』

ハヤト&スバル

「「あーっー」」

ティアナ

「何ダれてんのよ、アンタら……」

ハヤト

「いやー。何っーの？ 正月ボケ？」

スバル

「炬燵が恋しいよう……」

ティアナ

「シャキっとしなさいよ全く。いくら何でもダレすぎ」

ハヤト

「このブースさみいんだよ。暖房つけてても、足元がさー」

スバル

「女の子は腰を冷やしたら駄目なんだよー」

ティアナ

「あ、ん、た、ら……いい加減にしろ！」（スパーン！×2）

ハヤト&スバル

「「あいたあっ！？」」

ティアナ

「これ以上ダレるつもりなら、次は……あたし特製のおしおきよ?」

スバル

「ひいつ!?!」

ハヤト

「? 何されたんだ、スバル?」

スバル

「がくがくぶるぶるがくがくぶるぶる……」

ハヤト

「駄目だこりゃ、使い物にならん。まあ俺には関係ないからへーきだけどさー」

ティアナ

「……捻じ切るわよ?」

ハヤト

「どこを!?! 何を!?!」

ティアナ

「それが嫌なら、2人ともちゃんとやりなさい」

ハヤト&スバル

「「わかりました……」」

ティアナ

「それじゃあ、最初のコーナーいくわよ!」

ハヤト&ティアナ&スバル  
「……励まして！ スバルちゃん」

ハヤト

「さて、そいじゃあ最初の励ましいつてみようか」

ティアナ

「久しぶりだけど、スバル、準備はいい？」

スバル

「いつでもオツケー！ バッチコイ！」

ハヤト

「ほいじゃあ最初のお便り。」

ミッドチルダを放浪中の、RN：黒衣を纏う執行者さん。

『実は最近、自身の女性の好みについて真剣に悩んでいます。何故なら、最近ナンバーズのチンクに心打たれていると自覚したからです。』

ですが、ここで一つ問題が。

……こう言っしか表現しようが無いのでこう言いますが、

『合法ロリ』属性のチンクに萌えているのがどうしても罪深く感じてしまうのです。

自身の事を『節操無し』と自覚しているのですがチンクへの気持ちは募るばかり、

罪悪感と『チンク萌え』の板挟みで、どうにかなってしまいうです。

スバルちゃん、こんな俺に何でも良いですから励ましの言葉をっ！

そして叶うならディレトちゃんには、罪に塗れた俺に戒めの一言をっ！！

何卒、お願いします！』」

スバル

「ロリだっていいじゃない！　そこに愛があるのなら……！」

ディレト

「あらあら、御自分で節操無しと自覚していらっしやるのに、それでも諦められないとは……とんだ変態さんですわねえ？」

まあ、それでも諦めないその気持ちは、評価してあげてもよかったですよ？」

ティアナ

「今、ディレト居なかった？」

ハヤト

「？ 居なかつただろ？ ほれ、次のお便り読めって」

ティアナ

「居たと思うんだけど……まあいいわ。」

次のお便りは、第15管理世界『コリアス』の聖ロンドンデイル大聖堂にお住まいの、RN：鎧のシユヴァルツさんから。住所長っ！？

『最近本性（魔王スタイル）を現わしてから幹部が半数近く離反したのだ……。』

俺はそんなに人望が無いのだろうか……。通路で会った一般の騎士も恐れ戦くし……。

敵に頼むのはアレだとは思うが、励ましてくれ』」

スバル

「た、多分本性が怖かつたんですよ……。魔王はヤツパリコワイデス。アア、ナノハサンヤメテクダサイ、ソナナムリデス、ハイリマセン……ひにゃー……っ!？」

ハヤト

「スバル落ち着け！ 何かトラウマってるのは分かるが落ち着け！」

ティアナ

「ピンク怖いピンク怖いピンク怖いピンク怖い……がくがくぶるぶる」

ハヤト

「お前もトラウマ感染してんのかよ!? 落ち着けてお前ら！  
本編じゃアレは起きてないんだから！」

スバル

「……はっ！ そうだった」

ティアナ

「で、でもこう……体に刻まれた記憶？ みたいなのが、ね」

ハヤト

「はあ、すっかりしろよな。さて、せいじゃあ最後のお頼り。  
ミッドチルダ、首都クラナガンの高級マンション12階にお住まいの、RN：サリエルⅡフォーゼオンさんから。なんだ畜生！ これが経済格差つてヤツか！ 羨ましいなオイ！」

『現在書いている話が全く終わりを見せません。自分がまとめるのが下手なだけでしょうか？

ゲストもいらっしやっているのに、本当に情けない……

こんな駄作者を更生させるために気合いの入った励ましをお願いします。

ついでに好きな女の子に振られました（笑）』」

スバル

「えと、じゃあシンプルに……頑張っ！ 貴方なら出来るって、あだし信じてる！」

ハヤト

「うし。今回はここまでだな」

ティアナ

「それじゃ、個別に見ていこうかしら。まずは黒衣を纏う執行者さん」

スバル

「チンクなら、別にいいと思うんだけどなあ。だって、一応あたしよりお姉ちゃんだし」

ハヤト

「見た目ってのは、案外大事なんだよ。世間ってのはな」

ティアナ

「というか、こういうのは専門家に聞いてみましょう。で、どうなの？ スタッフとしては」

(、・・・) <チンクたんマジ天使

(、・・・) <チンクたんマジ眼帯

(、・・・) <チンクたんマジ合法ロリ

(、・・・) <チンクたんマジステインガー

(、・・・) <チンクたんマジランブルデトネイター

ティアナ

「……聞いたあたしが馬鹿だったわ」

スバル

「だ、だね……。えと、でもあたしはいいと思うよ。愛があれば見た目の幼さなんて！」

ハヤト

「最終的に捕まるんですねわかります」

スバル

「水差さないでよー！ もう……。えっと、次は鎧のシユヴァルツさん」

ハヤト

「魔王はまずいな」

ティアナ

「まずいわね」

スバル

「怖いです」

ハヤト

「ま、本性あらわした途端に部下が裏切るってのは、ある意味王道展開ではあるよな」

ティアナ

「そうね。少年漫画とかだと、結構そついつのあるわよね」

スバル

「ある意味お約束だから、人望が無いとかじゃないと思います。安心して下さい！」

ハヤト

「んで、最後にサリエル＝フォーゼオンさんか」

ティアナ

「書いても書いても終わらない……始末書みたいね」

ハヤト

「好きで書いているからこそその悩み、って感じだな。どうしても自分で納得できる終わりにならないと、イマイチ終わらせられなかったりするし」

スバル

「うん。でも、サリエルさんには頑張って欲しいなっ！」

ハヤト

「ん。じゃあキレイに纏まったところで、今回の『励まして！スバルちゃん』は終了。」

それでは“リリカル マジカル とあ新らじお”第16回……」

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートですー！！」

リリカル マジカル とあ新らじお

第16回 『その出会いはまるで、流星のようだ……』

ハヤト

「おい、何だこのポエムみたいなタイトル」

ティアナ

「何か、スタッフがいいタイトル思いつかなかったみたいよ」

スバル

「うーん、ダサイね」

(´・`・´) <シヨボンヌ……

ハヤト

「スタッフが落ち込んだところで、ゲストをお呼びするでしょう」

スバル

「はいはい。」

今回のゲストは…… 『魔法少女リリカルなのはStriker  
S ～運命を背負いし者～』から」

ハヤト

「ギンガ討伐部隊の第2号！　そしていつの間にかモテモテでハレム形成準備中ときたもんだ！

もげる！！　もげてしまえ！！　な主人公、ユウキ「エレンリッドと」

ディレト

「わたくしと同じナンバーズの13番。かつ純真無垢な乙女で男心を鷲掴みな、トレイム様ですわ」

ティアナ&スバル

「「ディレト!?!」」

ハヤト

「?　何言ってるんだお前、居ないぞディレトなんて」

スバル

「い、今居たよね!?!」

ティアナ

「絶対居たわよ!?!」

ハヤト

「訳わかんねー。まあいいや、それではゲストの方、どうぞ〜」

ユウキ

「ど、どうもー……ってか?げろって何!?!」

トレイム

「あははは、?げろ?げろ〜!?!」

ユウキ

「トレイムにまで言われた!？」

ハヤト

「トレイム、リア充には石投げてやれ石」

トレイム

「おっけ〜 ほれほれ〜!」

ユウキ

「痛い、痛いっ!?! ちょ、マジで投げるなーっ!」

ティアナ

「はいはいそこまで。何してんのよ、もう」

スバル

「ほら、トレイムも石投げるのやめなよ〜。てゆうか、どこにあったの、その石?」

トレイム

「スタッフさんがくれた」

ユウキ

「スタッフこのやるおおおおおっ!」

( > < ) < くだって、トレイムたんが石投げるって聞いたもので  
( > < ) < 好感度稼ぎたくてつい

ユウキ

「駄目だコイツら……早く何とかしないと」

ハヤト

「諦めるギンガ討伐隊2号よ。奴らを止められるのは、多分誰も居ない」

ユウキ

「それを放つといていいんですかね。ギンガ討伐隊1号」

ハヤト

「諦めるって、ステキちゃん？」

ティアナ

「モノマネはいーから。ほら、またグダグダ長くなっちゃうから、最初のコーナーいくわよ」

ハヤト

「あいあい」

スバル

「それじゃあ、まずはこのコーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「ゲストへの5つの質問！」

ハヤト

「このコーナーでは、ゲストに対して5つの質問をしていくぞ」

ティアナ

「あんまり緊張しないで、素の答えをよろしくね」

ユウキ

「了解」

トレイム

「わかったよ」

スバル

「じゃあ最初の質問！」

『お名前は?』

ユウキ

「ユウキはエレンドです。ギンガ討伐部隊の隊員2号です!!」

トレイム

「トレイムだよ。ナンバーズ最後の13番」

ハヤト

「ハヤトはロックウエルです。ギンガ討伐部隊の隊員1号DEATH  
H!!」

スバル

「いや、ハヤトのは聞いてないよ？ てゆーか、ギンガ討伐部隊って何！？」

「ギン姉に何する気！？」

ハヤト

「そりゃあ……」（ニヤリ）

ユウキ

「ねえ……？」（ニヤリ）

トレイム

「おお、何か2人が悪い笑顔してる。ドクターみたい」

ティアナ

「大丈夫よ。ギンガさんなら、この2人相手でも勝てるでしょ」

スバル

「そ、そうかなあ……ユウキはともかく、ハヤトは何か凄い悪巧みしてそうんだけど……」

ハヤト

「えー別にー？ ちょっとした小細工でギンガを動けなくしたところで、××××で××××て恥ずかしい××させたところに××を奥まで××××で、泣き叫ぶまで××××を××××××××して××××……」

スバル

「わーっ！ わーっ！ わーっ！ わーっ！」

ティアナ

「公共の電波で何言ってるのよアンタはあああああっっっ!!」  
（エスカリボルグ）

ハヤト

「ドクロちゃんっ!？」

トレイム

「???? ねーねーユウキ。今ハヤトが言ってたのって、どういう意味？」

ユウキ

「トレイムがもう少し大人になったらわかる話だよ」

トレイム

「ぶーぶー! 何かずる〜い」

ティアナ

「はー、はー……気、気を取り直して次の質問いくわよ!

『最近ハマッていることは?』

ユウキ

「えっと……モンオン、かな? 最近なのはさん達に見つからないように事務中にもやってるんだ!!」

トレイム

「はまってること? なんか金属のかたまりで、乗ってる人がもくひょーをなんとかって言いながら戦うゲーム? ドクターが作ったゲームで、バーチャルリアリティーらしいよ」

ハヤト（挽肉）

「モンンなあ。ちょうど3rd出たし、俺もやってるわ。  
ユウキのメイン武器なによ？ 俺デバイスなんだけど」

ユウキ

「うーん、最近はスラッシュアックスかなあ。あの使い勝手の悪さが癖になってるかな」

ハヤト（挽肉）

「わかるわかる。なんつーかこう……ゲーマー魂を揺さぶられるよな！」

ティアナ

「あーもーコラ、男共！ ラジオ中にモンン話に華を咲かせるな！」

トレイム

「そーだそーだー！ 私も混ぜろー！」

スバル

「ト、トレイム。そーいう事じゃないから」

トレイム

「にゃんとっ!?!」

ハヤト（挽肉）

「しかし問題はトレイムの方だな。エスコンなのか、バーチャンなのか、はたまたA・C・Eなのか」

ユウキ

「もしかするとアーマー・コアな可能性も」

ティアナ

「このゲーマーどもは……」

スバル

「あはは……、そ、それでトレイム。それって面白い？」

トレイム

「うん。こつ、相手をプチッてやるのがとっても面白いよ」

ハヤト（挽肉）

「無邪気さ故の残酷さ……恐ろしい子っ！」

ユウキ

「実力が伴ってるから、余計に厄介なんだよねえ」

ティアナ

「まあ、それがラスボスつてもものじゃない？　うちのディレトもそうだったし」

スバル

「確かに、そうかも。ってなところで次の質問！

『自分の性格を一言で』」

ユウキ

「うーんと、一言で言えば『大雑把』ですかね。細かい作業は好きなんだけどなあ〜」

トレイム

「おねーちゃん達からは幼いって言われるけど、私はけっこう大人だよおー!!」

ハヤト（再生中）

「はい。子供キャラが言うテンプレいただきました」

トレイム

「幼くなーいー!!」

(\*。。( ) || 3<トレイムたんマジ天使!

(\*。。( ) || 3<トレイムたんマジ13番!

(\*。。( ) || 3<トレイムたんマジトレイム!

ユウキ

「いや、意味わかんないですから」

ティアナ

「相手するだけ無駄よユウキ。あのスタッフは病気だから」

ユウキ

「んー……まあ、こっちに被害がないならいいか」

ハヤト（再生中）

「さすが大雑把」

トレイム

「なんだよー！ 私を無視するなーっ！」

スバル

「はいはい、トレイム機嫌直して。お菓子あげるから、ね？」

トレイム

「わーい！ お菓子ー！」

ハヤト（再生完了）

「さすが幼いな」

ユウキ

「確かに」

ハヤト

「よし、それじゃ次の質問。

『自分流格言をひとつどうぞ！』」

ユウキ

「えーっとじゃあ、折角なんで作者が考えたCVで……」

撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだっ！！」

トレイム（覚醒）

「私はアナタに負けるわけが無い。それを教えてあげる！！」

ハヤト

「テラコードギアスww」

スバル

「C・Cはどこかな？」

ティアナ

「そんなの居るわけ……あ、声優的にはリイン曹長なのかしら？」

ユウキ

「言われてみればそうかも知れないですね……」。

まあ、あんまり関係ないとは思いますがw」

トレイム

「ちよつと！ 私のカツコイイ台詞をスルーするなよー！

哀しいじゃないかー！ 泣くぞー！！」

ハヤト

「悪い悪い。なかなかカツコよかったぞ、トレイム」

トレイム

「う、うん……えへへ」(照)

スバル

「……」(ムッ)

ティアナ

「……」(ムッ)

ユウキ

「……」(これが噂に聞く、ハヤトさんの年下キラー！)「

ティアナ

「それじゃあ最後の質問いくわよー！ー！」

スバル

「そうそう、さっさといくよー!」

ハヤト

「ちよ、何いきなりキレてんのお前ら?」

ティアナ&スバル

「「ばー!」か!」

ハヤト

「(´・`・´) <ヒドス」

ティアナ

「あーもー最後の質問よ!

『パーソナリティの3人に一言!』」

ユウキ

「じゃあ俺から。ティアナとスバルにボコされながらも生きているハヤトさん偉い!!!」

「もっと強くなって、打倒ギンガ!!!」

トレイム

「えーっとねえ(メモを出す)、きどーろっかの皆さんお勤めしてくるーさま。」

「これでいいのかなあ? チンク姉に貰ったメモどーり言ってみただけだ」

ハヤト

「任せとけユウキ！　いつか必ずギンガを×××して×××を×××にして×××××……」

ティアナ

「だからアンタは公共の電波で何てこと言ってるのよっっ……！」  
(輻射波動)

ハヤト

「おはようございましてっ!?!」

トレイム

「おー。ハヤトが電子レンジに入れられたみたいな感じに」

ユウキ

「いや……普通にグロいんだけど……」

スバル

「ハヤトならへーきだよ。だってハヤトだもん」

ユウキ

「た、確かにさっきも肉片状態から再生してたし……」

ティアナ

「まあ、限界はあるかもしれないけど、そうそう死なないわよ。この節操なしは」

ハヤト(上手に焼けましたー)

「いくら俺でも流石に今のは死ぬかと思った」

トレイム

「あはは〜 何かおもしろーい」

ハヤト（こんがり肉）

「つつつくな！」

ティアナ

「ほらほら、トレイム。それにあんまり触ると馬鹿が伝染るわよ」

トレイム

「そーなのかー。馬鹿になるのは嫌だし、やめるね」

スバル

「いい子いい子」（なでなで）

トレイム

「むふ〜 きもちいい」

（…） <トレイムたんマジ幼子！

（…） <トレイムたんマジペロペロ！

（…） <トレイムたんマジもっふもっふ！

ティアナ

「黙れ変態ども！ あーもー！ とりあえず『ゲストへの5つの質問』はこれまで！

收拾つかなくなる前にCMいくわよCM！！」

地球に隕石『光の道』迫る！  
A案は莫大な予算をかけて巨大な扇風機をたくさん作り、隕石を止めようとする案。

オーリス

「これでは財政がですね……」

レジアス

「いいからやるんだ！」

一方、B案はこの人の砲撃で

フェイト

「いくらなのはの砲撃でも、隕石なんて止められる訳ないよ。  
私、こういう現実的じゃない話は嫌だなあ」

はやて

「でも、まんどらでもないやん？」

フェイト

「何？ まんどらって」

はやて

「だから、こつこつ現実離れた話や」

なのは

「ちよつと黙ってて！ 集中してるんだから！ ……行くよ！」

はやて

「やってまえ、なのはちゃん！」

なのは

「スターライトオ…………ブレイカー…………ツツツツ…………！」

カツ！ チュドーンッ！

オーリス

「あれっ？ 嘘っ!？」

はやて

「おお！ ホンマに消し飛ばしたで！」

フェイト

「ホントに!？ なのはちよつと人間離れしすぎじゃない!？」

『光の道』はどこへ？ 続きはWEBで。

HARD BANK。

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「とあ新らじお!」」」

ハヤト

「CMを挟んで、最初のコーナーはこれだ!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「こんなにリリカルは嫌だ!」」」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーさんから寄せられた『こんなにリリカルなのは嫌だ!』というお便りに対して、あたし達が色々コメントしていくコーナーよ」

スバル

「今回はどんなのが来るか楽しみだね」

トレイム

「楽しみ」

ハヤト

「よし。じゃあ早速いってみるか。

親友の豪邸の地下にお住まいの、RN：最近空気気味の暗殺者さん。

ヒモか。ヒモなのか！

何個も書いてくれてるので、一個一個いってみるか。

まずは……

『機動六課全員の声がアナゴさん』

ユウキ

「濃いよ！」

スバル

「嫌だよ！」

ティアナ

「お断りよ！」

トレイム

「アナゴってだれー？」

ハヤト

「異様に声の濃い人と覚えておくといいぞ。多分、一度聞いたら忘れられないくらいにな」

トレイム

「へえ〜。でも、全員同じ声だと誰が誰だか分からなくならないかな？」

ハヤト

「確かに。つーか普通に嫌だよなあ」

ユウキ

「模擬戦の最中とか、ずっと『ぶるああああ！』とか聞こえてきそう……」

ティアナ

「想像したくも無いわね……」。

「じゃあ次にいくわよ？ えっと次は……」

『訓練時、隊長が副隊長がハゲツラを被ってくる』

ハヤト

「……（想像中）……ぶふーっ！」

スバル

「あははははっ！」

ユウキ

「ハ、ハゲツラ……ぷっ」

トレイム

「にははははは！ それ最高！ 傑作だねーっ！」

ティアナ

「ちょ、ちよつと……ぷっ、笑うとか失礼でしょ……くふふっ……」

ハヤト

「いやー笑った笑った。シグナム副隊長が被つてるところ想像したら死ぬかと思ったわ」

ユウキ

「そ、それは……くっ、あはははっ！」

ティアナ

「っ、次に……ふふっ、次に行くわよ。」

『敵味方関係なく女性陣全員が目がヤンデレの目』

スバル

「うーん……ちよつとやってみよっか」

トレイム

「ヤンデレの目ってアレだよな。こんな感じだよな？」（ヤンデレ目）

スバル

「おお！ トレイムうまい！」

トレイム

「ドクターから教えて貰ったんだ」

ハヤト

「何教えてんだあの変態科学者……」

スバル

「それじゃ、あたしとティアもやってみようか」

ティアナ

「まあいいけど……それじゃ早速」(ヤンデレ目)

スバル

「あたしも」(ヤンデレ目)

ユウキ

「……怖い」

ハヤト

「怖い」

(´・`・´) <怖い

(´・`・´) <怖い

(´・`・´) <怖い

ティアナ

「ねえハヤト？ この間一緒にいた女の子、だあれ？」

スバル

「なんだかとっても楽しそうだったよね？」

トレイム

「ユウキも、誰かと一緒にお茶してたよねえ？」

ハヤト

「は！？ 何いきなり！？ そんな事した覚えねーぞ！？」

ユウキ

「こ、この間？ あ、あれはキャラクタだよキャラクタ！」

ティアナ

「どうして嘘つくのかな？ かな？」

スバル

「ホッチキスで口の中を縫い付けてあげようか？」

トレイム

「きゅっとして……どーん……くすくすくすくす」

ユウキ

「もうやめて！」

ハヤト

「怖すぎだつーの！ 泣くわ！！」

トレイム

「えー、終わるの？ 面白いのに」

スバル

「結構楽しかったね」

ティアナ

「まあ、確かに男性陣の心臓には悪いアニメになりそうよね」

ハヤト

「2度とやらないください。ホント怖いんで。

えーと、それじゃあ最後！

『常にデバイスが反抗期』」

ティアナ

「反抗期……どんな感じかしら？」

スバル

「んーと、こんな感じじゃないかな？」

ハヤト

「いくぞ！ ブレイブハート……！」

ブレイブハート

《 やですよ。何でわたしが、面倒臭い 》

ハヤト

「は！？ 何言ってるんのお前！？ 敵がすぐそこにいんだぞ！？」

ブレイブハート

《それくらい自分でやってくださいよ……》

ハヤト

「えー……」

スバル

「えーと、あはは……」

ティアナ

「反抗期とはちょっと違うんじゃない？ これ」

ハヤト

「ブ、ブレイブハート！ こんなこと言わねーよな！？」

ブレイブハート

《もちろんですよ。私はマスターハヤトの為に存在するのですから》

ハヤト

「さすがブレイブハート！ それでこそ俺の相棒だ！」

ユウキ

「でも、自分のデバイスにこんな事言われたら凹むと思うなあ」

トレイム

「そんなものかな？ 私はデバイスないからわかんないや」

ハヤト

「トレイムならアレだ。チンクあたりに甘えたら「鬱陶しいからくつつくな」って言われた感じだろ」

トレイム

「ええっ！？ チ、チンク姉にそんな事言われたら……っ、っ、っ、っ……」(涙目)

スバル

「だ、大丈夫だよ！ そんな事ないから！ ね？」

トレイム

「……っ、だよね！ チンク姉はそんな事言わないよね！」

ティアナ

「そうね。あの子は絶対に言わないと思うわ。妹思いの塊みたいな子だし」

ハヤト

「っし、キレイにまとまったところで次のお便りいってみよー。

次のお便りは、150ガーベラストレートの鞘の中にお住まいの、RN：監督提督さん。

……憧れる場所に住んでるなあ。この人は3つ送ってくれたぞ！

まずは……

『陸士108部隊隊舎の前で「星獣戦隊ギンガマン」のテーマを

大音量で一日中歌い続けるハヤト』」

ティアナ

「ただの嫌がらせじゃない」

スバル

「ギン姉絶対怒るよ……」

ユウキ

「何と素晴らしいアイデア！是非実行しましょうハヤトさん！」

ハヤト

「うむ。俺も良い考えだと思っていた。早速明日やるとしようか」

トレイム

「ガンガンギギーンギンガマーン」

スバル

「歌わなくていいから！あとハヤトとユウキも、絶対にやっちゃダメだからね!？」

ハヤト

「……ちっ」

ユウキ

「……ちっ」

スバル

「露骨な舌打ち!？」

ティアナ

「まあ、やったらやったで、揃ってギンガさんに怒られるでしょ。じゃあ次いくわよ。」

次は……『なのはさんと星光さんがシンメトリカルドッキング』」

ハヤト

「……………え、何？ 一人でツインS・L・Bとかやっちゃう感じ？」

ユウキ

「勝てる気がしない……………」

スバル

「というか、1人でもかなりのオーバースペックなのに、それが合  
体って……………」

ティアナ

「確実に1人で管理局相手できるわよね」

トレイム

「私よりも強くなるのかな？」

ハヤト

「多分、そうなるだろうな」

トレイム

「それなら楽しみだな、私は！」

ハヤト

「これだから戦闘狂は……」

トレイム

「なんだよ〜！ 私は戦闘狂じゃないぞー！」

ハヤト

「自覚が無いって怖いよね。

さて、それじゃあ最後いってみるか。

最後は…… 『借り暮らしのスカリエッティ』」

ユウキ

「ネタじゃないか！」

スバル

「ネタだね〜」

トレイム

「ドクターが何か借りるの？」

ティアナ

「いや、そういう事じゃなくてね……」

ハヤト

「でもよー、スカリエッティで実際借り暮らしじゃね？」

研究所とか材料とかも、全部管理局からの横流し品だろ？」

ティアナ

「言われてみればそうね……」

トレイム  
「そんなことないよー。私達全員でバイトして、ちゃんと買ったのもあるし」

ユウキ

「そんなことしてたの!？」

トレイム

「したよー。コンビニとか、ウーノ姉はじむいんやったり」

ハヤト

「……そんなことしてたんか」

スバル

「色々苦労してたんだねえ」

ティアナ

「事務員って……いや、普通に似合っけど……」

トレイム

「トーレ姉とかは土木工場の現場だったかなー」

ハヤト

「似合いすぎてて言葉がねえわ」

スバル

「あはは、ま、まあいいんじゃないかな？ ちゃんと自分で稼いだお金ならお」

ハヤト

「んだな。さて、それじゃあ今回の『かなりリカルは嫌だ!』は  
ここまで。」

CMを挟んでから、エンディングトークに突入だぜ」

なのは

「あれ？ ハヤト君は？」

スバル

「男のゴールデンタイムじゃないですか？」

ヴィヴィオ

『こないで!』

なのは

『!』

ヴィヴィオ

『ひとりで……立ってるよ……』

ハヤト

「……（；；）ぶわっ」

男には密かに嬉しい時間がある

男のゴールデンタイム、新ワソダ、銀の微糖

この冬、今まで一番熱い戦隊ヒーローが登場！

毎週日曜、朝8時からミッドチルダ中央放送で放送中！  
数の子戦隊、ナンバーズ！

クアットロ

「みんな、見てくださいねえ」

ハヤト&ティアナ&スバル

「……とあ新らじお！」「」「」

ティアナ

「はい。そろそろお別れの時間になりました」

スバル

「トレイム、楽しかった？」

トレイム

「うん！ でも、もうちょっと遊びたいな」

ハヤト

「じゃあこれが終わったら皆でモン　ンやるっぜ、BSPは持っているだろ？」

トレイム

「持ってるよー。ドクター特製のやつ！」

ティアナ

「……大丈夫なのそれ？」

ユウキ

「た、多分……自信ないですけど」

ハヤト

「チート使ってたらぶっ壊すけどな」

スバル

「チートっていつか、正規品と通信できるのかな？」

トレイム

「だいじょーぶだよ！ おねーちゃん達のは普通に買ったやつだったけど、ちゃんとできたもん！」

スバル

「ナンバーズ総出でやってるんだ……」

ティアナ

「あ、あたし達の戦ってる相手って……」

ユウキ

「深く考えたら負けだと思いますよ?」

ハヤト

「そうだな。頭痛くなってくるわ……んでは、最後に番宣いごうか」

ティアナ

「じゃあ今回は……ユウキ、お願いできる?」

ユウキ

「了解です。それでは……」。

俺の出ている作品は、『魔法少女リリカルなのは』運命を背負いし者』。

なくしたのはそれまでの記憶、手に入れたのは大切な人と仲間達。確かな決意を胸に歩き出した彼にどんな事件が待っているのか? 普通な主人公、ユウキ・エレンリッドが普通に活躍する物語。

いよいよクライマックス、スカリエッティー達との決戦です。死亡フラグを立てまくってしまった俺はどうなるのやら……

「こんな感じですかね」

ハヤト

「死亡フラグは大変だよなあ。じゃあ俺、パインサラダ作って待つてるわ」

ユウキ

「微妙に古い死亡フラグっ!?!」

スバル

「じゃあ次に、お便りやゲストに関するお知らせです。

んーと、それじゃトレイム、お便りに関するお知らせをお願いします」

トレイム

「まっかせて!

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーみんなからのお便りを待ってるよー。

“なぜなにとあ新”では、ハヤト達メインパーソナリティ3人やゲストに対する質問。

“励まして!スバルちゃん”では、リスナーが励まして欲しいエピソード。

“ツンデレ!ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞。

“チャレンジ!ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定だって。それとねー、ちゃんとハヤトが出来そうなこと、っていうのも

条件みたいだよ。

“ こんなりリカルは嫌だ！ ” では、リスナーが考えた“ こんなりリカルは嫌だ ” というお題。

そして“ ふつおたコーナー ” では、近況報告や普通のお便りを。

その他に、ハヤト達3人のイラストなども募集しているみたい。送ると、もしかしたらラジオで使われたりするかも？ みんな、どンドン送ってみてねー！ ”

ハヤト

「 んじゃ次に俺からゲストに関するお知らせ。

ちよつと今回は重要だから、出来れば皆良く聞いてくれよな

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になってる。だから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳じゃなくて、もしかすると大分前に応募してても、最後まで呼ばれない可能性もあるってことだ。

そこはまあ、了承してください。

選ばれた作者様には、ラジオからメッセージでお知らせが届くようになつてるぞ ”

スバル

「 それで、ですね。ちよつと最近ゲストに立候補してくれる人が多くなりすぎたので、一旦ゲスト応募を締め切りたいと思います。あの程度ゲスト候補が減ってきたら、また応募再開しますので、それまでは立候補しても、順番待ちリストには載りませんのでご了承ください ”

ティアナ

「お知らせは以上かしらね。トレイム、ご苦労様」(なでなで)

トレイム

「えっへん」(････) = 3

ハヤト

「それじゃあ今回の“リリカル マジカル とあ新らじお”はここまで！

お相手は、ハヤト = ロックウエルと」

ティアナ

「ティアナ = ランスターと」

スバル

「スバル = ナカジマと！」

ユウキ

「ユウキ = エレンリッドと」

トレイム

「私、トレイムでしたー」

ハヤト&ティアナ&スバル&ユウキ&トレイム

「バイバイ！」

ティアナ

「この番組は

(蛇) サーパーテール

(獅) さすらいの修理屋ビーターサービス

(狩) 毛狩り隊経理部

(鉄) 加藤機関

(犬) HARD BANK

(株) ワソダ

の提供でお送りしました。

よかった……今回は比較的まともね」

トレイム

「ねーねー、ディレトはー？ あの子と遊びたいな」

ユウキ

「血で血を洗う遊びになりそうだからやめなさいね」

トレイム

「ぶー！」

ハヤト

「いーからいーから、ほれトレイム、ベリオロスいこつぜー」

スバル

「うえ、ベリオロスいくの？ あたし苦手なんだけど……」

ハヤト

「5人でやりゃ余裕だろ、流石に」

ティアナ

「……あんたらねえ」

第16回『その出会いはまるで、流星のように……』（後書き）

今回はちょっと短く纏められてよかった……。

雷天壮双さん、何か修正して欲しい点などありましたら、ご連絡ください。

適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るもの限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、  
一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。  
ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第17回『神様だあ!？ その幻想をぶち殺(以下略)』

ハヤト

「うーむ……」

スバル

「うーん……」

ティアナ

「ちよつと、何のっけから唸ってるのよアンタらは」

スバル

「あ、ティア」

ハヤト

「いやさ、さっきこないだの第16回のラジオの感想読んでたんだよ」

ティアナ

「へえ。あ、あたしも後で読ませてね」

ハヤト

「そりゃ勿論だ。色々と参考になったりする意見もあるぞ。んで、その中で「そろそろ時期的にコーナーを新しくする時じゃ？」というお便りがあつたわけだ」

ティアナ

「ああ、確かに年も変わったしね」

スバル

「だからね、どついつ風にしようかなーってハヤトと悩んでたところなんだ」

ティアナ

「ふーん。だから、あんなにうんうん唸ってたってワケ」

ハヤト&スバル

「「そーゆーこと」」

ティアナ

「それなら、後で考えましょ。とりあえず、今回はいつも通りにやるわよ」

スバル

「はい」

ハヤト

「えー。思い立ったが吉日って言うだろー?」

ティアナ

「あのね……そんな事やってたら、またラジオがグダグダと長くなるでしょう！」

そーゆーのは、後でスタッフとやればいいでしょ」

ハヤト

「むう……確かにそうか。」

それじゃあ、コーナー改革は後回しにして、最初のコーナーいくとしようか」

スバル

「おっけー！ じゃあ、最初のコーナーはこちら！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「励まして！ スバルちゃん」」」

ハヤト

「んじゃまあ、いつてみよー。」

まずは……クロガネにお住まいの、RN：リョウトさん。

ドリル戦艦か！ ドリル戦艦なのか！ 男の浪漫なのか！？

『なかなか過去編とかシリアルに書くのが難しく、

新キャラとかそれ以降その小説では出ない設定を出していいの  
でしょうか？』

スバル

「うん。意外と、1回だけのつもりで出した設定が、後で使える  
時もありますよ？」

怖がらないで、やれることを一杯やってみましょうー！」

ティアナ  
「それじゃあ次のお便り……ん？ 何コレ、励ましてハヤトッチ  
になつてるじゃない……」

ハヤト

「ん？ 俺？」

ティアナ

「まあいいわ。とりあえず読むわよ？」

海底二万メートル・フィッシャーアイランドにお住まいの、RN：  
安部隆浩さん。

ワンー スネタかしら？

『この前、暇潰しに1/1スケール、ギア戦士電 を作って、

丁度ギンガがガサ入れするって言うから犯人達をなぶッゲフン  
ゲフン……。

遊んでたらギンガに怒られたんだ。ホンで電 が全力全壊に鉄  
屑に……。

教えてくれハヤト……この恨みを晴らす為においらは後、何体  
ガンダ を作れば良い？

因みに今丁度七十六種百体目だ。

それとお前の使いたい機体があつたら言ってくれ！送るから！』

┌

ハヤト

「ゼロは何も答えてくれない……じゃなくて、あの女やっちまおつ。頑張れ。超頑張れ隆浩さん！俺は心のそこから応援しているぞ！！」

あ、使いたい機体は、あえてのXXでよろしく……！！」

スバル

「ああ！ハヤトにとられたー！！」

ティアナ

「いや、てゆうか今アンタ、ギンガさんの事やっちまおつって……」

ハヤト

「いつてないにや〜。何のことかにや〜？」

スバル

「うー、ここはあたしのコーナーなのにー」

ハヤト

「気にしない気にしない。それじゃあ次のお便り！」

機動六課男子寮にお住まいの、RN：烈風の双弓士さん。

弓、弓か……上位クエだと単体弓はマジきついんだよなあ……。

『最近……フェイトとはやてが黒いオーラをぶつけ合ってて怖いんだ……』

『ぶついたら良い？』

スバル

「えと、胃薬飲んで頑張つて耐えましょうー!」

ハヤト

「むむ! 何かこのお便りからはリア充の香りがする」

ティアナ

「犬かアンタは!」

ハヤト

「つかスバルの励ましもどうよ? 根本的解決になつてなくね?」

ティアナ

「いいのよ。あの子は後でスタッフさんからダメ出しされるから。

えーと? それじゃあ最後のお頼り。

いつも貴方の斜め後ろにお住まいの、RN:正々堂々真正面から不意打ちさん。

……子荻ちゃん、魅力的なキャラよね。

『最近、悪い事が立て続けに起こってます。

ゲームが壊れ、家族が入院し、自分も骨折したり、キャッシュカード踏み砕いたり、

パソコンのデータが飛んでたり(泣)

こんな私を励まして欲しいです』」

スバル

「悪いことがあった分、きっと後からいい事があります！  
だから、めげないでくださいね！ あたしも応援してますから！」

ハヤト

「っし、今回はこれで終わりだな」

ティアナ

「ひとつだけ、ハヤト向けのお便りがあったけどね」

スバル

「うー。あたしのコーナーなのにー」

ハヤト

「しつつけーよ！ いーからホラ、コメントいくぞコメント！」

スバル

「ぶーぶー」

ハヤト

「後でアイス3個」

スバル

「アレだよね！ 一回だけのつもりで出したキャラとか設定が、後

々使えたりする場合ってあるよね！」

ティアナ

「（変わり身はやつ！？）ま、まあ。実際とあ新本編だと、ハヅキさんがそうだしね」

ハヤト

「姉ちゃん、元々はティアナルトでちょっとだけ出てくる脇役予定だったんだよなあ。

それがいつの間にか、本編でメインを張るような大躍進……」

ティアナ

「下手したら、主人公のアンタよりも人気ありそうよね」

ハヤト

「orz」

スバル

「だ、大丈夫だよハヤト！ そーゆーハヤトの事、あたしは応援してるから！」

ハヤト

「うう、お前はいい奴だなスバル……」。

えーと次にいくか。次は……ギンガまじ許すまじ！」

ティアナ

「自業自得な気がするんだけど……」

スバル

「てゆーか、絶対自業自得だよね」

ハヤト

「ギンガはそのうち絶対泣かす！」

ティアナ

「はいはい言っただけさ。どーせ無理なんだから。

えっと、次は……」

ハヤト

「リア充の匂いがプンプンします」

スバル

「うーん、こういう状況で黒いオーラぶっつけ合ってるんだろね？」

ハヤト

「リア充の匂いがプンプンします」

ティアナ

「やっぱり、そういう状況なのかしらね」

ハヤト

「リア充の匂いがプンプンします」

ティアナ&スバル

「「しつこい！」」（会苦巢狩婆&狩場庵）

ハヤト

「ぎゃあああああっ!?!」

ティアナ

「ふう、久しぶりに使ったわね。それじゃあ最後は……うーん、悲惨ね」

スバル

「でもさ、こつこつ悪いことが重なった後って、絶対にいい事あるよね！」

ティアナ

「そうね。そう信じるのって、大事よ」

ハヤト（生焼け肉）

「いい感じに纏まったな。よし、それじゃあ“励まして！ スバルちゃん”はここまで」

ティアナ

「では、“リリカル マジカル とあ新らじお” 第17回……」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「スタートです！」「」」

リリカル マジカル とあ新らじお

第17回 『神様だあ！？ その幻想をぶち殺（以下略）』

スバル

「はい！ そんな感じで始まりました、リリカル マジカル とあ  
新らじお！

メインパーソナリティのスバル「ナカジマです！」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティの、ティアナ「ランスターです」

生焼け肉<sup>ハヤト</sup>

「同じくメインパーソナリティの、生焼け肉です」

スバル

「ハヤト、ちゃんと挨拶しなきゃ駄目だよー」

生焼け肉<sup>ハヤト</sup>

「お前等がこっしたんだろーが」

ティアナ

「スバル、放つときなさい。相手していると疲れるだけだから」

スバル

「あー……そだね」

生焼け肉<sup>ハヤト</sup>

「（・・）<シヨボンヌ」

ティアナ

「馬鹿はほつといて、早速ゲストをお呼びしましょう。」

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのは』神様の力を得た少年  
』から」

スバル

「神様の力は伊達じゃない！ 何でもどんとこいな主人公の神谷迅  
さんと」

生焼け肉ハヤト

「ゼロは何も答えてくれない……え？ 違う？ 迅さんのデバイス、  
ゼロさんだ！」

迅

「うーっす」

ゼロ

《 こんにちわ。というかハヤトさん、それはゼロ違いですから 》

ハヤト（再生中）

「死ぬぜえ〜。俺を見た奴は、死んじまうぜえ！」

ゼロ

《 いや、確かにその人も一応ゼロにちょっと乗ったりしましたけ  
ど 》

ハヤト（再生中）

「俺がガンダムだーっ！ーっ！」

ゼロ

『 いや、それゼロ関係ないですよね？ 』

ティアナ

「アンタはちょっと黙ってなさい」

ハヤト

「へーい」

迅

「相変わらず飛ばしてんなあ、ハヤトは」

スバル

「あははー。ハヤト、ちょっと頭がアレですし」

迅

「確かに」

ハヤト

「うおおいスバルこの野郎！ 失礼なことやってんじゃねえよ！

つか迅さんも何納得してんの！？ 泣くぞ！？ 大声で泣くぞ  
！？」

迅

「笑えばいいと思うよ」

ハヤト

「いや、唐突なネタ振りされても……つか、エレナさんは居ないんですか？」

迅

「ん？ ああ、今回は留守番だな。何で？」

ハヤト

「いや、エレナさんのおっぱい……げふんげふん。エレナさんと話してみたかったな、と」

ゼロ

《今、あからさまにおっぱいと言いかけてましたよね》

迅

「言いかけたな」

ティアナ

「変態」

スバル

「えっち」

ハヤト

「男の子だから仕方ないんです」

迅

「わからんでもない」

ゼロ

《わからないでください》

ティアナ

「えーと、ハヤトへの制裁おはなしは後にするとして、そろそろこの「コーナー」にいきましょうか」

スバル

「そうだね。では、最初のコーナーはこちら！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「ゲストへの、5つの質問！」

ハヤト

「このコーナーでは、俺達がゲストに質問をしていくぞ」

スバル

「ゲストさんは、嘘偽りなく、気軽に答えてくださいね！」

迅

「あいよ」

ゼロ

《 わかりました 》

ティアナ

「それでは最初の質問。」

『お名前は？』

迅

「神谷 迅だ。前世では神矢 迅。漢字だけ違うんだ」

ハヤト

「この苗字は……毛利のおっちゃん！」

ティアナ

「今は声優違うじゃないの」

迅

「つか、人の苗字をすぐそっち側に結びつけんな！」

ハヤト

「えー……じゃあ、冴羽！」

スバル

「胸に七つの傷を持つ男！」

迅

「いや、だからそっち側に結び付けんってーの！ 関係ないから！」

ゼロ

《 無視すればいいんですよ。そうやって反論するから、面白がつて余計言われるんですから 》

迅

「子供か……」

ハヤト

「まだ17歳ですから！」

スバル

「まだ15歳ですから！」

迅

「いや、それってもう結構大人な方じゃねーの!？」

ハヤト

「まだ17歳ですから！」

スバル

「まだ15歳ですから！」

迅

「意味わかんねーよ……」

ティアナ

「え、えーと。それじゃあ気を取り直して次の質問。」

『最近ハマッていることは?』

迅

「最近の仕事がひと段落したからなあ……色々な部隊で総帥の立場を利用して遊びに行ってる」

ゼロ

《 そのたびにマスターは遊んでますから 》

ハヤト&スバル

「「え……?」」

迅

「ん？」

ハヤト

「総帥？」

迅

「おう」

スバル

「誰が？」

迅

「俺が」

ハヤト

「…………マヂで？」

迅

「マヂで」

ハヤト&スバル

「調子にのってすいませんでしたああああっ！」

ゼロ

《うわ、あっさりと掌を返した》

ティアナ

「権力って怖いわね」

ハヤト

「謝ります！ 謝りますから減俸だけは勘弁を！」

スバル

「アイス禁止だけは勘弁してください！」

迅

「いや、こつちの世界では関係ないから、大して実権ないし。つかそもそも、別にそんな気にしてねーって」

ハヤト

「ええ人や……っ、ホンマええ人や……っ！」

スバル

「ううう……ありがとうございますううう……」

迅

「なあゼロ。俺はこんな感謝されることをしたのか？」

ゼロ

《 相手にしないのが得策だと思えますけど 》

迅

「だーよなー」

ティアナ

「えーと、おばかコンビは置いて、次の質問に行きますね？」

迅

「そうだな。それが得策だと思う」

ティアナ

「次の質問は、

『自分の性格を一言で』」

迅

「うーん……お気楽かな？」

ゼロ

《鈍感の一言です》

迅

「鈍感……かあ？」

ゼロ

《これですからね……》

ティアナ

「鈍感な人って、自覚ないから困るのよね……」

スバル

「だよーねー……」

ハヤト

「リア充め！ リア充め！」

(、・・・) <リア充め！

(、・・・) <リア充め！

( ． ． ． ) <クリア充め！

迅

「そんなにかよ!？」

ハヤト

「いやまあ冗談ツスけど。でも、鈍感な人が自覚ねーってのはホントだと思いますよ」

迅

「そんなもんかなあ？」

ティアナ

「そうですねよ。どっかの馬鹿もそうですし」

スバル

「ホント、困ります」

ハヤト

「誰？」

ティアナ

「……………」

スバル

「……………」

迅

「……………」

ゼロ

《 …… 》

ハヤト

「な、何故俺を見る!?!」

ティアナ&スバル

「「はあ……………」」

迅

「大変だな、2人とも」

ゼロ

《 心中お察しします 》

ティアナ&スバル

「「ありがとうございます」」

ハヤト

「え、なにこれこわい。いつの間にか仲間はずれになってた……………」

迅

「まあ、何となくわかった気がするわ。

んじゃ、俺も少し気をつけないとなあ……………」

ゼロ

《 気をつけてどうにかなるモノでもないですけど 》

ハヤト

「え？ 無視？」

ティアナ

「じゃあ次の質問いきますね。次の質問は……」

『好きなもの、嫌いなものは？』

迅

「好きなものねえ……」。

前世ではオタクだったから、アニメ、特撮、なんでも来いだっ

ゼロ

《 聞いているのは今だと思えますよ 》

迅

「今かあ……好きなものは自分の娘たち、ターナとヴィヴィオかな」

ゼロ

《 嫌いなものありませんよね 》

迅

「なのは達のファンクラブが嫌い。毎回毎回襲撃してくるから」

ハヤト

「ファンクラブくらい、別にいいじゃないか！

俺なんて、俺なんて……ちよつとスバルやティアナとイチャついただけで、あつちこつちから全力攻撃が飛んでくるんだぞ！？ しかも何かすげー威力の！」

迅

「いや、それはまあ……でもホラ、鬱陶しいって意味でな？」

ゼロ

《 襲ってきても、一瞬で返り討ちですけどね 》

ハヤト

「きーっ！ これだから最強系主人公はっ！

妬ましいっ！ 妬ましいっ！ 妬ましいっ！ 妬ましいっ！ 妬ましいっ！ 妬ましいっ！

ティアナ

「あーもー、いい加減黙りなさい」（会苦巢狩婆）

ハヤト

「パルスイツ！？」

迅

「お、おおう……やりすぎじゃね？」

スバル

「いつもの事なんで、気にしないでください」

迅

「そ、そっか……（こ、こええ……）」

ハヤト（焦げ肉）

「マスクが無ければ即死だった」

ゼロ

《 いや、あの電流は普通の人間なら死んでます 》

迅

「つーか、ハヤトは別にマスクしてなかっただろ」

ハヤト（焦げ肉）

「こまけえこたあいいんだよ！」

スバル

「はいはい。ハヤトはちょっと黙っててね？」（狩場庵）

ハヤト（焦げ肉）

「名探偵ポアロツ！？」

迅

「……あれだな」

ゼロ

《 なんです？ 》

迅

「前世で漫画とか読んでた時に、『こんなスゲー攻撃を受けて死なない人間なんていねーよw』とか思ってたけど、案外いるもんなんだなあ……」

ゼロ

《 まあ、ハヤトさんを人と定義していいのかどうか、悩みますけど 》

ハヤト（炭肉）

「俺が人間かどうかは置いといて、迅さんってお父さんキャラなんですよね」

迅

「ん？ まあ、キャラって言うかなんていつか……」

ハヤト（炭肉）

「娘自慢とかします？」

迅

「3日くらい徹夜になるが、いいか？」

ティアナ

「遠慮します」

スバル

「ハヤト相手にやってください」

迅

「な、何故だ!？」

ハヤト（炭肉）

「ドーターコンプレックス、略してドタコンはこれだから……」

ゼロ

《響きが何かドタキャンみたいですね》

ハヤト（炭肉）

「まあ、いいお父さんなのは確かですから、いいとは思いますが、  
そんじゃま、最後の質問いきましょか。」

『パーソナリティの3人に一言!』

迅

「とりあえずあれだな、ハヤトがもうちょっと鈍くなくなって、スバルとティアナがもっと迫ればいいと思う。うん、夜襲え 二人とも」

ゼロ

《 そんな一言で大丈夫か 》

迅

「大丈夫だ、問題ない」

ティアナ

「な、ななな何言ってるんですか!?!」

スバル

「お、襲うって、夜襲うって!?!」

ハヤト（再生中）

「夜這いですね。わかります」

ティアナ

「何でアンタはそんなに平然としてんのよ!?!」

ハヤト（再生中）

「エロゲで慣れてるし」

スバル

「えっちーっ!?!」（零距离ディバインバスター）

ティアナ

「へんたいへんたい、へんたいーっ!」(弱S・L・B)

ハヤト(再生中)

「ひにゃーっ!?!」

迅

「……若いなあ」

ゼロ

《年寄り臭い台詞言わないでください》

迅

「つか、俺が咄嗟に防御してたから良かったけど、してなかったらこのブース消し飛んでたぞ」

ゼロ

《純真な乙女をからかうからですよ》

迅

「からかうなんて失礼な。俺はいつだって真面目だ!」

ティアナ

「余計悪いですっ!」

スバル

「そうですよっ!」

迅

「そうかあ? ハヤトも、俺の事をどうも言えないくらいに鈍い

だろ？

だったら、やっぱりそれくらい過激な事をした方が……」

ハヤト（それはもう凄いことに）

「いや、もうやられましたよ？」

迅&ゼロ

「《 ！？ 》」

ティアナ&スバル

「「！！」」

ハヤト（それはもう凄いことに）

「こないだの夜、2人で俺の部屋に来て……」

ティアナ&スバル

「「言うな馬鹿ああああっつ！！！！」」

ハヤト（それはもう凄いことに）

「エルシャダイツ！？」

迅

「なんだ、もう事後だったか」

ゼロ

《 最近の若い子は、大胆ですね 》

スバル

「ち、違ってますっ！ あれはティアアがやるっつて！」

ティアナ

「ちよっ！？ あたしのせいにする気！？ アンタだって乗り気だったじゃない！」

スバル

「ちちち、違うもんっ！」

迅

「はいはい、わかったわかった」

ゼロ

《 2人とも合意の上だったと……そういつ事ですね 》

ティアナ&スバル

「「違いますってば！」」

ハヤト（ドえらいことに）

「と、とりあえず、し……CM、です」

ギンガ

「あれ？ スバル、何それ？」

スバル

「あ、ギン姉。これ、新しいスマートフォン」

ゼスト

「どうもはじめまして」

ギンガ

「あら、いいわねえ。ちょっと貸して」

ゼスト

「失礼する」

スバル

「あっさり！？ しかも正座してるし」

ギンガ

「へえ……いいじゃない。すごくいい、すごくいい」

スバル

「ギ、ギン姉。何してるの」

ギンガ

「もつと前に会いたかった」

ゼスト

「今からでも、十分間に合うぞ」

スバル

「ちよっ、ちよっど、返してよ〜」

ゼスト

「すまんが、ちょっと静かにしてくれるか」

スバル

「（．．．）」

ギンガ

「スバル、ちょっと借りるね？」

スバル

「ええっ!？」

ゼスト

「遅くなるやも……いや、遅くなる」

スバル

「えええっ!？　ちょ、ちょっとちょっと!」

ギンガ

「港の見える丘公園」

これがタブレットという、新しいカタチ。

ゼスト

「こっちだ。ついてこい」

ボコモ スマートフォン「GALAXY Tab」

“bocomo”

ティアナ&スバル

「「とあ新らじお！」」

ハヤト（再生中）

「あー、落ち着いたかお前ら？」

スバル

「うー……うん」

ティアナ

「な、何とかね」

迅

「そんな照れることでも無いと思うんだけどなあ」

ティアナ

「照れますから！」

スバル

「恥ずかしいですから!」

ハヤト（再生中）

「はいはい、わかったから落ち着け、な？」

ほら、次のコーナーいくぞ。次のコーナーはこれだ!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「なぜなに」とあ新!」「」

ティアナ

「こ、このコーナーでは、リスナーさんからの質問に、あたし達が答えていきます」

ハヤト（再生中）

「それじゃあ最初の質問。

デンライナーの乗客室にお住まいの、RN：ゆうたんぺさん。

いーじゃん! いーじゃん! すげーじゃん!

『六課の人達を、動物で例えるなら何?』

スバル

「六課の人たち……部隊長とかもかな?」

ハヤト（再生中）

「だろうな。じゃあ1人ずつ交代で言っていこうぜ」

ティアナ

「じゃあ、まずはあたしからいくわね。」

あたしはなのはさんで……うーん、犬かしら？」

迅

「まあ、似合ってるわな」

スバル

「次はあたしー。フェイトさんで……こっちも、やっぱり犬かな？」

ゼロ

《あの2人は、どっちも従順な感じですよんね》

迅

「だなあ。犬って言われると何かしっくりくるわ」

ハヤト（再生中）

「んじゃ俺は八神部隊長だな。」

あの人は……駄目だ、タヌキ以外に何も思いつかねえ」

ティアナ

「仕方ないわね」

スバル

「仕方ないよ」

迅

「はやてだしな」

ゼロ

《むしろそれ以外無いでしょう》

迅

「じゃあ次は俺か。俺は……そうだな、スバルにしよう。  
んー……やっぱスバルは犬っ子だろ」

ハヤト

「異議なし」

ティアナ

「異議なし」

スバル

「そ、そんなに犬っぽいかなあ？」

ハヤト

「犬っ子だよ。お前は、間違いないく。」

ん、じゃあ俺はティアナにするかな。ティアナは……猫か？  
ツ  
ンデレってとこで」

ティアナ

「だ、誰がツンデレよー！」

迅

「ツンデレだろ」

ゼロ

《間違いなくツンデレでしょう》

ティアナ

「迅さん達まで!？」

スバル

「あはは。じゃあ、次はあたしー。

エリオにしようかな。エリオは……………なんだろう？」

ハヤト

「エリオはアレだ……………えーと」

ティアナ

「何してんのよ、エリオは……………えーと……………」

迅

「3人して思いつかないのかよ。エリオはアレだろ……………えーと……………」

ゼロ

《やめてあげてください。可哀想でしょ!?!?》

ハヤト

「冗談はおいといて。エリオは電気ネズミだな」

迅

「その心は?」

ハヤト

「ポケモ……………」

ティアナ

「アウトーーーーーッ!!!!!!」

スバル

「怒られるから！ 任 堂に怒られるから!!」

ハヤト

「そ、そうか。すまん」

迅

「まあ、別に平気だとは思うけどな。

じゃあ次は俺が。キャラ口にするか……キャラ口は兎かハムスターっ  
ぽいな。保護欲をそそるし」

ティアナ

「あ、確かに。小動物って感じですよね」

スバル

「可愛いですよ〜」

ハヤト

「あと残ってるのは……」。

シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、リイン曹長、シャマル先生、  
ザッフィーか？」

ティアナ

「シグナム副隊長は狼かしらね。一匹狼って感じでカッコイイもの」

ハヤト

「リイン曹長は……モモンガ？ 小動物、空を飛ぶつながりで」

迅

「それは酷くないか？ ムササビだろ」

ゼロ

《どっちもそんなに変わらないと思いますけど……》

スバル

「シヤマル先生は……うーん、蛇？」

ティアナ

「蛇？ どうして？」

スバル

「なんかこう、執念深い感じが……」

ハヤト

「そんな事言つと、後で先生特製の料理食べさせられるぞ？」

スバル

「なーんていうのは冗談で！ 白鳥ですよ白鳥！

とつても綺麗で、皆大好きですもん！！」

迅

「……まあ、あの料理は怖いよな」

ティアナ

「……ええ」

ハヤト

「んでザッフィーはい……じゃなくて、狼だよな」

ティアナ

「まあそだね。元々い……じゃなくて狼だもの」

スバル

「だよー。い……じゃなくて、狼だよー」

迅

「うん。い……じゃなく、狼だな」

ゼロ

《 もういつそ犬って言いましょうよ。逆に可哀想ですよ 》

ハヤト

「残るはヴィータ副隊長か。まあヴィータ副隊長は簡単だよな」

迅

「だな」

ティアナ

「簡単？ え、じゃあヴィータ副隊長を動物に例えると？」

ハヤト&迅

「「ライオン」」

スバル

「？ 何で？ イメージ違う気が……」

ハヤト  
「そりゃあ……」

迅

「勇者王的な意味で？」

ティアナ&スバル

「「ああ……」」

ハヤト

「ん、これで全員か？ じゃあ最後に纏めてみよう。」

・高町隊長 犬

・ハラオウン隊長 犬

・八神部隊長 タヌキ

・シグナム副隊長 狼

・ヴィータ副隊長 ライオン

・シャマル先生 へ……じゃなくて白鳥

・ザッファイー い……狼

・スバル 犬

・ティアナ 猫

・エリオ ピッピカピー

・キャラロ 兎、もしくはハムスター

……あれ？ 俺は？」

ティアナ&スバル&迅

「「「猿」」」

ハヤト

「（・・）」

ゼロ

《仕方ないですね》

ハヤト

「（・・）」<ソウデスカ……」

スバル

「ではでは、次のなぜなに！

次のなぜなにには、ハヤトを狙い撃てる場所にお住まいの、RN：  
銃のドンナーさんから！

……狙い撃つぜ！

『もし過去に戻れるなら何時に戻りたい？』

ティアナ

「過去……そうね、やっぱり子供の頃かしら。

兄さん達が居た頃に戻りたいって、やっぱり思うもの」

スバル

「あたしも、お母さんが生きてた頃かなあ……えへへ」

迅

「お、おおう……何だかしんみりした空気に。

こういう時はお前が頼りだハヤト！ そのエアブレイカー（空気  
殺し）を使い！」

ハヤト

「任せといてください！

俺が戻れるなら、やっぱり記憶をそのままに6歳の頃！

小さい身体を武器におねーさん達にあんなことやそん（バキューン）ロックオンツ！？」

ティアナ

「狙撃された!？」

スバル

「狙い撃てる場所って、本当に狙い撃てる場所だったの!？」

迅

「うわぁ……ハヤトの頭が吹っ飛んでグロい事に」

ゼロ

《おお、グロいグロい》

ハヤト（グロい）

「俺でなければ即死だった」

迅

「いや……なんでフツーに生きてんだよ。頭半分吹っ飛んでるんだぞ?」

ハヤト（グロい）

「俺だから、としか」

迅

「……それで納得出来ちまうのが嫌だ」

ゼロ

《 仕方ないですね 》

ティアナ

「え、えーと。まあとりあえず、あたし達の戻りたい頃はこんな感じですよ。」

では次のなぜなに。

龍騎の世界のミラーワールドにお住まいの、RN：神崎はやてさん。

ああ、微妙に龍騎じゃないのね。

「ハヤトがゲーム好きになったきっかけは？」

また、人生で初めてはまった思い出のゲームはどんなものですか？」

ハヤト（グロイ）

「ゲームが好きになった切欠、ねえ……」

ティアナ

「？ 何か言い難い理由なワケ？」

ハヤト

「いや、そーゆーワケじゃねーんだ。」

単純に、初めて姉ちゃんに勝てたのがゲームで、それ以来ゲームで姉ちゃんに勝つのが楽しくて、その延長線でゲーム自体が好きになったんだよ。

完璧超人の姉ちゃんに勝てたつてのが、スツゲー嬉しかった記憶あるわ」

スバル

「へえ、ハヅキさんつてゲーム苦手だったんだ？ いがーい」

迅

「完璧超人の弱点ってワケか」

ティアナ

「それで？ 一番最初にはまったゲームは何かしら？」

ハヤト

「えーと……あれのタイトルなんだっけ……んー……。あぁ、思い出した！ 『ポポロクロイス物語』だ！」

迅

「おお！ アレか！」

ティアナ

「？」

スバル

「ポポロ？」

ハヤト

「RPGだな。ちょっとマイナーだが、すっげー名作なんだぞ」

迅

「まあ、個人的にはPS版だけだけどな」

ハヤト

「それは同意ツス。PS2版はもう違うゲームだったしなあ」

ティアナ

「……なんか、またゲーマー同士で盛り上がってるわね」

スバル

「あはは。やっぱり、ゲームの話題だと、ついていけないよねえ」

ゼロ

《 ついていく必要も無いとは思いますが 》

ハヤト

「まあ、ポポロが何か分からない人はヤホーでググれ！

そんな訳で“なぜなにとあ新”はここまで！ 続いてはこの「  
ーナー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『ツンデレ！ ティアナちゃん！』」

スバル

「このコーナーでは、ティアガリスナーの皆さんから寄せられた台詞に、ツンデレな返事をします！」

ハヤト

「ツンデレ好きのそのの大きなお友達！ 耳に焼き付ける！」

迅

「いや、耳には焼き付けらんねーだろ……」

ハヤト

「細かい事は気にしない！」

「そんなじゃティアナ、準備はいいか!？」

ティアナ

「……まあ、いいわよ」

スバル

「それじゃあ最初のツンデレリクエスト！」

えっと、箱庭学園旧校舎の空き部屋にお住まいの、RN：ニシヤルK・Kなのに、十人中十人にK・Sと間違われる人さんから！  
めだかポツクス！！

『傘無いのか？ 俺の使うか？』

ティアナ

「べ、別にいいわよ！ あたしに貸したら、あんたの傘が無くなる  
じゃないの！」

……だ、だからその。一緒に入ってあげてもいいわよ！」

迅

「おおう、これまたテンプレな」

ゼロ

《 コテコテですねぇ 》

ハヤト

「それが王道なれば。では次のツンデレリクエスト。

聖王のゆりかご内の駆動路お住まいの、RN：検体番号1003  
2さん。

自分が風邪の設定で。

『ティア、看病してくれてありがとう……お前が来てくれて、  
嬉しかったよ……』」

ティアナ

「べ、別に来たくて来たんじゃないわよ！ アンタが居ないと、仕  
事が滞るから来ただけなんだから！

勘違いしてないで、さっさと風邪なおしなさいよねっ！」

迅

「きつとこの後「そうだな、ありがと」とか返されて、真っ赤にな  
って慌てるのみた」

ゼロ

《 テンプレ的展開ですもんね 》

スバル

「あはは。ティアってば、典型的なツンデレさんですもんね。ではでは、最後のお頼りは迅さんお願いします!」

迅

「俺? ああ、わかった。

えっと、最後のツンデレリクエストは……。

第97管理外世界、光写真館の背景ロールの裏にお住まいの、R

N：綾崎さん。

『まあ俺のこと悪く言っても。心の本音はどうなんだ?』

ティアナ

「ほ、本音って何よ!? あ、アンタなんてだ、大きら……いでもないけど、ああもう!

とにかく! 本音とか関係ないわよっ!」

ハヤト

「萌え」

スバル

「萌え」

ゼロ

《 萌えですねぇ 》

迅

「意外と萌えるモンだな」

ティアナ

「うう……久しぶりだから、すっごい疲れたわ……」

スバル

「ティア、お疲れ」

ハヤト

「乙カレ」

迅

「お塚礼」

ティアナ

「最後の2人！ 労う気ないでしょ!？」

ハヤト

「労ってるよ」

迅

「労ってるだろ」

ティアナ

「ぐぬぬ……」

ハヤト

「まあ、可愛かったしいいじゃん？」

ティアナ

「ふえっ!？」

スバル

「そうそう、ティア、可愛かったよ」

ティアナ

「な、ななな何馬鹿なこと言ってるのよ!？」

ハヤト

「? だって、事実だしなあ」

スバル

「ね」

ティアナ

「そ、そんな事言われても、嬉しくなんかないんだからねっ!」

迅

「テンプレいただきました」

ゼロ

《 いただきましたー 》

ティアナ

「いくら総帥と云えど、ぶん殴りますよ!？」

／射命丸！／／うぜえ丸！／／射命丸！／

ゼロ

《 おお、こわいこわい 》

／射命丸！／／うぜえ丸！／／射命丸！／

ハヤト

「 スタッフノリいいなあ 」

スバル

「 まあ、スタッフさん達だし 」

ハヤト

「 だなあ 」

ティアナ

「 …… はあ、もういいわ。とりあえず、“ ツンデレ！ ティアナちゃん ” はここまで。」

「 CMを挟んでから、エンディングトークです！」

迅

「 恥ずかしくて誤魔化したな」（ニヤニヤ）

ゼロ

《 誤魔化しましたんでしょうね 》

ハヤト

「誤魔化してるよなあ」(ニヤニヤ)

スバル

「ティア可愛い」(ニヤニヤ)

ティアナ

「全員黙れー！ーっ！！」

なのは

「DVDの返却」

フェイト

「返却」(・)メモメモ

なのは

「土曜日は教導」

フェイト

「土曜日は教導」(・)メモメモ

なのは

「あとは……」

フェイト

「もう、全部教えておいてね！」

なのは

「今日中に、ハヤト君のお誘いを断る」

フェイト

「ハヤト！ 断る！ 了解！」

ケータイがメモになる

PM 22:00

フェイト

「は……か……空ひびいてる……、おも……いは……」

なのは

「?」「ピ」

【ハヤト、断る】

知らせてくれる、iコンシェル

なのは  
「忘れてた！」

ハヤト

「イタリアン、中華、焼肉……。焼肉は早いかな！w」

ザッファイ

「高町からメールだ」

ハヤト

「キタコレ！ キタコレ！」

ザッファイ

「……………」(哀れみの目)

ひつじと、ひつじ。 walk with you

“b o c c o m o”

ハヤト                      スバル  
「とあ新〜」                      「ラジオー！」

ハヤト

「えーと、そんな感じでエンディングトークのお時間だ」

ティアナ

「迅さん、ゼロさん、どうでした？」

迅

「まあ楽しかったよ。面白いのも聞かせてもらえたしな」

ティアナ

「……いや、ホント忘れてください」

ゼロ

《 大丈夫です。ちゃんと録音しておきました 》

ティアナ

「今すぐ消してください！！」

スバル

「ま、まあまあティア。とりあえず一度終わらせちゃお？」

ティアナ

「そ、そうね……。それじゃあ迅さん、番宣お願いします」

迅

「おう。んじゃまあ……ごほんつ。  
俺の出ている作品は『魔法少女リリカルなのは』神様の力を得た少年』だ。

ある日神様に名簿をコーヒーで汚されて死んでしまった少年、神矢迅。

少年は創造の女神アテナの力によってリリカルなのはの世界に転生する。

見た目は5歳、中身は19歳！チート（無敵）の力を得た迅はリリカルなのはの世界を渡り歩く！

一応本編は完結してる。  
俺の活躍、見てくれよな！」

ハヤト

「本編全100話に加え、EFエンディングも多数あって読み応え抜群だぞ！」

ティアナ

「時間がある時に、纏めて一気に読みするといいかも知れませんね。  
それでは次に、お便りやゲストに関するお知らせです。じゃあスバル、お願いね」

スバル

「はいはい！」

“リリカルマジカルとあ新らじお”では、リスナーみんなからのお便りを待っています！

“なぜなに とあ新”では、あたし達メインパーソナリティ3人やゲストに対する質問。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーさんが励まして欲しいエピソード。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞。

“チャレンジ！ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定でお願いしますね！

それとですね、ちゃんとハヤトが出来そうなことっていうのも条件に加えさせてください。

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーさんが考えた“こんなにリリカルは嫌だ”というお題。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告や普通のお便りを。

その他に、あたし達3人のイラストなども募集しているみたい。送ると、もしかしたらラジオで使われたりするかもですよ？ 皆さん、どんどん送ってくださいね！

次にゲストに関するお知らせを、ハヤトから！」

ハヤト

「あいよ。つつても、ゲストに関するお知らせはあんまねーんだよ

なあ。

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になってる。だから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳じゃなくて、もしかすると大分前に応募してても、最後まで呼ばれない可能性もあるってことだ。

そこはまあ、了承してください。

選ばれた作者様には、ラジオからメッセージでお知らせが届くようになってるぞ。

それと、今はゲストの応募は締め切ってます。

なので応募されても、抽選候補には入りませんのでご注意ください。  
い。

ある程度消化できたら、また募集しますんで。こんなところか」

ティアナ

「お知らせは以上ね。

それでは、今回の“リリカル マジカル とあ新らじお”はここまでです。

お相手はティアナ「ランスターと」

ハヤト

「生焼け肉改め、ハヤト「ロックウェルと」

スバル

「スバル「ナカジマと！」

迅

「神谷 迅と」

ゼロ  
《そのデバイス、ゼロでした》

ハヤト&ティアナ&スバル&迅&ゼロ  
「「「《ばいばい！》「「「

ティアナ  
「この番組は、

(株) 21世紀警備保障  
(鋼) ビルドベース  
(警) SMS  
(炎) FIRE BOMBER  
(株) bocomo

の提供でお送りしました。  
ビルドベースって、某ゲームだと装甲薄いわよねえ」





第17回『神様だあ!？ その幻想をぶち殺(以下略)』(後書き)

また長くなってしまった……。

もついいです。変に短くなるよりはいいです！(開き直り)

秋風さん、何かありましたら感想などでご連絡ください。

適時修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いませ  
ん)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、  
一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。  
ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第18回 『姉弟の絆ってなあ、美しいモンだよな』

ハヤト

「うゝおゝお……」

スバル

「ハヤト、大丈夫？ 何か凄いだみ声なんだけど……」

ハヤト

「打ち上げではじゃぎぎだ……」

ティアナ

「カラオケのフリータイムが終わるまで歌いきった奴なんて、アンタが初めてよ」

スバル

「5時間ずっと歌いっぱなしだったよねー」

ティアナ

「アンタのせいで、途中から1部屋追加する事になったのよ？」

スバル

「しかもあたし達が移動した後も1人ぼっちですつと歌ってたし……」

ハヤト

「いゝやゝあゝ……デンジョン上がったちゃっで」

ティアナ

「はいはい。とりあえずその声をなんとかしなさい、聞き辛いっ  
たらないわ」

ハヤト

「わがっだ。ざよっと再生じでぐる……」

スバル

「えと、それも再生で何とかなるんだ？」

ティアナ

「気にしたら負けよ。スバル」

スバル

「……そだね。それじゃ、ハヤトが戻るまでにコーナー始めてよ  
か」

ティアナ

「ええ。それじゃあ今回最初のコーナーはこちら！」

ティアナ&スバル

「「励まして！ スバルちゃん」」

ティアナ

「このコーナー、もうオープニングの定番になってきたわね」

スバル

「えへへ。羨ましいでしょー？」

ティアナ

「あたしは自分のコーナーがコーナーだから、微妙なところから」

スバル

「むー。ティアはノリが悪いなあ」

ティアナ

「あたしまでノリが良くなったら、誰がアンタとハヤトと止めるのよ」

スバル

「……………いつもお疲れ様です」

ティアナ

「わかればよろしい。それじゃあ、早速最初のお便りにいくわよ。最初のお便りは軌道拘置所にお住まいの、RN：J・Sさんからです。」

……………どっかで聞いたことのあるようなイニシャルね。

『最近、私と同じ場所に収監されている、血の繋がらない娘からの求婚が激しくて困っています。』

どうか助けると思って励ましてください。いやホントマジでお願いします『』

スバル

「えと……その、娘さんの愛に答えてあげてくださいっ!!」

ティアナ

「いやいや答えちゃダメだから! ……あ、でも血が繋がってないならセーフかしら?」

ハヤト

「……何の話しとんお前ら」

スバル

「あ、ハヤトお帰りー」

ティアナ

「ホントに直ったのね……」

ハヤト

「まーなー。つか、義理でも親子が結婚したらダメじゃね?」

スバル

「そんな事無いよっ! 愛は全ての理屈を超越するんだよっ!」

ハヤト

「何をそんな夢見る乙女みたいな事言ってるの?」

スバル

「（・3・）ぶー」

ティアナ

「はいはい、そういう話は後でするわよ。今はとつとつと次のお便りを読む！」

ハヤト

「へいへい。んじゃ、次のお便りは喉が復活した俺が。

デビルガンダムの内部にお住まいの、RN：ななめたてよこ異次元不敗さんから。

なあコレ住んでるんじゃなくて取り込まれてねえ？

『最近採用を兼ねた職場実習を受けたんですが、2週間頑張ったのに不採用になってしまった上に、

他の職場の面接も全部落ちてしまいました……。励まして下さい……』」

スバル

「その経験が、いつか必ず役に立つ日がきます！」

腐らずに頑張って、その経験を生かせる日が来るのを待ちましょー！」

ハヤト

「うむ。なんか久しぶりに励ましらしい励ました」

ティアナ

「いや、今までのも十分励ましだったわよ？」

ハヤト

「まあスバルの励ましで元気が出るかどうかは不確定だがな！」

スバル

「失礼だよっ！！」

ティアナ

「はいはい。じゃれてないでさっさと次のお便りを読む！」

ハヤト

「(´・`・´)くういつす。では次のお便り。

バッドエンドの世界の翠屋にお住まいの、とある偽善者さん。

nice boat。え？ 違う？

『僕は男なのですが、何故か学校に男で結成されたファンクラブがあります……』

潰してもいいですか？ それとも皆殺しの方がいいですか？』

スバル

「ファンクラブがあるっていいことだと思えます！」

きつと貴方が好きでしょうがない人たちだから、大切にしてくださいね！」

ハヤト

「いや、男が男にモテても嬉しくないだろー」

スバル

「放課後の教室で無理矢理……とか、あると思います！」

ハヤト

「ねーよー!!」

ティアナ

「そうよスバル。こういう場合は、やっぱりこの『とある偽善者』さんが攻めよ」

ハヤト

「そーゆー話じゃねえし!!」

スバル

「乙女の趣味が理解出来ないハヤトは黙ってて！」

ハヤト

「薔薇色の会話なんか、聞きたくないわボケエツ！」

スバル

「なにさーっ！」

ティアナ

「スバル、落ち着きなさい。その話で後でじっくりとハヤトに教育してやればいいわ。」

今はとりあえず、最後のお便りを読みましょ？」

スバル

「うー……うん」

ハヤト

「いやいやいや、聞きたくねーからっ！！」

ティアナ

「（無視）えーと……それでは最後のお便りです。」

最後はバニシングエージの集会所にお住まいの、RN：ギンガⅡ  
ナカジマさんから。

……ってギンガさんっ！？

『最近』とあ新』の裏のケーブルテレビで私が出演しているドラマ『禁断の刃』での、

私の扱いが酷いんです……。2回登場してどっちも瞬殺、

2度目に至っては逃げた先で催眠ガスを撃ち込まれて人質になる役だし……。

Strikersに出た時から思ってたけど、私ってそう言う宿命なのかな……。

取り敢えず励まして……（涙で以下読めず）『」

スバル

「だ、大丈夫だよギン姉！ そんな事無いから！」

ちゃんとギン姉が活躍している番組とかもあるからっ！ だから  
頑張って！」

ハヤト

「ふうははーっ！ それが貴様の宿命なのだよ脳筋巨乳！！！」

スバル

「ハヤトは黙ってて！！」（震動拳）

ハヤト

「マツツオーンツツ！！！！！」

ティアナ

「……はい。これで今回のお便りは全部終わりね」

スバル

「ギン姉……頑張っつて。超頑張っつて」

ハヤト

「いや、実際ギンガっつてそっついう役回りじゃね？」

具体的に言っつなら噛ませい」

ティアナ&スバル

「黙らっつしやい！！」

ハヤト

「ぺらっつぶっ！？」

ティアナ

「ふとそういう事を思っても言わない。それが大人のマナーよ！」

スバル

「そっだよ！ ギン姉だって好きでそういう役回りしてる訳じゃないんだから！」

ハヤト

「…………お前の方が酷いこと言ってる？」

ティアナ

「そんな事ないわよ」

スバル

「大好きなギン姉に対して、酷い事なんていわないよ！」

ハヤト

「……………そういう事しておくのが、大人のマナーだな」

スバル

「む、何か変な納得の仕方してる」

ハヤト

「気にすんな。それじゃあ、今回の“励まして！ スバルちゃん”はここまで」

スバル

「むー、何か誤魔化された気が…………ま、いつか。

ではでは！ “リリカル マジカル とあ新らじお” 第18回

「

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「スタートです！」」」

リリカル マジカル とあ新らじお

第18回『姉弟の絆ってなあ、美しいモンだよな』

ハヤト

「はい、1ヶ月ぶりぐらいで始めました“リリカル マジカル とあ新らじお”。

メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルです」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティの、ティアナ＝ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティのスバル＝ナカジマだよー！」

ハヤト

「んじゃま、早速ゲストを呼んでみようかね。」

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikers 蒼の重騎士の再誕』から。

ステータス画面を開くと膝に爆弾マークが表示される主人公、サリエル「フォーゼオンと！」

ティアナ

「そのお姉さんで、お茶目な天才。マリナー「イシュバロンさんです」

サリエル

「どうも」

マリナー

「こんにちはわ〜」

ハヤト

「（。。。）。おっばい！おっばい！」

マリナー

「あらあら」

ティアナ

「いきなり発情してんなっ！」（会苦巢飯婆）

ハヤト

「のバツ!？」

マリナー

「あら、私なら別によかったのに」

サリエル

「姉さん、あんま兄貴をからかうなって。お色気にはとことん弱いんだから」

ハヤト（ミスタープシドー）

「というより、お色気に弱くない男なんていないでしょう。常識で考えて」

サリエル

「兄貴より弱い奴はそうそう居ない……ってどうしてそうなった！？」

ハヤト（ミスタープシドー）

「勝手にこうなる。迷惑千万だよ」

マリーナ

「気にいっているのかと思ってたわよ。ところで、今日は何の用かしら？」

ハヤト（ミスタープシドー）

「貴女のゲスト出演の祝福を」

マリーナ

「それはそれは」

ハヤト（ミスタープシドー）

「それと貴女のがままなそのおっぱいを、私色に染め上げて欲しい」

マリーナ

「どつやらそつちが今日の本命ね。要望はあるかしら？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「最高の大きさと、最高の張りを所望する」

マリーナ

「合点承知。その代わりに、確実に優しくしてね。女の子は繊細なんだから……」

ハヤト（ミスターブシドー）

「無論だ。私はそのために生きている」

ティアナ

「イイカゲン死ネ」（種割れ）

スバル

「死ネ。氏ネジャナクテ死ネ」（TRANSAM起動）

ハヤト（ミスターブシドー）

「うばぁー」

サリエル

「何だと！？ 目のハイライトが無くなったティアナの全方位からの一点集中ヴァリアブルシュートに、全身が赤い粒子に包まれたスバルのデンプシーロール！！ こ、こんな技が……！！」

マリーナ

「何だかんだで、ラグナモノリノリねえ」

サリエル

「はっ！？ 場の空気に流されてしまった！！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「いや、平気なんですけどね」

サリエル

「何で再生もなしで普通に生きてんですか！？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「愚問だな少年。あえて言わせてもらおう！ ハヤト＝ロックウエルであると！」

サリエル

「答えになってない！？」

ティアナ

「はいはい。バカに磨きがかかったハヤトは放っておきましょう」

マリーナ

「そうね。そろそろ飽きてきたし」

ハヤト（ミスターブシドー）

「何だと……！？」

スバル

「えーと、それじゃあ最初はこのコーナー！」

ティアナ&スバル

「「ゲストへの5つの質問！」」

ティアナ

「このコーナーでは、私達がゲストに5つの質問をしていきます」

スバル

「その答えで、ゲストを丸裸にしていこうってコーナーですよ！」

マリーナ

「丸裸は困るわね。公然猥褻で捕まっちゃっわ」

サリエル

「姉さん、服の話じゃないから」

ハヤト（ミスターブシドー）

「身持ちが固いなあ、マリーナさん！」

サリエル

「兄貴はいい加減元に戻ってー！」

ティアナ

（……ツッコミが他にいと楽ねー）

スバル

「ではでは、早速いってみようと思います。

ゲストの御二人は、緊張しないで答えてくださいね！」

マリーナ

「わかったわ」

サリエル

「りよ、了解」

ティアナ

「それではまず最初の質問。

『お名前は？』」

サリエル

「サリエル＝フォーゼオンだ。本名はラグナ＝イシュバロン」

マリーナ

「マリーナ＝イシュバロンよ。ラグナの姉になるわね。」

スバル

「サリエルって、何で本名じゃないの？」

サリエル

「それは……本編を読んでもらえればわかるぜ」

マリーナ

「ネタバレってヤツね」

スバル

「あや、そうですか。うう……気になるなあ」

ティアナ

「なら後で本編を読みにいけばいいでしょ」

スバル

「それもそっか。じゃあ早速……」

ティアナ

「いや、ラジオが終わってからにしないで！」

スバル

「はい。えっと、それじゃあ次の質問！」

『誰かに自慢したい事がありますか？』

サリエル

「記憶力なら絶対に負けない。作中で一度も披露していないが……」

マリーナ

「人ができないことを平然とやってのけることかな。大抵のことは簡単にやれちゃうわよ？」

スバル

「ほへへ。つまり、天才ってやつですね！」

マリーナ

「そうよ。ほらほら、もっと誉めて構わないわよ？」

ティアナ

「いや、催促されると誉めづらいです」

サリエル

「気にすんなティアナ。姉さんはからかってるだけだから」

ティアナ

「……そうよね、やっぱり。ていうかサリエル、記憶力良かったのね」

サリエル

「ああ。本編じゃ今んとこ使われてないんだけどな」

ハヤト（ミスターブシドー）

「まさかそんな設定があったとは……！ 聞いてないぞ、少年！！」

サリエル

「まあ、使われてないですし。つか大声やめませんか？  
すっげー耳がキンキン言うんですけど」

ハヤト（ミスターブシドー）

「そんな道理、私の無理でこじ開ける！」

サリエル

「意味がわかんねーです」

ハヤト（ミスターブシドー）

「何だと!?!」

スバル

「凄いですマリーナさん！ あたし達に出来ないことを平然とやってのける！

そこに痺れる！ 憧れますっつ！!」

マリーナ

「うんうん。スバルはいい子ね」

スバル

「えへへ」

サリエル

「姉さんは姉さんで、スバルを飼いならしてるし……」

ティアナ

「……無視しましょう、サリエル。マトモに相手してたら疲れるだけよ」

サリエル

「……ああ。そうだな」

ティアナ

「では、3つ目の質問にいきますね。」

『自分の性格を一言で』

サリエル

「真面目だけど、ユーモアが分かるぞ。」

マリーナ

「天才故にわからないわ。だけど基本的に女性的な優しさを持つ才色兼備よ。」

ティアナ

「じ、自分で天才って……」

ハヤト（ミスターブシドー）

「それでこそだ！ マリーナさん！」

サリエル

「うわっ！？ びっくりした！」

ティアナ

「アンタ、何でその仮面つけてからムダにテンション高いのよ……」

ハヤト（ミスターブシドー）

「あえて言わせてもらおう！ この仮面だからだ……」

ティアナ

「意味わかんないわよ……」

サリエル

「ティアナ落ち着け！ 相手にするだけ無駄だ！」

ティアナ

「ぐっ……！ い、いいわ。今は見逃してあげる」

ハヤト（ミスターブシドー）

「はあ……手合わせを拒まれたか」

ティアナ

「（# ^ ^）ピキピキ」

サリエル

「え、えーと！ 姉さんの言葉には他にもツッコミ処あるよな！  
ほら、自分で才色兼備とか言っちゃうあたりさー！」

マリーナ

「あら？ ラグナは私が才色兼備じゃないって言うのかしら？」

サリエル

「えー！？ いや……そういう訳じゃ……」

マリーナ

「ん？ なら、どついう訳なのかしら？」

ティアナ

「ガクガクブルブル」

スバル

「ガクガクブルブル」

ハヤト（ミスターブシドー）

「ガクガクブルブル」

サリエル

「つ、次の質問！ 次の質問……！」

ティアナ

「そ、そそそそうね！ えーと、それじゃあ4つめの質問いきます  
！」

マリーナ

「ラグナ。続きは帰ってから……ね？」

サリエル

「＼(^o^)／」

ティアナ

「4つ目の質問です!!」

『行ってみたい場所、世界は?』」

サリエル

「そうだな……何となく天界とか行ってみたいような……後は第9  
管理外世界の温泉というところにも行ってみたいな」

マリーナ

「私は基本的にどこも行きたくないわ。車いすは移動が不便だから」

ティアナ

「天界って……死ぬ気?」

サリエル

「いやいや、他にも行きかたあるだろ。召喚とかさ」

スバル

「あ、でも温泉は気持ち良さそうだね!」

前に出張任務で行った時に入ったスーパー銭湯も、凄く気持ちよ  
かったし」

サリエル

「お、んじゃ今度一緒に行くか?」

スバル

「いいねー」

マリリーナ

「じゃあその時は、私は留守番かしらね」

ティアナ

「え、でもマリリーナさんは、サリエルに介助してもらったとかの方法もあるんじゃない？」

マリリーナ

「ううん、それはいいわ。ラグナに悪いもの」

ハヤト（ミスターブシドー）

「そうか。貴女は姉ちゃん以上に、弟を愛していたようだな……」

ティアナ

「アンタは黙ってなさい」

ハヤト（ミスターブシドー）

「（・・・）くぶしど〜ん」

マリリーナ

「もちろん愛してるわよ。だって弟ですもの」

スバル

「うんうん。愛って素晴らしいですねー！」

ティアナ

「はいはい。それじゃあ最後の質問いくわよー。」

『パーソナリティの3人に一言!』」

サリエル

「本編が終わりましたが、とある新人の日常は永久に不滅です。兄貴、スバルとティアナの二人を大切にしてください。スバル、ティアナ、焼き餅はほどほどにな」

マリーナ

「ハヤト……二人があなたをボコボコにしたらいつでも癒やしてあげるわ。」

それと二人に飽きたら、いつでも私が恋人になってあ・げ・る?」

ハヤト（ミスターブシドー）

「なんと。そんなことを言ってくれるか。」

やはり貴女と私は、運命の赤い糸で結ばれていたようだ。

そうだ、結ばれる運命おっばいにあつた! ようやく理解した!

貴女の圧倒的な性能に、私は心奪われた。

この気持ち……まさしく愛だ!!」

ティアナ&スバル

「「愛!?!」」

マリーナ

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。じゃあ早速、お姉さんの胸に飛び込んでみちゃう?」

ハヤト（ミスターブシドー）

「その胸さばき……間違いない! それでこそマリーナさんだ。な

んという僥倖……！

生き恥を晒した甲斐が、あつたというもの……！」

ティアナ

「アンタは現在進行形で、生き恥晒してるけどね。

てゆうか、アンタはいつもいつも、おっぱいおっぱいって……」

スバル

「うー、でもヤキモチは程ほどに……って……」

サリエル

「あれ？ 俺の結構いい感じの台詞はスルー！？」

スバル

「だってマリーナさんが、ハヤトを誘惑するんだもん！」

サリエル

「ちよっ！？ 姉さん、やめてくれよ！ 俺の台詞スルーされてるじゃないか！」

マリーナ

「あら、ごめんね？ だってハヤトの反応が面白くて……。

あゝあ。それにしてもこのブース、ちよつと暑いわねえ……？」

(胸元を緩める)

ハヤト(ミスターブシドー)

「今日の私は！ 阿修羅すら凌駕する存在だ……！」

ティアナ

「いきなりルパンダイブ！？」

スバル

「なんでいきなり!?!」

マリナー

「きゃーっ」

ハヤト（ミスターブシドー）

「私は我慢強い!」

サリエル

「ちよつとなに言ってるんの兄貴!?!」

マリナー

「……でもお、今はだーめ」（グーパン）

ハヤト（ミスターブシドー）

「ぐべらばっ!?!」

スバル

「あ、沈んだ」

ティアナ

「車椅子に座ってるとは思えない、いいパンチだったわね」

スバル

「あたしの全力よりも凄かったかも……」

マリナー

「あら、コツさえ掴めば誰でも出来るわよ?」

サリエル

「……多分、姉さんしか出来ないと思うぞ」

マリーナ

「そうかしら?」

ティアナ

「(ボソツ)これだから天才は………えー、とりあえずこれでゲストへの5つの質問”は終了です。」

CMを挟んでから、次のコーナーに入りますね」

ヴィータ

「いよいよはやても、ミッドで働くんだな」

シグナム

「ミッドは巨大ですよ。主」

シャマル

「ミッドにはちゃんと薬局ってあったかしら?」

ヴィータ

「いや、あるだろ」

ザッフィー

「あっても見つけれない可能性もあるだろう」

はやて

「嫌やなあ、大丈夫やって！」

ゼスト

「その辺りは、ちゃんと俺が調べてある」

シグナム

「よろしくお願いします」

シヤマル

「お腹がすいたら、どうしましょう？」

ヴィータ

「外食できる店とか、色々あるに決まってるだろ」

ザッフィー

「そこが美味くなかったらどうする気だ!？」

はやて

「心配せんといてって！ 大丈夫やから！」

ゼスト

「そういう事も、キッチンと調査済みだ。安心してくれ」

ぐるなび

ザッフィー

「そろそろお出かけですね」

シグナム

「主を……主を……よろしく、お願い……づっっ……」

ゼスト

「任せておけ」

ミッドチルダ駅

はやて

「えっと……」

ゼスト

「大丈夫だ。話しかけてみる」

はやて

「中野坂上……」

乗換案内

マナーも一緒に携帯しましょう。

ゼスト

「それでは、行くぞ」

はやて

「了解！ いよいよやで！」

ゼスト

「ああ、いよいよだ」

スマートフォンは“bocomo”

ハヤト（ミスターブシドー）

「人呼んで！ とあ新ラジオー！」

ティアナ

「……はあ。えーと、とりあえず次のコーナーです」

サリエル

「疲れてるのはわかるが、もうちょい気合入れてくれ！」

5割くらい姉さんのせいだから、あんまり強く言えないけど!」

スバル

「次のコーナーはこちらです!」

スバル&マリーナ

「「こんなりリカルは嫌だ!」」

マリーナ

「このコーナーでは、リスナーさんから送られてきた『こんなりリカルなのは嫌だ!』というお題を読んで、私達で色々コメントしていくわよ」

スバル

「ではでは、早速読んでいきましょう!」

ティアナ

「……あれ? 何でマリーナさんがさりげなく仕切ってるのかしら?」

サリエル

「……すまん。多分悪乗りしてるんだと思う」

マリーナ

「最初のお便りはこちら！

ブラックスポットの遙か西、アイアンマウンテンの近くにお住まいの、RN：ゆうたんぺさん。

大分物騒な場所に住んでるわね……。

『六課の皆さんが性転換』ですって」

スバル

「あたし達が男の子になるのかな？」

ティアナ

「そうになると、前線部隊だとエリオが紅一点って感じね」

サリエル

「何か、エリオとのフラグの奪い合いになりそうな気が……」

マリーナ

「あら。男同士の禁断の……ってこともあるかもよ？」

サリエル

「無い！ 絶対に無い！」

ティアナ

「…………ごくり」

スバル

「…………ごくり」

サリエル

「そっちの2人も生唾を飲むな！！ あ、兄貴！ 兄貴も嫌だよな

!？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「薔薇好きが暴走すると、このような悲劇を招くというのか……」

サリエル

「まだ壊れてたー！ー！ーっ!?」（ガビーン）

マリナーナ

「冗談はさておき。戦闘シーンで、魔法とか使わなさそうよね。

特にスバルVSギンガのところなんて、それこそ格闘アニメなんかが子供騙しに見えるような、そんなガチ肉弾戦になりそう」

スバル

「確かに。SAっていう格闘技があるし、もっと細かい格闘戦になつてたかも」

ティアナ

「あたしは……ヴァイス陸曹ポジションになるのかしら？」

マリナーナ

「そうでしょうねえ」

サリエル

「あ、何か普通のコメント言ってる……。普通の事なのにすっげー安心する」

マリナーナ

「そして、アグスタの失敗の後で特訓するティアナ（ ）と、それを止めようとしたヴァイス（ ）。

「2人の距離が段々と近づいて行って……」

スバル

「きゃー」

ティアナ

「……ポツ」

サリエル

「全っ然普通じゃなかったー！ーっ！ーっ！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「諸君らがそうしている間に、私が次のお便りを読ませてもらう。」

スカリエツティ・ラボの浴槽壁の内側に居住している、RN：月  
光閃火からだ。

『ディレトがハヤトに対してツンデレだ』

サリエル

「ツンデレって言うと……どんな感じだ？」

マリーナ

「任せなさい。私に不可能は無いわ」

サリエル

「えー!? ちょっと、姉さん何言ってる……」

マリーナ

「おそろしく、こっぴつ展開になるわね！」

〜妄想です〜

クアットロ

「お馬鹿な坊や！ さあ、ガジェット的光線に焼かれて死になさい  
！！」

ハヤト

「くっ……！！」

バチイイインツ！！

ハヤト

「……？ つ！ デイレト！」

ディレト

「ふふ……怪我はなくて？ ハヤト様」

ハヤト

「何でお前が俺を……」

ディレト

「勘違いなさらなくてくださいます？ ハヤト様を倒すのはわたくし。」

他の誰にも、それを譲りたくなかっただけ……です、わ」（ドサッ）

ハヤト

「デイ、ディレトオオツツ!!!」

（妄想終了）

サリエル

「ねーよ！　ねーからこんな展開！」

ティアナ

「あら、結構王道な展開じゃないかしら？」

スバル

「だよね。この後、助かったディレトとハヤトの間にフラグが……  
って感じかな」

サリエル

「無いつて絶対！　常識で考えようぜ3人ともさあつー!!」

マリナー

「乙女の妄想力に、常識は通用しないわよ」

ハヤト（ミスターブシドー）

「私は抜けさせてもらっ」

マリナー

「っ!？　ハヤト、何故!？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「興が乗らん！」

マリナー

「そんな……これは王道展開なのよ？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「断固辞退する」

マリナー

「どうして？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「私は司令部（作者）より、独自行動の免許を与えられている。つまりはワンマンヒーロー。たった一人の主人公なのだよ」

マリナー

「そんな勝手な！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「免許があると言った」

マリナー

「くっ……それでも、守りたい明日（妄想）があるのよ！」

ティアナ

「えーと、ツッコミは……」

サリエル

「……もっ、放っておいっせ」

スバル

「そう……だね。じゃあ次のお便りです！  
クラナガンにお住まいの、RN：ザンバーさんから。いつもあり  
がとうございます。」

『なのはさんがシュートイベーションで弾幕を張る』だって」

ティアナ

「？ いつもの事じゃない？」

サリエル

「いつもの事だよな？」

スバル

「いつもの事だね」

ティアナ

「つまり、いつもの倍以上の弾幕ってことかしら？」

スバル

「そうじゃないかな」

サリエル

「そう考えるとすっげー嫌だな。シュートイベーションなのに撃墜  
されそうだ」

ティアナ

「そうね。いつもでさえ、かなりヤバイってのに」

スバル

「なのはさん、「弾幕はパワーだよ！」とか言うのかなあ」

サリエル

「違和感が全くないもんなあ……」

ティアナ

「えーと、そんなところでもう一つザンバーさんからのお題です。時間的にこれでラストかしらね。」

『新デバイスの代わりにダグコマンダーを渡される六課FW陣』

サリエル

「……ポジション争いで揉めそうだな」

ティアナ

「ギンガさんは途中参加だから、ドリ ゲキかしら？」

スバル

「うん。アニメでもドリル使ってるし」

サリエル

「だが、問題はサンダー イポジが居ないという事だ」

ティアナ

「うーん……雷つながりで、フェイトさんをお願いするしか」

スバル

「大丈夫かなあ？ フェイトさん、恥ずかしくてしてくれなさそう」

サリエル

「なるようになるさ。ってか、姉さんと兄貴、まだやってんのか？」

ティアナ

「そういえば……」

ハヤト（ミスターブシドー）

「だが！ 愛を超越すれば、それは憎しみとなる！

行き過ぎた妄想が、破滅（ナンパで振られる）を誘発するように  
！」

マリーナ

「それがわかっていながら！ なぜ妄想するの！？」

ハヤト（ミスターブシドー）

「軍人（思春期の男子）に戦い（妄想）の意味を問うとは、ナンセンスだな！」

マリーナ

「貴方は歪んでいるわ！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「そうしたのは貴女だ！ おっぱいという存在だ！！ だから私は  
貴女のおっぱいを揉む！

世界などどうでもいい。己の意志で……！」

マリーナ

「貴方だって世界の一部なのに！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「ならばそれは、世界の声だ！」

マリーナ

「違う！ 貴方はエゴを押し通しているだけだわ！  
貴方のそのゆがみ、この私が断ち切る！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「よく言った！ マリーナさん …！」

サリエル

「……見なかったことにしよう」

スバル

「それが得策だね」

ティアナ

「それでは今回の“こんなリリカルは嫌だ！”はここまで。  
CMを挟んでから、エンディングトークです」

はやて

「どっしたん？」

ザッフィー

「ん？」

はやて

「ポーっとして」

ザッフィー

「学生やり直せたらなって」

はやて

「やり直せばええよ！」

ザッフィー

「えっ!？」

はやて

「遅すぎることなんてあらへんっ！」

ザッフィー

「そっか」

はやて

「私が学生になっても、基本料3年無料やるか？」

ザッフィー&ティータ

「……」

はやて

「なに想像しとるん？」

ザッフィー&ティータ

「「いえいえ！ 何も！」」

ザッフィー

「学生に戻ります。こいつと！」

ティーダ

「僕モ！？」

はやて

「じゃあまだ学生はお酒はあかんね」

ザッフィー

「あーまだ、残ってる……」

後日

ティーダ

「ココガガツコウ？」

スカリエッテイ

「君もやり直したくなったのかい？」

ザッフィー

「同級生か！」

スカリエッテイ

「よろしく願いますよ」

学生3年無料。ブラック学割。  
Hard Bank。

ティアナ

「とあ新らじおなのかな？　かな？」

スバル

「はい、それではエンディングトークのお時間です」

サリエル

「何故だ……凄く疲れた……」

スバル

「あはは。今日はティアよりも一杯ツッコミやってたもんね」

ティアナ

「あたしはその分楽だったわ」

サリエル

「ぐぬっ！？　お、俺に押し付けたな！？」

ティアナ

「ま、たまにはあたしも楽しないとね」

マリナー

「忌々しいおっぱい信仰者の亡霊め。」

このマリナー「イシュバロンが、新世界への手向けにしてあげるわ！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「オレはおっぱいを愛でることしかできない愛好家。だから戦う。」

貧乳を生むものを倒すために、そのおっぱいを揉みくちやにする

「!!」

ティアナ

「……あっちはあっちで、まだやってるのね」

サリエル

「姉さん、何でそんなノリノリなんだ……」

スバル

「げ、元気だして！ きつとマリナーさんもたまには気晴らしではしゃぎたいんだよ！」

サリエル

「……そうだよな。きつとそうだよな」

マリナー

「そうそう。たまには気晴らしもしないとね」

サリエル

「え、！？」

ティアナ

「い、いつの間に!？」

マリナー

「うふふ、内緒」

ハヤト（ミスターブシドー）

「ようやくおっぱいと巡り会えたというのに……!  
口惜しさは残るが、私とて人の子だ!!」

スバル

「意味わかんないよ……」

サリエル

「あ、カンペ出てたのか」

（……）【そろそろ終わってください】

マリナー

「そういう事。だから、今はとりあえず終わりにしたの。

ハヤト、後でたっぷりと……ね」

ハヤト（ミスターブシドー）

「なんと……恥じらいが万全ではないとは。ならば揉む価値もなし  
」

ティアナ

「アンタはいつペン本気で死ぬ!!」

サリエル

「ティアナ落ち着け！　ここでお前まで暴れたらマジで收拾つかなくなるから！」

スバル

「え、えーとえーと……それじゃあサリエル！　マリーナさん！　最後に番宣をどうぞ！」

サリエル

「なにつ！？　この状況でかよ！　えーと……俺と姉さんの出ている作品は、

『魔法少女リリカルなのはStrikers　蒼の重騎士の再誕』だ」

マリーナ

「空を飛ぶ翼を失った青年は、再び空へ……。青年は新天地で何を学び、何を掴むことが出来るのか。自分を変えるために青年はどう戦い抜いていくのか……」

スバル

「サリエルがオリジナル主人公の、SttS再構成小説ですね。ハヤトとハヅキさんの2人も、特別ゲストとしてちよこつと登場してますよ」

ティアナ

「主人公のサリエルと六課の皆との心の交流がとても細かく書かれ

ていて、一見の価値あります」

ハヤト（ミスターブシドー）

「抱きしめたいな、この小説は！！まさに、名作だ！！」

ティアナ

「アンタは最後の最後で番宣を台無しにすんな！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「そんな事をしていていいのかな？ もう時間は無いぞ……！！」

（……）【そろそろ巻いて〜】

ティアナ

「くっ……卑怯な！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「卑怯者と罵られようと、スタッフの決定には従わせてもらっぞ、ティアナ……！」

ティアナ

「はあ、もういいわ。それじゃあ最後にラジオに関するお知らせを。サリエル、マリーナさん、お願いしていいですか？」

サリエル

「オーケー。任しとけ」

マリーナ

「大丈夫よ」

スバル

「それでは、最初にお便りに関するお知らせを、サリエル！」

サリエル

「よっしゃ。」

“リリカル マジカル とあ新らじお”では、リスナーの皆からのお便りを待ってるぜ。

“なぜなに とあ新”では、兄貴達メインパーソナリティ3人やゲストに対する質問を。

“励まして！スバルちゃん”では、リスナーが励まして欲しいエピソードを。

“ツンデレ！ティアナちゃん”では、ツンデレで返して欲しい台詞を。

“チャレンジ！ハヤト”では、兄貴にチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はこのブースの中で出来ること限定だそうだ。それと兄貴がこなせそうな内容ってのも重要だぜ。

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告や普通のお便りを。

その他に、3人のイラストなども募集しているぞ。  
送ると、もしかしたらラジオで使われたりするかも知れないな。  
皆、どんどん送ってくれ！」

ティアナ

「ありがとう。それじゃあゲストに関するお知らせを、マリーナさん」

マリーナ

「ええ。とはいえ、内容は少ないわね。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になっているの。だから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳ではなくて、一番最初に応募していても、最後まで呼ばれない可能性もあるってことね。そこは了承してくれると嬉しいかしら。

選ばれた作者さんには、ラジオからメッセージでお知らせが届くようになっているの。その時を楽しみに待っていてね。あ、でも全裸待機はダメよ？ 風邪をひいちゃうから。

それと、今はゲストの応募は締め切っているわ。

だから応募しても、抽選候補には入らないから注意が必要ね。

ある程度消化できたら、また募集するらしいわよ。……こんな感じだよかったかしら？」

スバル

「十分です！ ではでは、今回の“リリカルマジカルとあ新らじお”はここまで！」

お相手はスバル⇨ナカジマと！」

ティアナ

「ティアナ⇨ランスターと」

ハヤト（ミスターブシドー）

「あえて言わせてもらおう！ ハヤト⇨ロックウエルと！」

サリエル

「サリエル⇨フォーゼオンと」

マリーナ

「マリーナ⇨イシュバロンでした」

ハヤト&ティアナ&スバル&サリエル&マリーナ

「~~~~~ばいばい！」「~~~~~」

ハヤト（ミスターブシドー）

「この番組は、」

(暴) 奥州伊達軍

(熱) 武田家

(革) ソレスタルビーイング

(極) ブシドー日本講座

(幸) コーラサワー保険

(炎) イノケンシガレット

(聖) 天草おしぼり

(組) ミサカネットサービス

(犬) Hard Bank

(株) bocomo

以上の提供でお送りした。

まさかな……よもやソレスタルビーイングの名とロゴで会えるとは。

乙女座の私にとっては、センチメンタルリズムな運命を感じずにはいられない！」

ティアナ

「アンタはうお座でしょうが」

サリエル

「そうだったのか!？」

マリーナ

「意外な新事実ね」

スバル

「あれ? あたしはかに座って聞いてたけど……」

サリエル

「適当情報かよ！」

マリーナ

「でもかに座とうお座って……某漫画だと扱いが酷い人たちよね」

ティアナ

「……多分、狙って言ったんだと思います」

スバル

「てゆうかハヤト！ いい加減元に戻ってよーっ！」

ハヤト（ミスターブシドー）

「聞く耳もたん！」

サリエル

「……気に入ったんだな、兄貴」

ハヤト（ミスターブシドー）

「望むところだといわせてもらおう」

サリエル

「会話が成立しねー」

## 第18回『姉弟の絆ってなあ、美しいモンだよな』（後書き）

な、何とか2月中には間に合った……！ 遅れて申し訳ない。  
というかブシドーネタ多すぎて話ですよね（汗）

アガイル・グレインさん、マリーナさんをはっちゃけさせすぎた気がしますので、先に謝罪しておきますです（土下座）

気に入らない点や、修正して欲しい点などがありましたら、ご連絡ください。

直ぐに修正しますので。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第19回 『口は災いの元だったりそうじゃなかったり』

『さア……行つといで、バカ息子……!』

ハヤト

「（；；；）ブワッ」

スバル

「（；；；）ブワッ」

ティアナ

「ちよつ、アンタら何でラジオのブースで他のアニメの劇場版見てるのよ!？」

ハヤト

「良かったなア……良かったなア、チヨツー……」

スバル

「うう……よがっだよ……」

ティアナ

「いや、だからちよつと!」

ハヤト

「うるせえぞティアナ! この冬島編屈指の名シーンを見て、何とも思わんのか貴様は!！」

スバル

「そうだよ! 涙無しでは見られない、凄くいいシーンなんだよ!

？」

ティアナ

「いや……だからね？ 今はラジオの収録中であって、何でアニメを見てるのかって聞いてんのよ」

ハヤト&スバル

「昨日の夜、収録で見れなかったから！」（キリッ）

ティアナ

「……クロスミラージュ」

クロスミラージュ

《Set up.》

ハヤト&スバル

「ごめんなさいでした」

ティアナ

「わかればよろしい。さ、始めましょ」

ハヤト

「マジこええ……」（ボソボソ）

スバル

「なのはさん並に怖かったよ……」（ボソボソ）

ティアナ

「ナニカイツタ？」

ハヤト&スバル

「「いいえ何もっ！」」

ティアナ

「ほらほら、それじゃ最初のコーナーいくわよ」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「励まして！ スバルちゃん」」

ハヤト

「ふむ。そろそろこのコーナーもリニューアルの時期だよなあ」

スバル

「え！？ な、何で!?!」

ティアナ

「単純にもうすぐ20回に突入するからっただけよ。」

「ほら、番組もリニューアルした方が人気が出るかもしれないし」

スバル

「えー……いいじゃん、あたしのコーナーはそのままであ」

ハヤト

「なんだよ、最初は結構嫌がってたクセに」

スバル

「えへへ。なんか気に入っちゃって」

ティアナ

「ま、リニユールとかに関しては今日の最後でお知らせがあるから、それまでのお楽しみね。」

今はコーナーを進めるわよ？ それじゃハヤト、最初のお便りをよろしく」

ハヤト

「あいよ。それじゃ読むぜ？」

機動六課隊舎社員寮（エリオと同室）にお住まいの、RN：レイ

＝サントレルさん。

エリオと同室？ なら俺とも同室のはずだが……はて？ ホラーだネ！

『別に転生したわけでもなく、普通に19年生きてるのに11歳から身長が伸びてません。』

どーすりゃいいんでしょうか（泣）『』

スバル

「牛乳と小魚を一杯食べるといってテレビで言ってましたっ！

あと、やっぱり成長の秘訣は良く食べて良く眠ることだと思えますよ！」

ティアナ

「ふむふむ、それじゃあ次のお便りね。

デンライナーの客席にお住まいの、RN：神崎はやてさん。

いつもありがとうございます。ていうか、何に乗ってるんですか！

『最近よく寝てよく食べている筈なのに、身体がだるくて仕方ありません。』

「元気の出る励ましを1つ！」

スバル

「元気っ！ いっっぱあ~~~~~つつつつっ！！」

ハヤト

「励まし……なのか……？」

ティアナ

「深く考えないようにしなさい。スバルなんだから」

ハヤト

「それもそうか。それじゃあ最後のお便り。

ラー・カイラムにお住まいの、RN：なんだかよく知らないけどアニメで乗機が変更された男さん。」

左舷、弾幕薄いよ！ なあにやってんのおっ！

『初代スパロボ でどうしてもジュテッカ（ユーゼス機）に勝てません。』

どうか、主人公の運の悪さをどうにかしてください。

10パーセントの命中率の攻撃に当たるんですあいつ』」

スバル

「頑張つてソフトリセット&ロードを繰り返せば、いつかきつと勝てます！

だから諦めずに繰り返してくださいっ！ そうすれば勝てますから！」

ハヤト

「スパロボの命中率の信用出来なさは異常」

ティアナ

「そうよねえ。こっちの90%が外れて、相手の10%が当たるなんてザラなもの」

スバル

「バグじゃなくて仕様です！」（ドヤあ……）

ハヤト

「いや、そのドヤ顔は流行らない」

スバル

「えー」

ティアナ

「えー、じゃないでしょ」

ハヤト

「ドヤ顔はほつといて」コメントしようぜー」

ティアナ

「そうね」

スバル

「あ〜ん、無視しないでえ〜」(泣)

ハヤト

「最初のお便りはレイ＝サントレルさんのか。

身長ねえ……俺はそこそこ高いから、あんまわからんなあ……」

スバル

「ハヤトって、身長高いもんね」

ティアナ

「てゆーか、まだ伸びてるの?」

ハヤト

「まだ17だしなあ。結構伸びてるぞ?」

スバル

「何か特別なことしてる？　してるなら、教えてあげたらいいんじゃないかな」

ハヤト

「特別なことなんてしてねーと思うけどなあ。

スバルも言ってたけど、ちゃんと食ってちゃんと寝てれば育つモンじゃね？

育たないとしたら、それはもう……諦めるしか……」

ティアナ

「ちよっ！？　アンタ何希望を打ち砕くような事言ってるのよ!?!」

スバル

「あたしが励ましたのに、台無しじゃんか!」

ハヤト

「フヒヒｗｗ　サーセンｗｗ」

ティアナ&スバル

「……（イラッ）」

ハヤト

「で、次のお便りが神崎はやてさんか」

スバル

「病気とかじゃないといいんだけど……ちよっ心配だね」

ティアナ

「まあ、時期のせいってのもあるんじゃない?」

ハヤト

「ああ……春だからか」

スバル

「春ですよ」

ハヤト

「一部の東方ファンにしか分からんネタは自重しんさい。

まあ、春だから何となく気分的にダルいつてのはあるかも知れないな」

スバル

「あたしが元気注入したから、きっともう大丈夫だよ！」

ティアナ

「その自信はどこから来るんだか……」

スバル

「特に根拠は無いよ！」

ハヤト

「お馬鹿はほつとごう。最後のお便りは……分かる。痛いほどに分かる。」

俺も何度リセット&ロードを繰り返した事か……」

ティアナ

「アンタはゲームの話になると、途端にイキイキするわね」

ハヤト

「馬鹿野郎！ 初代スパロボ といえば、まさにスパロボ全盛期の頃の作品なんだよ！」

あの絶妙に崩れたバランスの面白さがお前にはわからないのか!？」

ティアナ

「……バランス崩れてたら駄目じゃない？」

ハヤト

「ちっげーよ！ 崩れてるけど、頭を使えば何とかなるっつー絶妙な調節加減が素晴らしいんだよ！」

ティアナ

「そ、そう……」

ハヤト

「それだけじゃねえ！ 初代の素晴らしさは……」(演説中)

スバル

「ティ、ティア、どうしよう？ ハヤトが何か語りだしちゃったよ？」

ティアナ

「どうしよつって言っても、あんなったら止められないでしょ?」

スバル

「だ、だよね……」

ティアナ

「ここで時間とるのもアレだし、とりあえず始めちゃいませよ」

スバル

「りょうかい！」

ティアナ

「それでは、今回の“励まして！ スバルちゃん”はここまで」

スバル

「そして！ “リリカル マジカル とあ新らじお” 第19回」

ティアナ&スバル

「スタートです！」

リリカル マジカル とあ新らじお

第19回『口は災いの元だったりそうじゃなかったり』

ティアナ

「はい。そんなこんなで始めました、“リリカル マジカル とあ新らじお” 第19回。

メインパーソナリティのティアナ＝ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバル⇨ナカジマです！  
それから」

ハヤト

「大体だな、最近のスパロボのラスボスはHPが多いだけで作業ゲ  
ーになってしまっている！

俺はやはり初代 やインパクトのような頭を使う……」（演説中）

ティアナ

「ゲーム好きなバカの3人でお送りします」

スバル

「ちゃ、ちゃんと紹介してあげようよ。

最後のメインパーソナリティは、ハヤト⇨ロックウエルですよ」

ティアナ

「さて、まだ馬鹿が全力で馬鹿やってるけど、ゲストを呼びましょ  
うか。

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikers』  
影の守護者』から、主人公のユウ⇨サエグサとそのお姉さんのミツ  
キ⇨サエグサさんの御二人よ」

スバル

それではゲストさん、どうぞ〜！」

ユウ

「よう、邪魔するぜ」

ミツキ

「こんにちは〜」

ハヤト

「……………あ、ごんちは」

スバル

「あれ？ どしたのハヤト、いきなり冷静になって」

ハヤト

「いや、なんだ……………その……………」（チラッ）

ミツキ

「？」

ハヤト

「ちっぱいを見たら、何か冷静になった」

ティアナ&スバル

「ちっぱい？」

ユウ

「小さなおっぱいの略だな」

ハヤト

「なんだろ……………ちょっと涙出てきた」

ミツキ

「余計なお世話よ？」（アームロック）

ハヤト

「あだだだだだだ！？ やめてください！ 折れます！ 普通の主

人公の腕が折れます！」

ユウ

「やめて！ それ以上いけない！」

ハヤト

「折れる折れる折れるー！ーっ！！」

ティアナ

「……まあ、これは折られても仕方がないわね」

スバル

「仕方ないね」

(。。(。。(。。  
(。。(。。(。。  
(。。(。。(。。  
ちっばい！ちっばい！  
ちっばい！ちっばい！  
ちっばい！ちっばい！

ティアナ

「うわ、あっちの変態どもがテンション上げたした」

スバル

「あれ？ でもスタッフさんは小さい子が好きだったんじゃ……」

(、・・・)(、・・・) b<ちっぱいもまた良し！  
(、・・・)(、・・・) b<流石に発情はしないけどネ！  
(、・・・)(、・・・) b<テンション上がるくらいはするぞ！

ティアナ

「自信満々のところ悪いけど、十分に変態だつてことを自覚しなさいよ！」

(、・・・)(、・・・) <自覚はしてます！

ティアナ

「なおさら悪い！」

ユウ

「……ラジオとかで聞いてたけど、マジでこんな事言ってるんだな、このスタッフ」

スバル

「あはは。まあ、スタッフさんだしねえ」

ティアナ

「ああもつ……疲れるから無視するわよ無視」

(´・`・´) <そ、そんなぁ……  
(´・`・´) <構ってくださいよう……

ティアナ

「子供かつ!」

ユウ

「スタッフ、皆いい年だろつに……」

スバル

「気にしたら負けだと思っよ?」

ユウ

「……そうだな、うん」

ティアナ

「はぁ、もうホント疲れるわ……」

ユウ

「お疲れだな、ツンデレ」

ティアナ

「ツンデレ言うな!」

ユウ

「は? だってお前ツンデレじゃん」

スバル

「ツンデレだよなー」

ティアナ

「違っつっつてんでしょうが！」

ユウ

「はいはい。それじゃあスバル、ゲストへの質問コーナー行こうぜ？」

スバル

「あ、はーい。ではでは、ゲストを迎えて最初のコーナーいってみましょうー！」

スバル&ユウ

「「ゲストへの5つの質問！」」

スバル

「このコーナーでは、あたし達がゲストさんに5つの質問をしますよー！」

ユウ

「緊張せず、いつも通りに答えさせてもらおう」

ティアナ

「自分で言うな！ つーかあたしを無視してんじゃないわよーっ！」

ミツキ

「あら、いつの間にか始まったのね」

ユウ

「おお、おかえり姉貴。ハヤトは？」

ミツキ

「あっち」

ティアナ

「あっちって……」（チラッ）

ハヤト

「……………人の関節ってこんな簡単に増えるんだネ」

スバル

「うわっ！？ タコみたいにグニヤグニヤになってる！ 気持ち悪

っ!?!？」

ユウ

「姉貴、流石にやりすぎだろコレは……………」

ミツキ

「ついカッとなってやった。手加減するつもりもなかった。今では反省している」

ティアナ

「いや……そんな通り魔が取調べで語った動機みたいな事言われても……」

ミツキ

「ついカッとなってやった。誰でも良かった。後悔も反省もしていない」

ユウ

「いやいや、それは流石に駄目だっ」

ハヤト

「あれ？ 俺の心配は？」

ティアナ&スバル&ユウ&ミツキ

「……いるの？」

ハヤト

「……愛が欲しい」

ティアナ

「あっそ。じゃあ、サクサク進めますね。それでは最初の質問。」

『お名前は？』

ユウ

「ユウ＝サエグサだ」

ミツキ

「ミツキ＝サエグサです」

スバル

「2人は」

ハヤト

「プリ ユア？」

ティアナ

「違うでしょ！ 2人は姉弟なんですよね？」

ユウ

「おう。お互い姉には苦勞するよなあ、ハヤト」

ハヤト

「うちの姉ちゃんとは比べるのもどうかと思っけどな……」

ミツキ

「ユウウ？ どういう意味かしら？」

ユウ

「じよ、冗談だよ。じよくだん！」

ミツキ

「ふうん？ まあいつか」

スバル

「あはは。では次の質問です！

『好きな食べ物は何？』」

ユウ

「そうだな。ハンバーガーやらジャンクフードって所かな？」

ミツキ

「うーん、そうだな。ユン先生の病院の病院食意外ならなんでも」

ユウ

「あれは本当にまずいからな（笑）」

ミツキ

「本当……何回病室抜け出して自分でつくろつかと思ったのやら……」

…」

スバル

「わかります！ 病院食っておいしくないですよね！」

ハヤト

「ああ……うちの食いしん坊が食いついた……」

ティアナ

「まあ、確かにあんまりおいしくないわよね」

ミツキ

「いやいや、そういう次元の話じゃないのよホント」

ユウ

「病院食だからっつーのを差し引いても、くっそマズイんだって」

ハヤト

「シャ 印のきびだんごと、どっちがマズイ？」

ユウ

「……ノーコメント」

ティアナ

「そ、そこまでなの……？」

ミツキ

「そこまでなのよ」

スバル

「ガクガクブルブル……シヤ 先生、それは食べ物じゃありません…… やめてください……いくらあたしでも食べられませんよ……ガクガクブルブル……」

ハヤト

「ああ！ スバルのトラウマスイッチが！」

ティアナ

「こうなると復帰まで時間かかるのよねえ……仕方ない、スバルは放っておいて次の質問行くわよ」

ユウ

「意外と淡泊だな」

ティアナ

「仕方ないでしょ。ちよつと時間が押し気味なんだから。それでは次の質問。」

『自分の性格を一言で』

ユウ

「面倒くさがりでマイペース」

ミツキ

「その通りね。私は……優しくノンビリかな？」

ユウ

「というより短気ですぐに怒るといった方が……」

ミツキ

「なんかいった？（怒）」

ユウ

「イエ……ナンデモ……」

ハヤト

「いやいや、ユウの言つとおり短気じゃないですか。さっきだって……」

ミツキ

「なんか言った？」（アームロック）

ハヤト

「おぎゃああああ！… やめて許して！ 勘弁してくださいミツキさんっ！！」

折れます！ 折角くっ付いた主人公の腕がまた折れます！」

ユウ

「一言余計な奴だなー……」

ティアナ

「手元の資料によると、アンタも人のこと言えないんじゃない？」

ユウ

「いやいや、俺はちゃんと弁えてるつもりだぞ」

ティアナ

「どうだか」

ユウ

「そんな事言って、ちゃんと分かってんだろ？ このシンデレレめ」

ティアナ

「それが一言余計だったのよっ！」

ミツキ

「まあまあ落ち着いて。ホラ、次の質問いきましょ？」

（、） （、）  
くさすがちっばい！

（、） （、）  
くいいこと言っネ！

ミツキ

「……………なんか言っただかしら？」

（、） （、）  
くあ、いえすみませんでした

（、） （、）  
く調子に乗りすぎました

（・・・）＜生きててすみません

ミツキ

「口は災いの元よ？ 覚えておきなさい？」

（・・・）（ズクサーイエツサー！

（・・・）（ズクサーイエツサー！

（・・・）（ズクサーイエツサー！

ティアナ

「（こ、怖いわね……）あれ？ ハヤトは……」

ハヤト

「もうこれ以上関節は増えません」

ティアナ

「……………うん、無事ね」

ユウ

「（あ、ツツコムの諦めた）」

ティアナ

「それでは次の質問です。

『会ってみたい漫画、アニメのキャラは？』」

ユウ

「とりあえずガンダムのアストナージさんには会ってみてえ〜な」  
(笑)

「ガンダムまでどう整備したのか聞いてみたいな」

ミツキ

「なら、私はチェーン・アギさんかな？ 逆シャアの。 の開発秘話なんて聞きたいわね(笑)」

ハヤト(軟体生物)

「アストナージは整備のチートキャラだよなあ」

ユウ

「某スパ ボだと、ガン ム以外にも色々と整備してるしな」

ハヤト(軟体生物)

「あーでも、 の整備はチェーンさんがやってたような気がする」

ミツキ

「開発者でもある訳だしね」

ユウ

「それでも……それでもアストナージさんなら何とかしてくれる！」

スバル

「でもさ、 ガン ムって確か某赤い彗星さんのお陰で出来たんだよね？」

ティアナ

「作者の記憶ではそうだった筈よ。 っていつかようやく復活したのね」

スバル

「うん……今のあたしは『恐怖を乗り越えたスバル』だよ！」

ハヤト（軟体生物）

「何故」O」だ……」

ユウ

「それ伏字の意味無いだろ……」

ティアナ

「話がズレてるから！」

ミツキ

「そうよ。チェーンさんの話が終わってないわ！」

ティアナ

「そういう話じゃ……いや、そういう話なのよね」

ミツキ

「ガンダムを製作した彼女から、色々話を聞きたいわよねえ…

……」

ユウ

「ああ、それは分かる……すっげえわかる……」

ハヤト（軟体生物）

「機械弄りをする人間としては気になるところ、ってワケですか」

ミツキ

「勿論よ」

ユウ

「当たり前だな！」

ハヤト（軟体生物）

「ちよつとわかる気がする。 の制作秘話はマジ聞きたいわ」

ティアナ

「……盛り上がってるところ悪いけど、最後の質問いきますよ？」

ユウ

「えー、空気嫁……違った空気読めよツンデレー」

ティアナ

「ツンデレ言うなつての！」

スバル

「まあまあティア、それじゃあ最後の質問です！」

『パーソナリティの3人に一言！』

ミツキ

「そうね……。とりあえず今回呼び頂きありがとうございました。これからラジオだけになりましたが楽しみにしております。頑張つてね！」

ユウ

「そつだな……。とりあえずお互い姉には色々と苦労するがお互い頑張ろうや。」

(ボソボソ)あとでフルモードのノアのセクシーショットやら、お前の好きそうな女の写真渡すからそれで勘弁してくれや。すまえねえくな。見栄え悪い姉貴しかつれてこれなくて」

ミツキ

「なんか言った？(怒)」

ユウ

「な……なんでもねえよ。(^^;)なんでも……」

ハヤト

「そうですねよミツキさん。僕達は別に変なことは何も言っていないせんよ？」(キリッ)

ティアナ

「そのムダにキリッとした顔……」

スバル

「エッチな話してたよね、きつと……」

ハヤト

「イヤだなあ、ティアナさん、スバルさん。ボクがそんなことする訳ないじゃないか」(キリッ)

ユウ

「(何というバレバレ……)」

ティアナ

「まあいいわ。あとで問い詰める事にしましょ」

スバル

「そうだね」

ユウ

「おいおい大丈夫か？」

ハヤト

「大丈夫だ、問題ない。」

それでは『ゲストへの5つの質問』は終了。CMを挟んでから次のコーナーだぜ」

ザッファイ

「(。 。 )」

ティード

「(。 。 )」

シャマル

「きよろきよろしない!」

ザッファイ

「すみません」

ティータ

「スミマセン」

フェイト

「あ、先生！」

ユーノ

「……」てくてく

ザツフィー

「んん？」

ティアナ

「フェレットが先生？」

シャマル

「下手な人間に習うよりいいでしょ」

ユーノ

「今日は『準主役の法則』について学びます」

ユーノ

「＼（。°）＜活躍させといて、リストラする」

ユーノ

「＼（；；）＜出てきたとしても、ほんの一瞬だけ」

ユーノ

「＼（；；）＜信じられるのは……ぶぐっ、ぐすっ……」

フェイト

「先生、泣かないで！」

なのは

「きつと4期では出番がある………といいなーって皆思ってるから！」

はやて

「そつやで！ 多分ありえへんけど…！」

ユ一ノ

「うわあああんっ…！」

ザッフィー

「………気をつけねばな」

はやて

「あ、ザフィーラはもう手遅れやで？」

ザッフィー

「!?!？」

シヤマル

「出番は大事ねー」

ティアナ

「ホントにね」

出番がなくなっても2年間無料 家族割引。

HARD BANK。

スバル

「とあ新らじおー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「なぜなに？ とあ新！」「」」

ハヤト

「このコーナーでは、リスナーの皆から寄せられた質問に俺達が答えしていくぞ」

スバル

「今回はどんな『なぜなに？』が来てるのかなあ」

ユウ

「まあ、そこは読んでみないとわかんねえ〜だろ」

ティアナ

「それじゃあ今回の『なぜなに』です。

ジー八村のブタモグラの檻の中にお住まいの、RN：ゆうたんペ  
さん」

ギンガ

「私のドリルは、天を貫くドリルだあああああああ!!!」

(´・`・´) <カエレ

(´・`・´) <お引取りください

(´・`・´) <お呼びじゃないんですよ

ギンガ

「くすん……」

ティアナ

「……なんでギンガさんが？」

スバル

「あ、多分今日隣のブースでラジオの収録だったんだよ」

ユウ

「え？ 他にもラジオ番組あるのか？」

ミツキ

「初耳よ？」

ハヤト

「いや、普通他のラジオの宣伝とかしないでしょうよ」

ミツキ

「言われてみれば、それもそうね」

ティアナ

「えーと、それは置いといてゆうたんぺさんからのなぜなにです。」

「六課の人達をスパロボで例えるなら何？（オリジナルも含む）」

ハヤト

「ほほう」

ユウ

「ふむ」

ミツキ

「これは面白そうね」

スバル

「おお、何か3人の目つきが変わった!？」

ハヤト

「じゃあサクサク答えていくとするか。そんじゃまず俺から。俺は高町隊長で……まあ、ゼオライマーだよな」

ユウ

「異議なし」

ミツキ

「当然ね」

ティアナ

「……うん」

スバル

「他に思いつかないよねえ」

ハヤト

「はい決定。んじゃ、次」

ティアナ

「じゃあ次はあたしが。あたしはフェイトさんにするわね。  
フェイトさんは……ダイゼンガーかしら」

ユウ

「その心は？」

ティアナ

「斬艦刀Ⅱザンバーフォーム」

ハヤト

「悪くないが、ダイゼンガーはスーパー系だろ？ ハラオウン隊長  
はリアル系だと思うが」

ミツキ

「そこら辺はフィーリングってヤツなのよきつと。実際、一番似合

「つてると思つわよ？」

スバル

「あたしもー」

ユウ

「んじゃ、これも決定だな」

スバル

「次はあたしがやるね。じゃあ八神部隊長！  
部隊長は……ネオ・グランゾン！」

ミツキ

「シユウ様k t k r！」

ユウ

「ディアボリック・エミッションとか、まんまブラックホールクラ  
スターだもんな」

ティアナ

「色合い的には正反対な感じだけどね」

ミツキ

「そこは仕方ないわよ」

ハヤト

「よし、じゃあこれも決定と。それじゃあ次はシグナム副隊長あた  
りに」

ユウ

「アンジュルグ」

ミツキ

「アンジュルグ」

ティアナ

「アンジュルグ」

スバル

「アンジュルグ」

ハヤト

「愚問だったな。じゃあヴィータ副隊長は」

ユウ

「ガオガイガー」

ミツキ

「ガオガイガー」

ティアナ

「ガオガイガー」

スバル

「ガオガイガー」

ハヤト

「ですよー」

ミツキ

「正直、他に選択肢があるなら聞いてみたいくらいよ」

ユウ

「全くだな。その2人は簡単すぎるだろ」

ティアナ

「それじゃあ次はFWにしようかしら。まずはスバルから……」

ハヤト

「うーん……難しいとこだな。個人的にはガオガイガーを推したいんだが」

ユウ

「それはもう出ちまってるからなあ……他に似合いそうなの……」

ミツキ

「ダイモスなんてどう？ 肉弾戦機体だから、似合うと思うけれど」

ハヤト&ユウ

「それだ！」

ティアナ

「そういう訳で、スバルはダイモスに決定しました」

スバル

「あ、あれ？ あたしの意見は？」

ティアナ

「あら、何かあったの？」

スバル

「えーと、んーと……………ごめんなさい、特に無かったです」

ハヤト

「素直でよろしい。んじゃ次はティアナだな」

ユウ

「二丁拳銃でツンデレかあゝ……………難しいな」

ティアナ

「ツンデレな機体なぞあるか！」

ハヤト

「二丁拳銃ってあたりだと、ストライクノワールじゃね？」

ミツキ

「待って。テキサスマックスも捨てがたいわ」

スバル

「せ、選択がマニアックですよミツキさん……………」

ティアナ

「えーと……………ミツキさんには申し訳ないんですけど、ノワールでお願いします」

ミツキ

「なん……………ですって……………!？」

ハヤト

「よっし。そんじゃティアナはストライクノワールで決定な。次は

エリオいくか」

ティアナ

「エリオね……槍使いなんていたかしら？」

ユウ

「槍、槍……エヴァ零号機？」

スバル

「いや、それはさすがに……」

ハヤト

「テッカマンブレードがいるじゃないか！」

ミツキ

「ああ！ テックランサーがあつたわね」

ティアナ

「ボルテッカはどうするのよ？」

ハヤト

「無かつた事に」

ティアナ

「あのねえ……」

スバル

「まあまあ、いいじゃんティア。他に良さそうな機体も無いしな」

ティアナ

「……仕方ないか。それじゃあエリオはテツカマンブレードで決定ね。」

次はキャラオかしら？ でも、キャラオはちょっと難しいんじゃない？」

ユウ

「いや、キャラオは逆に簡単だぞ」

ティアナ

「え？ どうして？」

ミツキ

「ガイキングで決定だからよ」

スバル

「ガイキング？ え〜……凄く変だと思えますけど？」

ユウ

「まあ確かにキャラオ単体なら違和感があるかも知れないけどな。だがしかし、フリードを大空魔竜に置き換えればどうだ？」

ティアナ&スバル

「！！！！」

ユウ

「つまりはそういう事だ」

ハヤト

「キャラオにフリードが乗る！！ガイキングと大空魔竜の合体という訳だな。」

うむ、キャラはガイキングに決定だ！」

ティアナ

「次は……シヤマル先生とザフィーラかしら？」

スバル

「ザフィーラはギャレオンだよね！」

ユウ

「いや、あつちが獅子で、本人は狼だから」

ミツキ

「でも形状が似てるし、いいんじゃない？」

ユウ

「そんな適当な……まあいいか」

ハヤト

「そしてヴィータ副隊長と合体するワケですね……やだ、なんかエ

ロい」

ティアナ

「死ね」

スバル

「不潔」

ユウ

「無いわー」

ミツキ

「折るわよ?」

ハヤト

「(´・`・´)」

ティアナ

「次はシャマル先生だけど……うん……」

スバル

「先生って難しいよね。殆どサポート専門だし」

ユウ

「あー、サポート型って意味ではドラグナー3とか?」

ミツキ

「そうね。帽子の形も何だかそれっぽいし」

ティアナ

「さ、流石にそれは無理矢理すぎるんじゃない?」

ミツキ

「いいのいいの。他に思いつかないし」

ユウ

「だな。それじゃあ決定ということだ」

スバル

「いいのかなあ……?」

ハヤト

「まあいいだろ。別に公式ってワケじゃないし……ってなところ  
最後はこの俺だな！」

ユウ

「ザク？」

ミツキ

「ウインダム」

ティアナ

「リック・ドム」

スバル

「シグー」

ハヤト

「量産機ばかりじゃねえか！ どういう意味だコリアツ！？」

ミツキ

「言ってるいの？」

ハヤト

「……いえ。やっぱりやめてください」(泣)

ユウ

「よし。それじゃあ最後にまとめようぜ」

スバル

「オツケー。では、これはまとめですー」

なのは           ゼオライマー  
フェイト         ダイゼンガー  
はやて           ネオ・グランゾン  
シグナム         アンジュルグ  
ヴィータ         ガオガイガー  
シャマル         ドラグナー3  
ザフィーラ        ギャレオン  
スバル            ダイモス  
ティアナ         ストライクノワール  
エリオ            テッカマンブレード  
キャロ            ガイキング  
フリード         大空魔竜  
ハヤト            量産機

ハヤト  
「量産機で……量産機で……」

ユウ  
「まあ、普通が売りなんだから仕方ねえさだろ」

ミツキ  
「そうそう。諦めが肝心ってね」

ハヤト  
「（．．．）<ちくしょう……」

ティアナ

「ふう。ちよつと長くなつちやつたわね」

スバル

「だね。それじゃあ次のなぜなに、いってみよう！」

次のなぜなにには、プラントにお住まいのRN：主人公ポジを盗ら  
れた赤服さん。

あんたつて人はあああああああつっつっ！！

『何かをどうしても買いたいけど金欠つて時、皆は何に使うお金を節約する？』」

ユウ

「お、コレは面白そうな質問だな」

ミツキ

「そうね。是非聞いてみたいわ」

ハヤト

「俺は生活費を削るな。主に食費」

スバル

「あはは、ハヤトつて訓練校時代に、ゲームの為に1週間水と塩だけで生活したことあるもんね」

ティアナ

「ホント馬鹿よねえ……」

ユウ

「うわ、馬鹿がいる」

ハヤト

「馬鹿じゃないやい！ ちょっと頭が可哀想なだけだ！」

ミツキ

「それを世間一般では『馬鹿』って言うの」

ハヤト

「（・・・・・）くによろ〜ん」

ティアナ

「馬鹿はほつといてと。あたしは、服とか化粧品とかのお金を節約するわね。」

まあ、そつちが買いたい時は食費とかになるけど」

スバル

「あたしも服とかを買うのを我慢するかな〜」

ユウ

「お前はアイスを控えれば大分金余るんじゃないか？」

スバル

「それを削るなんてとんでもない！」

ミツキ

「やっぱりそつちは無理か」

スバル

「そつちを削るくらいなら、何にも要りません！」

ハヤト

「先生！ こいつの方が馬鹿だと思います！」

ティアナ&ユウ&ミツキ

「「いや、それはない」「」

ハヤト

「ちくしょーっ！っ！」

ティアナ

「はい。とまあ、質問の答えはこんな感じですね。赤服さん、納得して貰えました？」

スバル

「それでは今回の『なぜなに？ とあ新』はここまで！

CMを挟んでから、エンディングトークです！」

ヴェロツサ

「“魔法少女リリカルなのは”をMLNって、まんまCMやったら笑われるよ？」

カリム&シャツハ

「「何ですって!?!」」

ヴェロツサ

「姉さんもシャツハも本気かい？」

シャツハ

「何時だつて本気ですよ！　というか、それをカッコよくするのが  
査察部でしょう！？」

ヴェロツサ

「いや、そもそもそれって宣伝部の仕事なんだけど……」

カリム

「じゃあ何でここに居るんですか！？」

ヴェロツサ

「ええ……自分達で呼んだのに……ええ……」

大人気、魔法少女リリカルなのは！

劇場版も好評発売中！

ユーノ

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ」

「平凡な9歳の少女に訪れた、不思議な出会い」

私、高町なのは9歳。

私立聖祥大学付属小学校に通う、ごく普通の小学3年生……の筈だったけど、あの日訪れた出会いをきっかけに、私の平和だった日常は一変。

この生活はすつごく大変だけど、なんのとりえも無い私でも、私にしか出来ないこと、誰かの役に立てる事がきつとあるから、全力全開で頑張ります！

魔法少女なのは マギカ

2011年4月3日(日) 深夜1時25分より放送開始！！

それは、新たな魔法少女物語の始まり。

ティアナ

「とあ新らじお」

ハヤト

「はいはい、そんなこんなでエンディングトークの時間だぜ」

ミツキ

「もうそんな時間なのね。ちょっと喋り足りないかな？」

ユウ

「姉貴はハヤトの関節増やすのに頑張ってたからなあ」

ハヤト

「もう2度と、ちっぱいをバカにしたりしないよ」

ミツキ

「……（怒）」

ハヤト

「ふんぎゃああああ!？」

ティアナ

「馬鹿だね」

スバル

「馬鹿だね」

ユウ

「ホント一言多いなあ。口は災いの元ってことか」

ティアナ

「アンタも気をつけなさいよ?」

ユウ

「いやいや、だから俺は余計な一言は言わねーって」

スバル

「自覚無いのが一番怖いんだよ？」

ユウ

「ふ〜ん？ ま、気にしすぎても仕方ねえ〜だろ」

ティアナ

「楽観主義つていいわねえ。それじゃ、最後に番宣の時間よ」

ユウ

「お、そうだったな。お〜い姉貴〜、番宣だつてさ」

ミツキ

「あらそう？ それじゃ、始めましょうか」

ハヤト（だった何か）

「……デハ、ドウゾ」

ミツキ

「私達が出ている作品は、『魔法少女リリカルなのはStrike

』S〜影の守護者』です」

ユウ

「マイペースでめんどくさがりの主人公……まあ、俺なんだけどさ。その俺がいきなり機動六課へ出向することになって、そこから始まる六課メンバーを巻き込んだドタバタとした日常を中心として展開していく、リリカルなのはの二次創作だ」

ティアナ

「色んな人の視点があつて、視点が変わる時のちょっとした掛け合いなどが凄く面白い作品ですよ」

スバル

「笑いあり涙(?) ありな作品です! 是非読んでみてくださいねっ!」

ユウ

「あと、ジャン先生の「勇者指令ダグオンA・S 不死鳥が舞う」でウチの姉貴が出ているからそっちの方も見てくれよな」

ミツキ

「同じくジャン先生の「勇者指令ダグオンA・S どっこい」と、その前作の「勇者指令ダグオンA・S」の方にも私やノア、それにユウもゲストで参加しておりますので、そちらの方も見て下さいね」

ハヤト(だった何か)

「まだ見ていないその君! 今すぐ書店へダッシュだ!」

ユウ

「いや、書店にはねえから」

ティアナ

「はい。それでは最後にちょっとお知らせというか、発表があります」

スバル

「そういえば最初に言ってたよね? なになに?」

ティアナ

「実は……次回の第20回から、この『リリカル マジカル とあ  
新らじお』がリニューアルすることになりました！」

ユウ&ミツキ

「「な、なんだってーっ!?!」」

ハヤト

「リニューアル後のタイトルは『リリカル マジカル とあ新らじ

お2』！」

ま、仮題だから違うタイトルになるとは思っけどな」

ティアナ

「それに伴って、コーナーなども一新することになりました。  
ですが、まだコーナー自体は決まって無い状態ですので、次回の  
リニューアル放送時に色々とコーナーの説明などをしていきたいと  
思います」

スバル

「ふわ〜……ホントにリニューアルするんだあ」

ユウ

「ん？ スバルは聞かされてなかったのか？」

スバル

「うん。今初めて聞いたよ〜」

ティアナ

「事前に聞いてたでしょ……」

スバル

「あれ？ そうだったけ？」

ハヤト

「スバルは居眠りしてただけだろ」

スバル

「（、・・・）＜マジですか!?!＞」

ミツキ

「らしいと言えば、らしいわねえ」

ティアナ

「はあ……まあいいわ。じゃあ、リニューアル後のコーナーなどについては次回細かくお知らせするとして、ゲストに関するお知らせを……ユウ、お願いできる？」

ユウ

「りょくかいだ。ま、短いからさっさと終わらせるか。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になってるぞ。だから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳じゃなくて、一番最初に応募してても、最後まで呼ばれない可能性もあるってワケだ。

ま、そこはくじ運頼みって事で了承してくれよな。

選ばれた作者には、ラジオからメッセージが届くようになってるから、楽しみに待ってるよーに。

それと、今はゲストの応募は締め切り中だな。

だから仮に応募しても、抽選候補には入らないから注意しろよー。

ある程度消化できたら、また募集するらしいからな。……こんなもんか？」

ハヤト（だった何か）

「ん。オツケーオツケー。それじゃあ今回の“リリカルマジカルとあ新らじお”はここまで。」

お相手はハヤト⇨ロックウエルと」

ティアナ

「ティアナ⇨ランスターと」

スバル

「スバル⇨ナカジマと！」

ユウ

「ユウ⇨サエグサと」

ミツキ

「ミツキ⇨サエグサでした」

ハヤト&ティアナ&スバル&ユウ&ミツキ

「「「「「バイバイ！」」」」」」

ティアナ

「この番組は

(株) 竹尾ゼネラルカンパニー

(反) 黒の騎士団

(断) ドラゴンズハイブ

(天) 大グレン団

(鷹) フリーデン

(咽) 神に愛された男

(3) 神ファミリー

の提供でお送りしました。

これってどう見ても破戒編よね？」

ハヤト

「撃つていいのは、撃たれる覚悟のある奴だけだ！」

スバル

「月は出ているかーっ！」

ユウ

「俺を誰だと思ってやがるっ！」

ミツキ

「断空砲！ いっけえええええつ！！」

ティアナ

「……………え？ あたしはやらないわよ？」

ハヤト

「（・3・）ブー」

スバル

「（・3・）ブー」

ユウ

「（・3・）ブー」

ミツキ

「（・3・）ブー」

## 第19回『口は災いの元だったりそうじゃなかったり』（後書き）

うむむ……ユウとミツキがいまいち上手く動かせなかった……。左近 遼さん、力不足で申し訳ないです……。っ！何か修正して欲しい箇所などありましたら、メッセージや感想で指摘くださいませ。適時修正しますので。

お知らせ！

第20回はリニューアル初放送という事で、ゲストはお呼びしない予定です。

また、コーナーなどもリニューアルしますが、今まで送って頂いたお便りもラジオ内で出来るだけ読んでいくつもりではいますので、ご安心くださいませ。

新コーナーなどは、次回放送後からお便りを募集する予定です。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。

ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第1回『リ・ニューアル!』

ハヤト

「祝! とあ新ラジオリニューアルッツツ!」

スバル

「いえーい!」

わーわー／＼ドンドンドン／＼パフパフ／

ティアナ

「……………」

スバル

「あれ、ティア? ノリ悪いよ。どしたの?」

ティアナ

「いや…………リニューアルよりも気になる事があるのよ」

ハヤト

「あん? 何だよ、気になる事って」

ティアナ

「そこに居るその子よ!」

ディレト

「…………わたくしのですの?」

ティアナ

「何で居るのよ!? アンタ、レギュラーじゃなかったでしょ!」

ハヤト

「ああ、ディレトなら……ホラ、ティアナあっち見てみ?」

ティアナ

「あっちって……」

( ． ． ． ) つ 【リニューアルに伴い、MCは4人になりました】

ティアナ

「ああ……なるほど、そういうコト」

ディレト

「先日お誘いのお電話をいただきました、二つ返事でお引き受けしました。

よろしく申し上げますわね、ハヤト様、スバル様、ティアナ様」

ハヤト

「おう、よろしくな」

スバル

「頑張ろつね、ディレト!」

ティアナ

「あたし聞いてなかったんだけど……まあ、決まったなら仕方ない

か。

よろしく、ディレト。先輩として、ビシバシ行くわよ?」

ディレト

「お手柔らかにお願いしますわ。わたくし、これでもか弱いもので

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「いや、それは無い」「」

ディレト

「し、失礼ですわよ！ わたくしは、か弱い女の子ですわっ!」

ハヤト

「ハハツ、ワロス」

スバル

「またまたご冗談を」

ティアナ

「嘘を吐くとロクな大人になれないわよ?」

ディレト

「うう……（泣） くっ、負けませんわ！ 先輩からのイジメはこの世界では当たり前!

見ててくださいませお姉様達、ディレトはこんな事では負けませんわーっ!」

ハヤト

「はいはい。それじゃありニユール後一発目のコーナーいつてみるか」

ティアナ

「そうね。それではリニユールしたラジオ、最初のコーナーはこちらです」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「励ましの一言!」」」

ディレト

「無視されましたの……無視されましたの……」(イジイジ)

ハヤト

「あつちでいじけてるディレトは置いといて、このコーナーの説明をするぞ」

スバル

「……これって、前のあたしのコーナーじゃないの?」

ティアナ

「微妙に変わったのよ。今回からは、あたし達の中から指名された誰か。もしくはランダムで誰かがお便りに対して励ましの言葉を言う、って感じになったみたいね」

スバル

「そ、そんなあ……あたしの1人舞台だったのに……」

デイレト

「まあまあ、よろしいじゃないありませんのスバル様。今までのお便りも読んでいくみたいですし、それはスバル様の担当ですよ？ 暫くは1人舞台ですわ」

スバル

「デイレト……うん、そくだよね。あたし頑張る！」

ハヤト

「よし、綺麗に纏まったところで最初のお便りだ。

リンフォースと共生中の、RN：ロウ・アイアスさんからのお便り。

……ん？ リン曹長とは違うリンフォース？ どゆこと？

『一作目が完結し、永く間を置いてようやく二作目が始まりましてね。拍手』。

ところが、二作目の主人公がボクからポツと出のロリ巨乳に変更されたのですよ。

お願いです。ボクが暗黒面に墮ちないように励ましてください』」

ハヤト

「ロリ巨乳いいじゃない！ むしろ俺は大歓迎ぶろあっ！？」

スバル

「だ、大丈夫ですよっ！

主人公が変わっちゃっても、その主人公以上に存在感を出してあげばいいんですっ！

そうすれば、物語終盤では主人公に振り返り咲けるかもですよ！」

ハヤト

「スバル、いきなり何しやがる。俺じゃなかったら死んでるぞ」

ディレト

「ひいつ！？ く、首が曲がっちゃいけない方向に曲がってますわ！？」

ティアナ

「あー……ディレトは初めて見るんだったわね。大丈夫よ、あの程度じゃ死なないから」

スバル

「あたし悪くないもん、ハヤトが悪いんだもん！ ハヤトのエッチ！」

ハヤト

「俺じゃなかったら死んでたぞまったく……」（ゴキゴキ）

ディレト

「自分で折れた首を治さないでくださいましっ！ キモイですわ！」

ハヤト

「キモくないわい！ これが俺の芸風じゃボケエツ！」

ティアナ

「アンタはいつからお笑い芸人になったのよ……。まあいいわ。それでは次のお便りです。」

次のお便りは、イシュタレット城にお住まいの、RN：大斧のモントさん。

……何故かしら、無性に敵対したくなるわね。

『男なのにどうしようもねえ位の幼女顔のせいで、街を散歩してたらナンパされんです……。』

声も男か女が分かんねえ様な音程ですし……。マジでトラウマです……。

こんな事を敵対してる人達に言うのはどうかたあ思いますが、励まして下さい……。』」

ティアナ

「あんまり気を落とさないで。タダでご飯を食べられると思えばいいんじゃないかしら？」

外見にコンプレックスを持つよりも、それを有利に使う方法を考えた方がいいと思うわよ。」

ディレト

「ナンパされるなんて羨ましいですわっ！」

スバル

「いーなー、タダでご飯……」

ハヤト

「お前はホント食い意地張ってんなぁ……自重しろよ女の子」

スバル

「太らないからいいんです！」（ドヤぁ……）

ティアナ&ディレト

「……（ギリッ）」

ハヤト

「部屋の温度が下がったような……気のせいか。」

「とまあ、こんな感じで俺達全員がリスナーの皆を励ますぞ」

ディレト

「励ますなんて初めての経験ですわね。わたくし、貶す方が得意なのですけれど」

ティアナ

「ああ、まあアンタはそうよね。でも、これも仕事よ？ ちゃんとやりなさいね」

ディレト

「わかってますわよ。そんなウーノお姉様やチンクお姉様みたいな事を言わないでくださいまし」

スバル

「うーうー！ 内容変わんないなら、あたしだけのコーナーでよか

「つたじゃんかあ」

ハヤト

「決定したことに文句言うなよ……あれだ、多分新しく個人のコーナーが出来てるんだろ。」

「オープニングは全員で、ってコトなんじゃねーの?」

スバル

「うーうー」

ティアナ

「そのうーうー言うのをやめなさい」

ディレト

「レミ リア?」

スバル

「うー」

ハヤト

「うわあ……」

ティアナ

「うわあ……」

ディレト

「うわあ……ですわ」

スバル

「ディレトには言われたくないよ!?!」

振ってきたのディレトだか

らね!？」

ディレト

「まさか本当にやるとは………ですの」

スバル

「ひどっ!？」

ハヤト

「はいはい、痛々しいスバルはほっとして、そろそろ始めるぜー?」

ティアナ

「そうね………って、新しいラジオのタイトルはどうなってるの? あたし聞いてないわよ?」

ハヤト

「ああそうか。んじゃ、フリは俺がやるぜ。

そんじゃまあ、「リリカルマジカル」とあ新らじお? (シヅミアイ) ” 第1回!!”」

ハヤト&ティアナ&ディレト

「スタートです!」「」「」

スバル

「うわーん、無視しないでよーっ!」

リリカル マジカル とあ新らじお?  
第1回『リ・ニユール!』  
ソウアイ

ハヤト

「えー、ども。とあらじ?ソウアイをお聞きいただき、ありがとっござい  
ます。

メインパーソナリティのハヤト=ロックウエルだぜ」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティの、ティアナ=ランスターです」

スバル

「無視された〜……じゃなくて! メインパーソナリティのスバル  
=ナカジマです!」

ディレト

「そして! わたくしが追加メンバーのディレトですわ」

ハヤト

「……うーん」

ディレト

「？ ハヤト様、どうなさいましたの？」

「そんなに見つめられたら、ちょっと恥ずかしいですわ……」テレ  
テレ

ハヤト

「ディレトはBか。俺の守備範囲外だな」

ティアナ

「B？」

スバル

「ハヤト、何がBなの？」

ハヤト

「スバルとティアナはDだから、やっぱり見劣りがなあ」

ティアナ&スバル

「「！」「」

ディレト

「な、何のことですか？」

ハヤト

「え？ 胸の大きさがえぼあがはあっ!？」

ティアナ

「死ね！ 氏ねじゃなくて死ね！」（ガスガス）

スバル

「公共の電波で変な事バラさないでよっ!！」（ガスガス）

ハヤト

「や、やめっ、悪かった！ 謝るから蹴るな殴るなやめてくれーっ  
！」

ディレト

「あわわ……ハヤト様がちょっとお見せ出来ない映像になってます  
の……」（ガクガクブルブル）

ハヤト（見せられないよ！）

「ホントすいませんでした」

ティアナ

「……なんでピンピンしてんのよ」

スバル

「結構本気だったんだけどなあ」

ハヤト（見せられないよ！）

「まあ、俺だし？」

ディレト

「ハヤト様……人間ですか？」

ハヤト（見せられないよ！）

「生物学上は」

ディレト

「そ、そうですの……」

ティアナ

「さて、それじゃあセクハラ馬鹿は後で再びおしおきするとして。今回はリニョーアル後して最初の放送だし、リニョーアルしたコーナーの紹介をするわよ」

スバル

「はい」

ディレト

「はい、ですわ」

ティアナ

「とりあえず、コーナーのいくつかはそのまま残ってるみたいね。残留決定のコーナーは……」

・ かなりリリカルは嫌だ！

・ チャレンジ！ ハヤト

この2つぐらいかしら。意外と少ないのね」

スバル

「あー！ ハヤトズルイ！ 自分だけコーナー残ってる！！」

ハヤト（再生中）

「しゃーねーじゃん。作者がペース配分ミスってたから、お便りで届いてたチャレンジが結構残ってるんだよ。折角送ってもらったんだから、やらなきゃだろ？」

スバル

「でもでも、何か納得いかないよ！」

ティアナ

「はいはい喧嘩しないの。それと大丈夫よスバル。」

新コーナーでは、ちゃんとあたし達の個人コーナーもあるから」

スバル

「え、そうなの？ やったーっ！」

ディレト

「…………あのー」

ハヤト（再生中）

「ん？ どうしたディレト？」

ディレト

「スバル様もティアナ様も、ハヤト様がスライムみたいな感じでグニグニ再生しているのは、ノータッチですか？ 結構凄い映像だと思えますけれど…………」

スバル

「え？ だっていつもの事だし」

ティアナ

「いつもの事よねえ」

ディレト

「そ、そうなんです…………。」

どうしましょう。わたくし、このラジオでやっていける自信がありませんわ」

ティアナ

「大丈夫よ、そのうち慣れるから」

スバル

「そうそう。あたし達も最初はビックリしたけど、今では全然平気だもん」

ディレト

「うう……御二人がそう仰られるなら、頑張ってみますわ」

ティアナ

「さて、それじゃあこれからは新コーナーの話に移るわよ？」

説明だけでも伝わらないだろうから、実際にコーナーをやりながら説明していくわ。

それでは最初の新コーナーはこちら」

ティアナ&スバル&ディレト

「「「あのシーン、もし私だったら!」「」」

ティアナ

「このコーナーは、前回の感想でアイズさんが提案してくれたものよ。」

『リリカルなのは』や他のアニメの名シーンを、ゲストさん達も含めたここにいる全員で再現する。」

「そんな、ある意味無茶な企画ね」

スバル

「おお！ じゃあじゃあ、あたしなのはさんやるー！」

ディレト

「あ、ズルイですわよ！ わたくしだって主人公役をやってみたいですわ！」

ハヤト

「……俺、多分ハラオウン提督か、スクライア司書長。もしくはザツフィーとエリオくらいしか出番なくね？ 元々男キャラって少ないしさ」

ディレト

「別に女性役をやればよろしいのではなくて？」

ティアナ

「そうよね。面白そうだし、それでいいんじゃない？」

ハヤト

「ええ……」

スバル

「ねえねえ、早くやってみようよー！」

ティアナ

「はいはい。それじゃあ今回は初めてということ、スタッフが用意してくれたお題でいくわよ？」

今回あたし達が再現するのは……

『リリなの無印最終回、なのはとフェイトがお互いのリボンを交換するシーン』です」

ハヤト

「配役は……はぁ！？ 高町隊長がスバルで、ハラオウン隊長が俺え！？」

スバル

「それで、クロノ提督がティアなんだ」

ディレト

「ミスマッチにも程がありますの……てゆーか仲間はズレですの」

ティアナ

「まあまあ、とりあえずやってみましょ。それでは、スタート！」

ティアナ

「時間だ。そろそろいいか？」

ハヤト

「……うん」(裏声)

スバル

「ハヤトちゃん！」

ハヤト

「スバル……」

スバル

「思い出にできる物……こんなものしか無いんだけど……」(、)・・・  
、)っ【アイス】

ハヤト

「じゃあ、私も」(裏声)(、)・・・(、)っ【ゲーム】

ハヤト

「ありがとう、スバル」(裏声)

スバル

「うん……ハヤトちゃん。きっと、また」

ハヤト

「うん。きっと、また」(裏声)

ディレト

「キモイですわ」

スバル

「キモかったね」

ティアナ

「何か色々と台無しよ」

ハヤト

「俺のせいじゃないのに酷い言われようだ！

っ！かスバルもおかしいだろうが！　アイスって何だよアイスっ  
て！」

スバル

「だって、あたしリボンしてないもん」

デイレト

「それにハヤト様だって、ゲームを渡してたじゃありませんの。  
そっちも十分にありえませんか」

ハヤト

「うぐう……」

ティアナ

「……まあ、キモかったけどこんな感じで、お便りで出されたお題  
と配役に沿って、あたし達はそのシーンを再現していくわ。

一応求めるお題は『リリカルなのは』という事にするけど、他の  
アニメのシーンでも大丈夫です。

ただ、あたし達がそのアニメを知らない場合もありますので、そ  
のシーンの元々の会話なんかもお便りに書いてくれると助かります」

スバル

「わーい、なのはさんが出来たー！」

デイレト

「羨ましいですわ。妬ましいですわ」

ハヤト

「(・・・)」

ティアナ

「ほらほら、いつまでも喋っていない！ 時間は有限なんだから、次の新コーナーに行くわよ！

次の新コーナーはこちら！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「「解けるかな？ ディレトちゃん！」「」「」

ディレト

「こ、これは！ わたくしのコーナーですね？ ですね!？」

ティアナ

「そうだけど、そんなに興奮しない」

スバル

「えつと、なになに……？」

『このコーナーでは、リスナーさんから送られてきた問題を、ディレトに解いて貰います。』

問題はなぞなぞから二次関数まで、どんなものでもオツケーです！

ただし、答えあわせをする為に、ちゃんと答えも一緒に書いてくださいね』だってさ」

ハヤト

「あー、ディレトはアホの子だもんなあ」

ディレト

「失礼な！ わたくしは、アホの子じゃありませんわ！」

ハヤト

「ほほう？ それじゃあ今回スタッフが用意したこの問題を解いて貰おうか」

ディレト

「望むところですよー！」

ハヤト

「では問題です！… 『30×20＝』？」

ティアナ

「いや、ハヤト……」

スバル

「いくらなんでも、それは簡単すぎると思」

ディレト

「50ですわー」（アヤあ）（……）

ティアナ&スバル

「間違ったーーーーーっ!?!」

ハヤト

「ぶははははっ! やっぱ間違った! やっぱ間違った! ぶひやはははははは!」

ディレト

「え? え? ち、違いますの!?!」

ハヤト

「答えは600だって! た、足してどうすんだよ足して! うひやははははは!」

しかもドヤ顔までしてとか……………ぶほあっ! 腹痛え! ぶははははははははははははっ!?!」

ディレト

「う、ううう……………」

スバル

「えと……………その……………」

ティアナ

「だ、大丈夫よディレト! これから勉強していけばいいのよ! そうすれば、いつかハヤトを見返せるわ!」

ディレト

「ハヤト様を…………? それ、本当ですか?」

スバル

「うんうん！ あたしとティアで教えてあげるから、頑張ろう？」

ティアナ

「大丈夫よ。アンタだって戦闘機人なんだもの、それくらい出来て当然だわ！」

ディレト

「……そうですわよね。わたくし頑張りますわ！」

よろしく願いますの！ スバル様、ティアナ様！」

ハヤト

「ひー、ひー……あー笑った笑った。

とりあえず、この“解けるかな？ ディレトちゃん”では、ディレトに対しての問題をお便りで送ってくれよな。ちゃんと答えも一緒に書かない場合は不採用だから、気をつけてくれ」

ディレト

「くっ……いつか見返してやりますわ。覚えてなさいませ」

ハヤト

「このラジオの最終回までに出来ればいいな」（嘲笑）

ディレト

「ちくしょうですの……」

ハヤト

「んじゃまあ、ひと笑いしたところで次のコーナーの紹介だ。

次は……お！ 喜ベスバル、お前のコーナーだぞ」

スバル

「本当！？ よしやるう、すぐやるう、今やるう！」

ティアナ

「だから今からやるんでしょうが……はあ。まあいいわ、次のコーナーはこちらです」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「『スバルの食べ物感想会！』」

ディレト

「こちらのコーナーでは、食いしん坊のスバル様に、リスナーの皆様から「食べて欲しい」とリクエストされた食品を食べていただき、その感想を言ってもらいますわ。」

……あんまりゲテモノは駄目でしてよ？」

スバル

「わー、わー！ いろんな食べ物を食べられるの！？」

ハヤト

「目をキラキラさせんなよ……。まあいいか。」

で、今回は最初なんだけど、俺のコーナー宛てに来てた中からひとつ採用させて貰った。」

えーと、学園都市の窓のないビル天井裏に在住の、RN：レン  
ハルトさんのお便りだな。

今回スバルに食べて貰う食品はコレだ！」

『初恋ジュース』

スバル

「初恋ジュース？」

ディレト

「甘酸っぱそうな名前ですわね」

ティアナ

「初っ端が食べ物じゃないとか、違うコーナーの流用じゃないとか、  
色々ツツコミたいんだけど」

ハヤト

「いいじゃん。折角の食べ物関係のお便りだったんだし、有効活用  
ってヤツだ。」

それじゃあスタッフが一晩で用意してくれた初恋ジュースがこち  
ら！」（でーん）

ディレト

「見た目は……まあ普通ですわね」

ティアナ

「そうね。匂いも特に変な感じはしないし……」

ハヤト

「さて、それじゃあスバル。食っちゃいなさい！」

スバル

「はい。それでは、いったただっきまーす……（ぐくぐく）……に  
ゃー……っ！？」

ハヤト

「うわ汚っ！？ 吹き出すなよスバル！」

スバル

「これ違う！ これ初恋違うネ！ こんな初恋じゃないアルよ！」

ディレト

「あるのが無いのか、どっちなんですの？」

ティアナ

「いや、ディレト。そっちへのツッコミは違うわ」

ディレト

「そうですの？」

スバル

「甘酸っぱいとかほろ苦いとかじゃなくて、ドブの水みたいな味だよ！？」

何コレ！？ 最初がコレとか嫌がらせじゃなか！ スタッフさん  
酷いよ！！」

ハヤト

「はあ？ 飯にも飲み物がドブ水とかねーだろ。

嘘も大概にしとけて、どれどれ……（ごくごく）……ぶぼあっ  
！？」

ティアナ

「汚っ！？」

ディレト

「ちよっ、かかりましたわ！ わたくしにかかりましたわ！

あ、でもハヤト様の唾液混じりだと考えると……」（きゅんっ）

ティアナ

「そこでキュンとするのはおかしいわよ！？」

ハヤト

「まっず！ 何コレ糞マズイんですけど！？ こんな味が初恋なワ  
ケねえだろ！？

製作者出てこい！ こんな初恋があつてたまるかあああ！！」

スバル

「お水、お水……っ！！」

〈少年少女飲水中〉

ハヤト

「はあ、はあ……」

スバル

「はあ、はあ……」

ディレト

「それでスバル様、『初恋ジュース』の感想はどうでしたの？」

おいしかったのですの？ それとも、デリシヤスだったのですの？」

ティアナ

「いや、それどっちも同じ意味だからね？」

スバル

「おいしいワケないじゃんか！ まだシャマル先生のご飯を食べた方がマシだったよ！」

ハヤト

「それもそれで遠慮したいが、まあ、うん。気持ちは分かる。」

「つーか、アレを俺に1リットル一気飲みさせようとしたのか……」

「……レンハルトさんマジパねえ」

ティアナ

「えー、ちょっとゴタゴタしちゃいましたけど、このコーナーではこんな感じで、リスナーの皆さんから『スバルに食べてみて欲しい』と送られてきた食べ物、スバルが食べて感想を言っていきます。」

「リクエストは他のアニメ、ゲームからでも大丈夫です」

ディレト

「なんというか、悪い意味で凄い食べ物ばかり送られてきそうですわね」

ハヤト

「そんな事は……いや、そうなる可能性大だな」

スバル

「ううう……このコーナーだよ……」

ハヤト

「どん まい」

スバル

「……」(イラッ)

ティアナ

「……」(イラッ)

ディレト

「……」(イラッ)

ハヤト

「さて、それじゃあ次のコーナー説明いつてみるか。

次はティアナの新しい持ちコーナーだな。さて、それでは次のコーナーはこれだ！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「白か黒か!? 答えてティアナちゃん!」」」

ティアナ

「……で、何をさせるつもりよ」

ハヤト

「えーとなになに……? 『このコーナーでは、リスナーの皆さんが白黒ハッキリさせたい問題を、執務官候補であるティアナが代わりに白黒つけちゃおう! というコーナーです』だよ」

ディレト

「つまり、ティアナ様が色々な問題を解決するコーナーという事ですわね?」

ハヤト

「早い話がそーゆー事だな」

スバル

「おー。何か色んな方面から文句言われそつな企画だね!」

ティアナ

「スバル、そういうメタ発言はやめなさい。で? どんな風にやればいいのよ」

ハヤト

「そこら辺はちゃんとスタッフが用意してくれたぞ。」

最初の白黒つけて欲しいお便りはこれだ。

『人の胸を勝手に揉むのはアリか無しか!?!』」

ティアナ

「……八神部隊長ね」

スバル

「部隊長だね」

ディレト

「あの方ですわね……」

スバル

「あれ？ ディレトも触られたの？」

ディレト

「ええ。この間同じ番組をやった後の打ち上げで……結構上手かったですわ」

ティアナ

「そーゆー事は言わなくてもいいのよ。

それで？ どういう風に答えていけばいいのかしらっ。」

ハヤト

「お前のやりたいようにやればいんじゃないかね？」

ティアナ

「そう？ それじゃあ勝手にやるわね」

ハヤト  
「おう、やっちなまえ」

ティアナ  
「この問題、『人の胸を勝手に揉むのはアリか無しか』。  
あたしの判決は。

『黒』よっ！！」（ババーン！）

ハヤト  
「……怒られそうだなあ。特に東方関係のファンに」

ディレト  
「大丈夫ですわよ。皆様、そういう部分にはきつと寛容な筈ですわ。  
怒られた時は、謝ってコーナーを中止すればいいんですのよ」

スバル  
「ディレト、何か腹黒いね」

ディレト  
「そんなに誉めないでくださいませし」（照）

スバル

「誉めてないんだけどね……」

ハヤト

「ついでだから、もう一個いってみつか。ティアナ、いけるか？」

ティアナ

「別にいいわよ。時間もまだ少し余ってるしね」

ディレト

「じゃあ、次はわたくしが読ませて頂きますわ！

次の白黒つけて欲しい問題はこちらですの！

『仕事もせずにゲームばかりしている少年はアリか無しか！？』」

ティアナ

「黒だよ……真っ黒！」

ハヤト

「そのネタ、何人に通じるんだろうな」

ティアナ

「う……べ、別にいいでしょ！ たまにはあたしがボケても！」

ディレト

「？ 何のネタでしたの？」

スバル

「あたしもわかんないや。ティア、何のネタなの？」

ティアナ

「うう、……」

ディレト

「何のネタですのー？」

スバル

「何のネタなのー？ ねえねえ」

ディレト

「教えてくださましー。ねえねえ、ですわー」

ティアナ

「う、うづうづるさい！ はい！ もうこのコーナーは終わりっ！」

スバル

「えー」

ディレト

「えーですわー」

ハヤト

「……それ以上弄ってやるな」

スバル

「弄つてた訳じゃ無いんだけど」

ディレト

「ハヤト様がそう言うならやめますわ」

ティアナ

「ハヤト、ありがとう……」

ハヤト

「いいつて。スベつた時の気持ちは痛いほど分かるからな……」。

まあ、それはともかくこれで新コーナーの説明は全部か？」

ティアナ

「ええ、一応新コーナーはこれで全部ね」

スバル

「結構いっぱいあつたね」

ディレト

「それでは、最後にコーナーを纏めてみますわね。」

リリカル マジカル とあ新らじお<sup>ソウタイ</sup>のコーナーは……

・ 励ましの一言

・ こんなリリカルは嫌だ！

・ チャレンジ！ ハヤト

・ 解けるかな？ ディレトちゃん

・ スバルの食べ物感想会！

・ 白か黒か？ 答えてティアナちゃん

・ あのコーナー、もし私だったら

以上の7コーナーですわね。

ああ、もちろんゲスト様への質問コーナーはありますわよ?」

ティアナ

「こうして見ると、数自体は増えてないのね」

スバル

「そだね。ディレトが増えたんだし、もうちょっと増えるかと思っただけど」

ハヤト

「あんま増やしても仕方ないだろ。」

実際の放送だと、結局1個か2個しか出来ないんだしさ」

ディレト

「折角リスナー様が送ってくださったお便りを、メッセージボックスに眠らせておくワケにもいきませんものね。どうせなら、ちゃんと全部お読みしたいですわ」

ハヤト

「そーゆーこつた。さて、それじゃあそろそろ終わりにすっかな。」

何だかんだで結構時間たったしさ」

ティアナ

「そうね。それじゃあ、最後にお便りとゲストに関するお知らせをしようかしら。」

スバル、ディレト。お願いできる?」

スバル

「お任せだよ！ それじゃあ、あたしはお便りに関するお知らせるね。

“リリカル マジカル とあ新らじお？”<sup>シグファイ</sup>では、リスナーの皆さんからのお便りを大、大、大募集集中です！

“励ましの一言”では、リスナーさんが励まして欲しいエピソードと、励まして欲しい相手を。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーさんが考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。

“チャレンジ！ ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

あ、ただしお題はブースの中で出来ること限定でお願いしますね。ハヤトが出来そうな事っていうのも、忘れずお願いします。

“解けるかな？ ディレトちゃん”では、ディレトに解いてほしい問題を。

こちらはちゃんと解答も一緒に書いてくださいね。

“スバルの食べ物感想会”では、あたしことスバルに食べて欲しい食べ物を！

うう……あんまりおいしくないのは、やめてくださいいね？

“白か黒か？ 答えてティアナちゃん”では、ティアに白黒つけて欲しい事を。

“あのシーン、もし私だったら”では、

あたし達とゲストさん達で再現して欲しいアニメのシーンと、その配役を。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告なんかの普通なお便りを。

その他に、あたし達のイラストなんかも募集しています！  
送った場合はラジオで発表しちやったりしますので、皆さんどんどん送ってくださいね！」

デイレト

「それでは、次にわたくしからゲストに関するお知らせですわ。とは言っても、あまり言うことが無いんですよねえ……。

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になっていましてよ。ですから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳ではなくて、一番最初に応募していたとしても、最後まで呼ばれない可能性も十分にあり得ますわ。

そこはくじ運という事で了承してくださいまし。  
選ばれた作者様には、ラジオからメッセージが届くようになっていきますから、楽しみにしていってくださいな。

それと、今はゲストの応募は締め切り中ですわ。  
ですから仮に応募しても、抽選候補には入らないから注意してくださいませね。

ある程度が消化できましたら、またどんどん募集しますので。

……こんな感じでよろしかったでしょうか？」

ハヤト

「オツケーオツケー。どうだったディレト？ 今回で出演自体は3回目だったけどよ」

ディレト

「以前にイシユメール様とやっていたから、それ程緊張はしませんでしたわね。

でもこれに満足せず、日々しょーじんしていきますわ！」

ティアナ

「いい心がけね。あたし達も見習わなくちゃ」

スバル

「そうだね。新しいコーナーも始まるし、頑張ろうか！」

ハヤト

「頑張れ！」

ティアナ&スバル

「「アンタ（ハヤト）も頑張るの！」」

ハヤト

「ええ」……」

ディレト

「ハヤト様、相変わらずやる気ありませんのね」

ハヤト

「まあこれが俺ですからね」

デイレト

「何だかティアナ様とスバル様が不憫ですわ」

ティアナ

「分かってくれる？」

スバル

「これから一緒に頑張ろうね」

デイレト

「ええ、よろしく願いしますわ」

ハヤト

「女子3人の結束が固くなりました。とても良いことだと思います」

ティアナ

「アンタ、そのうちクビになるわよ？」

ハヤト

「主人公だからなりません」

ティアナ

「はあ……後でちょっと教育ね。」

それでは今回の“リリカルマジカルとあ新らじお”<sup>レイン</sup>は“”<sup>レイン</sup>は“”<sup>レイン</sup>までです。

お相手はティアナ“ランスター”と

ハヤト

「ハヤト＝ロックウエルと」

スバル

「スバル＝ナカジマと」

ディレト

「ナンバーズ、ディレトでしたわ！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「バイバイ！」

ディレト

「この番組は

(量) 全世界モノアイ愛好会

(刹) ガンダム親衛隊

(悪) 木イイ原くウウウウウウン!!!

(断) フレノンダ

(破) スパロボ販促特務隊

以上の提供でお送りしましたわ。

わたくしの完全消去に、常識は通用しなくてよ?」

ハヤト

「いいぜ。てめえが何でも思い通りに出来るってんなら、まずはその幻想をぶち殺す!」

スバル

「あれだ……ママとパパを殺した……あの時のガンダム……!!!」

ティアナ

「スバル、中の人ネタは自重しなさい」

スバル

「(・3・)ブーブー」

ハヤト

「まあ、アリだよな。一応ネタとしては合ってるし」

ディレト

「いいですわよねー。中の人が出演してるスバル様は」

ティアナ

「アンタ達も、メタ発言はやめなさいよ……いや、マジで」

## 第1回『リ・ニユール!』（後書き）

リニユールしましたー。

次回からは、またゲストをお呼びしますね。

ふう。リニユールコーナーを考えるのって、意外と疲れますねw

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』をお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るもの限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、  
一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。  
ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第2回『これって3次創作っつーか、もはや4次創作じゃね？』

ディレト

「ジャツジメントですの！」

スバル

「ジャツジメントですの！」

ディレト

「ですの！」

スバル

「ですの！」

ハヤト

「……何しとんアイツら？」

ティアナ

「なんか、あのフレーズが気に入ったみたいよ。

ディレトなんて、わざわざDVDを借りてきたみたいだし」

ハヤト

「イメージC.V的には妻のんじゃねえか。小清水なんだし」

ティアナ

「メタな発言はやめなさい。ほら、2人とも、そろそろ始めるわよ」

ディレト

「わかったですよ！」

スバル

「ですよ！」

ティアナ

「……………えー、では最初のコーナーはこちらです」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「……励ましの一言！」「」「」

ハヤト

「このコーナーでは、リスナーの皆から寄せられたエピソードを、俺達で励ましていくぞ」

ティアナ

「基本的にはランダムで誰かが励ましますが、指名があればその人が励まします」

ディレト

「スルーされましたの」

スバル

「ですよ……」

ハヤト

「いつまで言っただよ。ほらスバル、最初のお便り読めって」

スバル

「ちえ〜、つまんないの。えっと、それじゃあ最初のお便りです！

最初のお便りは、黒の騎士団にお住まいの、RN：仮面の救世主<sup>メシア</sup>さん。

撃つていいのは、撃たれる覚悟がある奴だけだー！

『最近自分が出演しているスパロボを手に入れたのだが、俺自身の能力が低過ぎる。』

俺は一応人並みには操縦技術を持っていると言っのに……。  
思い出したら鬱になって来たから励ましてくれ……。』

ハヤト

「仕方ないだろ、お前モヤシだし」

デイレト

「指揮官タイプの方ですもの。仕方ありませんわよ」

ティアナ

「いや、励まさないよアンタら！？ 何トドメ刺そうとしてる訳

！??」

ハヤト

「だってよー。お前考えてみ？」

あの世界観だと、基本的に味方はエースパイロットばかり。そういった基準にステータスを作っている訳だ。そんな中で人並みの操縦技術とか……」

スバル

「い、言われてみれば確かに……」

ディレト

「それに、あの方はそれ以外に凄い能力を持っていますもの。文句を言うなんて贅沢ですわ」

ハヤト

「そつだそつだ！ 一般兵に謝れ！」

ティアナ

「はああ……後で苦情がきそうね。えっと、それでは次のお便りです。」

六課男子寮にお住まいの、RN：リユウセイ「ツルギさん」  
男子寮ってことは……ハヤト、知り合い？」

ハヤト

「いや、知らんなあ。ま、人は結構入ってるみたいだし、会った事無い人もいるだろ」

ティアナ

「ふうん。えっと、それではお便りの内容です。」

『上司の喧嘩に巻き込まれ、上司のミスを受け、散々な目によくあつのですが、

どうすればよいのでしょうか。切れたら負けかなと思っ  
ていま  
す』

スバル

「胃薬片手に頑張ってください！ あたし達は、そんなリユウセイさんの事を応援してます！」

ティアナ

「それに、そうやって頑張っている貴方を、きっと誰かが見て評価してくれていますよ。」

だから不貞腐れずに、頑張ってみてくださいね」

ディレト

「組織で働くというのは、大変なんですね」

ハヤト

「まあ、組織に属したらメリットもデメリットもあるしなあ。」

そこら辺を上手い事折り合いつけていくのが、大人ってモンだろ  
うさ」

ティアナ

「そうよね。私もアンタのミスの尻拭いをさせられてる訳だし？」

ハヤト

「アーアー聞こえない」

スバル

「あはは、ハヤト誤魔化してる」

ティアナ

「アンタもだからね？ スバル」

スバル

「アーアー聞こえない」

ディレト

「誤魔化し合戦ですの」

ティアナ

「見てみなさいディレト、アレが組織で働く大人の汚いやり方よ」

ディレト

「なるほどですの。大人って汚いですの」

ハヤト

「何教えてんだよお前は。ディレトは単純だから信じちまうだろ」

ディレト

「馬鹿じゃありませんの！ …… それでは、次が最後のお便りですわ！

最後のお便りは、ミッドチルダにお住まいの、RN：サリエル＝フォーゼオン様からですわね。

『最近になって気づいたんだけど、俺って案外モテますよね？  
ティアナに告白されるし……他にも噂で聞いた限りちらほら……  
それをつって別の人に走りました。  
づる方も心が痛いです。スバル……お前の屈託のない笑顔と言  
葉で励ましてくれ！』」

スバル

「辛いだろうけど、うやむやにするよりはずっといいよ！  
その時は泣いちゃうかもしれないけど、いつか笑い話になるから  
！」

ハヤト

「リア充め、リア充め、リア充め！！」

ディレト

「ハヤト様も十分リア充ですよ？ 御自覚なさってまして？」

ハヤト

「羨ましい……凄く羨ましい……」

ディレト

「ハヤト様も、ティアナ様とスバル様、それぞれのルートでどちら  
かをつってましたわよね？」

しかも、このラジオの世界観だとご両人とお付き合いなされてますし……何が羨ましいんですの?」

ハヤト

「いや、どつちかつつーと俺はリスナーの声代表だからさ。

俺自身の状況がどうあれ、羨ましいモンは酷く羨ましい訳なんだよ」

ティアナ

「……リア充な自覚が無いって怖いわよね」

スバル

「だね。だからいつもリスナーさんから怒られるのにな」

ティアナ

「ま、そこがいいトコなんだけど」

スバル

「あゝ、ティア惚気てる〜」

ティアナ

「う、うっさい馬鹿っ!」

ディレト

「……………空気が甘ったるいですわ」

ハヤト

「俺のせいじゃないが、スマン」

ディレト

「構いませんわよ。わたくし、そういうのはドクターとウーノお姉様で慣れてますもの。」

それにしても、一杯お便り来てましたわね」

ティアナ

「そうね。やっぱり、リスナーの皆さんも色々あるんでしょうね」

スバル

「悩みがあるのは生きてる証拠だって、お父さんも言ってたよ」

ハヤト

「思春期なら仕方あるまい」

ティアナ

「いや、なんで決め付けてんのよ。20代後半のリスナーさんも居るかも知れないでしょ」

ハヤト

「俺達の心は、いつだって思春期なんだよ!!」

スバル

「お、おお！　なんかハヤトがカッコイイ!!」

ディレト

「間違っつて惚れてしまいそうですわ!!」

ハヤト

「間違っつてかよ……まあいいや。」

んじゃ、今回の『励ましの一言』はここまでだな。んじゃ、タイトルコールいくぜ?」

スバル

「りょーかい！」

ティアナ

「オツケー」

ディレト

「大丈夫ですよ！」

ハヤト

「んじゃま、『リリカル マジカル とあ新らじお？』<sup>ツウアイ</sup> 第2回！！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「『スタートです！』」

リリカル マジカル とあ新らじお？

第2回 『これって3次創作っつーか、もはや4次創作じゃね？』

ハヤト

「リニューアル2回目だぜ〜！ ども、メインパーソナリティの

ハヤト「ロックウエルです！」

ティアナ

「同じくメインパーソナリティの、ティアナ「ランスターです」

スバル

「同じくメインパーソナリティの、スバル「ナカジマだよ」

ディレト

「同じく、メインパーソナリティを務めさせていただく、ディレトですわ」

ハヤト

「それじゃあ早速、リニューアル後の初ゲストといくか！」

ディレト

「そうですね！ 今回のゲストは『リリカル銀魂 Another  
〜魔法と少女とかぶき町ライフ〜』から！」

かつて白夜叉と呼ばれた英雄！ 今は万屋の主な坂田銀時様！」

スバル

「そして、江戸の平和を守る新撰組の一員で、ドS王子な沖田総悟さん！」

ハヤト

「あとツッコミ」

ティアナ

「以上の3人です。それでは、どうぞ〜」

新八

「オイイイイイ！？ いきなり人の名前完全無視ってどういう事だコラアア！！」

銀時

「正しいじゃねえか」

沖田

「むしろホントの名前って何だっけ？」

新八

「あんた等まで何言ってるの！？ 特に銀さんは同じ万屋の仲間ですよね！？」

銀時

「いやー、最近物忘れが激しくってなあ。悪いなヘタレ眼鏡」

沖田

「悪いね駄眼鏡」

ハヤト

「すまんかったツツコミ眼鏡」

ディレト

「ごめんなさいですわ、オタク眼鏡」

新八

「オイコラアア！！ もはや唯の悪口じゃねえかあああ！！」

ティアナ

「はい、そんなこんなで志村新八さんです」

新八

「あっさり流すなあああ！ これじゃ騒いでる僕が馬鹿みたいじゃないですか！」

スバル

「？ 違うんですか？」

新八

「ちよつとスバルちゃん！？ 君だけは僕の味方してくれると思っ  
てたのに！！！」

ハヤト

「諦めるよ新八」

新八

「君は君で何でタメ口なの！？ 僕の方が年上だよね！？」

ハヤト

「すいません、なんかつい。まあそれはともかく、よろしくお願  
いするッス」

銀時

「ん、まアよろしくたのむわ」

沖田

「いや〜楽しみですねエ、旦那」

新八

「……最初っから不安感がハンパないんすけど」

ハヤト

「よし、それじゃあゲスト紹介が終わったところで早速恒例のコーナーいくか」

ティアナ

「そうね。それでは最初のコーナーはこちら！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「……ゲストへの5つの質問！」「」「」

ディレト

「このコーナーでは、わたくし達がゲスト様に5つの質問をして、それに答えて貰うコーナーですわ。」

銀時様、沖田様、あと新八。緊張せずに答えてくださいませ」

新八

「ねえ！ 何で僕だけ呼び捨てな訳！？ ちょっとディレトちゃん！？」

銀時

「あいよー」

沖田

「任せてくださいませ」

新八

「アンタらも少しは庇えよおおおお！」

ティアナ

（さすが本場の突っ込みは違うわねえ。

それはともかく、やっぱりツッコミ役の人が他にいとホント楽  
だわ。）

次からも定期的に呼ぶようにしなきゃ（

スバル

「それでは最初の質問です！

『お名前は？』」

銀時

「俺ア坂田銀時」

沖田

「沖田総悟でさア」

新八

「志む」

銀時&沖田

「「ツッコミです」

新八

「役割で呼ぶなアアア！ 名を言え名をオオ！  
……ッゴホン、志村新八です」

ハヤト

「よろしくツッコミ」

スバル

「よろしくお願いしますね、ツッコミ」

ティアナ

「今日はツッコミをお願いしますね、ツッコミ」

ディレト

「ツッコミ」（嘲笑）

新八

「役割で呼ぶなっつってんだろオオ！ 名を呼べ名をオオ！！」

銀時

「うるせーぞ新八」

沖田

「少しは静かに出来ねーのかイ、お前さんは」

新八

「元を正せばテメエらのせいだろうがあああ！！」

ハヤト

「まあ名前に関してはあんま言及する事無いよなあ。だって商業作品の主人公だし」

スバル

「下手に名前を弄ったら、怒られるもんね」

ディレト

「それでは次の質問ですわ！

『好きな食べ物は何？』」

銀時

「甘いもんならなんでも」

沖田

「マヨネーズ以外ならなんでも」

新八

「うーん、和食が好きですね」

ディレト

「普通ですわね。そんなだからツッコミなんですわ」

新八

「ディレトちゃんは何なの！？ そんなに僕が嫌いななの！？」

ディレト

「いえ、新八様を見ているところ……つい虐めたくなくなると言いますか……。ねえ？」

新八

「『ねえ？』じゃないでしょ！？ 何なのそのドS発言！？」

ディレト

「お黙りあそばせ」

新八

「酷い、酷すぎる……」（シクシク）

ハヤト

「あつちはともかく。銀時さん、アンタは甘いモン駄目でしょ。糖尿病予備軍なんだし」

銀時

「何言つてんだバーロー。銀さんは定期的に糖分を摂らないと死ぬじまうんだよ」

ハヤト

「んな症状聞いたことねえよ！ 言い訳にしても、もうちょっと考えて言えよ！！」

銀時

「ガキは黙つてな。この苦しみは甘党にしかわかんねーんだよ」

スバル

「そつだそつだー」

ティアナ

「アンタは食べ物なら何でもいいじゃないの……」

スバル

「そんなこと無いよ！ あたしだって、定期的にアイス食べないと

死んじゃうもん！」

ハヤト

「定期的について……毎日デザートにアイス食ってんの誰だよ……」

スバル

「もちろん、あたしです！」（ドヤッ！）

ハヤト

「はあ……なんかもういいや。次の質問だ次の質問。」

『自分の性格を一言で』

銀時

「んー、自分の性格つつわれてもよくわかんねーな。アレだ、  
“ 掴みどころのない性格” って感じか？」

ティアナ

「掴みどころがないって言うか、適当なんじゃ……」

銀時

「ああん？　なんか言ったかー？」

ティアナ

「いいえ何も」

デイレト

「銀時様が存在そのものがマダオって言ってましたわ」

ティアナ

「言っていないわよ！」

スバル

「ティアー、マダオって何ー？」

ハヤト

「まるで駄目なおっさん、略してマダオだ」

銀時

「おいおい、本人の前でそんな事を言うもんじゃねエよ。しかもそんな楽しそうに。」

「銀さん軽く死にたくなっちまったじゃねーか」

ハヤト

「おう、これは失敬。んで、沖田さんは？」

沖田

「(ドSの)王子だ」

ディレト

「聞き捨てなりませんわね！ ドS梓はわたくし1人で十分ですわ！  
沖田様は即時ドS発言を撤回なさってくださいまし！」

沖田

「おうおう、面白い事言ってくれんじゃねーのお嬢ちゃん。  
お嬢ちゃんはただでさえアホの子梓を持ってんじゃねーか。それに加えてドS梓まで欲しがるとえのは、ちよつとばかり欲が深すぎやしませんかね？」

ディレト

「あらあら必死ですわねえ、そんなにドS枠が欲しいんですの?」

沖田

「お嬢ちゃんこそ必死だねエ? 脳味噌こねこねしてやるうか?」

ハヤト

「……おい、あそこ物騒だぞ」

銀時

「馬鹿、あーゆーのは近づかねえのが一番だ。ほれ、さつさと次いけ次!」

スバル

「そ、そうですね。えと、それじゃあ次は新八さん」

新八

「僕は」

銀時&沖田

「「へタレ駄眼鏡」」

新八

「いい加減にしるテメーらアア!! いちいち僕でオトさねーと気がすまねーのか!!」

世間じゃ地味とかオタクとか言われてますけどね、僕だってやるときゃやるんですからね!!」

「つーか沖田さんは、ダイレクトちゃんと言い合いしてたんじゃないんですか!?!」

沖田

「弄る機会があるなら、そっちを優先するに決まってるよ」

ディレト

「その気持ち、痛いほどよく分かりましてよ」

新八

「分かるなアアア！」

ハヤト

「そうなんだよなあ。あんなんでも、新八って意外と戦闘力は高い部類なんだよな」

スバル

「周りが凄い人ばかりだから、あんまり目立ってないけどね」

ティアナ

「実際、戦って勝ったりもしてるものね」

ディレト

「それ、本当ですか？ 新八様が？」

新八

「本当だよ。ホラ、単行本のこのあたりとか」

ディレト

「……………（鑑賞中）……………良く出来たコラですわね」

新八

「どう見てもコラじゃねえだろうがオイイイ！ どんだけ認めたく無いんだアア！？」

銀時

「諦める新八い。それがお前の“運命”と書いて“さだめ”ってヤツだ」

新八

「認められる訳ねえだろオオ!!」

ハヤト

「お後がよろしいようで。では次の質問」

新八

「よくねえだろうがアアア!! 何面倒になったからってぶん投げてんですかアアア!?!」

ハヤト

「次の質問。

『1日だけ何をしてても許されるなら、何をする?』」

銀時

「好きなだけパフェ食って、好きなだけパチンコやって、好きなだけ酒飲むわ」

新八

「うわ、駄目な大人がいるよ……」

ディレト

「マダオですの」

ハヤト

「いつそ清々しいくらいに働こうって意思が感じられねーな」

沖田

「旦那が働く時ア世界が終わる時って決まってるからなア」

スバル

「ある意味凄いな」

銀時

「オイイイ！ お前ら言いたい放題すぎやしませんかねえ！？ お兄さん泣いちゃいますよ！？」

ディレト

「さっきの自分の発言を振り返りやがれ、ですの」

銀時

「過去は顧みない。それがいい男ってモンだ、覚えとけディレト」

ディレト

「おお、何だか上手く言いくるめられて気がしますけれど、なるほどですのー！」

沖田

「……おいおい、あんんで大丈夫なんですかい、あのお嬢ちゃん  
は」

ハヤト

「……うん、まあホラ、アホの子ってのも個性ですから」

沖田

「はあく、色々大変でやんすねえ」

ティアナ

「ええと、それじゃあ沖田さんはどうします?」

沖田

「とりあえず土方ブツ してから、ウチのほうのティアに)ピー)してから)ピー)って)ピー)キメてそれから……」

ティアナ

「ふざけた事言っでんじやないわよオオオ!!」(会苦巢飯婆)

沖田

「おおっとお、危ねえじゃねえかティアナ。当たったらどうするんでい」

ティアナ

「あ、ああああアンタがふざけたこと言っからでしょ!？」

(ピー)キメるって何よ)ピー)って!」

沖田

「うるせえな。ウチの方のティアは悦んでんだからいいんだよ」

ハヤト

「ティアナ……そういう趣味あんの?」

ティアナ

「無いわよ馬鹿あああつ!」(狩場庵)

ハヤト

「ぎゃーっ!? や、八つ当たりじゃねえかああ!!」

新八

「ちよっ!? なんか凄い電撃なんだけど何それ!? 何でハリセンが放電してんの!？」

「てゆうかそれでハヤト君大丈夫なの!？」

ハヤト（黒人）

「まあ、割と大丈夫です。不死身のコーラサーなんで」

新八

「どこをどうやったらそうなの!? 顔と声まで変わってんじゃない!！」

スバル

「このラジオのハヤトに対して、細かい事考えたら負けですよ?」

新八

「スバルちゃんはスバルちゃん、何でそんな落ち着いてんの!? ねえ!？」

スバル

「慣れましたから。それで、新八さんは何をするんですか?」

新八

「な、慣れたって……まあいいか。  
何をしても許されるなら、お、おおッ、お通ちゃんとデデ、デ  
ト……ッ!？」

スバル

「? どうしました?」

新八

「いや、何か殺気を感じて……」

ハヤト（黒人）

「気のせいじゃないですかね、大佐あ」

新八

「誰が大佐だよ!?!」

ティアナ

「逃げるなこのセクハラやろおおお!?!」

沖田

「甘え甘え、そんなだから（ピー）（された時に（ピー）とか言うんだよ」

ティアナ

「誰が言うかあああああ!?!?!?!」

ディレト

「收拾つけられませんかねえ」

銀時

「おいおいディレトオ、諦めんなあ。諦めたら試合終了だって安西先生も言ってたぞ」

ディレト



『パーソナリティの4人に一言!』」

銀時

「ん、なに? 4人全員に1コずつ喋んねーといけねーのコレ?  
えーと……じゃまずハヤト。一度バカ……ハタ王子に会ってこい。  
多分、セレブな(ペットの)暮らしができるから。」

次、スバル。お前ってさ、ロケットパンチとか装備できねーの?

ティアナ、お前はクロスファイヤーに頼ってねーで、ガンカタ覚えるガンカタア。

最後、ディレト……おめーからのケンカは、銀さん死んでも買わねーからな」

ハヤト(黒人)

「ペットかよ! ペットかよ!」

スバル

「ロケットパンチ……心ときめきますね!」

ティアナ

「ガンカタって……どこで覚えるんですか……」

ディレト

「ぶーぶー、買って貰えませんの? 折角このラジオの後に死合を申し込もうと思いましたがのい」

銀時

「思ってたんかい! あつぶねーなオイ。今も言った通り、絶対に

「買いませんー」

ディレト

「からのー？」

銀時

「からのーは無えよ！ 何を期待してんだお前は！」

ディレト

「つまりませんの。では、次に沖田様、お願いしますわー」

沖田

「ティアナ、ちょっとコツチで3（ピー）しねーかい？

あとの三人は……ま、頑張ってくださいエ」

ハヤト

「いや、流石にやらせねーよ？」

沖田

「あん？ なんでえなんでえ、そんな怖い顔するなつて。1割冗談だからよ」

ハヤト

「9割本気じゃねーか！ つかピー音の意味ねえし！ 人の彼女取るうとしてんじゃねえよ！」

沖田

「まあそう言うない。ティアナだつてきつと悦」

ティアナ

「ばないわよ!」（会苦巢飯婆）

沖田

「おつとあぶねえ、バリアアつと」

ハヤト

「俺かよおばばばばばばばばば!?!」

ティアナ

「あ」

スバル

「あ」

ハヤト（消し炭）

「お、おのれ……沖田、総……がくっ」

ディレト

「死にましたの」

新八

「死んじゃったの!?! え、ちよっ、マジで!?!」

ハヤト（ゾンビ）

「まあ大丈夫なんですけどね」

新八

「生き返ったアアア!?!」

銀時

「おーおー、流石は人類やめてるだけの事はあるなあ。銀さんもビツクリだ」

ハヤト（ゾンビ）

「そんな誉めないでくださいよ。照れるじゃないですか」

銀時

「いや、誉めちゃいねえけどよぉ」

ハヤト（ゾンビ）

「まあでもマダオよりはマシかなーって思いますねw」

銀時

「ハハハこやつめ」

ハヤト（ゾンビ）

「ハハハ！」

ハヤト（ゾンビ） & 銀時

「……………」

ハヤト（ゾンビ） & 銀時

「「やんのかゴルアアアア!?!」「」

新八

「アンタら真面目にやってくださいよ!!」

「たくもー……。えと、いつも楽しい放送ありがとうございます  
いつも楽しみにしてるんで、これからも頑張ってください」

ディレクト

「普通ですわね」

沖田

「面白くねえなあ駄眼鏡」

スバル

「オチとしてはちょっと弱いですね」

ディレト

「やっぱり駄眼鏡は駄眼鏡ですよ」

新八

「いい加減にしろお前らアア！ いちいち僕を弄らなきゃ駄目な病気でもあるんですか！？」

ディレト

「ドSですから！」

沖田

「ドSだしい」

スバル

「それではCMです」

新八

「拳句の果てにスルーすんなアアア！……！」

こんにちは

スバル

「こんにちはワン！」

ありがとう

キャラ

「ありがとうウサギです！」

こんばんは

エリオ

「こんばんワニ」

さよなら

ヴィータ

「さよなライオンだよ」

魔法の言葉でた〜のし〜い、な〜かま〜が  
ぽぽぽぽーん

おはよう

ハヤト

「おはよウナギ……ってウナギかよ!」

いただきます

なのは

「いただきマウス」

いってきます

ギンガ

「いってきますカンク! てゆーか私がスカンクってどういう意味!?」

ただいま

フエイト

「ただいまンボウ」

ごちそうさま

ヴィヴィオ

「ごちそうさまウス〜!」

おやすみなさい

ティアナ

「おやすみなサイ。意外と普通ね」

すてきな言葉でゆ〜かい〜な、な〜かま〜が

ははははは〜ん

あいさつするたび、友達増えるね。

B D 交響皇国機構

ディレト

「とあ新らじおでしてよ」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「『『『スバルの食べ物感想会！』『』『』』」

ハヤト

「このコーナーでは、スバルにリスナーの皆から「食べて欲しい」とリクエストされたモンを食べてもらって、その感想を言ってもらぞ」

スバル

「前は酷い目にあつたからね……今回はおいしいのだといいなあ」

沖田

「そこでこつそりこのタバスコを」

ティアナ

「入れるなっ！」

沖田

「冗談に決まつてるじゃねーか。そう怒んない」

ティアナ

「がるる……」

ハヤト

「何か仲良いなお前ら……まあいいや。今回の食べ物をリクエストしてくれたのは、博麗神社の床下の段ボールに潜入中の、RN：楽園の素敵な御子さん、帝都ザーフィアス市民街在住のRN：脱獄囚の顔見知りさん、2人とも同じものをリクエストしてくれたぞ。

そしてリクエストされた品がこちら！」

『マーボーカレー』

銀時

「なんでえ、甘いモンじゃねえならどつでもいいや」

新八

「ちょっと銀さん、何でいきなり寝転ぶんですか。せめて椅子に座ってくださいよ、てゆーか何でそんな一気にテンション下げてんですかちょっとおー!」

スバル

「うわー、おいしそうだね!」

ディレト

「流石に今回はスタッフ様も、食べられる物を用意してくださっていると思うのですが……」

沖田

「DSならここで追い討ちかけてくるだろうなあ。油断は禁物ってヤツだ」

ディレト

「ですわよね」

スバル

「うう、不安になるような事を言わないでよお……」。

えっと、それじゃあ早速食べてみるね! では、いったただっきまーす!

……もぐもぐ……もぐもぐ……っ!?

ティアナ

「スバル? どうしたの? やっぱり酷い味だった?」

ハヤト

「いや、マーボーカレーはテイルズシリーズでちゃんと料理になつてるし、回復量もそこそこだから決してマズイという結論にはならないと思うんだが……」

スバル

「うー……まー……い……ぞ……!……!」

新八

「ス、スバルちゃんが目と口から光を発しながら叫んだ……っ!」

ハヤト

「どっかで見たぞそのリアクション」

ティアナ

「パクリね」

ディレト

「パクリですの」

銀時

「パクリはいけねーなパクリは。そーゆーのは銀さん許せねえ」

新八

「いや、銀さんがそれを言いますか」

スバル

「カレーと麻婆豆腐、2つの辛味が入っているにも関わらず、決して辛すぎはせず、しかし舌にピリツとくる絶妙な辛さはキチンとキープしている！」

そして、麻婆豆腐特有のとろみによってカレー全体が程よくごはん

と絡み合う！  
煮込んだことで豆腐が煮崩れしていて、それがまたカレーと合っているんだよ！

おいしい！ おいしいんだよとーま！！」（パクパクモグモグ）

銀時

「とーまってなあ誰だっつー話だ」

ハヤト

「そげぶですよそげぶ」

銀時

「あー、そげぶな」

新八

「それで通じるんですか……」

ティアナ

「まあ、有名ですものね」

ディレト

「では、スバル様が食べているうちに、楽園の素敵な御子様とお

便りの続きを読んでいきますわよ。

……寶錢箱が泣いてますわ。

『是非とも食べて欲しいのはこの”テイルズシリーズ”のマーボ  
ーカレー、

一応ハヤトさんやティアナさん、ディレトさんにも送りますんで  
ラジオ終了後にも食べてください。

スタッフさんには大妖精、ルーミア、ミステリアの手作りだそ  
うです。

P.S

スタッフさんへ、萃香や？（チルノ）、レミリア、フランが幻  
想郷へ来たらもてなす。

とのことです』

（ ） くちよつと幻想郷に行ってきます。

（ ） く探さないでください

（ ） くおぜうと妹様、マジペロペロ

（ ） く萃香の脇をペロペロしたいお！

ハヤト

「行ってこい行ってこい。そして二度と帰ってくんない」

銀時

「すんげえロリコンだなあオイ。是非ともウチのヴィヴィオには近  
づいて欲しくないもんだ」

沖田

「旦那あ、もしもの時は俺にやらしてください。新しく色々と試してみたい事があるんでさあ」

銀時

「おうおう、勝手にやってくれー」

ハヤト

「なんつー物騒な会話を……まあスタッフだからいいか」

ティアナ

「そうねえ。スタッフだし」

ディレト

「ですわね。ところで、そろそろスバル様が食べ終わる頃だと……」

1073

スバル

「もぐもぐ、ごっくん。おかわり！」

ディレト

「……ああ、うん。予想出来たことでしたわね」

ハヤト

「そうだな。スバルだもんなあ」

ティアナ

「あの子が美味しい物食べたら、まず間違いなくああなるわよね」

銀時

「まあ仕方ねえだろ。アイツは犬っ子だからな」

沖田

「首輪をつけて外を連れまわしてやりたいですねえ」

新八

「だからアンタはそっついう発言すんなっつってんでしょうがああ！」

ハヤト

「はあ、とりあえず『スバルの食べ物感想会』はここまで。

次のコーナーいつてみるか。次のコーナーはこれだ！」

ハヤト&ティアナ&ディレト

「「「「「解けるかな？ ディレトちゃん！」「」「」

ハヤト

「このコーナーでは、ディレトがリスナーから寄せられた問題に答えしていくぞ。

果たして今回は正解する事が出来るのか！！」

ディレト

「頑張つて勉強しましたもの、大丈夫ですわ！」

ティアナ

「頑張つてね、ディレト」

ディレト

「任せてくださいませ！」

銀時

「間違えた方がおいしいよなあ」

沖田

「そうですねえ、その方がおいらとしても弄り甲斐がありますよ」

ディレト

「そっちの2人はお黙りあそばせ！」

新八

「頑張つてディレトちゃん！」

ディレト

「あ、眼鏡は別にいいですよ」

新八

「( . . . ) < によろこんだ……」

ハヤト

「そんでは今回の問題。」

ナス力級にお住まいの、RN：メイリン「ホークさん。」

……ああ、影の薄い方のホークさんですね、わかります。

問題！ 『サバ・トロ・イカ・タラ・マスのうち仲間外れは？』」

ディレト

「け、計算問題ではありませんの!？」

ハヤト

「そりゃそうだろ。問題っただけで、別に数学の問題とは決まってるんだし。」

「ちなみに、この答えは理由まで正解しないと にならないからな  
ー」

銀時

「はいそれではシンキングタイムスタート」

ディレト

「あーうー……魚じゃないって意味ではイカですわよね……。  
でもなぞなぞですし、そんな理由で当たりって訳はありませんで  
しょうし……。」

「そうなるよ、あれがこうしてこうなって……ううう、じえんじえ  
んわかりませんのお……」

スバル

「あーおいしかったー。ってアレ？ あたしのコーナーは？」

ティアナ

「もうとっくに終わったわよ。今はディレトのコーナー中」

スバル

「そ、そんな！？ あたしの見せ場は！？」

銀時

「そんなモンとつくの昔に星の彼方だっつーの」

スバル

「がーん……」

ハヤト

「はい、シンキングタイム終了ー！ それではディレト、答えをどうぞー！」

ディレト

「こ、答えはイカですわ！ 理由は、ひとつだけ魚類じゃないからですのー！」

ハヤト

「……惜しい！」

ディレト

「お、惜しいんですの？」

ハヤト

「イカってのは当たりだ。ただ、理由がはずれてたな。」

正解の理由は、『イカだけは2回繰り返し返しても言葉にならないから』だ。

ほら、他のはサバサバ、トロトロ、タラタラ、マスマスって感じに言葉になるだろ?」

ディレト

「おお〜……なるほど、ですわ」

ティアナ

「残念だったわね、ディレト」

ディレト

「うー、悔しいですの。次回は絶対に当ててみせますわ!」

スバル

「その意気だよディレト! またティアと一緒にいろいろ教えてあげるからね!」

ディレト

「お願いしますの!」

新八

「いい話だなあ……」

銀時

「何この茶番……」

沖田

「面白くもなんともないですぜ」

ハヤト

「はい、そんなじゃまあ女の友情が深まったところで『解けるかな？  
ディレトちゃん』は終了。」

CMを挟んでから、エンディングトークだ」

J・S事件から3年後。

1人の少女の恋が動きだす。

動き出した少女の恋は、周りの人も巻き込む大騒動に。

そんな中で、徐々に近づいていく2人の距離。

果たして少女の恋心は、大好きなあの人に届くのだろうか。

「お兄ちゃん！ 私、私ね」

「……？」

これは、未来にあったかも知れない、とある青年と少女の恋物語。

魔法少女リリカルなのは ～高町ヴィヴィオの憂鬱～

現在、s u f i aさん執筆で絶賛連載中！  
まだ読んでいない人は、書店に急げ！

「高町ヴィヴィオ9歳。お兄ちゃんが大好きです！」

ハヤト

「これってガチCMじゃね？ ……とあ新らじお！」

ハヤト

「ってな訳で、エンディングトークですよーっ」と

銀時

「あーあー疲れちゃったなあ。おっさんにはキツイぜ、こーゆーのは」

新八

「おいしいい！ まだ終わっても居ないのに文句つけんなコラァア

ア!!!」

沖田

「わかりますぜ旦那。おいらも、もうクタクタでさあ」

ティアナ

「アンタもアンタで人に寄りかかってくんない！」

ハヤト

「あーもー離れろって沖田さん」

沖田

「何でえ何でえ、ヤキモチかハヤト？」

ハヤト

「ええまあ」

ティアナ

「っ!?!」

スバル

「っ!?!」

ディレト

「あらあら」

ハヤト

「目の前で自分の女に手え出されたら、流石にいい気はしないっしよ?」

ティアナ

「なっ、ばっ……」(照)

スバル

「あわわ……」(照)

ディレト

「ワクワクテカテカですの」

沖田

「おーおー、お熱いこって」

ハヤト

「なんとでも。さて、それじゃあ最後に番宣してもらって、その後お便りとゲストに関するお知らせといこうか。まずは番宣から。これは俺が担当するぜ」。

銀さん達が出演してるのは、『リリカル銀魂 Another 魔法と少女とかぶき町ライフ』。

赤夜叉さんが執筆された『リリカル銀魂 Strikers 白夜叉鎮魂歌』の3次創作で、その後の世界を書いた作品だ。

銀魂とリリなの、2つの世界観が絶妙にマッチした抱腹絶倒間違いなしの作品だぜ。

しかし、銀さんってこの世界だとハラオウン隊長と結婚してんだよなー。

あの我儘おっぱいを好き勝手してんだよなー……妬ましいなー」

スバル

「とっても面白いですから、是非牛乳を口に含んでみてくださいね」

ハヤト

「ちなみに、笑ってPCや携帯、PSPが壊れても当方は一切責任を負いません。」

全部リア充が悪いんです」

銀時

「最後番宣じゃねーぞオイコラアアア!!」

ハヤト

「気のせいですよリア充爆ぜろ」

銀時

「もしもしいい!?! 今思いつき悪口言ってみましたよねええ!?!」

ハヤト

「だから気のせいですって。じゃあついにお知らせの方を……銀さんと新八さん、お願いできます?」

銀時

「無視してんじゃねーよこの野郎!!」

……ちっ、しゃーねーなあ、後でパフェ10個で手を打とうじゃねえか」

新八

「銀さん、アンタ大人気ないよ……」

ディレト

「それではまず銀時様、お便りに関するお知らせをお願いしますわ」

銀時

「あいよあ。 “リリカル マジカル とあ新らじお？” では、リスナーからのお便りを募集中らしいぞ。

“励ましの一言”では、おめえらが励まして欲しいエピソードと、励まして欲しい相手を。

“ こんなりリカルは嫌だ！” では、リスナーが考えた “ こんなりリカルは嫌だ ” というお題を。

“ チャレンジ！ ハヤト ” では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

あー、ただしお題はブース内で出来ること前提だな。外でやるとロケ代がなあ……。

ハヤトが出来そうな事つても忘れちゃなんぜえぞ？ ああ、でもそれじゃお題が無いか。

“ 解けるかな？ ディレトちゃん ” では、ディレトに解いてほしい問題を送ってくれ。

こっちはちゃんと解答も一緒に書けよな。銀さんとの約束だ。

“ スバルの食べ物感想会 ” では、スバルに食べて欲しい食べ物のリクエストだな。

まあ食うのは俺達じゃないんだし、適当に何でもリクエストすればいいんじゃないの？

“ 白か黒か？ 答えてティアナちゃん ” では、ティアに白黒つけて欲しい事を送るよつに。

“あのシーン、もし私だったら”では、ハヤト達とゲスト達で再現して欲しいアニメのシーンと、その配役を。

ただし、ちゃんと元になるシーンの資料も添付しねーと再現出来ない時もあるから気をつけろお。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通なお便りを募集してるな。

その他に、イラストなんかも募集してるぞ。

送った場合はラジオで発表される可能性が0・1%ぐらいはあるらしいから、まあ期待せずに送ってくれや」

ディレト

「ありがとっございますですの。それでは次にゲストに関するお知らせを、新八、やれですの」

新八

「何で僕だけ呼び捨てなの！？　ねえ！？」

ディレト

「いいから読めですの」

新八

「くっそう……えーと、ゲストに関するお知らせです。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になっています。ですから、応募した順番通りにゲストに呼ばれる訳ではなくて、一番最初に応募していたとしても、最後まで呼ばれない可能性も十分にあり得ます。

そこは、くじ運という事でご了承ください。選ばれた作者さんには、ラジオからメッセージが届くようになっていきますから、楽しみにしてくださいね。

それと、今はゲストの応募は締め切り中です。

だから仮に応募しても、抽選候補には入らないから注意してください。

ある程度が消化できたら、またどんどん募集するみたいです。

……えーと、こんな感じでもよろしかったかな？」

ティアナ

「はい。ありがとうございました」

スバル

「それでは、今回の“リリカル マジカル とあ新らじお？”はここまで！」

ハヤト

「お相手はハヤト＝ロックウエルと」

ティアナ

「ティアナ＝ランスターと」

スバル

「スバル」ナカジマと」

ディレト

「ナンバーズ、ディレトと！」

銀時

「坂田銀時とお」

沖田

「沖田総悟と」

新八

「志む  
」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト&銀時&沖田

「「「「「ツツコミでした」「「「「「」

新八

「オイイイイ！ 結局最後まで僕で落とすのかアアア！？  
最後くらいちゃんと名乗らせるオオオオ！！！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト&銀時&沖田

「「「「「ばいばい！」「「「「「」

新八

「無視すんなやゴルアアアアア！！！！！」

ティアナ  
「この番組は

- (株) 虫歯建設株式会社
- (株) 養命酢製造株式会社
- (公) ACロボ軍団
- (Q) インキュベーター契約会社

以上の提供でお送りしました。  
アンタ、あたしと契約して魔法少女になりなさい」

ハヤト  
「俺と契約して、巨乳少女になれよ」



第2回『これって3次創作っつーか、もはや4次創作じゃね?』（後書き）

む、難しかった……。

実は私、銀魂ってアニメを何回か見ただけで、あんまり良くは知らないんですよ。

だから各人のキャラがこれでいいのか激しく不安です（汗）

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いません）  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、

あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合があります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、  
放送翌日あたりにメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、  
一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。  
ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第3回『禁断って言われると、何となく破りたくなるよね』

ハヤト

「きゅっぷい」

スバル

「きゅっぷい」

ディレト

「きゅっぷいですわ」

ティアナ

「……今度は何よ、3人揃って」

ハヤト

「インキューター」っご。略してQB」っごだ」

ティアナ

「何してんのよアンタらは！ てか何よそのQB」っごって！？  
ワケわかんないわよ！」

スバル

「ティアはいつもそうだね。事実をありのままに伝えると、決まっ  
て同じ反応をする」

ティアナ

「いや、いつもっていつか今のシシ」コニは初めてだと思っただけど  
！？」

ディレト

「訳が分かりませんわ。どうしてティアナ様はそんなに、ツッコミの在処にこだわるんですの?」

ティアナ

「ツッコミの在処って何よ!? てゆうーかいい加減やめて! 何かイライラするから!」

ハヤト

「デバイスコアさえ砕かれな限り、君達は無敵だよ」

ティアナ

「デバイスコアはあたし達と無関係でしょうが! あとやめろって言ったでしょ!」(会苦巢飯婆)

ハヤト

「あばばばば……!?!?」

ディレト

「ああ! ハヤト様が消し炭に……!」

スバル

「ティア! やりすぎだよ!?!」

ティアナ

「何言ってるのよ。アイツなら別にここから復活」

ハヤト(黒焦げ)

「……………」

ティアナ

「あれ？　しない？　え、嘘？」

ハヤト（黒焦げ）

「……………」

ティアナ

「ハ、ハヤト……？　ちょっと、ねえっ!？」

ハヤト（黒焦げ）

「……………」

ティアナ

「う、嘘でしょ……ハヤト、ハヤトってば!」

ハヤト

「無駄な事だつて知ってるくせに。懲りないんだなあ、君も」

ティアナ

「うわっ!？　びっくりした……って、え!？　何でハヤトが2人!？」

ハヤト

「ああ、そっちは抜け殻さ」

ハヤト（黒焦げ）

「……………」

ハヤト

「代わりはいくらでもあるけど、無意味に潰されるのは困るんだよ

ね。勿体無いじゃないか」

スバル

「おおー！ ハヤトしか出来ないQBごっこの真髄だね！」

ディレト

「カッコイイですわ、ハヤト様！」

ティアナ

「……コロス」

ハヤト

「H H H H H A！ それじゃあ今回の“とあ新らじお？”、最初のコーナーに行ってみようか！」

スバル

「最初のコーナーはこちら！」

ハヤト&スバル&ディレト

「「「励ましの一言！」「」「」

ハヤト

「このコーナーでは、俺達がリスナーの皆から寄せられたお便りを読んで、元気が出るように色々と励ましていくぞ」

ティアナ

「って無視するなっ！」

スバル

「まあまあ、落ち着いてティア。ほら、あんまりのんびりやっても駄目でしょ？」

ティアナ

「くっ……正論なのがムカつく……っ！」

デイレト

「それでは、最初のお便りはこちらですわ。

第97管理外世界海鳴市市街地 御剣古美術店にお住まいの、R

N：世界創造師様。

『これでも主人公の1人で、最強クラスだと言っ自負も有ります。なのに、それなのに!!! 最近めっきり出番が有りません。それに加えて、僕だけイラスト無し。どう言っ事なの……。どうか、どうか皆さん！ 励まして下さい!!!』

ハヤト

「ぐっ……涙で前が見えねえ……っ！ でも、俺は応援してます！ 頑張って！ 超頑張って！ きっとな明日はあるからっ!!!」

デイレト

「貴方様のお気持ち、凄くよく分かりますわっ！ わたくしも、最

近本編じゃとんと出番がございませんもの！！ それにわたくしもイラストがありませんしっ！

でも、負けては駄目ですわよ、世界創造師様っ！ いつか……いつかわたくし達にも輝ける時代がやってきますわ！ その日が来るまで、今はジツと我慢する時なのですわっ！

スバル

「な、何かディレトが熱いなあ……。えと、頑張ってくださいねっ！」

ティアナ

「主人公なら、いつかきつと活躍する時がやってきますよ。だから、それまで頑張ってください」

ハヤト

「チート主人公でも不遇な人って居るんだなあ……。俺、何かすげー親近感湧いたわ」

ディレト

「わたくしも、凄く親近感を覚えましたわ……」

スバル

「ティア、何か2人が遠い目してるよ!？」

ティアナ

「……ほっときなさい。それじゃ、次のお便りいくわよ。」

えっと、次のお便りは……結構長いわね、これ。なにになに……?」

聖王教会の聖堂の隅っこにお住まいの、RN：レンハルト（代筆、神崎ミコト）さん。

代筆なんだ……。

『このお便りを書いていたレンハルトが途中で心が折れたため、レンハルトが書いている小説に出演している俺、神崎ミコトが代筆を務める。』

この夏にエアコンが壊れたため、修理の人が来たときの話だ。

おっちゃん「夏休みか？」

レンハルト「はい」

おっちゃん「そうか……。中学生？」

レンハルト「……。いえ、大学生です」

という会話があっという間に。

その他、弟より年下に見られる、15歳以上対象のゲームを買う時に、

年齢の証明できる物の提示を求められ自動車の免許証を出すと驚かれる、などなど。

今、レンハルトは部屋の隅っこで「こんな童顔で生まれた俺が悪いです。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」とかブツブツ言っている。

正直鬱陶しい。どうにかして励ましてやってくれ』

それと、励ます相手の指名もあるわね……。あたしかスバル、ですって」

スバル

「それじゃ、ここはあたしが！」

「うーんと……格好を大人っぽいのにしてみましたらどうでしょう？」

後は髭を生やして見るとか！」

童顔だからって諦めちゃうよりも、色んな事をやってみるといいかもですっ！」

逆にそれを逆手にとって楽しむっていうのも手ですよ？」

ディレト

「チンクお姉様も、同じ悩みを持ってらっしゃいましたわねえ」

ハヤト

「そういや、ヴィータ副隊長もだなあ」

スバル

「あの2人は背が低いってのもあるけど……でも、童顔なだけなら色々やりようはあると思うな」

ティアナ

「そうね。出来る事を全部試してみて、諦めるのはそれからでも遅くないですよ？」

もしかしたら、あと数年で一気に大人っぽくなるかも知れませんし」

ディレト

「それに老け顔よりはマシだと思いますの」

ハヤト

「それは俺も思う。ってなところで次のお便りだ。

次はミッドチルダ山岳地帯のアジトに潜伏中の、RN：赤眼の幽霊的人外さんだ。

潜伏中なのに、らじおを聞く余裕はあるのか……。すげえ組織だなオイ。

『とあるテロ組織のリーダーをやっているのだが、

メンバーが見た目が魚人、人間の体を捨てた守銭奴、爆弾ばかり作る芸術バカ、

変な鎧に籠もってばかりの根暗、増殖できる白黒のアロエにラリったカルト宗教家と

まともな奴がない。

唯一の（精神的意味で）常人は今や敵になってるし

………俺の精神が壊れないように励まして欲しい』

いや、テロ組織なのにマトモさを求めるってどうよ？」

デイレト

「頑張ってくださいまし。どんな組織だって、リーダーは色々と苦労するものですわ。

それを乗り越えてこそ、貴方様の組織はより一層凄いものになる筈ですわよ？」

ティアナ

「そうね。それに、そういった濃い面子を纏めてこそそのリーダーだ

と思うわ。

あたしだって、今現在この3人をまとめてるわけだし……はあ」

ハヤト

「異議あり！ 俺をこの2人と一緒にすんな！」

スバル

「異議あり！ あたしをハヤト達と一緒にしないでよ！」

ディレト

「異議ありですわ！ わたくしを、この御二人と一緒にしないでくださいまし！」

ティアナ

「……びっくりする程同レベルよ、あんた等」

ハヤト

「心外だが今は置いておこう。」

しかし、このお便りのメンバーってどこかで聞いたことあんだよなあ」

ディレト

「そうなんですか？ わたくしは全然知りませんわだってばよ」

スバル

「あたしもわかんないってばよ」

ティアナ

「いや！ あんたら絶対わかってんでしょ！？」

ハヤト

「いやいや、全然わかんねーってばよ」

スバル

「全然わかんないってばよ」

ディレト

「心当たりがありませんわってばよ」

ティアナ

「……もういい。疲れたわ。」

それじゃあ今回の“励ましの一言”はこれまで。  
3人とも、タイトルコールいくわよ？」

ハヤト

「わかったってばよ！ それじゃあ“リリカル マジカル とあ新  
らじお？”！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「スタートです！！」「」

リリカル マジカル とあ新らじお？

第3回 『禁断って言われると、何となく破りたくなるよね』

ハヤト

「僕と契約して魔法少女になってよ！」

ども、メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルです」

スバル

「貴女は、鹿目まどかそのままがいい。

同じくメインパーソナリティの、スバル＝ナカジマです！」

ディレト

「ティロ・フィナーレ！」

同じくメインパーソナリティを務めます、ディレトですわ」

ティアナ

「……なにこのまどマジ祭り。

えーと、同じくメインパーソナリティのティアナ＝ランスターです」

ハヤト

「おいおい、ここはお前もノってくるところだろうが！」

スバル

「そうだよー」

ディレト

「そうですねー」

ティアナ

「うるっさい！ 誰がやるか！」

ハヤト

「んだよー。折角お前が言う用に、「あたしって、ほんとバカ」を残しといたのに」

ティアナ

「何でよりによってそれなのよ！？ もういい！ 今回のゲストを呼ぶわよ！」

デイレト

「了解ですの。それでは今回のゲスト様ですわ！  
今回のゲスト様は、『魔法少女リリカルなのはStrikers  
〜禁断の刃〜』より。

刀のフラメ様と、銃のドンナー様ですの〜」

フラメ

「や。呼ばれたから来てみたよ」

ドンナー

「てゆーか、紹介はないの紹介は！」

デイレト

「あら、これは失礼しましたわ。それでは改めまして……こほん。  
わがままおっぱいな刀のフラメ様と、つるぺたがっかり娘な銃の  
ドンナー様ですわ！」

ドンナ

「よいしい度胸ねディレト。ちょっと表出なさい」

ディレト

「あらあら、望むところでしてよ?」

ハヤト

「いやいや、いきなり喧嘩はやめろって。

お前ら2人とも、どっちもどっちじゃうごはあっ!?!」

ディレト

「何かおっしゃいました? ハヤト様」

ドンナ

「ぶっ殺されたいみたいね。ハヤト」

ハヤト

「おお、こわいこわい。だが忘れるな! 俺はそうそう死なない男だぜ!」

ドンナ

「いいわ。アンタがどんだけ殺しても死なないって言うなら、まずはその幻想をぶっ殺す!」

ディレト

「わたくしもぶっ殺しますわ」

ハヤト

「H A H A H A! やれるもんならやってみなあつ!

自慢じゃねーが、俺のギャグキャラとしての補正は、主人公補正

よりも強いんだぜえっ!!」

フラメ

「……それを誇るっていうのもどうなんだ？」

ティアナ

「気にしたら負けかなと思ってるわ」

フラメ

「oh……大変だね、アンタも」

ティアナ

「ふっ、もう慣れたわ……」

スバル

「えっと、それじゃあ最初のコーナーいってもいいかな？」

「なんか向こうでハヤトが凄い事になってるけど」

ティアナ

「ええ。いつもの事だし、適当に痛めつけられたら終わるでしょ。

それじゃあ最初は恒例のこのコーナーよ」

ティアナ&スバル

「「ゲストに5つの質問!」」

ティアナ

「このコーナーでは、あたし達がゲストさんに5つの質問をして、それに答えて貰うわ」

スバル

「あんまり緊張しないで、いつも通りに答えてくださいね！」

フラメ

「OK。私に出来る範囲で頑張らせてもらうよ」

ドンナー

「あたしも、まあ適当に答えさせてもらうわ」

ティアナ

「あれ？ もうハヤトはいいの？」

ドンナー

「ええ。あとはディレトに任せてきた」

スバル

「あー……ハヤト、大丈夫かなあ」

ティアナ

「大丈夫でしょ。ハヤトだし」

フラメ

「ふふっ、loveな男の事はお見通しってヤツだね」

ティアナ

「う、うるさいっ！ ほら、さっさと質問いくわよ！」

スバル

「はい。それじゃあ最初の質問です！」

『お名前は？』

フラメ

「刀のフラメ。本名はカレン＝ロットだよ」

ドンナー

「銃のドンナー。本名は竜波美琴よ」

ティアナ

「本名と渾名って、特に関係ないのね？」

フラメ

「そうだね。まあ色々あってさ」

ドンナー

「最近は、あんまり本名を名乗ることはないけどね」

スバル

「へえ〜……でもでも、銃のドンナーとかってカッコイイよね！」

ドンナー

「そ、そうかな……えへへ」

フラメ

「あ、そうそう。話はChangeするんだけど、いいかい？」

ティアナ

「? 何かしら?」

フラメ

「気になってたんだけど、今、とあ新の本編だとキングがHero  
ineをしてるじゃない?」

Loversな2人としては、そこんところどう思ってるんだい?」

ティアナ

「……ヤなこと聞いてくるわね」

フラメ

「ははっ、ゴメンね。ちょっと気になったもんだから。で? どう  
なんだい?」

スバル

「むー……ギン姉はもちろん大好きだけど、あれはちょっと……」

ティアナ

「殆ど夫婦なものね……」

ドンナ

「納得は出来てるけど、心中複雑ってところかな?」

ティアナ

「そうね。一応、あれはドラマだって分かっているけど……やっぱり、  
ちょっと」

スバル

「ヤキモチは焼いちゃうかなあ」

ディレト

「愛されてますわねえ、ハヤト様」

ハヤト

「無論だとも。ティアナもスバルも、俺様のミリキにメロメロだからな！」

ティアナ&スバル

「「!？」」

フラメ

「あれ？ 帰ってきてたんだ」

ティアナ

「い、いいいい、いつから聞いてた!？」

ハヤト

「あ？ えーと、おっば……フラメさんが『気になってたんだけど』って言ったあたりから」

スバル

「殆ど最初っからじゃん！」

フラメ

「というか今、人のことを『おっばい』って呼びそっになっただけかっただ？」

ハヤト

「ははは、いやだなあ。気のせいですよおっぱいさ……フラメさん」

フラメ

「呼びそつになつてただろ！ つーかむしろ呼んだだろつ！？」

ティアナ

「忘れる！ さっき聞いたのは全部忘れなさい！」

スバル

「あれは全部嘘……じゃないけど、でも嘘なの！」

ハヤト

「はいはい。それじゃあ次の質問にいくか。

『趣味と特技は？』」

ティアナ&スバル&フラメ

「「「無視するなーーーーっ！！！！」」」

ドンナー

「うるさいわよ3人とも。静かにしてよね」

ディレト

「本当ですわよ。女の子はエレガントに、ですわ」

フラメ

「この状況でElegantに振舞えるわけないだろつがっ！」

ティアナ

「くっ、ハヤトに聞かれるなんて、不覚……っ！」

スバル

「あうあう……」

ドンナ

「このままじゃ進まないわね……」。

えーと、アタシの趣味は銃集めとシューティングゲーム。特技はハッキングよ」

ディレト

「STGと言いますと……東とかですか？」

ドンナ

「んー、まあそつちもやるよ。でも、主にやるのは玩具の銃を構える方のゲームかな。」

ほら、画面の外を撃ってリロードする感じの」

ハヤト

「へえ。ティアナと似たようなのやるんだな」

ドンナ

「あれ？ ハヤトはやらないの？」

ハヤト

「勿論やるけどな。ゲーマーとして、苦手なゲームがあっただいかなのだよ！」

ディレト

「どんな理屈ですよ……」

スバル

「その割には、ティアには勝てないよね。STG」

ハヤト

「くぐぼうぼはあつ!?!」

フラメ&ドンナー

「血い吐いたっ!?!」

ディレト

「余程ショックだったんですね」

ティアナ

「あんなの楽勝でしょ？ ハヤトがシヨボいのよ」

ハヤト

「ちくしょう！ 謝れ！ 全国の敵の配置や隠し得点まで記憶してるSTGゲーマーに謝れ！」

ドンナー

「そーだそーだ！」

フラメ

「ドンナーまで同調しないでよね……」

スバル

「あたしはゲームはやらないから、気持ちはあんまりわかんないかなあ」

ハヤト

「ちつ、これだからゲーマーじゃない奴は嫌なんだ。なあぺたんこ」

ドンナー

「よしその喧嘩買った」

ハヤト

「冗談ですよ。イツツ・ア・ジョーク。そんなに怒らないでくださいな、ぺたんこ」

ドンナー

「あんだとゴルアアア!!!」(電撃)

ハヤト

「そげぶっ!」

ティアナ

「あ、黒焦げになった」

スバル

「いつも通りだね」

ディレト

「それではフラメ様、質問にお答えいただけます?」

フラメ

「え? あれThrougghすんの?」

ティアナ&スバル

「「いつもの事だから」」

フラメ

「……そういえばそうか。」

えーと、私の趣味はGuitarや模擬戦、あとは実戦かな。特技は高速剣技……自分では『早撃ち』って呼んでるけどね。ま、特筆すべきこともない、普通の趣味だよ」

ハヤト（きゅっぷい）

「いや、それはおかしい」

フラメ

「復活はやつ!?!」

ハヤト

「いつもの事ですから。てか、それよりもその趣味が普通ってのはおかしいだろ」

ディレト

「? 何かおかしいところがありました?」

ティアナ

「ギターはともかく、実戦とか模擬戦が趣味って……」

ハヤト（わけがわからないよ）

「なんというバトルマニア」

フラメ

「失礼な。私はちょっと好戦的な趣味を持つてるだけだ。それをBattle Maniaなんて言われるのは、さすがに心外だよ」

ディレト

「そうですね。このくらいの趣味、誰でも持ってますわ」

ハヤト（僕と契約して以下略）

「黙らっしゃいこのラスボスっ子め。ええいもういい！ 次の質問だ！」

スバル

「そだね。と、途中のもあって、今回は時間かかっちゃってるし…。

えと、次の質問はコレです！

『自分の性格を一言で』」

フラメ

「んー、自分で言うのもアレだけど、好戦的かな」

ドンナー

「あたしは面倒見が良いわね。皆からも言われるし」

ハヤト（君達はいつも以下略）

「ドンナーが面倒見が良いってのは、ちょっと意外だな。もうちょっとこう、自由奔放って感じがするわ」

ドンナー

「そう？ 結構部下の相談に乗ったりとかしてるわよ？」

ディレト

「びっくりですわ。てっきりドンナー様は、わたくしと同じ人種かと……」

ティアナ

「いや、ディレトと同じ人種なのはフラメだから。どう考えても」

フラメ

「いやいやちょっと待って。流石にディレトほどf o o lじゃないと思うんだけど」

ディレト

「失礼なっ！ わたくしはバカじゃありませんわ！」

フラメ

「J o k eは程々にしなよ。さ、それじゃあ次のQ u e s t i o n sに行こうか？」

ディレト

「ジョークって何ですのジョークって!!」

ハヤト

「はいよ。それじゃあ次の質問な。」

『苦手な物や怖い物はなんですか？』

フラメ

「苦手な物や怖い物ねえ。アデル……ああ、私の直属の副官なんだけど、そいつの小言かな。」

「長いうえにねちっこくて、気分がD o w nするんだよ」

ドンナー

「アタシは………お化けとか、ホラー映画かな」

ハヤト

「ほほう?」

スバル

「はっ！ ハヤトが獲物を狙う狩人の目に!？」

ディレト

「あの目は知ってますわ！ ドクターが実験動物を見る時の目ですわ！」

ティアナ

「あー……ドナー、逃げた方がいいわよ」

ドナー

「？」

ハヤト

「これはいい事を聞いた！ ならば語ってやろう！

この俺が八神部隊長から今年の夏の為に仕入れた、とんでもなく怖い話をな！」

ドナー

「んなあつ!？」

フラメ

「お、面白そうだね。話してみなよ」

ドナー

「ちよーーっ!」

ディレト

「わたくしも興味ありますわ！」

ドンナー

「え、ちよつ、待って待って！ ティアナ、スバル！」

スバル

「あたしも興味あるかも……ごめんね、ドンナー」

ティアナ

「民主主義を始めましょうか。ドンナー」

ドンナー

「ちくしょう」

ハヤト

「それでは聞かせてやろう！ 機動六課に代々伝わる、7つの7不思議をな！！」

ディレト

「おー」

スバル

「定番だね！」

ティアナ

「……ってちよつと待て！ 7つの7不思議！？」

ドンナー

「7×7＝49個もあるじゃない！多すぎでしょ！？」

何かあっさり言い出すから、危うく聞き流すトコだったけど！！」

フラメ

「それに機動六課って1年しか動いてないじゃない。代々伝わって嘘でしょ」

ハヤト

「ちっ、バレたか」

フラメ

「むしろバレないと思うその脳味噌がFantasticだよ」

ハヤト

「それはさておき。語っていいですか？」

ドンナ

「駄目」

ハヤト

「ちょっとぐらい」

ドンナ

「却下」

ハヤト

「まあ、勝手に語るんですがね」

ドンナ

「やめろっつってんでしょが！！」（レールガン）

ハヤト

「あべしっ！」

ディレト

「おお。ハヤト様が吹っ飛ばされましたわ」

スバル

「なんでレールガンの直撃食らってるのに、吹っ飛ぶくらいで済むんだろ……」

ティアナ

「ギャグ補正つてヤツよ」

フラメ

「何ともCrazyな奴だねえ。ま、そこが面白いんだけど」

ハヤト（ボロ雑巾）

「す、少しは心配してくれ……がくっ」

ティアナ

「さて、それじゃあ最後にいきましよう。」

『パーソナリティの4人に一言』

フラメ

「それじゃ、私から。」

ハヤトは……取り敢えず私に斬られてみるか？ ええ？

スバル、殴る時はもっと思い切りやりな。そうしないとハヤトをCrash出来ないよ。

ティアナはツッコミ役、いつも御苦労さん。もし疲れたウチに来なよ。歓迎するから。

「ディレト、声と同じ人間同士、仲良くハヤトを虐めようじゃないか」

ハヤト（口口雑巾）

「こんな状態の俺をさらに斬ると仰るか。なんという外道。

しかしそのおっぱいを揉ませてくれるなら、斬られるのも吝かではない」

ティアナ

「アンタはいい加減にしろ！ ……って、ああもう、ホント疲れる。」

本気でフラメのお世話になろうかしら……？」

スバル

「あたしは別に、ハヤトの事壊したい訳じゃないんだけどなー」

ディレト

「とつても素敵なお誘いですわね！

……でも、ハヤト様を虐める権利はわたくしだけのモノですわよ？」

ハヤト（ティ口雑巾）

「俺を虐める権利なぞ、誰にも無いわボケエツ！」

フラメ

「あつはっは！ Nice joke だねハヤト」

ハヤト

「……泣いて良い？」

ドンナー

「次はアタシね。まずハヤト。

ちよつとこの放送が終わった後でO H A N A S H Iしようか？ 主に胸の件で。

スバル。ハヤトをとめるには、殴るより締め技の方が効くと思うわよ。

それからティアナ。今度銃の腕で勝負しましょ。あ、勝った方が負けた方にバイクをプレゼントするって条件でね。最後にディレト、ハヤトの奴、最近ツツコミに慣れてるみたいだから、もっとキツくやった方がいいわよ」

ハヤト

「えー。俺は事実を事実として言ったまでじゃんかー」

ドンナー

「良い度胸ね。じゃあ丸焦げにしてあげるから、そこ座んなさい」

スバル

「ま、まあまあ。てゆーか、ドンナーもフレームもあたしの事誤解してない？」

あたしは別に、ハヤトの事ボロボロにしたい訳じゃ……」

ディレト

「ふむ、殴るよりも締め技ですか……勉強になりますわ。流石ドンナー様。

他には何をしたらよろしいのでしょうか？ 良ければ教えて欲しいですの」

スバル

「そこでディレトが反応しちゃっの!？」

ドンナー

「いいわよ。色々教えてあげるわ。」

それとティアナ、どう？ 勝負してみない？」

ティアナ

「望むところよ。まあ、あたしが勝つに決まってるけどね」

ドンナー

「あら、自信満々じゃない。いいね、それじゃあ後でやりましょ」

ティアナ

「オツケー。ちゃんとバイクを買う準備しておきなさいね？」

ドンナー

「そっちこそ」

ハヤト

「よし。とりあえず話が纏まったところで、『ゲストへの5つの質問』は終わりだ！」

ちよつとグダグダしたせいで時間が押してるから、CM無しで次のコーナー！」

スバル

「次のコーナーはこれだよ！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「「あのシーン、もし私だったら！」「」」」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーさんから指定されたアニメや漫画のシーンを、あたし達で再現するわ。」

ちなみに、誰が誰の役をやるのかは、リスナーさんの指定がある場合はそれに準拠。指定が無い場合はこっちで適当に決めていくわね」

フラメ

「お、楽しみだね。どんなSceneがくるのかな？」

スバル

「今回の『あのシーン』はこちら！

ネオジャパンにお住まいの、RN：ザンバーさんから。」

『機動戦士ガンダム』より、ギレン・ザビの決戦演説をハヤトに！  
だって」

ドンナー

「あれをハヤトが？ 似合わないわ」

ハヤト

「黙れがっかりおっぱいめ！ 見ている、完璧にこなしてやる！」

ティアナ

「はいはい。それじゃあ早速やつてもらいましょ?」

フラメ

「それじゃあ、Start!」

ハヤト

「我が忠勇なるジオン軍兵士達よ!

今や地球連邦軍艦隊の半数が我がソーラ・レイによって宇宙に消えた。

この輝きこそ我等ジオンの正義の証である。

決定的打撃を受けた地球連邦軍に如何ほどの戦力が残っていないかと、それは既に形骸である。

あえて言おう、カスであると!

それら軟弱の集団が、このア・バオア・クーを抜くことは出来ないとは私に断言する。

人類は、我等選ばれた優良種たるジオン国民に管理運営されて、初めて永久に生き延びることが出来る。これ以上戦いつづけては人類そのものの危機である。

地球連邦の無能なる者どもに思い知らせてやらねばならん。

今こそ人類は明日の未来に向かって立たねばならぬ時であると!

ジーク・ジオン!!!」

ドンナー

「馬鹿な！？ ハヤトが、カッコイイ……だと……！？」

ディレト

「わたくし、夢でも見ているのでしょうか？」

フラメ

「2人とも落ち着きなよ。気持ちはわかるけどさ」

ティアナ

「台詞の力って凄いのね……あのハヤトが、真面目キャラに見えたわ」

スバル

「うん。ハヤトが凄い人に見えるもん」

ハヤト

「よし、泣くかあ」

フラメ

「さつさと次のLetterにいくのか。このままじゃ、私達の精神衛生的にマズイ気がする」

ティアナ

「そ、そうね。それじゃあ次の『あのシーン』よ。」

ミッドチルダ上空の宇宙空間にお住まいの、RN：龍神さんからのリクエスト。

『リリカルなのはA・S第2話で、  
ヴィータに襲撃されたなのはピンチにフェイトが現れて「友  
達だ」という場面』」

ハヤト

「ねえ、無視しないで？ 泣くよ？ 本気で泣いちゃうよ？」

ドンナ

「ああ、あのA・S屈指の名シーンね。これはちょっと楽しみだわ。  
それで配役は？」

ディレト

「ええと、なのは様がスバル様で、フェイト様がティアナ様。  
そしてヴィータ様がわたくしですわね」

ハヤト

「もういい、隅っこで泣いてくる」

フラメ

「あれ？ あのSceneって、もう1人いなかったかい？」

スバル

「あ、スクライア司書長がいたはずだよね」

ドンナ

「じゃあ、それはハヤトがやりなさいよ。ほら、そんな隅っこで体  
育座りしないで」

ハヤト

「……くすん」

フラメ

「なら、合図は私が出すよ。全員準備はいいかい？」

ハヤト

「…………おっ」

フラメ

「OK。それじゃ Start!」

スバル

「(こんなので……………終わり?)」

ディレト

「…………」

スバル

「(嫌だ……………キャロ、エリオ、ハヤト……………)」

ディレト

「トドメですわよ?」

スバル

「( …… ティアッ! )」

ディレト

「……………っ!？」

ティアナ

「……………」

ハヤト

「悪い、スバル。遅くなった」

スバル

「ハヤ……………ト……………?」

ディレト

「あら、お仲間ですの?」

ティアナ

「違っわ」

ティアナ

「 腐れ縁の、友達よ」

ドンナ

「おおー！ いいわね、普通にアリじゃない?」

フラメ

「うん、悪くない。まあ、流石に原作とは台詞がChangeしちゃってたけどさ」

スバル

「ふあ〜……なのはさんの役とか緊張したよ〜」

ティアナ

「フェイトさん役だから、あたしも緊張したわね」

ハヤト

「俺は特に」

ディレト

「わたくしも特に平気でしたわ。いつも通りでしたもの」

フラメ

「いい感じだったよ。流石StrikesのSub主人公だね」

ティアナ

「やめてよ。照れるじゃない」

スバル

「えへへ〜」

ハヤト

「それほどでもない」

ドンナー

「いや、ハヤトは違うから。アンタ原作にいないから」

ハヤト

「（・・・）<きゅっぷい>」

ディレト

「どんまいですわ、ハヤト様」

フラメ

「いやいや、ディレトもだぞ？」

ディレト

「（・・・）<きゅっぷい>ですの」

ティアナ

「はいはい、それじゃ今回の『あのシーン、もし私だったら』はここまで。」

次のコーナーは……どうしようかしらっ？」

ハヤト

「時間は微妙にあるし、あと一つくらいならいけんじゃね？」

スバル

「スタッフさん？」

（・・・）<時間はある。許可を。

（・・・）<よし、やっちまえ！

ドンナ

「なに、あのやりとり……」

ハヤト

「気にしたら負けだ。それじゃあ最後のコーナーいくぜー！」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「「チャレンジ ハヤト！」」」」

ハヤト

「おー、このコーナーも久しぶりだなあ」

ティアナ

「そうね。さ、時間も無いしさっさといくわよ」

ハヤト

「えーと、今んとこ一回成功でいいんだっけ？」

(´・`・´・`・´)くりニユールしたから、回数リセットだよ

ハヤト

「マジでー!?!」

( . . . ) <ムジで

ハヤト

「えー……いいじゃん、1回くら〜」

( . . . ) <きゅっぷい

スバル

「き、聞こえないフリしている……」

ディレト

「大人げありませんの」

フラメ

「あっはっは！ さいつこつだね！」

ドンナー

「ハヤトさまあ」

ハヤト

「ちくしょう」

ティアナ

「はいはい、時間が無いんだからグダグダしない。  
それじゃあ今回のチャレンジ行くわよ。」

住所が現在落下中の、RN：武闘鬼人さん。

『今不満の溜まっている人の悪口を言ったださい』

ハヤト

「なんだ簡単じゃねーか！ 任せとけ！ 悪口は得意だ！！」

プレシア社長！ いい加減給料上げてくださいよ！

何で俺だけティアナ達よりも3割くらい少ないんですか！！ 畜

生！

最近小じわが増えてきたからって、八つ当たりで給料減らすなー！

あと胸がちよつと垂れてきたからって八つ当たりすんなー！

それから、俺がアリシアさんとハラオウン執務官にアタックしよ

うとするのを邪魔すんなー！

おっぱい揉ませろー！

……ふう」（スッキリ）

フラメ

「ハヤト。他に言いたい事は？」

ハヤト

「え？ うーん、まあとりあえずさっきので全部かな、うん」

ドンナ

「そう。それじゃ、頑張ってね」

ハヤト

「え？」

スバル

「え、えーとね、ハヤト。さっきのお便りには続きがあつて……」

ディレト

「ハヤト様ー、後ろ後ろー」

ハヤト

「おいおいディレト。ぶじのぶり……」

プレシア

「こんにちは、ハヤト」

ティアナ

「その人物が今、あなたの後ろに居ます。」

戦つて勝つてください。敵前逃亡は厳禁ですって」

ハヤト

「（・・・）」

プレシア

「それじゃあ、ちょっと場所を移しましょうか。ここだと狭いしね」

ハヤト

「（．．．）」

プレシア

「ティアナ、スバル。後は頼んだわよ」

ティアナ

「は、はひっ！」

スバル

「わかりましたっ！」

ハヤト

「（．．．）」

プレシア

「それじゃあね」（退出）

フラメ

「……………なんとというか、大丈夫なのかい？」

ドンナー

「殺気が尋常じゃなかったんだけど」

ティアナ

「だ、大丈夫よ。いくらプレシア社長でも、流石に殺人は……………ねえ？」

スバル

「そそ、そうだよね！　大丈夫……だよね？」

ディレト

「きつと大丈夫ですわ。まったく自信はありませんけれど。

えーと……それでは、CMを挟んでからエンディングトークです  
の」

ティアナ

「あたし、心配だから見てくる」

スバル

「あたしも！」

それは、未来にあつたかも知れない、とある青年と少女の恋物語

「お兄ちゃん！　私、私ね　」

初めての恋に戸惑い、悩む少女

「ヴィヴィオは……大事な妹分だからな!!」

いつでも笑顔で少女に答える青年

「俺に出来ることがあれば協力する」

少女の思いをつなげるために動き出すもう一人の青年  
そして……

「お兄ちゃんにとって……私はやっぱり“妹”なのかな……?」

少女を不安が襲う

「大事なものは、お前があの子のことをどう思っているかだ」

「俺は」

自分の気持ちに気付き、戸惑い始める青年

「お前には……覚悟が足りないんだよ。

……あの子と向き合う、その覚悟がな」

彼は、徐々に追い詰められていく

「お兄ちゃん……」

「俺は、ヴィヴィオのことが」

少女の思いは届くのか？

<魔法少女リリカルなのは　〜高町ヴィヴィオの憂鬱〜>

S u f i a 書房にて、絶賛連載中！！

「私は、最強系のお兄ちゃんには興味ありません。平凡なお兄ちゃんが、大好きです！！」

ディレト

「ガチ宣伝ですわ。とあ新らじお?!!」

ディレト

「そんなこんなで、エンディングトークのお時間ですわ」

ドンナ

「ねえ、ティアナもスバルもハヤトも帰ってきてないんだけど？」

ディレト

「大人の事情ですの。気にしたら負けですわよ」

ドンナ

「いやいや気になるから！ 流石に気になるから！」

フラメ

「ま、今頃3人でイチャついてるんだろ」

ディレト

「ですわよねー。羨ましいですわ〜」

ドンナ

「いや、明らかにそうはならないでしょ！？ さっきの殺気から考えるに！」

フラメ

「ドンナー。さっきの殺気って……そのJokeは無いと思う」

ディレト

「わたくしも無いと思いますわ」

ドンナー

「駄洒落言ったんじゃないわよ！　つかスベった感じにするなっ  
！」

ディレト

「大丈夫ですわよドンナー様。そんなドンナー様を、わたくし応援  
してますから」

ドンナー

「哀れみの目で見るなっ！」

ディレト

「それでは最後に、軽い番宣をお願いしますわね。フラメ様？」

フラメ

「OK、任せなよ。それじゃあ……コホンッ。

私達が出ているのは『魔法少女リリカルなのはStrikerS  
〜禁断の刃〜』だね。

舞台はStrikerS本編が終わった後。

聖王教会の中でも禁忌とされていた私達『王佐の刃』が動き出し、  
そして元機動六課の面々や、元ナンバーズの連中とガチンコで戦い  
を繰り広げる。そんな感じのストーリーさ」

ディレト

「全体的にシリアスなストーリーが秀逸ですよ！

ただ、ちよっとお子様には刺激の強いシーンが多いので注意です  
わね。主に残酷的な意味で。

でもでも、それを差し引いても素晴らしい作品ですわよ！」

ドンナー

「あー……なんかもういいわ。番宣はこんなものね」

ディレト

「それでは、次はラジオに関するお知らせを、ゲストの御二方にお願ひしますわ！

ではまずドンナー様。お便りに関するお知らせをお願いしますの」

ドンナー

「はいはい。“リリカル マジカル とあ新らじお？”では、リスナーからのお便りを募集中よ。

“励ましの一言”では、アンタ達が励まして欲しいエピソードと、励まして欲しい相手を。

“こんなにリリカルは嫌だ！”では、リスナーが考えた“こんなにリカルは嫌だ”というお題を。

“チャレンジ！ ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はブース内で出来ること前提ね。ハヤトが出来そうな事つても忘れちゃ駄目よ？

ま、別に出来ないことでもいいと思うけど。ハヤトだし。

“解けるかな？ ディレトちゃん”では、ディレトに解いてほしい問題を送ってちょうだい。

こっちはちゃんと解答も一緒に書いてね。じゃないと、採用されないみたいだから。

“スバルの食べ物感想会”では、スバルに食べて欲しい食べ物のリクエストをお願い。

あんまりゲテモノは可哀想だから、ちゃんと食べられそうなのにしてあげてね。

“白か黒か？ 答えてティアナちゃん”では、ティアに白黒つけて欲しい事を送って。

“あのシーン、もし私だったら”では、ハヤト達とゲスト達で再現して欲しいアニメのシーンと、その配役を。

ただし、ちゃんと元になるシーンの資料も添付しないと採用されないから、気をつけてね。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通なお便りを募集してるわよ。

その他に、イラストなんかも募集してるわ。

送った場合はラジオで発表されるから、皆ごんごん送るよーに！

ディレト

「ありがとうございます、ですの。それでは次にゲストに関するお知らせを、フラメ様から」

フラメ

「任せな。それじゃあGuestに関するお知らせだよ。

Guestに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になってるよ。

だから、応募した順番通りに呼ばれる訳じゃなくて、一番最初に

応募していたとしても、最後まで呼ばれない可能性も十分にあり得るって寸法だ。

そこはまあ、くじ運ってことで諦めてちょうだい。

選ばれた作者には、こつちMessageが届くようになってるから、気長に待っていてくれ。

それと、今はGuestの応募は締め切り中だよ。

だから仮に応募しても、抽選候補には入らないから注意してちょうだいな。

ある程度が消化できたら、またどんどん募集するみたいだよ。

……こんなところかな？」

ディレト

「完璧ですよ！ では、今回の“リリカル マジカル とあ新らじお？”は終わりですね。

お相手はハヤト様とティアナ様、そしてスバル様の3人。

そしてこのわたくし、ナンバーズ、ディレトと！」

フラメ

「刀のフラメと」

ドンナー

「銃のドンナーでした」

ディレト&フラメ&ドンナー

「「「ばいばいー」「「「

ディレト

」この番組は

(巴) ティロ・フィナーレ

(巴) マミったあああ!

(巴) 円環の理

(巴) もう何も怖くない

以上の提供でお送りしましたの。



フラメ

「よし、ならLet's GO!」

( ) ・ ・ ・ ( ) <行っちゃったね

( ) ・ ・ ・ ( ) <ヤってる場面に遭遇して気まぜくなるに100万

ペリカ

( ) ・ ・ ・ ( ) <同じく

( ) ・ ・ ・ ( ) <同じく

( ) ・ ・ ・ ( ) <賭けにならないね

### 第3回『禁断って言われると、何となく破りたくなるよね』（後書き）

うむむ、何か上手く書けた気がしない。

ムーギネーターさん、うまく動かせずに申し訳ないです。

何か修正点などありましたらお知らせください。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所（架空で構いませ  
ん）

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いま

せん。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、こちらからメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

第4回『六課のお父さん登場！？』（CV：北大也）

ハヤト

「ふはははは！ 出でよ、我が最終兵器、機皇神龍アステリスク！  
！」

ディレト

「激流葬ですの」

ハヤト

「……すみません。負けました」

スバル

「はい。これでハヤトの5連敗」

ハヤト

「何故だ……何故ディレトに勝てんのだ……」

ディレト

「ハヤト様。ファンデツキには限界がありましてよ？」

ハヤト

「それでも……守りたい世界があるんだ……っ！」

スバル

「あんまり似てないね」

ディレト

「似てませんわねー」

ティアナ

「……今回は何？ 遊王？」

スバル

「あ、ティア。うん、始まるまでの暇つぶしにっつて」

ディレト

「ハヤト様が弱すぎて、暇つぶしにもなりませんけれど」

ハヤト

「うっせー！ ファンデッキじゃなきゃ勝てるわボケー！！」

ディレト

「負け犬の遠吠え乙ですの」

ティアナ

「はいはい、喧嘩しないの。もうラジオ始まってるんだし、気持ち  
を切り替えなさい？」

スバル

「はい、お母さん」

ディレト

「わかりましたの、お母様」

ハヤト

「わかったよ母ちゃん」

ティアナ

「誰があんたらのお母さんか!! まだ16歳よ!!」

ハヤト

「H A H A H A! さて、最初のコーナーにいくとするか!」

ティアナ

「無視すんなっ!!」

スバル

「今回最初のコーナーはこちら!」

ティアナ

「だから無視すんなっ!!」

ハヤト&スバル&ディレト

「『スバルの食べ物感想会!!』」

ディレト

「このコーナーでは、スバル様にリスナーの皆様からリクエストされた品を食べて頂いて、その感想を言ってもらっちゃいますの」

スバル

「今日はなにが食べられるのかな」

ティアナ

「……もうなんでもいいわよ」

ディレト

「まあまあティアナ様。そんなやさぐれないで下さいまし。」

ほら、お便りを読んでコーナーを進めましょう?」

ハヤト

「そうだけ。お前がいなきゃマトモに進められる自信がないからな  
!」

ティアナ

「それはそれでどうなのよ……。まあいいわ、とりあえずお便りを  
読むわよ?」

今回のリクエスト1品目は、六課男子寮のどこかにお住まいの、  
RN:とある偽善者さん。

どこかって……どこよ?

『詩魔転正月特別編で、ヴィータちゃんが持ち出してきたメロン  
パン

(バターの上にガムシロップをかけて焼いてさくさくふわふわ  
にした僕最高の特別な品)を、

辛党のユウ……紅茶マニアに食べさせたら速攻で吐いたので、  
なんで駄目だったのかを、スバルとハヤトとティアナに送るの  
で、食べてみてください。』

ハヤト

「うわ、すっげー甘そうだなオイ」

ディレト

「聞いているだけで胸焼けがしてきましたの……」

ティアナ

「えー、それじゃあスバル。サクッと食べて感想を教えてください」

スバル

「ラジャリました！ それじゃ、いったただっきまーす！

ぱくっ、もぐもぐ……もぐもぐ……ごっくん」

ハヤト

「……どうだ？」

スバル

「うん、甘いけどすっごくおいしいよ！

アイスみたいな甘さと、サクサクふわふわなのが最高だね！

これだったらいくらでも食べられるかも！！ 星みっつですっ！

！」

ティアナ

「ふうん、甘ったるそうなイメージな割には普通っぽい感想ね」

デイレト

「吐いてしまった方は辛党だったからかもしれないわね。

では、わたくし達も少し食べてみませんか？」

ハヤト

「んだな。俺らの分も送ってくれたみたいだし」

ティアナ

「でも……太りそうよね」

スバル

「う……そ、そうかも……てゆーか、あたしもう食べちゃったけど」

ディレト

「わたくしは別に平気ですの。食べても太らない体質ですもの」

ティアナ

「……へえー、そうー！　じゃあこのメロンパン100個食べて貰おうかしら！？」

それでも太らないっていうならたいしたもんだわ！！！！」

スバル

「あわわ、おおお落ち着いてティア！　別にティア太ってないから！　大丈夫だから！」

ハヤト

「そうかあ？　最近ちょっと尻がでkフジヤマヴォルケイノ！！」

ティアナ

「ナニカイツタカシラ？」

ハヤト

「い、いいえ。何も言ってません。右ストレートパねえツス」

ディレト

「今のはハヤト様が悪いですわね」

スバル

「うん。女の子の体型を軽々しく口にするとか、殺されても文句は言えないよ」

ティアナ

「さ、馬鹿は放っておいてまとめていきましょ。スバル、メロンパンの感想は？」

スバル

「ちよつと甘かったけど、サクふわで最高でした！」

ディレト

「他に送ってくださった分は、あとでスタッフの皆様と一緒に美味しく頂きますわ〜。

それでは次のリクエストですの！ 次のリクエストは、ニードレス駆除機『テストメント』の中にお住まいの、RN：ゆうたん様からですわね。

……アレの中って、凄く狭いんじゃないんですの？

リクエストされた一品は、『スーパーゲル状デロドロンドリンク』ですわ」

ハヤト

「どろり濃厚ピーチ味がどうしたって？」

ディレト

「そんな話はしてませんの」

ハヤト

「（´・・´）」

スバル

「で、これがその『スーパーゲル状デロドロンドリンク』なんだけど……」

ティアナ

「凄い色ね……しかも殆どゼリー状じゃない」

ハヤト

「まあ、これって元ネタの本編中でもゲテモノって言われてるしなあ」

スバル

「うう……時々コーユーの入れるのやめようよお。被害を受けるのあたしなんだよ？」

ディレト

「仕方ありませんわ。そういうコーナーですもの」

スバル

「ふえええん……」

ハヤト

「安心しろスバル。これは確かに『ゲテモノ』という括りだが、不味いとは一言も言われていない！」

スバル

「え、それホント!？」

ティアナ

「ええ。今ネタ元に確認したわ。別に不味かったり、変な味なワケではないそうよ」

ディレト

「ただ」

スバル

「じゃあ飲むー」  
「ぐくぐくぐく……ぷはーっ」

ディレト

「ああ! まだ説明の途中ですのに……そんな腰に手を当てて、斜め45度を向きながら、男らしく一気飲みされて……まあ、わたくしは別に構いませんけれど」

スバル

「うん。ゲル状だから飲みにくいけど、まあ普通だね。

味はちよつと甘い感じでしたっか? たかな? でも、全然普通に飲めたよ!

「ごちそうさまでしたっ!」

ハヤト

「あーあ」

ティアナ  
「あーあ」

ディレト  
「あーあ、ですの」

スバル  
「え？ 何？ 何かあったの？」

ハヤト  
「いや、お前が聞かなかったこの『スーパーゲル状デロドロドリンク』の説明がな……」

ティアナ  
「ええ。女の子としては、結構致命傷というかなんというか……」

スバル  
「？ ？ ？」

ハヤト  
「実はこのドリンク、元ネタではイヴというやたらとカロリー消費の激しい、とある能力を使うキャラだけが飲んでいるドリンクでな？」

スバル  
「へえ、そうなんだ。けっこーおいしいのに」

ティアナ  
「で、何で飲んでいるかという」と

スバル

「いうと?」

デイレト

「これ、一杯5000キロカロリーという、驚きのカロリー数なんですのよ」

スバル

「へえ」……………え?」

ハヤト

「ちなみに、テリヤキチキンピザの平均カロリーは1468キロカロリーな」

スバル

「えーと……………それは、つまり?」

ティアナ

「あなたはその3倍以上のカロリーを、たった今、一気飲みで摂取したという訳ね」

デイレト

「最初に食べたメロンパンのカロリーも相当でしょうし、これは太りますわねえ」

スバル

「うわあああんっ! そーゆーのは先に言ってよおおおっ!」

デイレト

「いや、言おうとしたら、それよりも先にスバル様が飲んでしまっ

たんじゃありませんの。

わたくし達のせいにはしないでくださいまし」

スバル

「それはそうだけどお……ちょ、ちょっと走りこみしてくるーっ！  
！」

ハヤト

「待てスバル。今はラジオの収録ちゅ……ってもう行っちゃったし」

ティアナ

「まあ、女の子としては死活問題だものね」

ディレト

「仕方ありませんわ。わたくし達だけで初めてしまいましょ？  
スバル様も、きっとそんなにはしないで戻ってきますわよ」

ハヤト

「そんなもんか？ まあ、とりあえず『スバルの食べ物感想会』は  
ここまで。」

それじゃあ、“リリカル マジカル とあ新らじお？”の第4回  
！」

ハヤト&ティアナ&ディレト

「スタートですー！！」

リリカル マジカル とあ新らじお？  
第4回『六課のお父さん登場！？（CV：北路欣）』

ハヤト

「あー、そんなこんなで始まった第4回。

どうも、メインパーソナリティのハヤト＝ロックウエルだZE」

ティアナ

「なにこれうざい。えっと、同じくメインパーソナリティのティアナ＝ランスターです」

スバル

「ぜーはー……こ、これで少しは……。

「お、同じくメインパーソナリティのスバル＝ナカジマです……ぜーはー」

ディレト

「汗だくですわね。これはこれでその手の方に人気が……ごくり。  
同じくメインパーソナリティを務めます、ナンバーズ、ディレト  
ですの！」

ハヤト

「んじゃ、早速ゲストをお呼びするとしますかね。

「スバルが太る太らないっつー騒ぎで、なんだかんだと時間とっち  
やったし」

スバル

「うっうっうるさいよっ！ 乙女にとっては一大事なんだよっ！」

ハヤト

「乙女とかマジワラストジャツジメントツ！？」

スバル

「ナニカイツタ？」

ハヤト

「いえ、何も言ってます。左ストレートマジパねえッス」

ティアナ

「あーもうほらほら、いつまでもふざけてんじゃないわよ。

さ、それじゃあゲストをお呼びするわよ！ 今回のゲストは」

ディレト

「『魔法少女リリカルなのはStrikerS』とある年増の銃騎士』から。

何とも珍しい三十路の主人公、六課みんなのお父様のような立ち位置で、フォローに仕事にと頑張っているらしいです、月城朔也様ですわ！」

朔也

「どうも。ただいまご紹介に預かった、月城朔也です」

ハヤト

「タディヤーナザァン！ ナズエミデルンデイス！？」

ディレト

「オンドウルルラギツタンディスカーーー!!」

スバル

「な、何？ どうしたの2人とも？」

ハヤト

「いや……何故か言わなければいけない気がした」

ディレト

「同じくですの。何か得体の知れない電波を感じましたの」

朔也

「だ、大丈夫か2人とも？ 疲れているんじゃないのか？」

ティアナ

「気にしないでください。あの2人はいつもの事なんで」

朔也

「それはそれで心配すべきだと思うんだが……」

スバル

「気にしたら負けですよ朔也さん」

朔也

「そういうものなのか？」

ティアナ

「そういうものですよ。それでは、ゲストもお呼びしたし、いつも  
のコーナー行ってみましようか」

スバル

「りょーかい！」

ハヤト&スバル&ティアナ&ディレト

「ゲストへの、5つの質問！！！！」

ハヤト

「このコーナーでは俺達が5つの質問をして、それをゲストさんに答えてもらうぞ」

ティアナ

「あんまり緊張しないで、いつもどおりに答えてくださいね」

朔也

「了解だ。どんどん質問してくれ」

スバル

「ではでは最初の質問です！

『お名前は？』」

朔也

「月城 朔也。部隊最年長のおっさん主人公だ」

ディレト

「いやいや、十分お若いですわよ？　あまりそういう事は言わない方がいいですわ。」

自分でおっさんなんて言ったら、余計に老け込んでしまいますもの」

朔也

「そうかも知れないが、まあ事実として30歳だからねえ」

スバル

「言われてみれば、普通にエリオとかキャロくらいの子供が居てもおかしくないですよね」

朔也

「まあそうだな。10歳の子供が居ても不思議じゃない年齢だ」

ハヤト

「それだと確かに、世間一般ではおっさんって言われる年齢か」

ティアナ

「馬鹿、失礼なこと言ってんじゃないわよ」

朔也

「ははっ、いいさ。別に気にしてないよ」

ディレト

「おおー……さすが大人の男性ですわね。ハヤト様とは大違いですの」

ハヤト

「オイコラどういう意味だ」

ディレト

「そのまんまの意味ですの」

ハヤト

「キシヤー!!」

朔也

「ほらほら、ハヤトもディレトも、そんな些細なことで喧嘩をしないでくれ。」

大人には大人の、少年には少年の魅力というモノがあるのだから

ハヤト

「むう、納得いかんがゲストに言われては仕方ない」

ディレト

「ふふん。わたくしの勝ちですのっ!」

ハヤト

「……もういい。そっぴや朔也さん、個人的に聞きたいことが」

朔也

「ん？ なんだい？」

ハヤト

「朔也さんって、そっちだとスバルと恋人同士なんですよね？」

スバル

「はうあつ!?!」

ティアナ

「そついえばそつね」

朔也

「ま、まあそれはそつだけど……それで?」

ハヤト

「朔也さんつてロリコンですか?」

朔也

「いや違つから! 好きになつた人がたまたま年下だつただけだから!  
ら!

「というか、それだけでロリコン認定しないでくれ!」

ハヤト

「まあ確かにそつですな。世間でも15歳差とか普通ですし」

ティアナ

「だから、アンタはそつやつて失礼な事を……」

スバル

「あうあつ……」

ディレト

「スバル様も、違つ世界の話で真つ赤にならないでくださいまし」

スバル

「で、でもお……」

ディレト

「そんな事を言い出したら、スバル様もティアナ様も大勢の恋人が居ることになるんですよ？」

スバル

「そ、そうだよ。気にしたらキリがないよね」

朔也

「そうだぞスバル。私の恋人であるスバルと、ハヤトの恋人である君とは別の人なんだから」

スバル

「はう」

ハヤト

「朔也さん。人の彼女を堂々と口説かんといってください」

朔也

「い、いやそういうつもりは……」

ディレト

「スバル様も朔也様も真っ赤ですよ、アツアツですよ」

朔也

「だからどうしてそういう方向に持っていきたがるかなあ！」

ティアナ

「すいません朔也さん、気にしないでください。

ディレトは、自分にそういう話が無いから僻んでるだけです。あ

とハヤトは収録後にブース裏ね」

ハヤト

「ひぎい」

ディレト

「僻みじゃありませんのっ！ 失礼ですのっ！ ぶんぶんですのっ  
！！」

ティアナ

「はいはい。それじゃあ次の質問いきますね。」

『趣味と特技は？』

朔也

「趣味はツーリングと煙管キセル集め。特技は料理とカクテル作りだね」

ハヤト

「おー、大人の男って感じの趣味と特技だなあ」

ティアナ

「男の人で料理が特技って、結構珍しいですよね」

朔也

「そうかな？ 独り身が長いと、いやでも上手くなるものさ」

ハヤト

「俺にはよくわかんねーっすね。一応料理は出来ますけど、簡単な  
のですし」

朔也

「ハヤトはティアナとスバルに作って貰えるものな？」

ハヤト

「うっ……い、いやそういう話をしたかった訳じゃ……」

ティアナ

「……えっと」

スバル

「えへへ……」

ディレト

「ギリギリギリギリ……リア充爆ぜて滅んで死滅しろですの」

朔也

「ま、まあまあ。ディレトにもいつか、運命の人が現れるよ」

ディレト

「ホントですのお……?」

朔也

「ああ。私が保証する、だってディレトはこんなにも魅力的な女の子だからね」

ディレト

「朔也様……」（きゅん）

ハヤト

「……アレは天然のたらしだな」

スバル

「だねえ」

ティアナ

「いや、そこは大人の男性の魅力って言うべきじゃない？」

ハヤト

「羨ましいから絶対に言わん。さて、では3つ目の質問いくぜ！

『必殺技はありますか？』」

朔也

「今のところは、ロイヤルストレートフラッシュとワイルドサイクロンの二つ。

どっちもリスクな必殺技だけど」(苦笑)

ハヤト

「強力な必殺技だからこそ、リスクが伴う。基本ですわかります」

ティアナ

「そういえばコレって、元ネタがあるんですよね？」

朔也

「ああ。仮面ライダー剣で使われていた技だな」

ハヤト

「オデノカラダバポドポドダ！」

ディレト

「アンダドーウレハ！ アカマジヤナカッタンテエ、…ウエ！」

ティアナ

「またか…何なのよもう」

ハヤト

「すみません、北北西からきた電波が」

ディレト

「申し訳ありませんの。南南東からきた電波が」

朔也

「2人とも疲れてるんだよ……」

スバル

「いや、あれはふざけてるだけだと思います。ええ」

朔也

「ははは。まあ楽しいから別にいいんだけどね」

ハヤト

「くっ！ 大人の余裕がありすぎて困る！」

ティアナ

「いや困らないでしょ」

ハヤト

「弄り甲斐がないのは、俺的にちよつと。

しかたない、次の質問にいくとしようか。次の質問は

『好きなもの、嫌いなものは？』」

朔也

「好きな物……か。」

基本的には甘いもの全般とお酒、ジャパニーズ洋食だな。作るのも食べるのも好きだね。

嫌いな物は……ウニ、セロリ、椎茸の3つ。あと、強いて言えばジェットコースターも苦手だな」

スバル

「あたしも甘いもの大好きですっ！ お揃いですね」

ティアナ

「アンタの場合、甘いものが『アイス』に限定されるじゃないの」

スバル

「え〜？ そんな事ないよお、甘いものは別腹だもん！」

ハヤト

「んなこと言ってるから太」スターダストレヴァリエツ！？」

ディレト

「だから、そついう事を言ったら駄目だと何度言えば……」

朔也

「確かに今のはハヤトが悪いな」

ハヤト

「す、すいませんでした。ガゼルパンチパねえ……」

ティアナ

「それはともかく、お酒も好きなんですね。好きな銘柄なんかありますか？」

朔也

「いや、特にそういう拘りはないよ。酒は楽しく呑めればいいからね」

ハヤト

「そうツスよねえ。酒はやっぱり大人数でワイワイ呑むのが醍醐味ですし」

朔也

「そうそう……って待て待て。ハヤト、お前はまだ未成年じゃないか？」

ハヤト

「何言ってるんですか。ミッドではお酒は18歳からですよ？」

ティアナ

「聞いたことないわよ。つーか、そうだとすると、結局アンタ呑んじゃ駄目じゃないの！」

ハヤト

「ちっ、バレたか」

朔也

「未成年のうちからの飲酒は感心しないな。酒は確かに良いものだが、やはり未成年の身体には多少なりとも害があるんだ。だからこそ飲んでいい年齢が決まっているワケで、それを管理局自らが破

るといっのはどうかと思っぞ」

ハヤト

「うう……ごめんよお、父ちゃん」

朔也

「なに、これから気をつければいいのさ。いいな、ハヤト？」

ハヤト

「わかったよ父ちゃん！俺、これからは真面目に生きていくよ！」

ティアナ

「……………ねえハヤト、それってもしかしなくてもツツ」ミ待ち？」

ハヤト

「当たり前じゃないか！」

ティアナ

「……………さ、最後の質問にいきましょうか」

スバル

「そだね。サクサク進んじやおう」

ディレト

「そうですね」

ハヤト

「え、ちよっ！？ 放置プレイは勘弁してくれよ！」

朔也

「やれやれ、上手くのせられてしまったかな」

ティアナ

「朔也さんは悪くないですよ。ハヤトが馬鹿なだけですから。それでは最後の質問です。」

『パーソナリティの4人に一言!』」

朔也

「ふむ。ではまずハヤトから。」

まあ、その…なんだ。色々と感想で言われたり、弄られたり、砲撃を受けたりしているが……。

辛かったら、たまには私の処に遊びに来なさい。

一緒にご飯でも食べながら愚痴を言っても良いからな?」

ハヤト

「(´；；；(´ぶわっ」

朔也

「そ、そんなに泣くほどじゃないだろう? 同じ男同士、色々と悩みも聞いてやるからな?」

ハヤト

「(´；；；(´ぶわっ」

朔也

「次はティアナ。ハヤトのお守りは大変だろうが、頑張つてな?」

恋愛っていうのは、惚れた方が負けって言うからな」

ティアナ

「あー、はい。頑張ります……何か凄く恥ずかしいわね」

朔也

「続いてスバル。君もあんまりツツコミが激しいと、いくらハヤトと言えど危ないから程々にな？」

まあ……見ている分には微笑ましい事この上ないんだね」

スバル

「はい。でも、今回はハヤトが悪いんですよ!？」

女の子に太ったとか、デリカシーの無いことというから!」

ハヤト

「だって動かせない事じゃエクスパンデッド・オンバシラ!」

朔也

「あはは、やっぱり見ている分には微笑ましいんだけど……」。

さて、最後にディレト嬢。まあ……君の場合はどうにも『アホの子』というイメージが先行してしまうんだが、それも純粹ゆえ。その純粹さを大切にな」

ディレト

「うう……温かい励ましの言葉が身に染みますの。」

でも、出来ればティアナ様ルートでのカリスマを取り戻したいですの」

ハヤト

「年がら年中カリスマブレイクしてるのにか?」

ディレト

「わ、わざとじゃないですよ! ハヤト様たちがわたくしを弄るの

が悪いんですのっ!」

ハヤト

「ペタワロス」

ディレト

「むきーっ!」

朔也

「ほらほら2人も、仲がいいのも結構だがラジオを進めなくていいのか?」

ディレト

「むう、納得いきませんが、朔也様にそう言われては仕方ありませんの。」

「ではでは、今回の『ゲストへの、5つの質問』はここまでですね。CMを挟んだら、次のコーナーを始めますのっ!」

ティアナ

「あっつーい」

ティータ

「暑いデス」

ティアナ

「クーラー我慢しないとね」

ティーダ

「節電デス」

ティアナ

「もっとパタパタしてよ」

ティーダ

「ていあモデス」

ティアナ

「やってるわよ!」

ティーダ

「暑い、暑い!」

ティアナ

「サボらないでよ」

ティーダ

「さぼッテナイヨ!」

ティアナ

「サボってるじゃない!」

ティーダ

「さぼッテナイヨ！」

ティアナ

「~~~~っ！」ぱたぱた

ティーダ

「~~~~!!」ぱたぱた

リンディ

「あらまあ」

シャマル

「逆に暑苦しいわよ、2人とも」

ザッフィー

「これがホントの『内輪もめ』」(扇風機前)

ティアナ&ティーダ

「お父さん！」

ザッフィー

「暑いと思うから暑い！」(扇風機前)

ティアナ

「1人だけなに楽しんでんのよ！」

ザッフィー

「スイマセン」(扇風機前)

リンディ

「宇宙人やってみなさい?」

ザッフィー

「ワレワレハ、ウチュウジンダ」(扇風機前)

リンディ

「ちょっと歌ってご覧なさい?」

ザッフィー

「ヤーレンソー……ってやらせないでください」

無理せず節電。扇風機貰えます。

HARD BANKから。

ティアナ

「とあ新らじお?」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「「「こんなリリカルは嫌だ!!」」」」」

ディレト

「このコーナーでは、リスナーの皆様が考えた『こんな“リリカルなのは”は嫌だ!』というモノを、わたくしたちで読んでいきますわよ」

ハヤト

「さて、今回はどんなとんでもネタが来るんだろうな」

朔也

「私も楽しませてもらおうかな」

ティアナ

「はい。楽しんでいてくださいね。

それでは、まず最初の『こんなリリカルは嫌だ!』です。

ガレキの塔にお住まいの、RN：破壊の道化さんから。

……正直、プレイ当時はあのラスボス形態に、かなり度肝を抜かれたわ。

『セットアップ時に、無印でユーノにきいた呪文を、大人になってなお毎回唱えるのはさん』」

ハヤト

「呪文つーと……」

スバル

「我、使命を受けし者なり。契約のもと、その力を解き放て。風は空に、星は天に、そして不屈の心はこの胸に。この手に魔法を。」

レイジングハート、セットアップ！

……っという呪文だね」

ディレト

「完璧に暗記してますの？」

スバル

「なのはさんの事なら、なんでもお任せ！」（どやっ！）

ティアナ

「スバルはともかく、これを19歳のなのはさんが毎回……うーん、確かにちよっと」

ハヤト

「痛いというか、俺の黒歴史が刺激されるといっつか……」

朔也

「まあ確かに19歳でこれを毎回というのは、色々辛いものがあるな。」

「うっ……じわじわとボディブローのように効いてくる」

ハヤト

「でもコレ、実は一番嫌なのは高町隊長じゃね？」

ティアナ

「そうよね。軽い羞恥プレイだもの」

スバル

「ええ〜？　なのはさんがやるなら、なんでも素敵だよ！」

ハヤト

「はいはい。高町隊長の大ファンは黙っててな」

ディレト

「でも、毎回恥ずかしそうに変身するのは様を見れると思えば、悪くないと思いませんこと？」

朔也

「ふむ……その手のシチュエーションが好きな人には、かなり好評かも知れないな」

ティアナ

「いや朔也さん？　何でノってるんですか!？」

朔也

「ああいや、つい……」

ハヤト

「なるほど。毎回恥ずかしそうに頬を染めながら、ちよつと噛み噛みで呪文を唱えて変身する、管理局のエース・オブ・エース（19）……これは流行る!！」

ディレト

「夏コミで薄い本が出ますわね!！」

スバル

「なにそれ欲しい」

ティアナ

「ほらー、朔也さんが悪ノリするから」

朔也

「え！？ こ、これは私のせいなのか！？」

ハヤト

「5割くらい」

スバル

「7割くらい」

ディレト

「10割くらいですの」

朔也

「殆ど私のせいじゃないか！」

ティアナ

「それじゃあ次の『こんなリリカルはいやだ！』にいきましょうか」

朔也

「ちよつ、無視なのか！？」

ティアナ

「次のお便りは、ユクモ村にお住まいのRN：ランドールさん。2  
つも応募してくれました。

ユクモ村……アイルー可愛いわよね。凄く可愛いわよね。

『六課に入ると、デバイスの代わりに平成仮面ライダーズの変身ツール（主人公の）を渡される』

『もしくは、キュウベえと契約されて、魔法少女／少年になる』」

朔也

「うん。最初のは中々嫌なシチュエーションだな。

平成仮面ライダーの主人公達の変身ツールには、何かしら副作用というか、リスクが伴うし」

ハヤト

「特に龍騎のはなあ……」

スバル

「あ！ あたしはカブトがいいな！」

ディレト

「わたくしは〇〇〇のいいですわね。タジャドルコンボを使ってみたいですの！」

ティアナ

「あたしは……うーん、悩むわねえ」

ハヤト

「いや、お前らなんでノリノリなん！？ リスクあるかも知れねーんだぞ！？」

朔也

「それを差し引いても、魅力的という事なんだろう」

ハヤト

「そんなモンですかねえ？」

朔也

「そもそもうつひとつは、ある意味最悪だな」

ハヤト

「普通に考えて、最悪の結末しか思い浮かばない……」

ティアナ

「グリーンフィードの奪い合いになりそうね」

スバル

「原作的に考えると、最後はなのはさんが女神なのはさんになるのかな？」

ディレト

「わたくしはワルプルギスの夜のポジションでしょうか」

ハヤト

「それ以前に、普通にキュウベえがムカつきすぎて殴りそうだ」

ティアナ

「大丈夫よハヤト。アンタは多分そんなに素養が無いからと言われて、契約断られるわ」

ハヤト

「酷いつ！？ あんま酷いこと言うと、俺が魔女化するぞ！？」

スバル

「あれ？ でも男の子の場合は魔女っておかしいよね？」

朔也

「確かにな。男の場合は……魔王というのが正しいのか？」

ディレト

「魔王ハヤト様……オメガワロスですの」

スバル

「似合わないねー」

ティアナ

「魔王（笑）になりそうよね」

朔也

「いや3人とも……でも、うん、確かに」

ハヤト

「畜生！ 畜生！」

ティアナ

「はいはい、ハヤトは置いといて次のお使いいくわよ。スバル」

スバル

「ラジャー！」

次のお使いは、「とあ新」の世界と自作の世界の狭間にお住まいの、RN:sufiaさんから。

高町ヴィヴィオの憂鬱、みんな見てね！

『エリオが超ブレイボーイ』

『女性陣のバリアジャケットが、水に溶けやすい素材』」

ハヤト

「エリオは元々ギャルゲ体質だからなあ。アレでプレイボーイだったら……うわあ」

ティアナ

「あたしとかも攻略される対象になるのかしら？」

朔也

「ふむ。原作のエリオからは想像も出来ないなあ……」

スバル

「普通に六課の女性陣全員に手を出してそつだよね」

ディレト

「わたくしも攻略されてしまいそうですの」

ハヤト

「アレだろ？ 毎回毎回齒の浮くような台詞を言っただろ？」

「それで、その度に女性陣が……ぼっ」とかなるんだろ？ 畜生  
これだからイケメンは」

朔也

「まあまあ。これは『こんなのは嫌だ』という仮定なんだから、いいじゃないか」

ハヤト

「そりゃそうですけど……まあいいか。

それよりも、2つ目のは最高ですな。むしろ今すぐ」とあ新「本

編でこの設定使おうぜ！

もう俺、速攻で水系統の魔法が使えるように練習すっから！

っーかもっ、六課だけじゃなくナンバーズのもそうしようぜ！

いやマジで！！

そして写真をとってこう一攫千kファイナルマスタースパーク！  
？」

ティアナ

「どスケベ！」

スバル

「節操なし！」

ディレト

「救いよりの無い変態ですのー！」

ハヤト

「ぐっ……っ……う、うるせえっ！ これは全次元世界の男子の意見の結  
晶だ！

貴様達のパンチ如きで碎かれるほど、安い願いz yお化けキュー  
カンバーツ！？」

朔也

「おお、スバルの身体が の字を描いて……アレが噂に聞くデンプ  
シーロール！！」

スバル

「次は無いよ？ ハヤト」

ハヤト

「ぐふうっ……俺でなければ、即死だった……がくっ」

ティアナ

「スケベは滅んだわね。ま、水に溶ける素材だとしても、あたし達  
が注意すればいいだけなんだけど」

スバル

「でも、ハヤトは下水道の時とか、喜んで水かけてきそっだよね」

ハヤト

「安心しろ。お前らのは見慣れてるから別に平kジエラシーボンバ  
ー！？」

ティアナ

「見慣れてるとか言うな！」

スバル

「えっちー！！」

ディレト

「……………リア充マジ滅べ、ですの」

朔也

「ま、まあまあディレト、落ち着いて落ち着いて。どっどっ」

ディレト

「うう、仕方ありませんわね。ここは朔也様に免じて見逃しますの。  
それでは、『こんなリリカルは嫌だ！』はここまでにいたしまし  
よっ。

もう一度CMを挟んでから、エンディングトークですわ!」

アルフ

「メイド戦艦アースラ。7人の清楚で可憐(?)なメイドたちが」

エイミィ

「心安らぐお持て成しを提供する、くつろぎと癒しの空間」

ミナ

「……ってコレ、宣伝間違っていないかい？」

リンディ

「いいのよ。メイド喫茶なんて、そーゆーものだから」

プレシア

「メイドなんて、私のキャラじゃないんだけど……」

ミナ

「いーから黙って読むわさ!」

なのは

「だ、黙ってたら読めないと思うんだけど……」

ミナ

「なら読んでから黙るわさ！」

フエイト

「ミ、ミナ？ それはいくらなんでも強引な気が……」

ミナ

「あーもー！ 皆がグダグダ言うから番宣の時間が終わっちゃわさ！」

リンディ

「新番組、『私が最強モノを書いたら、こんなん出来ました』。絶賛連載中よ」

スバル

「CMで番宣して欲しい人、募集中です！ とあ新らじお?!」

ハヤト

「早いもんで、エンディングトークのお時間です、と」

ティアナ

「朔也さん、楽しんで貰えました？」

朔也

「ああ。随分と楽しませてもらったよ」

スバル

「良かったあ。年上の人って久しぶりだから、ちょっと緊張しちゃいました」

ディレト

「今回は朔也様がいてくださったおかげで、比較的落ち着いた放送になりましたわね」

ティアナ

「あたしとしては、毎回これくらいの方がいいんだけどね……」

スバル

「えー？ でもでも、リスナーさん達はもっと激しいのがお好みだと思うよ？」

ディレト

「激しいのがお好み………なんだかエロいのですの」(ドキドキ)

ハヤト

「ディレト自重。さて、それじゃあ最後に番宣とお知らせして終わるとしますか」

スバル

「はい。それじゃあまず朔也さん、番宣をお願いします！」

朔也

「了解だ。私が出ているのは『魔法少女リリカルなのはStrikerS』とある年増の銃騎士」。

30歳という異例の主人公、私こと月城朔也が機動六課に赴き、六課で知り合った若者達に振り回されながらも楽しく、時に苦楽を分かち合いながら共に成長していく『魔法少女リリカルなのはStrikerS』の再構成小説だ。

仮面ライダー剣のネタも随所に織り込まれているから、是非そちらのファンの人にも読んで欲しい」

ハヤト

「デッタイヴィデグリヨナ！」（絶対見てくれよな！）

ディレト

「ヨンディゾンバア、デイバゼンド！」（読んで損はありませんの！）

ティアナ

「アンタらはいいい加減にしろ！」

ハヤト

「すまん、何か今度は東南東から電波が……」

ディレト

「大丈夫ですの。そんなハヤト様を、わたくし応援してますの」

ティアナ

「いやディレトもだから！」

スバル

「あはは〜…えっと、それじゃあ次にお便りやゲストに関するお知らせです！」

まずはお便りに関するお知らせを、あたしから。

“リリカル マジカル とあ新らじお？”では、リスナーの皆様からのお便りを募集中です！

“励ましの一言”では、皆さんが励まして欲しいエピソードと、励まして欲しい相手を。

“こんなリリカルは嫌だ！”では、リスナーさんが考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。

“チャレンジ！ ハヤト”では、ハヤトにチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はブース内で出来ること前提でお願いします。  
ハヤトが出来そうな事つても忘れちゃ駄目ですよ？

“解けるかな？ ディレトちゃん”では、ディレトに解いてほしい問題を送ってください。

こっちはちゃんと解答も一緒に書いてくださいね。そうじゃないと、ちよつと採用出来ません。

“スバルの食べ物感想会”では、あたしに食べて欲しい食べ物の

リクエストを送ってくださいね。

ただし！ ゲテモノ料理は勘弁してください！ ホントお願いします！

“白か黒か？ 答えてティアナちゃん”では、ティアに白黒つけて欲しい事を。

“あのシーン、もし私だったら”では、

あたし達とゲストさん達で再現して欲しいアニメのシーンと、その配役を。

ただし、ちゃんと元になるシーンの資料も添付しないと採用されないので、気をつけてくださいね。

そして“ふつおたコーナー”では、近況報告とかの普通なお便りを募集しています。

その他に、イラストなんかも募集してますよ。

送った場合はラジオで発表されるから、皆さん張り切ってどんどん送ってくださいね！

ディレト

「次にゲストに関するお知らせをわたくしから。

の。ゲストにお呼びする順番は、あみだくじによる抽選になってます。

ですから、応募した順番どおりに呼ばれる訳ではなくて、一番最初に応募していても、一番最後まで呼ばれない可能性も大いにありますわ。

そこは、くじ運が悪いということ諦めてくださいませ。

選ばれた作者様には、こちらからメッセージが届くようになって  
いますので、ワクワクしながらお待ちになってくださいませね。

それから、今はゲストの応募は締め切っていますの。

もし応募されても、抽選候補には入りませんのでお気をつけてく  
ださいませね。

ある程度順番待ちのゲスト様が減ってきたら、また募集しますわ

ハヤト

「ん。それじゃあ朔也さん、今日はありがとうございました」

朔也

「いやいや、こちらこそ楽しませて貰ったよ。ありがとう」

ティアナ

「それでは今回の“リリカル マジカル とあ新らじお？”はここ  
まで！

お相手はティアナ＝ランスターと」

ハヤト

「ハヤト＝ロックウエルと」

スバル

「スバル＝ナカジマと！」

ディレト

「ナンバーズ、ディレトと」

朔也

「月城 朔也でした」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト&朔也

「「「「「はいばい！」「」「」「」

ディレト

「この番組は、

(N) シメオン製薬

(一) アクセロリータ

(冷) 常識は通用しねえ!

(電) コインを撃ちだす簡単なお仕事

(鮭) 麦にゃん

以上の提供でお送りしましたわ」

スバル

「うろう……5000キロカロリー……」

ティアナ

「大丈夫よスバル。あたしも一緒にダイエットするから」

スバル

「ティア……うん！ 頑張ろうね！」

ハヤト

「無駄な努力よkプラネタリーレボリユーション!？」

ディレト

「ハヤト様も懲りませんわねえ……」

#### 第4回『六課のお父さん登場!?(CV:北大 也)』(後書き)

何とか6月中に更新できた……。

雨風雪人さん、何か修正して欲しい点などございましたら、メッセージなどでご連絡ください。適時修正いたします。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますのでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしま  
います。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いま  
せ  
ん)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ!ハヤトに応募する内容は、  
あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい!」というのは、感想で構いま

せん。

・お便りは、らじおで使いやすいように多少文を修正する場合も  
あります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。  
ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知  
れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、  
こちらからメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、  
一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。  
ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思  
います。

第5回『ティロ・フィナーレ！（物理）』

ハヤト

「カラオケに行きたい」

スバル

「ど、どうしたのいきなり？」

ティアナ

「行きたいなら行けばいいじゃない。別に止めないし」

ハヤト

「何が悲しくてヒトカラせにやなんのだ！？ ちっげーよ！

皆でワイワイ楽しくカラオケに行きたいって話をしてんの、俺は  
！！」

ディレト

「わたくしはいいですよ。昨日も、お姉さまやドクターと一緒に  
行きましたし」

ハヤト

「はあ！？ あの変態ドクターがカラオケえ！？」

ティアナ

「てゆーか、ナンバーズ全員で行ったの？」

スバル

「ちよつと想像できないなあ……」

ハヤト

「ちなみに、何歌ったんだ？」

デイレト

「ええつとお……『Sailing To The Future』とか、『Rise』ですわね。」

中の人の曲は全部歌ってますわよ。もちろんキャラソンも！」

ハヤト

「メタいこと言ってるじゃねえよ」

ティアナ

「ま、まあそれはともかく、スカリエツティは何歌ってたの？」

ティアナ

「あ！ それあたしも気になるー」

デイレト

「ドクターですか？ ドクターは妖精帝国の曲とか、Sound Horizonとかですわ」

ハヤト

「うわあ……」

ティアナ

「うわあ……」

スバル

「うわあ……」

ディレト

「な、なんですの!?! ドクター、凄く上手なんですのよ!?!」

ハヤト

「余計にうわぁ……………」

スバル

「意外な一面を見たというか」

ティアナ

「見たくも無い一面を見てしまったというか……………」

ディレト

「失礼ですの! ドクターは長年の努力によって、男性ながら女性と全く同じ歌声を出すことに成功したんですのよ!?! だから、女性ボーカルの曲なんて物凄く上手なんですの!?!」

ハヤト

「…………よし。それじゃあ最初のコーナーいくか」

ティアナ

「そうね、そうしましょう」

ディレト

「スルーですの!?! スルーですの!?!」

スバル

「最初のコーナーはこちら!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「とけるかな？ デイレトちゃん！」「」」

スバル

「このコーナーでは、リスナーの皆さんから送ってもらった問題を、ディレトに解いてもらうよ！」

ディレト

「スルーされましたの。ちくしょうですの……」

ティアナ

「えーと、それじゃあ最初の問題から。」

最初の問題を送ってくれたのは、ミッドチルダ高級マンション1階……のベランダにお住まいの、RN：サリエル「フォーゼオンさん。」

ベランダって、冬とか寒くないのかしら？

それでは問題！

『往年の名作RPG、スーパーマリオRPGからの問題です。』

ちんぼつ船で、中ボス『たこつぼゲッソー』の部屋に入る為に必要なキーワードは何？』

ハヤト

「うわ、これは簡単すぎるだろー」

スバル

「そ、そうなの？ あたし分かんないんだけど」

ハヤト

「はああ！？ おま、この問題わかんないとか、今まで何して生きてきたんだよ！？」

「ちよつと人生やり直ししてこいよ！！」

スバル

「そんなに！？」

ティアナ

「スバル。相手しなくていいわよ、いつもの病気だから。それよりもディレト、答えはわかった？」

ディレト

「ふっふーん。これは余裕ですよ！

なにせ、昨日ドクター達と一緒にやってみましたもの！」

ハヤト

「やってたんかい。まあいいや、それじゃあ答えをどうぞ！」

ディレト

「答えは『すいぞくかん』ですよ！」

ティアナ

「ハヤト、解答は？」

ハヤト

「正解だな。いやー、これは面倒だった」

ディレト

「わたくしはドクターに教えて貰ったから、楽勝でしたわ」

ティアナ

「スカリエツティは何をやったのよ……」

スバル

「まあ、研究ばかりだと飽きるのかも知れないけど」

ハヤト

「しかしマリオRPGとはいい趣味だな。奴とはいい酒が飲めそう  
だ」

ティアナ

「飲むな未成年。えっと、それじゃあ時間もあるからもう1問いく  
わよ？」

ディレト

「どんとこいのです！ 今のわたくしに、解けない問題なんてあり  
ませんわー！！」

スバル

「おお、自信满满だね。それじゃあ第2問！

こっちは第97管理外世界海鳴市市街地 御剣古美術店にお住まいの、RN：天剣さんから。

『では問題だ。簡単な謎かけだから、気軽に解くと良い。』

子供の前に男が1人、女の後ろに男が2人、

男の後ろに男が1人と女が1人、子供の後ろに女が1人。

さて、ここには最低何人の人がいることになる？』

ハヤト

「シンキングタイムスタート！」

ディレト

「ええっと、子供の前に男性が1人で後ろに1人で女性が2人？

前が1人で後ろが3人、アイツがわたくしでわたくしがアイツで？

今週のびっくりどつきりメカがワンダフルでドツグデイズで、ゼ

ロガルルーシュでルルーシュがスザクで、ゼロは私が守るー

ーっ！」

ティアナ

「……ああ、これは答えられないわね」

スバル

「うん。無理だね」

ハヤト

「確実に頭がこんがらがってるな。ちなみにスバル、お前はわかるか？」

スバル

「ふえっ！？ もも、もちろんわかってるよ!？」

ハヤト

「ほう？ じゃあちょっと答えてみるよ。どうせディレトには聞いてないだろうし」

ディレト

「つまり男性の前に女性がいて女性の後ろに男性がいて？」

「一方通行と鈴科百合子は同一人物ですから、つまりミサカは御坂な訳ですわよね？」

ティアナ

「ねえ、あれって大丈夫なの？ 頭から湯気でてるけど」

ハヤト

「大丈夫だ。スタッフの中には戦闘機人の肉体メンテナンスのエキスパートも混じってる」

ティアナ

「何でもアリね、あのスタッフ……」

ハヤト

「さて、それはさておき。答えてみようかスバル？」

スバル

「ううう……」

ハヤト

「ほら、早く答えるよ」

スバル

「すみません、見栄張ってました。ホントは全然わかりません」

ハヤト

「わかってた」

ティアナ

「わかってた」

ハヤト

「むしろ分かる訳がないと思ってた」

ティアナ

「同じく」

スバル

「ひ、酷いよ2人とも!!」

ハヤト

「それじゃあスバル弄りも終わったところで、シンキングタイム終了。」

「ディレト、答えはわかったか？」

ディレト

「おはよびございましたの」

ハヤト

「……そうか。それじゃあ答えをどうぞ！」

ディレト

「答えは簡単ですわ。つまり、全てはノストラダムスの仕業だったんですのよー！」

ハヤト&ティアナ&スバル

「「「な、なんだってー！ーっ!?」「」」

ディレト

「だから、この問題に対する答えは、存在する訳が無いという事ですわー！」

ハヤト

「つまりわかんない、と」

ディレト

「……………はいですの」

ティアナ

「残念でした。それじゃあ答えを教えるわよ？」

正解は3人。男性と男の子、そして女性、ということになるわね」

ディレト

「3人!? そ、そんなに少ないんですの!?!」

スバル

「うっそだ〜。ティア、実はわかんなくて適當言ってるでしょー」

ティアナ

「あのね……これは葉書にも書いてあるから本当に正解よ。」

男性が前を向いていて、男の子も同じく前を向いている。そして女性が後ろを向いていれば、問題文の通りの並びになるでしょ？」

ハヤト

「図で説明するとこんな感じだな。」

男 男の子 女

わかったか、2人とも？」

ディレト

「……」（ぷしゅー）

スバル

「……な、なんとか」（ぷすぷす）

ハヤト

「何ともまあ、見事に2人仲良く頭から煙出してからに。」

ディレトはともかくスバル、お前は訓練校で主席だっただろうが。このくらい分かれ」

スバル

「うー、学校の勉強は得意なんだけど、こーゆーめんどくさいのは苦手だよ〜」

ハヤト

「そんなんでいいのか訓練校主席」

ティアナ

「はいはい。それじゃあディレトも限界みたいだし、今回の『とけるかな？ ディレトちゃん』はここまでにしましょうか」

ディレト

「わあ……大きな星が、ついたり消えたりしてますの。

大きい……！ 彗星かしら？ 違いますわね、彗星はもっと、パアーツって動きますもの……」

ハヤト

「はい、何か危険な感じのディレトはスタッフにお任せするとして！

“ リリカル マジカル とあ新らじお？” 第5回！！”

ハヤト&ティアナ&スバル

「スタートです！！」

ディレト

「ちよっ、どこ触ってますの！？ やめてくださいまし！ セクハラで訴えますわよ！？」



「そして最近、お姉さま達とカラオケに行くのが楽しみになっている、デイレトですわ」

ハヤト

「ほいでは早速今回のゲストをお呼びするとしますかね。

今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikers 護  
るための力を持つ者』から」

ティアナ

「穏やかで真面目、だけど恋愛話はちょっと苦手な主人公。コルト  
||リバティ君と」

デイレト

「防御と機械いじりはお任せ！ブルズ||アルフィード様ですわ」

コルト

「えっと、こんにちは」

ブルズ

「どうもっす」

デイレト

「こんにちはですの〜」

ハヤト

「またおとこか」

ティアナ

「ちよつとハヤト、いきなり何言ってるのよ」

ハヤト

「だってよー。最近男ばかりじゃん！ 女性ゲストは来ないのか  
女性ゲストは！！」

スバル

「仕方ないよ。だって、ゲストの抽選はあみだくじだもん」

ハヤト

「くそー……潤いが欲しい。おっぱいという名の潤いが」

イツキ

「あの、なんかすみません」

ブルズ

「いやこれ俺達が悪いのか？」

ティアナ

「いいのよコルト君。別に気にしないでね、いつもの病気だから」

ハヤト

「病気とか言われた」

ディレト

「どう考えても病気ですわよ」

ハヤト

「おっぱいが嫌いな男の子なんていません！ そつだよな、コルト、  
ブルズ！！」

コルト

「え？ えつと……あの……」

ブルズ

「否定はしないっすけど、こんな公共の電波で言う事じゃない気がするっすよ」

ハヤト

「ぐぬぬ。味方は！ 味方はおらんのか!？」

ティアナ

「はいはい。じゃあ病人は放っておいて恒例のこのコーナー、いくわよ」

スバル

「はい」

ディレト

「了解ですのー」

ハヤト

「せめて構えよ！ 構ってくれよ!」

ティアナ&スバル&ディレト

「ゲストに5つの質問!」

ディレト

「こちらのコーナーでは、わたくし達がゲスト様に5つの質問をしていきますわ。

ゲスト様は、その質問に答えてくださいませ」

スバル

「あんまり緊張しないで、ときどきに答えてくださいね」

コルト

「はい……って、それよりもハヤトさんは放っておいていいんですか？」

ティアナ

「いいのよ。アレはああいう芸風だから」

ハヤト

「別に芸風じゃねーから!」

ブルズ

「でも、ラジオで必ず一回はこういう弄られ方してるっすよね」

ハヤト

「くっ! そう言われると全く反論できない!」

ティアナ

「お後がよろしいようで。それじゃあ最初の質問いくわよ? まず最初は恒例のこの質問から。」

『お名前は?』

コルト

「コルト＝リバティです」

ブルズ

「ブルズ＝アルフィードだ」

ハヤト

「手元の資料によると、2人とも16歳。ティアナと同じ年だな」

コルト

「ハヤトさんよりも1つ年下ですね」

ハヤト

「つまり俺が一番年上ということだ！俺を崇め奉れ、コルト、ブルズ！」

コルト

「わかりました！」

ブルズ

「いやいや、年上だから必ず敬う必要はないと思うんですけど」

ティアナ

「てゆうかハヤトを敬うとか無理よね」

スバル

「うんうん」

ディレト

「不可能ですの」

ハヤト

「（・・・）<松尾芭シヨンボリ」

コルト

「だ、大丈夫です！ 僕はハヤトさんをちゃんと敬いますから！」

ハヤト

「ほら見る！ 分かる奴には分かるんだ！ 俺の偉さが！」

ディレト

「テラワロスですの。では次の質問ですわ。

『好きなものは？』

コルト

「食べ物ならサンドイッチですね……あと、物で無くて良いなら人の笑顔とかですかね。自分が作ったお菓子とかを食べて笑顔になってくれると、とても嬉しいんですよ」

ブルズ

「俺は食べ物ならリゾートだな……コルトみたいなものだど人に信頼される事、かな」

ハヤト

「うわ、なにこの2人眩しい」

ディレト

「同じ主人公属性だというのに、ハヤト様とは雲泥の差ですわ」

ハヤト

「酷いっ！」

コルト

「だ、大丈夫ですよハヤトさん。ハヤトさんは十分に主人公ですから！」

ハヤト

「コルト君……素敵っ！抱いてっ！！」

ブルズ

「いや、何言ってるんすか」

ティアナ

「ふむ、ハヤトが受けていっつのもアリね」

ディレト

「わたくしの乙女回路がキュンキュンしてますのー！」

スバル

「これは流行るっ！！」

ブルズ

「はやんねーから。つか流行っても困るから」

ハヤト

「……うん、話を戻そう。ブルズの方は人から信頼されること、か」

ブルズ

「自分で言つと、何か恥ずかしいっすけどね」

ティアナ

「でも、そういうの良いわよね。人から信頼されるのって」

スバル

「そだね。チームで戦うなら、一番大事なこともん」

ディレト

「難しくてよくわかりませんの」

ハヤト

「俺達は大丈夫だけどな。お互いに固い信頼の絆で結ばれてるし！

なあ！？」

ティアナ

「……………」(ふいっ)

スバル

「……………」(ふいっ)

ディレト

「……………」(ふいっ)

ハヤト

「一斉に目え逸らされた!?!」

コルト

「た、多分アレですよ！ きつと照れちゃってるだけですよ！  
だから次の質問いきましよう、次の質問!」

ハヤト

「そうだな。これ以上自分で自分を傷つけるのもアホらしい。では3つ目の質問だ。」

『この人には敵わない、という人はいますか』？」

コルト

「結構沢山いますね……それこそ僕なんてまだまだ未熟な訳ですし、ハヤトさんにも敵わないです」

ブルズ

「兄さんやコルトの母さんのカローラさんだな……兄さんは魔術師として、カローラさんは技術者として敵う気がしない」

ティアナ

「あら、ハヤトになら勝てると思うわよ？」

スバル

「うんうん。えっちな本を囿にすれば、あっさり勝てるよね」

ディレト

「わたくしなら、どんな状況でも勝てますの」

ブルズ

「いや、ディレトは当たり前っちゃ当たり前だろ。いちおう』とあ新』作中最強キャラなんだし」

コルト

「でも、ハヤトさんには負けたよね？」

ディレト

「うぐつ!? そ、それはたまたまですのっ!」

ブルズ

「いい訳すんなくて。負けは負け、それは動かせない事実だろ」

ディレト

「くっ、悔しいですけど言い返せませんの」

ティアナ

「はいじゃあディレトはおいといて、ブルズはお兄さんとコルトのお母さんなのね」

ブルズ

「そうだな。いつかは追い越したいと思ってるけど、現時点では敵わない人だと思ってる」

ディレト

「魔導師と技術者。どちらにも目標があるなんて、羨ましいですの」

ブルズ

「ディレトにはそういう人は居ないのか?」

ディレト

「うん。わたくし最強ですし、戦いにおいて目標になる人なんていませんの。」

技術に関しては元々わたくし専門外ですし」

ハヤト

「バカだしな」

ティアナ

「？だものね」

スバル

「2人とも酷いよ！ デイレトは、ちょっとだけ頭が残念なだけだよ！？」

ブルズ

「いや、スバルも十分に酷いからな？」

ディレト

「あたいたら最強ね！ ですよ」

コルト

「ディレトもノっちゃうんだ……あはは」

スバル

「そういえば、ハヤトもハツキさんには敵わないよね？」

ハヤト

「むしろあの人に勝てる奴なんぞ、高町隊長かハラオウン隊長、あとはシグナム副隊長とヴィータ副隊長ぐらいしか思いつかねーって話だよ」

ティアナ

「八神部隊長は？」

ハヤト

「部隊長は後方からの重火力での攻撃がメインだからなあ。たしか詠唱の時間も結構あったから、1対1での戦闘なら姉ちゃんに分があると思うんだよ」

ブルズ

「ああ、言われてみれば確かにそうっすよね」

ハヤト

「お互い身内が強いと苦労するな。色々」

ブルズ

「俺はそんなでも無いっすよ。目標が身近にいるから、その分頑張れるっすから」

ハヤト

「なにこの子凄くいい子」

ティアナ

「アンタが俗物なだけよ」

ハヤト

「(´・`・´) <ヒドス」

スバル

「それでは4つ目の質問いきまーす。

『もし宝くじが当たったら何が欲しい』?」

コルト

「うーん……特に何かか欲しいっていうのは無いですけど……」。

強いて言えば、新しい調理道具とかですね。後は六課の皆で使えるような物とか」

ブルズ

「俺も似たような感じだけど、新しい工具一式とか良いかもしれないな。あとは新しいバイクとか」

ティアナ

「バイク、いいわよねバイク」

スバル

「おお、ティアが食いついた」

ハヤト

「ティアナも結構なバイク好きだもんなあ」

ブルズ

「ちょっと目をつけてる新型があるんだけど、これが微妙に高くてよ」

ティアナ

「あたしもあるのよね。それでちよくちよく貯金してるんだけど、まだ目標の半額にも届いてなくて」

ハヤト

「何か語りだした」

スバル

「ティア、ああなると止まらないんだよね」。

「じゃああつちは放っておいて、コルト君の話しようか」

ディレト

「そうですね。調理器具ですか……コルト様らしいといえば、  
しのですかしら？」

コルト

「うん。やっぱり、新しい方が色々と便利な機能が追加されてた  
りするし」

スバル

「おいしい料理を作るには、まず調理器具からですねわかります」

ハヤト

「食う専の奴が何を言うのか」

ディレト

「ホントですよ」

スバル

「失礼な！ちゃんと料理くらいできますー！」

コルト

「そうだね。確かvividでも料理を持ってきてる場面があっ  
たし」

ハヤト

「あれって出来合いのものを皿に盛っただけじゃねーの？」

スバル

「自分でつくったよ！てゆーか、ハヤトにだって作ってあげたじ

やん！」

ハヤト

「あれ？ そうだったけ？」

スバル

「そうだよ！ ティアとあたしで、1日交代でご飯作ってあげてるでしょ！？」

ディレト

「モーニングコーヒーってヤツですの。ラブラブですの」

コルト

「……あわわ、そ、それってつまり」（真っ赤）

ハヤト

「はいはい邪推しない。単純に交代で飯作ってるだけだから」

コルト

「あ、ああ。そういう事ですか……びっくりしました」

ハヤト

「それはともかく、皆で遊べるモノねえ。ゲームとかか？」

コルト

「それもいいですけど、僕は違うモノにしようかと思っています」

ハヤト

「え〜？ いいじゃんゲーム。ゲームは人類の至宝なんだぜ？」

ティアナ

「そんなのアンタだけよ」

ブルズ

「そうつすよ」

スバル

「あ、2人ともおかえりー」

ディレト

「バイク談義は堪能できました?」

ティアナ

「ええ。久しぶりに熱く語ったわ」(つやつや)

ブルズ

「バイクの整備の方まで話せるとは思わなかったぜ。やるなティアナ」(てかてか)

ティアナ

「ブルズこそ。あそこまであたしに付いてくれたのは、ヴァイス陸曹以来よ」

ハヤト

「なんか変な友情芽生えてるし」

スバル

「ティア、バイクについて語り合える知り合いが少なくて溜まってたんだね」

ディレト

「ドクターでよろしければご紹介しますのに」

コルト

「いや、あの人を紹介するのはどうかと思うよ？」

ディレト

「失敬な！ ドクターはちょっと頭がお花畑なだけであって、とても優秀なお方なんですのよ！？」

ハヤト

「お前の方が酷いかな。あー、まあいい。とりあえず最後の質問にしよう。」

最後の質問はこれだ。

『パーソナリティの4人に一言』！

コルト

「えっと……ハヤトさんは僕にとって憧れの存在と言える人の一人なので、今回はこういった場に呼んでいただけて本当に嬉しかったですー！」

ブルズ

「ティアナとスバルはハヤトさんと今後も仲良くな……ディレトも今回は楽しかったぜ、但至少は賢くなれよ」

ディレト

「賢いのです！ チンクお姉さまだって、「ディレトは賢いなー」といつも誉めてくださいますのー！」

ブルズ

「なら123×50は？」

ディレト

「……………わ、わかりませんの」

ブルズ

「6150でした。残念！」

ディレト

「ちくしょうですの！ ちくしょうですの！」

ティアナ

「あつちはともかく、コルト。ハヤトなんかに憧れちゃ駄目よ？」

「こいつと同じようになったら、間違いなく人生を色々と損するから」

スバル

「そうだよ。あたしやティアはそこもいいかな、なんて思ったりもするけど、普通はハヤトみたいな子は駄目人間のレッテルを貼られるんだよ？」

ハヤト

「(´・`・´) <訳が分からないよ」

コルト

「そんな事ないですよ。ハヤトさんはいつだって皆の事を考えてますし、ムードメーカーっていうのは、なるうと思っただけなものじゃないですから」

ハヤト

「それほどでもない」(謙虚)

ティアナ

「うっさいバカ。調子にのんな」

ハヤト

「ひぎい」

コルト

「ま、まあまあ落ち着いてティアナ。ね？」

ハヤト

「来た！メインコルト来た！これで勝つる！！」

ティアナ

「……………(無視) それじゃあ『ゲストへの5つの質問』はここ  
まで。」

CMを挟んで、次のコーナーに行くわよ」

ティーダ

「何も見エマセン」

ティアナ

「節電ね！ 節電！」

ザッファイ

「今年是我慢しないとな」

シャマル

「これくらいの方が、大事なものが見えてくるわ」

リンディ

「やっぱり家族！」

ザッファイ

「痛っ！ 誰だ尻尾踏んだの！？」

ティーダ

「違イマス」

リンディ

「違っわよ」

ザッファイ

「電気つける！」

カチツ（電気オン）

ザッファイ

「えっ！？」

フェイト

「どちら様？」

ザッファイ

「誰だ、あんたたち！」

ハヤト

「あんたこそ誰だよ？ 人んちに」

ザッファイ

「ティアナ！」

スバル

「何言ってるの？」

ザッファイ

「母さん！」

レテイ

「犬が喋ってるよ」(合掌)

ハヤト

「予想外です」

アルフ

「わんっ！」

ザッファイ

「失礼します……」

シャマル

「どうしたの？」

ティアナ

「家、間違えたんだって？」

ザッフィー

「はずかしい〜」

無理せず節電。扇風機もらえます。

H A R D B A N K 。

ディレト

「とあ新らじお?!」  
「ですの!」

ハヤト

「CMが終わった次のコーナーはこれだぜ」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「「「あのシーン、もし私だったら！」「」」

ティアナ

「このコーナーでは、リスナーの皆さんから寄せられた『あたし達に再現して欲しい場面』を、あたし達で再現していきますよ」

スバル

「それじゃあ今回の1発目！

タカマガハラにお住まいの、RN：アマ公さんから。  
大神、アレは名作だよね！。

『天元突破グレンラガンの、ニア救出から天元突破グレンラガンまでのセリフをお願いします！』

ちなみに配役は

シモン ハヤト

ニア スバル

ヨーコ ティアナ

リーロン ゲストさん

ヴィラル ゲストさん

アンチスパイラル デイレトだって」

ハヤト

「ゲストさんは特に指定なしか。どっちがどっちやる？」

コルト

「あ、じゃあ僕がリーロンやります。ヴィラルはあんまり似合わない気がしますから」

ブルズ

「りょーかい」

スバル

「それじゃあ皆、熱く叫ぶ準備はいい？」

リスナーの皆さんは、該当する場面を思い浮かべてくださいね？

じゃあ………いってみよー！」

ハヤト

「来たぞ、スバル。約束通りにな」

スバル

「……っ！ うん……！」

ディレト

「馬鹿なっ……！ 知的生命体が、多元宇宙迷宮を脱出できる訳がありませんの……！」

ハヤト

「なめんじゃねえ……！」

時間だろうが、空間だろうが、多元宇宙だろうが……そんな事知ったことじゃねえ。

テメエの決めた道を、テメエのやり方で貫き通す！！

それが俺達、機動六課だ！！」

スバル

「……因果の輪廻に囚われようと……！！」

ティアナ

「遺した思いが扉を開く……！！」

コルト

「無限の宇宙が阻もつと……！！」

ブルズ

「この血の滾りが宿命を決める……！！」

ハヤト

「天も次元も突破して……！！」

ハヤト&ティアナ&スバル&コルト&ブルズ  
「……………掴んでみせるぜ、己の道を……………!」

ハヤト

「天元突破!!!! グレンラガン!!!!!!」

ハヤト

「……………げほっ、疲れた」

ティアナ

「久しぶりに全力で叫んだわ……………」

コルト

「やっぱりこういうのは少し恥ずかしいですね」

スバル

「えへへ。ハヤトにお姫様だっこされちゃった」

ディレト

「ぶーぶー! なんでわたくし悪役ですの!?!」

ブルズ

「まあ原作でもラスボスだった訳だし、仕方ないんじゃない?」

それにしても、やっぱりこれは映像がないと迫力に欠けるな」

ハヤト

「そりゃあな。やっぱりアニメは映像とセリフとが合わさって、初めて完成品になるわけだし」

ティアナ

「てゆうーかコレ大丈夫？ ラジオをヘッドセットで聴いてるリスナーさん、鼓膜破けてない？」

スバル

「さ、流石にそこは大丈夫だと思うよ？」

ディレト

「わたくしも叫びたかったですの〜」

ハヤト

「あとで好きなだけ叫んでろ。さて、それじゃあ次いつてみるか？」

ティアナ

「無理、喉が限界」

スバル

「おなじくー」

コルト

「ぼ、僕もちよっと」

ブルズ

「俺も無理っすね」

ハヤト

「なんと……まあ確かに俺もキツイわ。それじゃあ今回の『あのシン、もし私だったら』は急遽ここまでということにしようか。次やる時は最初に何を持ってくるかが重要だな。」

「では時間も微妙にあまつてるから、なんだかんだで投稿の多いこのコーナーいつてみよう」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト

「……励ましの一言」「」「」

ハヤト

「言わずと知れたこのコーナー」

ディレト

「リスナー様から送られてきたお手紙に、わたくし達が励ましの言葉を贈りますの」

スバル

「時間が無いから、あんまり沢山は読めないけどね」

ティアナ

「それじゃあ早速いくわよ？」

「最初はエターナルにお住まいの、RN：永遠の歌姫さんから」

ハヤト

「ああ、あの偽者の方が巨乳な人ね」

ティアナ

「黙ってなさい。えっと、お便りの内容は……」

『アニメのDVDを発売日に買うべく片道420円掛けてアニメイトに向かったのですが、

行った先で発売日が延期されている事が判明しました……。

御陰で1時間30分の時間と840円が無駄になりました……

(T-T)

今は少し参っています……』」

ハヤト

「うわあ、それはご愁傷様……。まあでも、ちょっとした気分転換だと思えばいいんじゃないか？」

1時間30分をかけて、気分転換の散歩に来たとかさ。ようは気持ちようだよ」

スバル

「おお、ハヤトがまともな事言ってるー」

コルト

「そ、それは酷いんじゃない？ ハヤトさんはいつもまともだと思  
うよっ。」

ティアナ

「……本当に？」

コルト

「ほ、本当に！」

ディレト

「ほんとーにですか？」

コルト

「ほ、本当だってば！」

ブルズ

「本当の本当にか？」

コルト

「……………「ごめんなさい」

ハヤト

「そこは諦めないで欲しかった」

スバル

「でもハヤトも似たようなことあったよねー。確か、休日を丸々使  
ってゲームソフト探したら、実は発売日が翌日でしたーっていうの  
だっけ？」

ハヤト

「思い出させんなよ……アレ、マジで凹んだんだから」

コルト

「どんまいです、ハヤトさん」

ハヤト

「コルト君は優しいなあ。俺が女だったら、間違いなく惚れてたぜ」

コルト

「えええっ!? いや、それは嬉しいですけど……いや、そういう意味じゃ無いですよ!?!」

ディレト

「……コルト×ハヤト」

ティアナ

「ハヤト×コルト」

スバル

「これは流行る!」

ブルズ

「流行んねー! 流行んねーから!」

ハヤト

「それはともかく、次のお便りいつてみよー」。

次はM県杜央町にお住まいの、RN：リョウトさん。

『今書いている小説の主人公のキャラが、最初、中盤、今、で全く変わってしまっています。』

（黒幕っぽいキャラ、お人好し、乱暴みたいな感じで）どうしたらいいんですか？」

「指名はディレトだ」

ディレト

「キャラが変わっていく過程をちゃんと書いていけば、問題ないと思いますの。」

わたくしの様に、本編とラジオとで思いっきりキャラが違う場合もございますし。まあ、わたくしの場合は作者様が何も考えずに色々と遊んでいた結果ですけれど……。

それはさておき。キャラが変わっていても、その軸となる部分が変わっていなければ大丈夫だと、わたくしは思いますわ。もし違っているのだしたら、その辺りを意識したらいいかがかしら？」

ブルズ

「ディ、ディレトが賢いこと言ってる！」

ハヤト

「天変地異の前触れか！？」

ディレト

「失礼ですの！」

ティアナ

「まあ、本編のディレトはある程度知的な部分もあったものね。精神年齢は幼かったけど」

スバル

「そうだね。何で今のお馬鹿キャラになっちゃたんだっけ？」

ハヤト

「感想欄でのやり取りが原因だったと思われ」

ディレト

「そうですよ。それで、いつの間にかお馬鹿キャラが板についてしまいましたの……」。

でも！ もし再び本編に出れた暁には、きっと知的キャラになってますのー!!」

ハヤト&ティアナ&スバル

「『『ないない』』」

ディレト

「（・・・）<ちくしょう……」

コルト

「大丈夫だよディレト。僕はちゃんと、ディレトが賢いつてわかってるから」

ディレト

「コルト様……ありがとうございます。お礼に後で全力全開で戦って差し上げますの」

コルト

「それは勘弁してくれると嬉しいな」

ディレト

「（．．．）<ですのー……」

ハヤト

「よし。オチがついたところで今回はここまでにするか。  
もう一回CMを挟んだら、エンディングトークだ」

「……私は『運命』という言葉が嫌いだ」

語れることの無い、亡霊と呼ばれた1人の魔導師。  
彼が機動六課と呼ばれる部署に配属になったことから、物語は始まる。

「アウル君は、優しいんだね」

「そんな事ありませんよ、私は」

少女達との触れあいの中で、彼は少しずつ変わっていく。

「貴様のような出来損ないが、のうのうと闊歩しているとは……！  
虫酸が走る！」

けれど 闇は彼を逃そうとはしない。

どこまでも、どこまでも彼を追いかけてくる。

「ッ！ ならば答えるタスラム！ “私らしい”とは何だ！」

彼はその闇に押し潰されてしまうのか。

「……タスラム。私は、もう道を選んでるんだ。なら、その道を  
進む」

それとも、闇を振り払えるのか。

「私は……諦めない」

魔法少女リリカルなのはStrikers 亡霊の弾丸。

にじファン内にて、絶賛連載中！

コルト

「とあ新らじお？です！」

ティアナ

「はい。そんなこんなでエンディングトークです」

ハヤト

「どうだった？ 楽しんでくれたか、2人とも」

コルト

「はい！ とっても楽しかったです！」

ブルズ

「俺も楽しかったっすよ。有意義な話も出来ましたし」

ディレト

「それならよかったですの。それでは最後に、番宣とお知らせです」

わ

ハヤト

「そうだな。それじゃあコルト君とブルズ、番宣いつとく？」

ブルズ

「了解つす。俺とコルトが出てるのは『魔法少女リリカルなのはS  
trikers 護るための力を持つ者』」

コルト

「ミッドチルダでの大規模災害。それに巻き込まれた一人の少女、スバルリナカジマは、一人の魔法使いと一人の少年と出会うことで自分の力を何かを護るために使うことを決心する。

その4年後、スバルは新しく配属された新設部隊<機動六課>で自分と似た意思を持つ少年と出会う」

ブルズ

「現在第21話 前編まで更新中だ」

ハヤト

「コルト君やブルズを初めとした、個性豊かなオリキャラたちの活躍に期待だな」

ティアナ

「それぞれの話が前、中、後編に別れているから、読み応えもバツ  
チリよ」

ディレト

「コルト様の弄られっぷりにもご注目ですよ！」

コルト

「そんなに弄られた記憶が無いよ!？」

ディレト

「わたくしの頭の中にだけある記憶によれば、確かありましたわ！」

スバル

「捏造じゃん!」

ディレト

「そうとも言いますわね」

ブルズ

「いや、そうとしか言わねえよ!！」

ディレト

「知りませんの。それでは次にお便りとゲストに関するお知らせですわ。」

「まずはお便りに関するお知らせですの。」

「リリカル マジカル とあ新らじお？」では、リスナーの皆様からのお便りを募集中ですわ。」

「励ましの一言”では、皆様が励まして欲しいエピソードと、励まして欲しい相手を。」

「“こんなリリカルは嫌だ!”では、リスナー様が考えた“こんなリリカルは嫌だ”というお題を。」

“ チャレンジ！ ハヤト ” では、ハヤト様にチャレンジして欲しいお題を。

ただし、お題はブース内で出来ること前提でお願いしますわね。ハヤト様が出来そうな事だけというのも、忘れては駄目ですわよ？

“ 解けるかな？ デイレトちゃん ” では、わたくしに解いてほしい問題を送ってくださいませ。

こっちはちゃんと解答も一緒に書いてくださいませね。問題だけだと、採用しませんわよ？

“ スバルの食べ物感想会 ” では、スバル様に食べて欲しい食べ物のリクエストを送って下さいませ。

ゲテモノ料理なんかお勧めですわ。

“ 白か黒か？ 答えてティアナちゃん ” では、ティアナ様に白黒つけて欲しい事を。

そして“ ふつおたコーナー ” では、近況報告とかの普通なお便りを募集していますわ。

その他に、イラストなんかも募集してますわよ。

送った場合はラジオで発表されますから、皆様張り切ってどんどん送ってくださいませね！

それからちょっとお知らせですの。

大人の事情で、『あのシーン、もし私だったら』は今回でお終いとなりますわ。

突然で申し訳ありませんが、ご了承くださいませ」

ハヤト

「じゃあ次にゲストに関するお便りを俺から。」

ゲストに呼ぶ順番は、あみだくじによる抽選になってるぞ。

だから、応募した順番どおりに呼ばれる訳じゃなくて、一番最初に応募していても、一番最後まで呼ばれない可能性も大いにあるって訳だ。

そこは、くじ運が悪いということ諦めてくれな。

選ばれた作者さんには、こっちからメッセージが届くようになってるから、ワクテカしながら全裸待機してくれよな！

それから、今はゲストの応募は締め切ってるぞ。

もし応募されても、抽選候補には入りませんので気をつけてくれよな。

ある程度順番待ちのゲスト様が減ってきたら、また募集するからその時にまた応募してくれ」

ティアナ

「はい。それじゃあ今回の“リリカルマジカル”とあ新らじお？

”はここまで！

お相手はティアナ「ランスターと」

スバル

「スバル「ナカジマと」

ハヤト

「ハヤト「ロックウエルと」

ディレト

「ナンバース、ディレトと！」

コルト

「コルト＝リバティと」

ブルズ

「ブルズ＝アルフィードでお送りしたぜ」

ハヤト&ティアナ&スバル&ディレト&コルト&ブルズ

「「「「「はいはい！」「「「「「」

スバル

「この番組は！」

(麦) ブチ カク

(四) 原子崩し

(追) はーまづらあ

(愛) モノアイ愛好会

(忠) メイリン親衛隊

以上のスポンサーの提供でお送りしました！」

ハヤト

「なあ、これって実際3人だけじゃね？」

コルト

「ですよ。特に最初の3つは間違いなく同じ人ですし」

ブルズ

「最後の2つは姉妹だよなあ……」

ディレト

「でも、ブチ カクって書くとか何か可愛いですわね」

ティアナ

「言ってる内容は物騒極まりないけどね」



## 第5回『テイロ・フィナーレ! (物理)』 (後書き)

長くなってしまった……。

イツキさん、何か変な部分などは無かったですでしょうか？

あった場合はメッセージや感想などでお知らせください。すぐに修正しますので。

それからEXAMさん、CMっぽくしてみましたけど、どうだったでしょうか？

もうちょっと変えて欲しい時は言ってくださいませ。

お便り、ゲスト出演に関する諸注意。

・コーナーへのお便りはなるべく『メッセージ』でお願いします。  
感想だと、質問などがネタバレになってしまいますんでw

・感想に書かれたお便りは、不採用とまではいきませんが、  
採用される優先順位はメッセージに比べて結構下になってしまいます。

・件名は『とあ新らじお』で統一し、本文には

どのコーナーに応募してるのか、RN、住所(架空で構いません)

を明記してください。

・RNは基本的に応募された方の名前を使いますが、  
他の名前にして欲しい時は本文中に明記してください。

・チャレンジ！ハヤトに応募する内容は、あくまでラジオブース内で出来るものに限定させて頂きます。

・「こんなコーナーやってほしい！」というのは、感想で構いません。

・お便りは、ラジオで使いやすいように多少文を修正する場合もあります。

あらかじめご了承ください。

・ゲスト出演は応募順ではなく、抽選で決めたいと思っています。ですので、応募したのが大分前でも、ずっと呼ばれないかも知れません。

そこはご了承ください。

・出演が決まった作品の作者様には、こちらからメッセージでお知らせします

・少しゲストの応募が貯まってしまっていますので、一度ゲストの応募を締め切りたいと思います。ある程度ゲストが消化されたなら、また応募を募りたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5627/>

---

リリカル マジカル とあ新らじお

2011年8月14日22時10分発行